

博士論文

移動する人びとの教育と言語
—中国朝鮮族に関するエスノグラフィー—

趙 貴花

目 次

序章	1
1. 移動する人びと	1
2. 新しいライフスタイルとしての移動	2
3. 中国の改革開放と朝鮮族の移動	3
4. 先行研究の検討	6
5. 研究の対象と方法	19
6. 本論文の構成	26
第Ⅰ部 中国東北部における朝鮮族学校の二言語教育	
第一章 グローバル化時代の朝鮮族学校の二言語教育の実態とその変容	30
—延吉市とハルビン市の事例—	
1. はじめに	30
2. 改革開放と中国朝鮮族の移動	31
3. 朝鮮族学校の教育及び朝鮮族生徒のアイデンティティ	32
(1) 朝鮮族学校の教育状況	32
(2) 朝鮮族生徒の国民的帰属意識とエスニック・アイデンティティ	38
4. グローバル化時代の学校選択	41
(1) 漢族学校を選択する要因	41
(2) 朝鮮族学校を選択する事例	44
(3) 朝鮮族学校を選択する漢族生徒と韓国人留学生の登場	47
5. むすび：少数民族教育の新しい意味	51
第Ⅱ部 朝鮮族の中国内における移動と言語意識の変化	
第二章 北京の「韓国城」(コリアンタウン)	54
—改革開放が生み出した新しい都市コミュニティ—	
1. はじめに	54
2. 望京における「韓国城」の誕生	56
(1) 望京：「小さな村」から「副都心」へ	56
(2) 「韓国城」という名前の東アジアのハイブリッド文化街の成立	58
3. 望京「韓国城」の人びと	62
(1) 韓国人の商業戦略の変化	62
(2) 「韓流ブーム」と中国人のライフスタイルの変化	64
a. 「哈韓族」(ハーハンズー)と望京	64
b. 飲食と居住にみる中国人のライフスタイルの変化	65

(3) 朝鮮族と韓国人の関係-----	66
(4) 朝鮮族の人から見た望京-----	69
(5) 望京「韓国城」に関する多様な情報ネットワーク-----	72
4. むすび-----	73
第三章 北京へ移動した朝鮮族の言語意識と子どもの教育-----	76
—中国語、英語の重視と「民族語」の維持をめぐる—	
1. はじめに-----	76
2. 北京の朝鮮族と北京韓国語学校-----	77
(1) 中国における韓国語の需要と大学での韓国語学科の設置-----	77
(2) 北京韓国語学校におけるグローバル人材の育成-----	77
3. 北京における朝鮮族の言語意識と子どもの教育-----	82
(1) 中国語と英語の重視による漢族学校選択-----	82
(2) 家庭教育と学校外教育による朝鮮語の継承-----	86
a. 家庭内における朝鮮語の維持と継承-----	86
b. 補習クラスへの親の期待と子どもの学習意欲の低下-----	88
c. 「民族語」の習得とエスニック・アイデンティティ-----	90
4. 中国の戸籍制度と移動する子どもたち-----	92
5. むすび-----	95
第Ⅲ部 朝鮮族の国際移動とアイデンティティの変容	
第四章 高学歴者が「帰郷」するとき-----	98
—韓国在住の朝鮮族のアイデンティティの揺らぎをめぐる—	
1. はじめに-----	98
2. 中国朝鮮族について-----	99
3. 「帰郷」先における社会的排除と包摂-----	101
(1) 朝鮮族の韓国への「帰郷」-----	101
(2) 「朝鮮族」と「中国同胞」というカテゴリー-----	103
(3) 言語の「違い」による摩擦-----	106
4. 高学歴朝鮮族のアイデンティティの揺らぎ-----	108
5. 子どもへの教育戦略-----	113
6. むすび-----	116
第五章 ソウルのガリボン「同胞タウン」-----	120
—朝鮮族労働者と韓国人市民団体が共同に創り上げた街—	
1. はじめに-----	120
2. ガリボンドンにおける朝鮮族の文化-----	121
3. 労働者たちの出発点となるガリボンドンの「くぐり部屋村」-----	125

4. ガリボンドンにおける朝鮮族と韓国人市民団体の相互関係-----	129
(1) ガリボンドンの韓国人ジャーナリスト-----	130
(2) 朝鮮族教会：運動と情報交換の場-----	132
5. 朝鮮族労働者たちのライフスタイルの変化-----	136
6. むすび-----	137
第六章 高学歴朝鮮族の先を見つめる子育てとハイブリッド・アイデンティティ-----	140
1. はじめに-----	140
2. 日中韓3国を一つの生活圏とする朝鮮族-----	141
(1) 留学・就職を主とする移動-----	142
(2) 両親の滞在地が「帰る場所」となる移動-----	144
3. 日本在住の朝鮮族の子どもへの教育選択-----	146
(1) 「より良い教育」を求めて-----	146
(2) 子どもの潜在能力を伸ばす教育-----	150
4. 高学歴朝鮮族の子どもへの言語教育戦略-----	153
(1) 中国語を重視する家庭-----	154
(2) 朝鮮語／韓国語を重視する家庭-----	157
(3) 日本語を重視する家庭-----	160
5. ハイブリッド・アイデンティティの構築-----	162
(1) 高学歴朝鮮族のハイブリッド・アイデンティティの創造-----	162
(2) 子どもの名前と親のアイデンティティ-----	166
(3) 朝鮮族のハイブリッドな食生活-----	169
6. むすび-----	172
終章-----	175
参考文献-----	192

序章

1. 移動する人びと

ジグムント・バウマン（2010）は、近年のグローバル化の現象が、人間の日常や生活の空間にもたらす影響を考察した（バウマン 2010, p.189）。その主軸をなすのが「移動の自由という新しいグローバルな自由がもたらすもっとも根本的な影響」に関する考察である（同上：p.95）。彼がたどりついた結論部分を、以下、少し長くなるが引用する。

今日の世界は、グローバルなものとローカルなもの、すなわち、社会的な昇進、優越、成功の兆しであるグローバルな移動の自由と、敗北、挫折の人生、落伍の不快な臭いを放つ不可動性とのヒエラルヒーの上下にわたって拡がっている。グローバル性とローカル性は、徐々に、相反する価値としての性格を帯びつつある。それらは、激しく切望されるか、あるいは忌み嫌われる価値であり、人生の夢、悪夢、闘争のまさに中心に位置づけられる価値である。人生の希望はなによりも、可動性、居住場所の自由な選択、旅行、世界を見る、といった言葉で表現される。人生の恐怖は、反対に、閉じ込められること、変化の欠如、ほかの人々が簡単に立ち入って、探究し、楽しむ場所から自分が締め出される、といった観点から語られる。「良い人生」とは移動する人生である。より正確には、そこにとどまっていることにもはや満足できなくなったときには、自分は移動できるという能力を確信している安心感である。自由とは、第一に選択の自由を意味するようになった。そして、選択は、顕著に空間的な次元を備えている。（同上：pp.169-170）

「移動の自由」そのものへの希求、それこそが本研究の対象となった中国朝鮮族の人びとの近年における爆発的な移動の実態を解明する魔法の言葉である。中国東北部から、中国の国内外に向けて移動を開始した朝鮮族の人びとは、各地での幾多の法的・制度的・社会的・文化的障害を乗り越えて、世代を超えて移動し続けている。2003年以來、10年近くにわたって彼らを北京近郊、ソウル、東京へと追いかけて、何時間もかけてインタビューをし、生活を共にして参与観察をし、その生活に関する詳細なエスノグラフィーを記述する過程で理解したのは、「移動の自由」という新しい経験のもたらす喜びであった。

本研究は、日中韓 3 国を移動する中国朝鮮族の人びとの移動先での生活の実態をエスノ

グラフィックとして記録することを目的とする。彼らは移動を開始する前には、中国東北部において集住し、自分たちの文化と言語を所与のものとして受け入れ、次世代へ継承してきた。そして、後述するように、中国における朝鮮族学校の二言語教育（中国語と朝鮮語の教育）を受けることで、政治的には「中国国民」であり、同時に、文化的には「朝鮮族」というエスニック・グループに帰属することをなんら疑うことなく受け入れていた。

改革開放後の中国に突然に移動の自由が生じた時、彼らは、その二重言語能力を武器に、率先して中国内外への移動を開始し、その勢いは増すばかりである。さらに顕著なことは、彼らが中国東北部への帰還に対して、決して積極的でもなければ、帰還することが当然だと考えているわけでもないことである。彼らを移動へと突き動かしているものはなんなのか、移動する朝鮮族の人びとは自分をどのように認識し、次いで、子どもの将来をどのように考えているのだろうか。朝鮮族の人びとの移動が、中国の他のエスニック・グループや漢族と比較しても、突出しているのは、後述するように彼らの二重・三重の言語能力による優越性に基づくものであることは明らかである。当然、そのことを自覚した移動する人びとは、子どもの将来と言語教育とにおいて、どのような戦略を立ててきたのだろうか。本研究では、こうした移動する人びとが、自己のアイデンティティをどう再構築し、グローバルな移動空間との交渉の場において、子どもの教育と言語選択とにおいてどのような教育戦略をもち、実施しているのかを探求しようとするものである。

2. 新しいライフスタイルとしての移動

今日、グローバリゼーションの急速な進行とともに、世界中のモノ、カネ、情報、そして国境を越える人の移動が、かつてないほど迅速に行われている。2010年11月28日の国際移住機関（IOM）の発表によると、2009年の世界的な国外移住人口は2億1,400万人に達しているとされる⁽⁴⁾。同報告書では、過去20年間の割合で国外移住者の増加が続くなら、2050年までにその数は4億500人になると予測している。国際移動は、21世紀を生きる人びとにとって、すでにライフスタイルの一つになっている。

生れ育った地域を離れて移動する人びとの研究は、これまでは経済的観点からのものが多かったが、移動する人びと自身への密着した調査によって、彼ら自身が移動の目的をどう認識しているのかに注目してみると、そこには新しいグローバル化の時代の、新しい移動のあり方が見えてくる。それは新しい土地や新しいライフスタイルへの憧れであったり、

より良い教育を受けようとする野心であったり、決して経済的領域に限定されるのではない「社会的な昇進、優越、成功」を求める文化的社会的な要因であることが見えてくる。中国は2010年にはGDPが39兆7,983億元になることで「世界2位の経済大国」になった⁽²⁾。こうした中国の経済成長は、中国における多くの富裕層を生み出し、彼らは経済的に余裕のあることから、従来とは異なるライフスタイルを追求しようとしている。その新しいライフスタイルの一つが国際移動である。2010年に中国社会科学院が発表した『全球政治与安全』(世界政治と安全)報告書によると、現在国外に移住している中国人は約4,500万人に達しているとされる⁽³⁾。また、2011年に中国銀行プライベート銀行と胡潤研究院の共同発表による『2011中国私人财富管理白書』では、1,000万元(2012年11月29日のレートで1億3,813万円)以上の投資資産を有している中国の富裕層が約50万人に達しているが、その中で国外資産を有している人が3分の1を占めると報告する。その国外資産の中には、3分の1の国外投資が移民を目的としている。そして、全体の富裕層の中で、約14%の人びとはすでに移民しているあるいは移民の申請を行っており、そのほかの約46%の富裕層は移民することを考えているとのことである⁽⁴⁾。こうした富裕層が国外へ移住する目的には、医療や食品、出入国の自由、安全な投資環境などを求めることが含まれるが、最も重要な目的として挙げられたのは子どもにより良い教育を与えることであった。中国においては、こうした文化的な要因による移動が、一種の新しいライフスタイルとして登場してきた。

本研究では、「移動」という語を用いる。それは永住を目的として新しい地に移り住むことを指すのではなく、一時的あるいは長期的な滞在を目的として、一つの国や地域からそれとは異なる国や地域へ移り住むことや、複数の国や地域の間を往復する行為を指すものである。本研究では、移動する人びとの移動に関する主体的な考えに重点を置くことで、彼らの戸籍や国籍を分析基準にしない。

3. 中国の改革開放と朝鮮族の移動

社会のさまざまな変化が人の移動としてあらわれる(伊豫谷 2007, p.8)。中国朝鮮族の中国内外へと活発な移動は、中国の改革開放による社会変動とともに始まった。

中国では1978年に中国共産党第11回3中全会で「対内改革、対外開放」の戦略政策を提出し、実施を開始した。対内改革は主に経済体制の改革と政治体制の改革を指すが、計

画経済体制から市場経済体制への転換は中国における経済の活性化を促した。対外開放は、主に外国に対して門戸を開くことを指す。こうした改革開放は一部の地域や都市において実施し始めた。1980年に中国政府は広東省の深圳、珠海、汕頭と福建省の厦門において経済特区を設置し、1984年には大連、青島、上海などの14の沿海都市を開放し、1985年には長江デルタ、珠江デルタ、閩南トライアングルを経済開放区として設置した。その後も、海南島における経済特区の設置や上海浦東新区の開発などが行われ、中国沿海都市から内陸の都市の開放などが次々に行われている。こうした経済特区の設置や沿海都市の開放などは、主に対外経済協力や技術交流を促進し、外国の資本や技術の導入などを行うことで国内経済の活性化を促進することが目的である。こうした沿海地域を中心とする一部の都市や地域において外国の企業や人びとおよび資本が集中することで、中国における地域間の経済格差も徐々に現れている。したがってさまざまな就職の機会を求めて、農村から都市へ、小都市から大都市へ、内陸から沿海都市への人の移動が急激に増加しつつある。特に、1990年代以降の中国では、戸籍登録地を離れて他地域へ移動し常住する人口が急増している(厳善平 2009, p.45)。中国政府の『中国流動人口発展報告 2010』によれば、2009年の中国の「移動人口は2.11億に達している」とされる⁽⁵⁾。こうした移動する中国人の中には、漢族だけでなく、少数民族の人びとも含まれている。新華社の2010年9月15日の報告によれば、現在中国で毎年の移動する少数民族の人口は約1,000万人に達するとされる⁽⁶⁾。

中国朝鮮族は、主に19世紀以降朝鮮半島から数次にわたり中国へ移住した朝鮮人および彼らの子孫を指し、中国の国民として中国の国籍を有し、中国の戸籍に「朝鮮族」と登録されている人びとを指す。中国の2000年の人口統計によれば、朝鮮族の人口は約192万3,842人とされている⁽⁷⁾。彼らは、これまで中国の東北3省(黒竜江省、吉林省、遼寧省)と内モンゴル地域に集住し、エスニック・アイデンティティを強固に保持してきた。その背景には子どもたちに中国の国家言語である中国語に加えて、朝鮮族のエスニックな言語である朝鮮語を教えるという二言語教育が重要な役割を果たしてきたと見られる。その二言語教育は、彼らが中国と朝鮮半島の文化的経済的交流に寄与し活躍できる基盤となった。さらに、日本との歴史的な関係の中で多くの若い朝鮮族たちは、中等教育で外国語として日本語を習得することで、さまざまな領域における日本との関わりも深まってきた。このような多言語習得によって、朝鮮族の東アジアにおける交流の最前線で活躍する機会が飛躍的に増加している。

1980年代以降、とりわけ1990年代以降の中国の朝鮮族社会は劇的な変化を経験している。その最も大きな変化が人びとの移動である。1980年代にはまだ小規模の東北地域内、または国内の農村と都市間の移動が行われ、国外への移動はまだ少数にすぎなかった。けれども、1990年代には、韓国、日本をはじめ国外への移動が急速に増加し、これと同時に国内での移動も東北部に限らず、東南沿海部地域や大都市を目指した全国的な移動が大きく増加した(李鋼哲 2006, p.6)。まず、彼らの中国内における移動を見ると、その移動の人数の把握は難しいが、中国の黒竜江新聞の2005年の調査によると、朝鮮族の人びとは以下の地域へと移動していることが分かる。すなわち、彼らは従来の居住地である中国東北3省と内モンゴル農村地域から、次第に経済発展地域である沿海都市へと拡散しながら移動している。例えば、深圳、広州を中心とした華南地域への移動人数は約6万人であり、上海、南京、義烏、杭州を中心とした華東地域には約8万5千人、青島、威海、煙台を合わせた山東地域には約18万人、北京、天津を中心とした首都圏地域へ移動した朝鮮族は約17万人に達している。さらに、西部大開発の進行で、成都、西安を中心とした西部地域へ移動した朝鮮族は約2万人とされる。また、東北3省と内モンゴル地域には現在約120万人が居住している(韓光天 2006, p.159)。このような朝鮮族の移動は都市への集中が特徴と見られる。次に、朝鮮族の国外への移動を見ると、彼らは韓国、ロシア、日本、北朝鮮、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、ドイツ、シンガポールなどを含めた幅広い地域へと活躍の場を広げている。その中で朝鮮族が一番多く移動している国は韓国であり、2012年7月31日現在韓国に滞在している朝鮮族は約46万7,981人に達している⁹⁾。

朝鮮族社会は現在移動による激動の時代を迎えている。彼らはさまざまな機会を求めてこれまで集住していた中国東北部を離れて新しい地に移動している。そして、移動先での新しい空間において生活をし、子どもを育てていく。本研究は、日中韓3国における朝鮮族その中でも高学歴朝鮮族に焦点をあてて、彼らの移動のパターンや移動先における社会的立場、子どもへの言語教育戦略の多様性、そして彼ら自身のアイデンティティが「ハイブリッド化」している様相を論じていく。また、朝鮮族のアイデンティティがどのような教育を通じて次の世代へと引き継がれていくかを明らかにする。

なお、ここでアイデンティティや文化のハイブリッド化に関して、先のバウマンが、それこそがグローバル化時代の移動の一つの特性であるとして Jonathan Friedman (1997, pp.70-89) を引用して次のように論じている。すなわち「都会の貧しい、民族的に混在した

ゲッターは、斬新なハイブリッドのアイデンティティの構築を直接もたらす場所ではなく、「グローバルで、文化的にハイブリッドであり、国際政治、学術研究、メディア、芸術に結びついた、世界についての特異な経験を共有する個人たち」が創造するものであると指摘している（バウマン 2010, p.142）。

4. 先行研究の検討

以下では中国朝鮮族の移動と教育に関するこれまでの研究を中心に、本論文と緊密な関連がある先行研究を整理していく。

(1) 中国の少数民族と二言語教育

これまで、中国の少数民族に関する先行研究は主に少数民族政策（小川 2001；岡本 2008）や少数民族教育（何俊芳 1998；張琮華 2001）、民族関係（長谷川 2010；塚田 2010；菅野 2001；松岡 2001；鄭雅英 2000）、少数民族の習俗文化（嚴汝嫻主編 江守監訳 1996；金旭賢 1999；池春相 1999）などに焦点を当てて議論することが多かった。これらの研究には以下の点が指摘できる。第一に、改革開放以前を対象としているものが主であり、改革開放以降の状況を十全にとらえているとは言いがたい点である。第二に、少数民族政策や少数民族教育、少数民族の習俗文化に関する先行研究では、中国の自治州に住んでいて、少数民族学校に通う少数民族というカテゴリーを前提としており、このカテゴリーにあてはまらない移動する少数民族などは等閑視されてきた点である。第三に、民族関係についての先行研究では、東南アジア地域との国境地帯を対象として国境を越える移動や、その地域における民族関係および文化の変容に関する知見は興味深いものがある。しかしながら、雲南省などの一部の地域や少数民族に限定されており、より広い地域の少数民族についての研究がなされるべき点である。

以下では、主に本研究の重要なキーワードの一つの中国の少数民族の二言語教育に関する先行研究を見てみよう。

まず、中国の少数民族の言語状況と中国政府の少数民族政策の一環である二言語教育について見てみよう。中国は公式には漢族と 55 の少数民族から構成される多民族国家である。したがって、中国における言語も多様であり、地域ごとの方言だけでなく、さまざまな民

族集団による多様なエスニック言語も存在する。けれども、すべての少数民族が自分たちの言語と文字を有しているのではなく、全体の中で 21 の民族による 39 種類の文字しか維持されていない。この 39 種類の文字は主に二種類に分けられる。一種類は中華人民共和国が成立する前にすでに使用されていた文字であり、もう一種類は中華人民共和国が成立した後中国大陸が文字のない少数民族のために創ったアルファベットを基にするピンイン（拼音）文字である。現在、21 の民族が有している 39 種類の文字の中で、自民族の集団の中で普遍的に通用している民族文字は約 10 種類にすぎない（滕星・王军 2002, p.339）。例えば、モンゴル語、チベット語、ウイグル語、朝鮮語、タイ（傣）語、カザフ（哈萨克）語、ウズベク（乌孜别克）語、クルグズ（柯尔克孜）語、タタール（塔塔尔）語、ロシア（俄罗斯）語である。

中国政府は建国以来国民統合の重要な一環として少数民族政策を実施してきた。中国の少数民族政策に関する研究として小川（2001）の研究が挙げられるが、小川は中国の「民族平等」に注目し、中国政府がどのような政策理念に基づいて「民族平等」を実現しているのか、それが少数民族の教育にどのように反映されているのかを考察した。小川は、中国政府の少数民族政策の柱の一つとして少数民族文化の尊重が挙げられるが、その少数民族文化尊重の核心が言語にあると指摘する（小川 2001, pp.125-126）。こうした中国の少数民族政策は民族区域自治と少数民族教育を特徴とする。少数民族教育は、主に少数民族の集住する地域に少数民族学校を設立し、そこにおいて中国語と少数民族言語の二言語教育を行うことである。中国の少数民族学校では、基本的に少数民族の伝統的な風俗習慣を教えることがないため（同上：p.146）、少数民族の言語を教えることは中国政府側と少数民族自身の両方にとって少数民族文化の維持と継承のための最も重要な方法になっている。

中国における少数民族の二言語教育に関して、全体的な見取り図を呈示している研究として何俊芳（1998）を挙げたい。何俊芳は、中国の少数民族の二言語教育の現状とその歴史的発展について分析し、特に少数民族の民族学校における中国語と少数民族言語の二言語が教授言語としてどのような特徴を有しているのかを全体的に分類し、綿密に分析したことに特徴がある。また、社会統合を成しうるために二言語教育が果たす役割を示したものとして、張琼華（2001）の研究がある。張琼華は、中国の阿壩チベット族自治州の事例を取り上げ、二言語教育における教授言語を明らかにすることで、教授言語が生徒たちの民族アイデンティティやナショナル・アイデンティティに与える影響について分析した。そ

して、そうした生徒たちの帰属意識のありかたから、中国における民族共生と社会統合の可能性について考察したものである。張琮華は「多文化主義はその多文化教育・二言語教育のあり方によって、同化を強化することもあれば、異化へ導くこともあり、さらには統合に寄与することもありうる」ことを示し、「教育や文化レベルに限って言えば、多文化主義の成否は、多文化教育・二言語教育のあり方にかかっていると見えよう」と指摘する（張琮華 2001, p.186）。張琮華が、二言語教育において社会統合に寄与する類型として挙げたのが、少数民族の学校において生徒たちに共通言語（筆者注：中国語を指す）を教授言語とする教育と民族言語を教授言語とする教育の両方を受けさせることである。その理由として、そうした共通言語と民族言語の両方を教授言語とする教育を受けてきた生徒たちのほうが、一貫して民族言語あるいは共通言語のみを教授言語とする教育を受けてきた生徒より、民族文化の共有としての民族的アイデンティティと信念体系の共有としてのナショナル・アイデンティティの両方を育んでおり、他民族に対して有機的志向を育む傾向があるということである（同上：p.180）。すなわち、張琮華は少数民族学校の生徒たちがエスニック・アイデンティティとナショナル・アイデンティティの両方を獲得することにおいて、学校におけるエスニック言語とナショナル言語の両方を教授言語とすることが重要であることを示している。これと比べて、本研究では第 1 章において中国東北部の朝鮮族学校における二言語教育の実態を、朝鮮族の集住する地域と朝鮮族が漢族と混住する地域の両方の比較を通じて、学校だけでなく、地域や家庭の言語環境にも目を向け、異なる言語環境にいる朝鮮族生徒たちの言語使用状況や彼らのエスニック・アイデンティティおよび国民的帰属意識がどのように異なるのかを分析する。

ほかに、本研究と共通の問題意識を持つものとして岡本（2008）がある。岡本は、教育と言語の視点から中国の少数民族政策について分析し、さらにモンゴル族や朝鮮族、チベット族、イ族および新疆ウイグル自治区や広西チワン族自治区などの地域における言語教育を中心とする少数民族教育の歴史と現状について述べた。岡本は、朝鮮族に関して、市場経済化が推し進められる中、朝鮮族地域でも漢語の優位がますます高まっているが、朝鮮族の場合にはほかの少数民族と違って、改革開放や市場経済が必ずしも朝鮮語教育を衰退させているとはいえない状況が出ていると指摘する（岡本 2008, p.181）。それは韓国の存在があるため、中国と韓国の交流が拡大する中で、朝鮮族の人びとは中国の先を行く韓国の情報や、中国より進んだ自然科学の知識も民族語で得ることができるということが挙げられている。けれども、中国内で地位を得るためには中国語ができなければならない

状況に変わりがないが、これは朝鮮語や朝鮮語による教育に少なからぬ影響を与えることを示している。これは、本研究において朝鮮族の若い人たちの言語選択における動機に注目する点では本研究の問題意識と共通するが、本研究では言語選択とアイデンティティの関連により重点を置くことで、異なる視点を提示したい。

(2) 朝鮮族の移動と教育

中国における朝鮮族に関する研究は、主に 1950 年代中頃から始まり、その後一時期中断されたが、1982 年から単刊本が刊行され始めることで研究が本格的に始まったと見られる。中国朝鮮族の教育に関する研究は、1980 年代までは主に政府の民族教育政策に関する分析がほとんどであり、1990 年代からは朝鮮族教育と経済発展（金舜英 1994）、朝鮮族子どもの漢族学校通いの問題（崔成学 2002）、朝鮮族の教育史（朴泰洙 2002）、二言語教育環境（朴泰洙 2003）、朝鮮族の歴史（黄有福 2009）など多様な研究が増えてきた。朴泰洙は、過去における朝鮮語文と漢語文の授業数にこだわる研究とは異なり、二言語教育は教科書の編纂、教学方法の制定、教師の授業の準備などを緊密に関連づけなければいけないと指摘する（朴泰洙 2003）。しかし、これらの研究には次のような限界がある。研究対象が朝鮮族の自治区や一部の地域に限られる場合が多く、他の地域や移動先における朝鮮族の教育状況に関する研究は非常に少ない。また、二言語教育に関する研究は理論的研究と統計データによる分析をもとにした研究がほとんどである。朝鮮族のアイデンティティやその変化などに関して、量的研究では深く追えない部分を分析するための、学校現場の当事者、すなわち学校教員、生徒および保護者の声を忠実に反映したような研究は管見の限りではほとんどない。

1978 年以降、改革開放政策の実施と中国内における市場化の進展によって、中国の人びとの国内外への移動が活発に行われている。特に、国内においても人びとはすでにこれまで居住していた地域を離れてさまざまな地域へ移動し、移動地において短期的あるいは長期的に滞在している。こうした中国内における人の移動をとらえた研究として、例えば嚴善平（2010）、大橋（2011）、李天国（1996）などが挙げられる。嚴善平は、統計データと質問票調査に基づいて、上海市と珠江デルタにおける農民工の就業状況や賃金、現地での暮らしおよび子どもの教育について考察した。大橋はジェンダー研究の視点から中国における改革開放以降の農村出身家事労働者の都市（主に北京）への移動と再生産労働力の供

給などを述べた。また、李天国では、改革開放後のウイグル族が、漢民族の多い大都市へ移動する実態を明らかにされた。中国内の三つの都市（ウルムチ市、北京市、広州市）におけるフィールドワークを通じて、移動先でのウイグル族の飲食を中心とするエスニック・コミュニティの生成と彼らの生活を描いたことにより、中国少数民族の移動の研究において重要な一書となる。また、朝鮮族に焦点をあて、地方から北京へ移動した朝鮮族の人びとが望京という地域に形成したコミュニティを「脱国家化、脱政治化した自律的な共同体」としての「種族共同体」ととらえたイェドングン（예동근 2009）がある。イェドングンは、商業的な面に焦点をあてて朝鮮族を韓国や韓国人と関連しながら分析した点においては、本研究で文化的な側面から取り上げた望京コリアンタウンとは異なる視点を提示する。

移動する若い人びとにとって大きな課題の一つが子どもの教育である。中国では農村と都市を厳格に分ける戸籍制度があるため、国内の移動地において長期的な生活を行うとしても、移動地の戸籍を取得することは容易ではない。したがって、移動先の戸籍がない場合にはその地における子どもの就学も困難になる。これに加えて、少数民族の子どもの場合には移動地において自民族の言語を習得する民族学校に入ることはもっと難しいことである。それは彼らの新たな移動先に少数民族の民族学校がほとんどないからである。岡本が指摘したように、中国の少数民族政策は個人ではなく、民族集団を単位とし、かつ民族自治地方内で実施されるため、従来の民族自治地方を単位とした政策は、改革開放政策の下で増大した都市に分散居住する少数民族に対応できていないのである（岡本 2008, pp.171-181）。すなわち、少数民族教育において、民族学校は基本的に各少数民族の自治区や彼らが長年集住してきた地域に限って設立されているため、彼らの新しい移動地には民族学校が設置されていない。一方、今日中国の急速な経済発展は、中国語の世界的な需要も高めている。中国内においても、市場化の進行とともに中国語の言語的な市場価値も上昇することで、中国内の少数民族の中国語習得への必要性も高まりつつある。

こうした時代的言語的な背景の中で、中国の少数民族の人びとその中でも移動を始めている、あるいは移動を考える人びとは、自民族の言語を維持するかそれとも放棄するかを選択を迫られている。朝鮮族の場合にも、これまで主に中国の東北三省に集住し、そこにおいて朝鮮族学校に通い、中国語と朝鮮語を学ぶことが一般的であった。したがって、家族の世代間の共通語も朝鮮語であることが珍しくなかった。けれども、1990年代以降の国内外への移動とともに、次世代の教育のありかたは大きく変化している。特に、中国の東

北三省を離れて、大都市や沿海地域へと移動する朝鮮族にとって、彼らの子どもたちはすでに彼らの親のように自然に朝鮮族学校に通うことがほとんど不可能になっている。本研究では、こうした時代的な変化と朝鮮族社会においても最も注目されている移動と言語の問題に関して、その実態を明らかにすることをねらいとする。

朝鮮族の中国内における活発な移動とともに、彼らの子どもの教育への関心と憂慮も高まっている。それを反映した研究としてまずファンユボク(황유복 2011)が挙げられる。황유복は朝鮮族社会の変化を教育と関連付けて「21世紀において朝鮮族社会が生き残る道は持続的な経済成長と新しい文化を創出する道しかない。新しい朝鮮族文化の創出は朝鮮族の民族教育を前提にする」と述べる(황유복 2011, p.20)。そして、ファンユボクは朝鮮族の人びとが現在都市に移動するとともに、都市における朝鮮族の民族教育の解決策として、都市における漢族公立学校の人的資源と空間を利用して民族教育を発展させることや私立全日制民族学校による教育、そして週末学校などを提案している(同上: pp.20-21)。ほかに、中国の青島市の朝鮮族学校に注目した鄭信哲・黄娜(2010)は、青島市における民営の朝鮮族学校の経営難やそれに対する中国政府の関心の足りなさを指摘し、少数民族の自治区以外の地域においても、少数民族政策を実施することの必要性を提示した(鄭信哲・黄娜 2010, pp.32-33)。

また、朝鮮族の中国内の新たな移動地における生活や諸活動について、人類学的な研究方法を用いた佐々木(2007)の研究がある。佐々木は、中国青島に移住した朝鮮族の事例を取り上げ、彼らが現地で構成するコミュニティと社会的ネットワークに注目している。佐々木は、「青島における朝鮮族のエスニックな集団としての社会的特徴は、企業家たちによるリーダーシップのもとに組織化されている。政治的、社会的な機能を持つ人的ネットワークは組織的な活動の上に支えられており、彼らのコミュニティが体制から認知されている」と報告する(佐々木 2007, p.13)。

ほかにも朝鮮族の中国内における移動に関して、研究書ではないが中国の朝鮮族メディアである黒竜江新聞社による現地調査に基づいて編纂したイジンサン(이진산 2006)が挙げられる。同書は、中国の沿海地域、東北地域、西部地域、内モンゴル地域などの幅広い地域における現地調査を通じて、中国全域における朝鮮族の移動の動向を把握しようとしたものである。朝鮮族の移動先での移動人数や従事する職業および子どもの教育、そして彼らが韓国人とどのような相互関係の中で生活しているのかなどを、朝鮮族の集住地域における観察や韓国大使館、さまざまな団体、教育機関への訪問および個人へのインタビュー

ューを通じて新聞記事として黒竜江新聞に載せたものをまとめて編纂したものである。イジンサンは、朝鮮族の近年の中国内における幅広い地域への移動に関して、その移動地と移動人数そして移動地における朝鮮族の生活などを全体的に把握することにおいて重要なデータを提供している。

2000年以降朝鮮族の移動に関する研究は急速に増えつつある。朝鮮族が1990年代以降に人数的に一番多く移動している韓国でも、朝鮮族への関心が高まることで朝鮮族に関する研究が活発に行われている。その多くが韓国在住の朝鮮族に関する研究であり、以下のようなものが見られる。例えば、朝鮮族労働者の法的地位に関する研究(蔡漢泰 2005)や法的・経済的・社会的地位に関する研究ユンファン・キムヘラン(윤황·김해란 2011)、そして朝鮮族の労働者集団の形成過程イジンヨン・バクウ(이진영·박우 2009)や朝鮮族労働者の葛藤ムンヒョンジン(문형진 2008)に関する研究などがある。また、朝鮮族女性の移動と就労に焦点をあてたイヘギョン・ジョンギソン・ユミョンギ・キムミンジョン(이혜경·정기선·유명기·김민정 2006)とイソンイ・ホンギスン・ソンヨギョン(이송이·홍기순·손여경 2010)、朝鮮族の韓国への移動を「母国への帰還」としてとらえたジョンヒョングオン(전형권 2006)、朝鮮族の韓国での定住意識と朝鮮族コミュニティの関係について分析したキムヒョンソン(김현선 2010)、朝鮮族コミュニティにおける朝鮮族の社会的連携に注目したバクセフン・イヨンア(박세훈·이영아 2010)など多様な研究がある。従来では、一括して労働者という側面が強調されてきた。これらの研究は、少数民族としての朝鮮族に注目するあまり、移動する人にとっての教育はかえって見逃されてきた。朝鮮族の教育に関する研究としては、朝鮮族の移動による中国における朝鮮語・韓国語教育の危機をとらえたキムビョンウン(김병운 2007)や韓国へ出稼ぎに行った両親と離れて生活する中国における朝鮮族の子どもたちの生活環境と適応問題を取り上げたゾボクヒ・イズヨン(조복희·이주연 2005)などが挙げられる。

このほかに、朝鮮族の近年の移動を取り上げた研究として、グオンテファン(권태환 2005)がある。同書は、社会人類学の研究方法を用いて、1990年以降の中国東北部の朝鮮族の中国内での移動と韓国への出稼ぎによる朝鮮族社会の全体的な変化を提示した。主には、従来の朝鮮族共同体の解体、家族の分散と解体および親の韓国への出稼ぎとそれに伴う家庭の解体が中国に残っている子どもたちに与える影響、朝鮮族労働者や女性など多方面に焦点を当て、現地調査で行ったインタビューデータに基づいて論じたものである。朝鮮族の中国内における移動や韓国への移動による朝鮮族社会の近年の変化をミクロな視点

から把握することにおいて重要な先行研究となる。1990年代以降の朝鮮族社会における変化を移動という視点からとらえることの重要性について、グオンテファンは「朝鮮族社会の変化は、単純に村の解体と新しい環境への適応の問題に帰着するのではない。変化とそれによる危機は総体的で全方向的である。その始まりには多様な要素が作用しているが、そのすべては人の移動と関連する。(中略)しかし、朝鮮族社会の危機に関するホットな議論が行われているにも関わらず、移動に関する具体的な深層的な研究はほとんどない実情である」と指摘する(권태환 2005, p.2)。

また、韓国における朝鮮族研究の中で、社会人類学的な研究方法を用いたバクグァンソン(박광성 2006)が挙げられる。バクグァンソンは、1990年以降の朝鮮族の移動に伴う朝鮮族社会の変化を「朝鮮族の大規模な分散移動は朝鮮族社会の解体をもたらすのではなく、既存の地域に基づいた同質性が高い民族社会から脱地域へ、そしてネットワークされた多元化された民族社会へと変化している」と指摘する(박광성 2006, p.185)。また、バクグァンソンは朝鮮族の社会変化の中で家族共同体が重要な機能を果たしていることと、既存の社会関係も移動地での適応と定着において重要な役割を果たしていることを示している。

韓国に移動した朝鮮族に関する研究の中で、参与観察とインタビューという調査方法を用いたチェグムヘ(최금희 2006)も挙げられる。チェグムヘは、韓国人男性と結婚した朝鮮族女性たちの韓国生活への適応過程に注目しており、その適応過程を「朝鮮族女性たちが韓国で結婚生活をする中で多様なストレスを経験し、ストレスに対処し、未来への計画を立てることで最終的に「人生の主人になろうとする」欲求をもつ過程である」と指摘する(최금희 2006, p.128)。こうしたストレスの原因に関して、チェグムヘは韓国人男性と結婚した朝鮮族女性たちの低い学歴による低い社会的地位、姑との間の葛藤および夫の家父長的な行動などを挙げている。低い学歴を有する朝鮮族女性を取り上げたこの論文と異なり、筆者の本研究では第4章において韓国における高学歴朝鮮族を取り上げることで異なる視点を提示する。

朝鮮族の日本への移動は1980年代から始まったと見られるが、日本在住の朝鮮族に関する研究はまだ少ない。その中で、朝鮮族の中国内における移動と関連するさまざまな問題を取り上げた中国朝鮮族研究会(2006)や朝鮮族の来日においてエスニック・ネットワークの存在が、合法・非合法を問わず重要な役割を果たしていることを示した権香淑(2011)などが挙げられる。このほかに日本における朝鮮族研究には、中国の改革開放政策による

中国朝鮮族社会の変化とそれによる中国朝鮮族社会の直面する危機について分析した李向日(2009)や、朝鮮族の韓国への移動を経済的な要因による移動としてとらえた李向日(2010)などがある。韓国在住の朝鮮族を取り上げた研究として特に挙げられるのは鄭雅英(2008)である。鄭雅英は朝鮮族の韓国移住労働に注目して、韓国政府の中国朝鮮族労働者に対する「訪問就業制」に至るまでの受け入れ政策について分析し、韓国の在外同胞労働者に対する受け入れ政策が日本の政策⁹⁾と比して「遅れている」と指摘する(鄭雅英 2008, p.93)。ほかに、延辺朝鮮族自治州の朝鮮族の労働力移動に注目した鄭菊花(2012)では、その労働力移動が顕在化した原因を中国政府の1994年の元切り下げ政策にあると指摘し、同政策は先進国との賃金格差を一層拡大させることとなり、韓国等先進地域への延辺州朝鮮族の労働力移動に拍車をかけたと述べる(鄭菊花 2012, p.97)。日本における朝鮮族研究の中で移動する朝鮮族の教育に関する研究は非常に少ない。その中で挙げられる金花芬・安本博司(2011)では、日本在住の朝鮮族の子どもの学校選択や言語継承における親の悩みに関して分析し、その親の中に日本の公立学校や私立学校を選択する傾向があることや子どもの中国語の習得を重んじるが親自身の中国語が流暢でないため子どもに教えられないという事例を提供している。この点において、本研究では第6章において日本在住の朝鮮族の子どもへの言語教育戦略を、多様な朝鮮族家庭の事例を分析し分類することで、その親たちの言語能力と彼らの主体的な教育活動について描いている。

(3) 移動とアイデンティティ

中国朝鮮族の韓国への移動と彼らのアイデンティティを取り上げる際に、日系ブラジル人の日本への移動に関する研究は一つの参考になる。朝鮮族の韓国への移動と日系ブラジル人の日本への移動は、両方とも故国への移動として共通点を有している。日系ブラジル人の場合にも、故国への移動によってアイデンティティの変化が見られる。まず、ブラジルにおける日系人たちのアイデンティティについて、山ノ内(2011)は、日系人たちがブラジルにおいては世代が進み、日本語から離れても、容姿や習慣の違いから、周りの人びとから独自の文化をもつエスニック・グループであると認知され、「ジャポネース(日本人)」と呼ばれていると述べる(山ノ内 2011, p.190)。続いて、子どもたちはナショナリティとしては「ブラジレイロ(ブラジル人)」であることを自認しているが、エスニシティのレベルでは、日本語能力の有無にかかわらず、大なり自分のルーツが日本にあることを意識

していることを示している。山ノ内によれば、近年では非日系から呼称される「ジャポネース」や日本人との血縁関係に基づく「ニホンジン」とも異なり、日本や日本の文化を肯定的に捉え、そこに自分たちなりの意味づけを加えつつも、日本人の血を引くことや日本語能力の有無には必ずしもこだわらない、「ニッケイ」という新しいアイデンティティを構築している。次に、日本在住のブラジル人のアイデンティティに関して、山ノ内は子どもたちの多くは同質性の高い日本社会においては自己を「ブラジル人」とアイデンティファイしていると述べる（同上：p.190）。日本の学校に通い、日本語を話し、自分の顔がいわゆる「混血顔」ではなく、「日本人顔」であっても、家庭やエスニック・コミュニティ内部での文化が、学校や地域社会のそれとは違うことを、在日ブラジル人の子どもたちは幼少の頃から自覚している。こうした在日ブラジル人の子どもたちが自らが「日本人」ではなく、「民族的・文化的に異なる存在」であることを容認し、「ブラジル人」としてアイデンティファイするようになっていく（同上：pp.190-191）。こうした日本在住の日系ブラジル人の子どもたちのアイデンティティの構築について山ノ内は「それは必ずしも自らのルーツに関する肯定的なアイデンティティ形成とは限らない。日本社会において「異質な他者」として差異化され、排除され、ラベリング化された結果としての、否定的な「ブラジル人」としてのアイデンティティ形成である場合も多々あることに留意すべき」（同上：p.191）と指摘することで、日本社会における日系ブラジル人への排他的なまなざしが、日系ブラジル人の子どもたちに自己否定的なアイデンティティを構築させるという悪影響があることを提示している。筆者の本研究では、故国の言語を獲得した高学歴者朝鮮族が韓国へ移動する事例を分析することで、日系ブラジル人の場合と似ていながら異なるアイデンティティの構築／再構築のありかたを提示したい。

在日韓国・朝鮮人に関する先行研究も、朝鮮族の韓国や日本への移動をとらえることにおいて多くの示唆を与えてくれる。その文献の一つとして、聞き取り調査を基にした福岡（2003）が挙げられる。同書によると、日本で生まれ育った「在日」二世三世で、日本語の会話、読み書きに不自由する人は、誰もいないが、朝鮮語・韓国語ができない「在日」の若者たちのほうが、多数派である（福岡 1993, p.54）。そして同書では、「在日」の三世たちは、日本社会では、日本人たちから“日本人ではない”とみなされても、韓国へ行けば、本国人から“韓国人ではない”と見られると指摘する（同上：p.52）。それは、「在日」の若者たちが韓国語を話せないこともあるが、彼らの髪型や服装、表情といった雰囲気から韓国の人びとに「韓国人ではない」、「日本人である」と判断される場合があることを示

している。福岡は、そうした韓国語ができないなどの理由から韓国において韓国人扱いされなかった「在日」二世の韓国で居場所がないと感じる事例や「在日」の民族アイデンティティを支えるものとして本名が重要であることの事例を挙げた。本研究では、朝鮮族が朝鮮語ができて韓国において外国人扱いされることや、高学歴朝鮮族はどのように韓国において法的および社会的に受け入れられ、その中でも「中国人」としてのアイデンティティを再構築するなどの「在日」の場合とは少し異なる論点を提示したい。但し、「在日」の場合には、日本への移住経緯や政治的社会的文化的背景において、中国朝鮮族と大きく異なるため、本研究は比較の対象として扱わない。

(4) 言語とアイデンティティ

移動する人びとは移動とともに常に自分はどこに属しているのかを意識させられる。彼らが移動先において常に聞かれるのが「どこから来たのか」、「なに人であるのか」、「なに族であるのか」といった地域的帰属や国民的帰属およびエスニックな帰属などである。そして多くの場合、そうした帰属を示すものとして言語やその集団の特有な文化が関連づけられる。学問領域においても、言語と文化およびアイデンティティの関係が研究対象としてよく取り上げられてきた。例えば、小野原は言語（あるいはことば）とアイデンティティについて「人はある言語や云いまわし（表現）を使い分けることで自分のアイデンティティを主張することがある。そのようなことばを選ぶことによって、自分の認知の仕方や社会的意識などを確認したり、表出したりするだけでなく、より積極的に聞き手に影響を与えようとするのである」と主張する（小野原 2004, p.26）。また、渡辺（2004）は言語と民族の文化の関係に関して「民族固有の文化や世界観を次世代に伝達し、次世代がそれを継承していくためには、それが反映されている言語が必須である」と述べる（渡辺 2004, p.134）。そして、渡辺は言語は単なる伝達の道具ではなく、そこには言語外現実の範疇化をとおして見られる個々の言語のユニークな世界の認識が反映されていることを示している（同上：p.145）。ほかにもさまざまな研究があるが、多言語話者の言語意識とアイデンティティの関係について小泉（2011）は「言語に関する多様な経験から生じる言語に対する情意によって言語意識が形成され、越境による立場と言語の変化、ならびにそれらに対する自己認識と他者からの認識が個人のアイデンティティの意識化に大きく作用する。そして言語意識は、アイデンティティ形成の過程において多言語話者の国や言語にとらわれ

ないアイデンティティの根拠としての役割を担う」と指摘している（小泉 2011, pp.155-156）。こうした言語意識とアイデンティティの可能性について、本論文では第6章において多言語話者として朝鮮族高学歴者の事例を通じて新たなアイデンティティの創造の可能性を示したい。

（5）移動，言語，教育

日本においては、異文化間教育学会（1981年に設立）が「異質な文化の接触によって生ずるさまざまな教育の問題を学問対象として取り上げ、その研究を促進しようとする」⁽⁹⁾ことを主旨として、これまで海外子女・帰国子女教育や留学生教育、ニューカマー教育など移動と教育に関する研究を活発に行ってきた。研究方法においては、学会の萌芽期⁽¹⁰⁾と成長期では、質問紙調査や面接・聞き取り調査、文献の内容分析が主な研究方法として採用されている。しかしながら、拡大期前半から拡大期後半を経て、安定期に入るにつれて、研究方法は多様性を示し、例えば参与観察や心理学や言語の領域で一般的に使用される実験やテストが方法として導入されるようになってきている」（山田 2008, p.54）。

こうした異なる文化の接触とそれによって生ずる教育の問題について研究を進めてきた異文化間教育学では、2000年以降になって言語の使用や継承および教育に関する研究が増えつつある。例えば、在日ブラジル人の年少者のポルトガル語と日本語のバイリンガリズムに関して論じたエレン・ナカミズ（2004）は、在日ブラジル人の年少者の言語能力と大きく関係しているのが彼らの来日した年齢と生活環境であると指摘する（エレン・ナカミズ 2004, p.33）。その年少者の言語使用に関しては、「家庭」がポルトガル語の維持を担う唯一の領域であることや、ブラジル人コミュニティとつながりを持つことが、ポルトガル語の維持が容易になることを言及した。また、年少者の母語と母文化の維持における受け入れ社会の態度の影響や年少者の教育問題を和らげることに於いて保護者の教育に対する意識向上の必要性を提示した。すなわち、エレン・ナカミズはエスニック言語の維持・継承における家庭の言語環境と受け入れ社会の態度の重要性を提示している。この点では本研究と共通の問題意識を有しているが、本研究では家庭の言語使用や受け入れ者の眼差しおよびそれに対する移動する人びとの主体的な考えや行動を当事者の視点から描いている。

異文化間教育学では、近年複数の異なる言語文化を有する家族を指す言葉として「国際

家族」以外にも、「バイカルチュラル家族」⁽⁴²⁾や「異言語間家族」⁽⁴³⁾といった新しい用語が登場し、そうした複数の言語や文化を有する家族に注目する研究が行われ始めた。特に、そうした家族の言語使用や言語・文化の継承およびそれにかかわる要因などに関する研究の進展が見られる。例えば、日系国際家族に関する研究を行った鈴木（2007）は、現地調査を通じてどの日系国際児も、程度はさまざまであっても共通しているのは、居住国（地）の言語・文化を継承しているが、居住国（地）以外の言語（異文化出身の親の言語）は必ずしも継承しているとはかぎらないことを報告することで、国際家庭においても複数の言語の習得は容易ではないことを示した。さらに、鈴木は「特に異文化出身の親の志向性が、彼らの子どもの言語、文化、教育に対する考えと密接し、家庭の言語・文化や学校選択に影響を及ぼし、言語・文化の継承に大きく関与していることが推察される」と述べる（鈴木 2007, pp.17-18）。すなわち、親の文化的志向（出身国あるいは居住国）が子どもの言語・文化の習得に大いに影響することを示している。しかし、これらの研究では親の子どもの言語・文化の継承やそれに関する教育への意識的な指導が足りないことを報告している。この点においては、本研究では親の言語選択や教育における戦略的な行為をとりあげることによって、新しい事例を提供し、新たな可能性を提示することで重要な意義があると考えられる。

こうした異文化間教育学では移動する子どもたちの言語や文化の継承および教育に関する研究が進みつつあるにもかかわらず、朝鮮族に関する研究はほとんど見られない。唯一挙げられるのは、出羽（2001）の研究であるが、中国の東北部の延辺朝鮮族自治州と長春の朝鮮族学校における質問紙調査を通じて、朝鮮族学校に通う中学生の言語状況ならびに衣食住などの民族文化への志向度に関して報告したものである。また、異文化間教育学では学校における調査に基づいた研究が比較的によく見られるが、教員や保護者などの当事者の声を反映したものは少なく、人類学的方法を用いた研究はまだ多くない。

以上、筆者の管見の限りでの本論文と緊密な関連がある先行研究を取り上げた。以上の文献では、まず経済的な要因による移動を取り上げる研究が多く見られる。しかし、人の移動においては経済的な要因による移動だけでなく、移動先の国や地域への憧れやより良い教育を求めるなどの文化的な要因による移動も含まれる。朝鮮族の移動に関する研究においても、こうした文化的な要因による移動が看過されてきた。特に、高学歴朝鮮族の移動に注目する研究はほとんどない。そして、高学歴朝鮮族の移動地における生活や彼らの子育ておよび言語やアイデンティティに関して、人類学的方法を用いて考察したも

のは管見の限りでは見当たらない。しかし、朝鮮族の移動においては、一人ひとりにさまざまな葛藤やアイデンティティの揺らぎ、そして教育戦略などの現象が現れているため、そうした動きを描くことが重要になると考えられる。本研究は、こうした先行研究では反映することが少なかった一人ひとりの朝鮮族の主体的な活動や考えに焦点をあてて考察を進める。そのために、朝鮮族の国内外の複数の移動地における生活実態や子どもの教育および彼ら自身のアイデンティティの変化などを一人ひとりと向き合う人類学的な手法を用いて描き出す。朝鮮族の移動と教育に関する文化人類学的な研究は、中国の社会変動の中で、人びとの社会的文化的な認識の仕方、自己アイデンティティの領域においてどのような変化が生じているのかを理解し、言い古された「ヒトの移動」のもつ意義を深く掘り下げていくことに繋がり、移民研究において新しい視座を提供することと考えられる。

5. 研究の対象と方法

本研究では、移動する人びとが教育についてどう考えているのかを明らかにするために、文化人類学の研究調査方法を用いて移動する人びとの移動の軌道に沿ってフィールドワークを行い、参与観察とインタビューを行った。

文化人類学のフィールドワークは、現地のことばを習得し、長期間、ひとりで、現地の人びとのまっただなかで、現地の人びとと同じように暮らしながら、そこでくり広げられる人びとの営みを細大もらさず記録することが理想的形態として見られてきた（青木 1993, p.17）。調査者＝人類学者は、生活をともにする人びと＝インフォーマント（情報提供者）の社会生活に参加すると同時に、それらの活動を外部者の目で観察することで、インフォーマントの生活様式を調査するが、こうした研究方法が、参与観察として知られている（E.A.シュルツ／R.H.ラヴェンダ著 秋野・滝口・吉田訳 1993, p.9）。また、人間の生活のあらゆる側面を扱う学問である文化人類学は、任意の一つの側面は必ずその他の種々の側面との有機的な連関のもとでなければ理解できない、という基本的な立場をとる（本多・棚橋・三尾 2007, p.208）ことで、人びとが生きている空間と環境のすべてを研究者もまた見て、聞いて、感じることにフィールドワークの重要性がある（波平・道信 2005, p.12）。

本研究で筆者は朝鮮族の移動と教育の実態を明らかにするために、主に中国の延吉市とハルビン市、北京市および韓国のソウル特別市、日本の首都圏という五つの都市や地域に

において、現地の人びとと同じように暮らしながら、長期的な調査を行った。筆者も朝鮮族と呼ばれている人びとの中の一人であり、調査を行う前から日常のコミュニケーションにおいて特に支障を感じないような中国語、朝鮮語／韓国語と日本語を身につけている。そして、筆者はハルビン市において 20 余年間、韓国のソウルおよびほかの都市では調査期間を含めて 2 年余り、東京では約 10 年間の生活経験がある。また、延吉市と北京にも定期的に赴き、朝鮮族家庭で彼らと一緒に生活をする中で、彼らのライフスタイルを理解し、彼らの話に耳を傾けた。さらに、筆者は本研究の調査校である B 校で約 1 年半教師と勤めた経験があり、韓国でも語学講師の経験がある。こうした日中韓 3 国のそれぞれの調査地における長期滞在と現地の人びととの関わりの中で生活した経験やそうした営みの中で参与観察し、インタビューを行ったことによって、本研究の朝鮮族の日中韓における移動と教育に関するエスノグラフィーが書けると考えられる。

「典型的な人類学のフィールドワークは、一つの場所でインテンシブ（集中的）に長期にわたって行われるタイプのものである」（山下 2005, p.7）。けれども、「21 世紀は、人・者・資本・情報が地球規模で動くグローバリゼーションの影響をほとんどの人が受ける時代であり、このような変化に対応して出てきたのが、マルチサイテッド・エスノグラフィー（multi-sited ethnography）（Marcus, 1995）である。これには二つのタイプがある。一つは人・物・資本・情報の移動を追って、フィールドワーカーも複数の場所でフィールドワークを展開する文字通りの複数の場所（multi-sited）でのフィールドワーク、もう一つは、フィールドワークを実施する場所は一つだが、そのフィールドに作用している多様な場所との関係を取り込めるような仕掛けをリサーチデザインに取り込んでおく意味で multi-sited という場合である」（箕浦 2009, p.15）。本研究で書いたのは、この第一のタイプのマルチサイテッド・エスノグラフィー（multi-sited ethnography）になる。

複数の場所（multi-sited）でのフィールドワークの今日における必要性に関して、山下は「今日のように、人びとの移動が激しい場合は、一つの場所のみの調査では完結せず、複数の場所でフィールドワークを行う必要もあるだろう」と指摘する（山下 2005, p.7）。このように、人の移動が活発に行われている今日において、彼らの移動を追って複数の場所におけるフィールドワークおよびそれに基づいて書いたエスノグラフィーがますます必要とされている。けれども、こうした研究はまだ非常に少ない。

エスノグラフィーについては、以下の箕浦の言葉に端的に表されている。

エスノグラフィーとは、他者の生活世界がどのようなものか、他者がどのような意味世界に生きているかを描くことである。その人たちが世界をどのように見て、何を喜び、どのような行動をとるのか、その背後にあるその人の文化を描くことである。人の日常行動の背後にある文化は、当人さえ感知されないくらいその人の一部分となっていることが多く、質問紙調査や面接などのその人の意識を頼るような研究方法では取り出せないことも多い。(箕浦 1999, p.2)

本研究の研究対象である中国朝鮮族はダイナミックな移動を行っているにもかかわらず、彼らがどこへ移動し、移動先でどんな生活をし、教育についてはどう考えているのかに関する十分な記録はない。したがって、本研究ではエスノグラフィーの手法を用いて、中国内において移動する朝鮮族の人びとがそれぞれの移動先でどんな生活をし、どんな教育戦略をたてようとするのかを描き出すことを目的とする。

本研究は、朝鮮族の移動地における社会環境に目を配りながら、人びとが現実に生きている生活実態をより鮮明に描き出すために、彼らの移動に沿って、複数の場所（主に北京市、ソウル特別市、東京都など）において長期にわたってフィールドワークを行った。そして、移動する朝鮮族の人びとが受けてきた朝鮮族学校の言語教育の実態を把握するために、中国東北部の延吉市とハルビン市の朝鮮族学校において現地調査を行った。これらの調査地においては、文化人類学的な参与観察、インタビュー、個人のライフヒストリーの聞き取りを行ない、朝鮮族の移動の全体像を文献とデータで精査し、官公庁でのデータ収集などの調査も行った。以下においては、筆者が調査を行った延吉市、ハルビン市、北京市、ソウル特別市、東京を中心とする日本の首都圏などにおける調査概要を記していく。

(1) 延吉市

中国の吉林省の東南部に位置し、東はロシアに隣接し、南は図們江を隔てて北朝鮮の咸鏡北道と見合っている延吉市は、中国の朝鮮族の自治機関である延辺朝鮮族自治州（1952年9月3日に成立）の州都である。延辺朝鮮族自治州において、朝鮮族の人びとは主体民族として地方自治権利を行使することができる。延吉市は朝鮮族、漢族、満族、回族などの13の民族があり、朝鮮族と漢族が主である民族混住地区である。

延吉市の公式言語は中国語と朝鮮語の二言語であり、市内の公的機関（学校など）や会

社、さまざまな店の看板は、ほぼ中国語と朝鮮語の両方で表示されている。教育において、延辺朝鮮族自治州は、二言語による教学を比較的早く実施した地域であり、中国の少数民族の中では一番早く政府レベルの二言語制度を確立した。延吉市には幼児教育から小学、中学、高校、大学（延辺大学）まで、教師の養成から教材出版、教育研究まで比較的を整えた朝鮮族による教学体系が形成されている。

延吉市はこのような民族的自治権利を行使する特徴と地理的な特性から、本研究の一つの調査地として選定された。本研究の調査対象である延吉市の朝鮮族学校であるA校は、毎年北京大学や清華大学のような一流大学へ進学する生徒が15名前後いて、90%の生徒が大学に進学するという公立朝鮮族の進学校である。筆者は主に2005年3月にこの学校で調査を行い、さらに2009年の9月に追加調査を行った。調査は主に参与観察とインタビューの両方を行った。筆者は、A校の授業と学校による諸活動を参与観察し、学校側や官公庁の提供するデータなどを収集した。学校の授業参観（主に朝鮮語科目と中国語科目）においては、主に授業内容や授業中の教師と生徒たちの使用する言語および生徒たちの反応などを把握した。筆者は放課後にも生徒たちがよく出入りするマンガ貸本屋や書店も訪れ、生徒たちが興味をもつ教科書以外の図書の情報を入手した。ほかに、朝鮮族がよく集まる延吉市内の街や飲食店、そして朝鮮族の家庭を訪問し、彼らが公的な場所や家庭内において使用する言語および彼らの居住環境や地域特性などを把握することで、多角的に調査を行った。

A校においてインタビューに応じてくれた人は全部で約25名になる。教師、生徒、保護者などで構成された本研究の調査対象者の選定過程をみると、生徒の場合、各学年から4～5名ずつ選び、地域別に延吉市内および近郊地域出身に区分し、生徒の特性を基準にして朝鮮族と漢族および韓国人留学生に分けた。なお、性別も学校の協力に基づき、男女両方のバランスを考えたうえで、選定した。そして、朝鮮語と中国語を教える教師を各二名選定し、保護者は市内と市外戸籍の者を含め3名選別し、調査対象者に選定した。後述するB校においても調査対象者の選定は同様に行った。

(2) ハルビン市

中国で一番北側と一番東側に位置している省が黒竜江省であり、その黒竜江省の西南部に位置しているのが省都のハルビン市である。また、黒竜江省は北側と東側がロシアに隣

接していることから、アジアと太平洋地域において陸路においてロシアとヨーロッパ大陸を繋げる重要な通路になっている。中国の改革開放政策実施後、ハルビン市の金融業は急速に発展し、現在ハルビン市は、ロシアおよび東ヨーロッパの諸国との貿易を行う重要な要衝であると同時に、韓国や日本がロシアなどの国に進出する重要な貿易通路でもある。

ハルビン市内には公教育機関としての朝鮮族小学校、朝鮮族中学校および朝鮮族高校がある。また、朝鮮族のエスニック・メディアである黒竜江朝鮮語放送局や黒竜江新聞社の本社があり、朝鮮族民族芸術館もある。このような朝鮮族の教育文化的な機関や施設が充実し、諸外国との経済的文化的な交流を活発に行うこの都市の特徴は、本研究の調査対象として選定された一つの要因でもある。

ハルビン市は、多民族の混住する地域でもあり、住民の中には漢族が一番多く、ほかに満族、回族、モンゴル族、朝鮮族など 40 以上の少数民族の呼びともいる。ハルビン市は延吉市と異なって、社会的な公式言語は漢語のみである。朝鮮語は、朝鮮族の学校や家庭および彼らの集まる場所などに限って使われる言語である。ハルビン市と延吉市は、このような中国東北部において朝鮮族が比較的に集住する都市という共通点と社会的な朝鮮語の使用環境が異なるという点から、比較の対象として本研究の調査対象に選定された。

B 校は、ハルビン市で唯一の公立朝鮮族中高一貫校であり、黒竜江省において唯一の「少数民族省級模範高校」である。全校の生徒数の半分以上が黒竜江省におけるハルビン市以外の地域からきた生徒たちである。本研究で A 校と B 校を調査校として選択した理由は、両方とも所属する地域において進学校（省級模範学校）として認められている点と、それによって、この二つの学校は地域環境は異なっているけれども、基本的に学校の特性は似ている部分が多いため、比較の対象として適切であると考えたことによる。

B 校における調査も主に 2005 年 3 月に行われ、インタビューに答えてくれた人は全部で約 25 名近くになる。男女両方、教師、生徒(朝鮮族、韓国人留学生)、保護者などで構成される。調査方法と調査対象者の選定においては、上記の A 校と同様に実施した。2009 年 8 月に、筆者は再びこの学校において追加調査を行い、教師や生徒および保護者へのインタビューを行い、家庭訪問も行った。また、ハルビンにおける黒竜江新聞（朝鮮語版）社での調査を行い、新聞の発行や記事における言語使用などを把握した。そして、朝鮮民族芸術館や朝鮮族用品商店などにおける観察および朝鮮族に関する関連文書やデータの収集を行った。

(3) 北京市

北京は中国の首都であると同時に、中国の政治、経済、文化、教育の中心でもあるため、中国の各地域から多くの人びとがさまざまな機会を求めて北京へ移動しようとする。特に中国の改革開放以降にこうした現象は顕著に現れている。朝鮮族の場合にも、北京は青島と並んで中国内で朝鮮族の移動人数が一番多い都市になっている。

本研究は中国内での朝鮮族の移動の実態と彼らの子どもの教育状況を把握するために、北京を調査地として選定し、現地調査を行った。調査は2006年、2007年と2011年にわたって、定期的に行った。北京においては主に以下の三つに分けて調査を行った。第一に、北京の望京地域に「韓国城」と呼ばれるコリアンタウンがあるが、そのコミュニティはどのようなコミュニティであり、朝鮮族とどのような関連があるかを調べるために現地調査を行った。筆者はこの地域で住み込み調査を行い、現地に居住している人びとの日常を観察し、インタビューを実施した。第二に、公教育機関としての朝鮮族学校がない北京には、朝鮮族知識人が設立した民営の韓国語学校がある。筆者はこの学校の校長の協力を受け、同校の教員や受講生にインタビューを行い、授業参観を行うことで、この学校が北京の朝鮮族にとってどのような学校として存在するのかを把握した。第三に、中国東北部から北京へ移動し、現地で生活している朝鮮族の個人にインタビューを行い、彼らの北京への移動の経緯や北京での生活状況および子どもへの教育などを把握した。調査対象者は公務員、会社員、自営業者、学生などを含め、約17名に上がる。彼等とは電話や電子メールなどによって連絡を保ち、追加調査（インタビュー）も行うことができた。

(4) ソウル特別市

中国朝鮮族の国外への移動の中で、移動人数が一番多い国が韓国である。彼らの多くはソウルに居住していることから、ソウルは本研究の重要な調査地の一つとして選定された。ソウルでのフィールドワークは主に以下のように行われた。まず、朝鮮族の生活実態を把握するために、ソウルで朝鮮族労働者が集住しているガリボン「同胞タウン」を訪れ、現地における街の観察と住民への聞き取り調査を行った。そして、同じ地域において朝鮮族がよく集まる場所としての朝鮮族向けの新聞社や教会を訪問し、参与観察と聞き取り調査を行った。次に、本研究の主な調査対象者である高学歴朝鮮族の人びとへのインタビュー

を行うために、知人・友人の紹介などを経てソウルの各地域に住んでいる朝鮮族の人びとと連絡を取り、話を聞かせてもらった。調査対象者は主に会社員、専門職者、大学院生、自営業者、主婦などが含まれる。約 20 人の調査対象者とは直接会って話すことを重んじており、主にソウル市内のカフェや飲食店、調査対象者の自宅および調査対象者が通う教会などの場所においてインタビューを行った。ほかに、韓国政府の朝鮮族に対する受け入れ政策や朝鮮族の韓国における法的地位などを把握するために、インターネット上の韓国の出入国・外国人政策本部のホームページやさまざまなメディアによる報道記事および新聞社の責任者へのインタビューなどを通じて情報収集を行った。

ソウルにおける調査は 2006 年から 2011 年にかけて、毎年定期的に行った。また、筆者は 2001 年と 2008 年には各一年間韓国に滞在した経験がある。2001 年には慶尚南道、2008 年にはソウルに滞在することで、日常において現地の人びとと接することから韓国の人びとの考え方を理解し、韓国の多様なメディアの報道姿勢や傾向を把握することができた。このような韓国での滞在経験は、筆者が韓国における韓国人の朝鮮族への社会的まなざしや朝鮮族の社会的立場および彼らの現地での生活実態等を理解することにおいて有利な要素として働いたと考えられる。

(5) 東京都

日本に滞在している朝鮮族は、主に 1990 年代後半から企業研修や留学で入国した人たちが主流を占め、彼らの多くは首都圏に居住している。朝鮮族の日本への移動は、彼らが中国の中等教育で外国語として日本語を学んだことと一定の関連があると言える。日本へ移動した朝鮮族の若い人たちは多言語能力を有していると同時に、高学歴者であるということから、彼らの日本での社会的立場やアイデンティティの変化および子どもへの言語選択や教育のありかたが、筆者が調査したほかに国や地域へ移動した朝鮮族とどのように異なるかを検討するために、本研究では東京を一つの調査地として選定した。

筆者は 2002 年から東京に住み始めた。日本在住の朝鮮族に関する本格的な調査は、2010 年 1 月から 2012 年 9 月の間にかけて、主に朝鮮族が多く居住している東京を中心とする首都圏において調査を行い、名古屋、京都、大阪に住んでいる朝鮮族に対しても聞き取り調査を行った。これらの地域においては、主に朝鮮族がよく集まる街や飲食店などで参与観察し、調査対象者の家庭を訪問し、彼らが使用する言語や居住環境および地域特性などを

把握した。日本では朝鮮族の集住するコミュニティがまだ明確に現れていないため、筆者は朝鮮族がよく出入りする朝鮮族料理店（東京の新大久保，池袋，上野など）を一つの調査地とし，店内における参与観察を行った。こうした飲食店では，朝鮮語の使用から朝鮮族と判断される者への観察や朝鮮族の集まりへの参加および店内に置いてある朝鮮語や中国語で書かれている無料雑誌の収集などを行った。それから，朝鮮族向けの新聞社や朝鮮族の集まる場所（研究会，同郷会・同窓会など）も訪れた。そして，筆者は朝鮮族が比較的によく居住していると思われる千葉県にも住んだことがあり，同地域に居住する朝鮮族への家庭訪問や聞き取り調査も行った。主に，彼らの国際移動経緯や生活状況および育児と子どもの教育状況などについて語ってもらった。会社員や主婦，学生などを含め，約 23 名（20 代前半から 50 代前半の朝鮮族の男女）の調査対象者に対してインタビューを行った。

本論文で扱った事例に関しては，個人名は匿名にした。個人情報を守るために，調査対象者の年齢や家族構成などにおいて議論に支障がないと判断した範囲で記している。聞き取り調査における使用言語としては，基本的に朝鮮語・韓国語あるいは中国語で行い，場合によって日本語も用いて話を交わした。言語使用においては，基本的に調査対象者が一番表現しやすい言語を用いてインタビューを行い，本論文でデータとして提示したものはすべて筆者が日本語に訳したものである。インタビュー内容は IC レコーダーで録音し，その後テープ起こしの作業を行った。録音できなかった一部の内容は，聞き取り直後に，メモを取る形で記録した。

6. 本論文の構成

本論文は 3 部 6 章（第 I 部は第 1 章，第 II 部は第 2 章と第 3 章は，第 III 部は第 4 章と第 5 章および第 6 章）として構成されている。第 I 部では，朝鮮族のこれまでの集住地域としての中国東北部における朝鮮族学校の二言語教育の実態とその変化について考察した。第 II 部では，中国東北部から北京へ移動した朝鮮族の現地での生活と子どもの教育について書いた。第 III 部では朝鮮族の国外への移動に焦点をあて，ソウルと東京を中心とする移動先における朝鮮族の事例を取り上げ，彼らの移動先におけるアイデンティティの変化および子どもへの教育戦略について論じた。

第 1 章では，中国の朝鮮族学校における二言語教育の実態を延吉市とハルビン市の各一校の事例を取り上げて考察する。ここでは，二つの異なる地域における朝鮮族学校の生徒

たちの中国語と朝鮮語能力、彼らのエスニック・アイデンティティのありかたを明らかにする。そして、近年両校に現れた新しい動きとしての中国語の習得を目指す韓国人留学生や朝鮮語の習得を目的とする漢族の子どもの流入現象を取り上げて分析する。

第 2 章では、北京に近年新しく現れた「韓国城」という名前のコリアタウンに焦点をあて、それが韓国人や朝鮮族だけでなく、北朝鮮や日本の人びとおよび現地の中国人を惹きつける要因は何であるか、そのコミュニティは朝鮮族にとってどのような空間であるのか、そこにおいてはどのような文化が創出されているのかについて考察する。

第 3 章では、北京に移動した朝鮮族の言語意識の変化と子どもへの教育選択および「民族語」の維持をめぐる葛藤などについて検討する。北京における朝鮮族の若い人たちは、社会的地位の向上や経済的な要因から子どもへの教育や言語を選択することが多い。彼らの中には子どもに中国語と英語の習得を優先する傾向が見られるが、朝鮮族の伝統を受け継いで子どもに「民族語」としての朝鮮語を教えるためにさまざまな方法を模索している人たちもいることを示したい。

第 4 章では、朝鮮族の韓国への移動を「帰郷」ととらえ、彼らの「帰郷」した韓国において、学歴がどのような影響を与えるのかを論じる。朝鮮族の韓国における法的地位および社会的立場を在外同胞法やメディアにおける朝鮮族への捉え方などを通じて分析する。そして、韓国社会における朝鮮族への受け入れ方が、朝鮮族が単純肉体労働者であるか高学歴者であるかによってどのように異なるのか、そこにおいてはどんな社会的排除と包摂が行われているのか。そうした社会的環境の中で、朝鮮族のアイデンティティがどのように構築／再構築され、それが彼らの子どもの教育にどのような影響を与えているのかを論じる。

第 5 章では、ソウルで朝鮮族の単純肉体労働者たちが集住するガリボンドン「同胞タウン」というコミュニティに焦点をあて、それはどのような街であるのか、朝鮮族の人びとにとってはどのような生活空間であるのか、その地域における韓国の市民団体は朝鮮族の人びととどのような関わりがあるのかなどについて検討する。

第 6 章では、留学や就職によって日本へ移動した高学歴朝鮮族に焦点をあて、彼らの日中韓 3 国における移動の実態と家庭教育による子どもへの言語教育戦略、そして彼ら自身の新しいアイデンティティの構築などについて考察する。

〈注〉

- (1) Excite ニュース 2010 年 11 月 30 日記事
http://www.excite.co.jp/News/chn_soc/20101201/Recordchina_20101130016.html (アクセス, 2012 年 11 月 24 日)
- (2) 朝日新聞 2011 年 1 月 20 日の記事
<http://www.asahi.com/business/update/0120/TKY201101200149.html> (アクセス, 2012 年 1 月 10 日)
- (3) 人民网 2011 年 12 月 2 日《关注中国富豪移民, 移民潮并非传说 流失的不仅是钱》
(人民網 2011 年 12 月 2 日記事「中国の富豪移民に注目する, 移民の波は伝説ではない 失われるのはお金だけではない」)
<http://mnc.people.com.cn/GB/16468976.html> (アクセス, 2012 年 12 月 4 日)
- (4) 財新网 2011 年 10 月 31 日《中国千万富豪已移民或拟移民 美国加拿大是首选》
(財新網 2011 年 10 月 31 日の記事「中国千万富豪はすでに移民あるいは移民しようとする 米国とカナダが一番人気」)
<http://special.caixin.com/2011-10-31/100319439.html> (アクセス, 2011 年 12 月 1 日)
- (5) 中国政府门户网站 2010 年 6 月 26 日《我国流动人口达 2.11 亿 未来人口流动呈四大态势》
(中国政府網 2010 年 6 月 26 日の記事「我が国移動人口は 2.11 億に達している 未来人口移動の 4 大情勢」)
http://www.gov.cn/jrzq/2010-06/26/content_1638133.htm (アクセス, 2012 年 12 月 4 日)
- (6) 中国政府门户网站 2010 年 9 月 16 日《我国少数民族流动人口目前大部分进城务工经商》
(中国政府網 2010 年 9 月 16 日の記事「我が国の少数民族の移動人口は, 現在そのほとんどが都市へ移動し, アルバイトや商業を営んでいる」)
http://www.gov.cn/jrzq/2010-09/16/content_1703606.htm (アクセス, 2012 年 12 月 4 日)
- (7) 中華人民共和国国家統計局第五回人口統計データ
<http://www.stats.gov.cn/tjsj/ndsj/renkoupuha/2000puha/html/t0201.htm> (アクセス, 2011 年 6 月 14 日)
- (8) (韓国) 出入国・外国人政策本部ホームページ
http://www.immigration.go.kr/HP/COM/bbs_003/ListShowData.do?strNbodCd=no

ti0097&strWrtNo=100&strAnsNo=A&strOrgGbnCd=104000&strRtnURL=IMM_607
0&strAllOrgYn=N&strThisPage=1&strFilePath=imm/ (アクセス : , 2012 年 9 月 20
日)

(9) 鄭雅英 (2008) によれば, 1991 年に南米に移民した日系人を対象とする「定住」資格を新設してその在留と就業を自由化した日本の政策のことである (鄭雅英 2008, p.93)。

(10) 異文化間教育学会ホームページを参考

<http://www.intercultural.jp/about/index.html> (アクセス : , 2013 年 5 月 31 日)

(11) 山田 (2008) は, 異文化間教育学会の設立 (1981 年) からの 10 年間を異文化間教育学研究の萌芽期として位置づけ, 学会大会の第 11 回から第 15 回までの 5 年間を成長期, 第 16 回から第 25 回までを拡大期, 第 26 回から第 28 回までを安定期と定義した。

(12) 西原 (2007) は, 国籍, 民族, 出身社会の違いを超えて一つの世帯として存在する家族を, 複数の文化的背景を持つという意味で, 「バイカルチュラル家族」と定義する。

(13) 山本 (2007) は, 複数の言語と関わりをもつ家族を「異言語間家族」(Interlingual families) と呼び, そうした家族に生起するさまざまな言語的事象を包括的かつ体系的に研究する学としての新たな研究領域を「異文化間家族学」と称した。

第一章 中国における朝鮮族学校の二言語教育の実態とその変容

—延吉市とハルビン市の事例—

1. はじめに*

本章ではグローバル化の進行する現代において、中国に少数民族教育がどのように変化していくのかを、中国東北部の延吉市とハルビン市の朝鮮族学校の事例を取り上げることで、その実態を明らかにしたい。

中国における少数民族教育とは、漢族以外の 55 の少数民族に対する教育を指す。「民族教育」とも呼ぶ。この少数民族教育の主要な特徴は二言語教育である。中国における二言語教育は、多数派の漢族の言語であり国家の言語である中国語（中国では一般的に「漢語」と呼ぶ）と、各少数民族の独自の言語との二言語を教育しようとするものである。中国政府は二言語教育を公教育機関としての少数民族の学校で教授することによって、少数民族の子どもたちが国民としてのアイデンティティと同時に少数民族としてのアイデンティティをも維持し両立することを、その政策主眼としていると考えられる。

中国において「朝鮮族」と呼ばれる中国朝鮮族は、朝鮮半島からの移民および彼らの子孫とされ、中国の国籍を有する人びとのことである。これまでの先行研究では、主に 1860 年～1904 年(越境潜入時期)、1905 年～1930 年(自由移民時期)、1931 年～1945 年(強制集団移民時期)の三つの時期に現在の中国東北部への大量の移住があったとされている(임계순 2003, p. 50)。中国での朝鮮族教育は、移住初期の儒教教育以降の歴史的変遷を経て、1950 年から上記のような二言語教育が公式に行なわれてきた(姜永徳 1992, p.11 ; 박청산・김철수 2000, p.132)。朝鮮族の二言語教育は、国家の標準的な言語としての中国語と民族語としての朝鮮語を平行して教授することである。例えば、北朝鮮と韓国では朝鮮語および韓国語はその国の教育を担う唯一の言語であるが、中国では朝鮮族学校において中国語と朝鮮語とがペアとして教えられることによって、少数民族教育としての朝鮮語教育が成立してきた。

しかし近年になると、このような二言語教育は、中国の改革開放とグローバル化の流れの中でさまざまな変容を遂げている。1980 年代以降、従来中国東三省に主に居住していた朝鮮族の各地域への移動が始まった。その結果、農村における朝鮮族学校は、生徒不

足などの原因により維持が難しくなっている。もう一方、都市部にある一部の朝鮮族学校は近年、漢族や韓国人留学生が入学するようになった。このような新しい動向は、従来の民族学校における教育にグローバルな市場に応じた教育という新しい意味を付与する。

本章では、朝鮮族学校における二言語教育（朝鮮語と中国語）がどのように行われているのか。そこで二言語教育を受けている生徒たちは、一体どのような生徒たちなのか、その中で朝鮮族生徒の二言語の習得が中国国民としての国民的帰属意識および朝鮮族としてのエスニック・アイデンティティと、どのような関わりがあるのか、グローバル化時代において朝鮮族はどのような学校選択をするのかに関して検討する。

2. 改革開放と中国朝鮮族の移動

中国は、1978年の中国共産党第11期3中全会の決議により、改革開放政策を開始した。改革開放により、中国の市場経済が始まり、国外への門戸開放が行なわれ、中国はグローバル化時代に踏み込んでいった。改革開放による市場化は、中国全土での均等な発展をもたらしたのではなく、東部沿海地域にかたよって集中し、経済の地域的な不均衡を広げていった。したがって、それに刺激されて内陸から東部沿海地域への人口移動が急激に進行することになった。

人の移動が激しい今日において、中国朝鮮族の活動の場も東北三省に限られなくなり、国内および国外への移動が始まった。その結果として、中国東北部における朝鮮族子どもの数が減少し、朝鮮族学校が減り始めた。特に高学歴者の場合は、経済が発展している大都市および沿海地域を移住先に選ぶことが多い。したがって、今までの朝鮮族が集住する地域から他の地域へ出て活動するためには、これまで朝鮮語を第一言語として使用してきた朝鮮族にとって、中国における共通語の中国語を習得することが重要になってきた。

朝鮮族の移動先は国内においては北京、天津、青島、上海、深圳などの大都市へ拡大しつつある。北京における朝鮮族の人口は、1990年の中国の人口統計によれば約7,689人になる（황유복 2002, p.128）が、2000年の人口統計によれば約2万369人に達する（韓光天 2006, p.159）。中央民族大学の黄有福教授によれば、2006年現在の北京における朝鮮族の人口は約6~7万人に上る⁹⁾。東北三省を離れた朝鮮族は約25~50万人と推測されるが、これは朝鮮族人口の約13~26%に相当する（권태환・박광성 2005, p.38）。国外への移動は韓国、日本、アメリカなどに及ぶが、その中で一番多く彼らが移動した国として韓

国があげられる。2002年の韓国法務部資料によれば、韓国における朝鮮族は19万8,037人（その中に不法滞在が7万9,737人という数字が出ている）に達する（김귀옥 2005, p.207）。朝鮮族にとって、韓国は朝鮮語が通じるから行きやすい国であるし、同じ仕事の場合、韓国は中国より賃金が高いため移住の魅力的な場でもある。しかし、韓国語は中国で使われている朝鮮語と文法は同じであっても、語彙やアクセントに違いが見られる。韓国経済の発展とともに韓国語の国際的な言語価値が高まっている中で、朝鮮族にとって韓国語は中国で使用している朝鮮語より有効な新しいグローバル化時代の言語になっている。

改革開放以降、特に1992年に中韓建交として中国と韓国が国交正常化を果たして以来、中国朝鮮族は国内および国外へ動いている。これは彼らがグローバル化の波に乗っている現象である。彼らは、新しい活動の場における使用言語の重要性に気づき、中国語に対してもまた今まで習ってきた朝鮮語と少し異なる韓国語の習得に対しても新たな認識をもつことになった。

3. 朝鮮族学校の教育および朝鮮族生徒のアイデンティティ

(1) 朝鮮族学校の教育状況

朝鮮族学校での教育とりわけ二言語教育は、どのようなものなのであろうか。以下は、筆者が中国東北部における朝鮮族の集住地域の延吉市にあるA校と、朝鮮族が漢族と混住しているハルビン市にあるB校で行った調査データをもとに両校の教育状況を叙述したものである。

A校とB校とも、学校教育において言語教育に重点を置き、朝鮮語と漢語の二言語に通じる生徒の養成と外国語教育（主に英語、日本語）を重視している。さらに、両校は生徒の総合能力の養成にも力を注ぎ、国内および国外において活躍できる人材をつくることで学校の特徴を発揮しようとしている。そして、近年になって外部との交流も深め、国内および国外との姉妹校作り、他民族そして留学生への積極的な受け入れの開始など、時代に応じた二言語教育のメリットを高める対応をしようとしている。

A校とB校をとりまく言語環境は以下のとおりである。

地域と家庭の言語環境に関しては、すでに言及したように延吉市の公式言語は中国語と朝鮮語の二言語であり、したがって、A校の朝鮮族生徒たちは地域と家庭において主に朝鮮



図1 A校内の運動場(2009年9月1日,筆者撮影)



図2 A校内の掲示板上に「我が民族の固有の美しさ」という題目の文章が張られている。(2009年9月1日,筆者撮影)



図3 B校の裏庭と運動場(2009年8月28日,筆者撮影)



図4 B校の教室(2009年8月27日,筆者撮影)



図5 B校内の壁に貼られているポスター。その一番上に書かれている左からの8文字は「二言語に通じ, 四つの言語を同様に重視する」である。(2009年8月28日,筆者撮影)

語を使用する環境に置かれている。しかし、B校の朝鮮族生徒たちは、地域的環境として中国語が第一言語である。家庭の言語環境としては、ハルビン市内出身の生徒は中国語が主であるか若しくは朝鮮語と中国語の併用が一般的である。近郊地域からきた生徒の場合は、これまでの家庭生活で朝鮮語のみ使っていた場合が多い。

学校空間での教授言語と日常会話に関しては、A校は教授言語から日常会話まで朝鮮語中心の比較的単一の言語使用状況である。B校は、学校の教授言語および日常会話において中国語が主で、ときには朝鮮語も使用する程度である。したがって、B校におけるハルビン市内出身の朝鮮族生徒は中国語が第一言語であり、そのため朝鮮語をあまり話せない生徒が多い。しかし、B校の近郊地域からきた朝鮮族生徒は朝鮮語が第一言語で、中国語はあまり話せない。結果として、A校のような朝鮮族の集住地域の朝鮮族学校であれ、B校のような混住地区の朝鮮族学校であれ、朝鮮語と中国語の両方とも習熟した生徒は少ない。

次に、両校で二言語教育に用いられる教科書に注目しよう。

A校とB校の朝鮮族生徒は、現在使用している教科書について一般的に不満をもっている。中国東北部における朝鮮族学校では、延辺出版の『朝鮮語文』教科書と『漢語文』教科書を使用している。大学受験の時も一般的に朝鮮語文と漢語文この二つの科目において、延辺出版の教科書から試験問題を出すことが規定されている。

例えば、現在使用している『漢語文』教科書に関して、A校の延吉市出身の朝鮮族生徒の中には、内容的に古くて易しすぎて、面白さが足りないという指摘する者がいる。一方で延吉市の近郊地域からきた生徒の中には難しいという声がある。実際に、A校は吉林省で統一普及されているMHK（中国少数民族漢語（筆者注：中国語）能力試験）⁹⁾を採用しており、MHKに合格した生徒は、大学受験の時『漢語文』の試験を受ける必要がない。MHKの試験内容は延辺出版の『漢語文』教科書の内容より難度が高いからである。したがって、A校の漢語文科目の教師は生徒たちの中国語能力を高めるために『漢語文』教科書を中心に授業をするのではなく、課外の教材を使う場合が多くなっている。B校では、漢語文科目においては、高校二年生まで漢族学校用の全国統一編纂の『語文』教科書を使用している。しかし、高校三年生は大学受験のために延辺出版の『漢語文』教科書を使う。B校において、多数のハルビン市内出身の生徒には『漢語文』教科書は易しすぎるし、他方で、近郊地域からきた朝鮮族生徒は第一言語が朝鮮語であるため、『語文』教科書に難しさを感じることもある。

次に、『朝鮮語文』教科書に対しても生徒たちは批判的である。特に延吉市では、学校の



图 6



图 7

延吉市内では、街の道路標識や店の看板などはほとんど中国語と朝鮮語の二言語で書かれている。(2009年9月2日、筆者撮影)



图 8



图 9

延吉市内の「新華書店」。この書店では朝鮮語・韓国語の図書を数多く販売している。特に近年韓国から輸入した韓国語の書籍が増えているが、その中には子ども向けの童話や文学書が多く見られる。(2009年9月1日、筆者撮影)

図書館や地域の書店から韓国の本が容易に入手できる（図8と図9を参照）。ハルビン市では書店では韓国の本が入手しにくいですが、生徒たちはインターネットで韓国のサイトをクリックし、韓国語の文学作品などに接することが多い。このように、A校とB校の朝鮮族生徒たちは韓国語に接することによって、現在学校で使用している『朝鮮語文』教科書に対して「古く、窮屈で、実用的でない」と考えるようになった。生徒たちにとって、朝鮮語文科目はただ試験のために勉強する科目になってしまっている。朝鮮語文科目を教えているA校の教師からも教科書の内容が古いという声があった。

このような朝鮮語の教科書には興味がない生徒たちが、韓国語のマンガには興味が多いことが本調査から見られた。筆者の2009年の延吉市での現地調査から見られたのは、A校の周辺には古本屋（図10を参照）があり、そこには朝鮮語の雑誌以外にはほとんど韓国語

のマンガが並べられていた。それらの韓国語のマンガは全部韓国で出版されているマンガであるが、その中には韓国人マンガ家の作品もあるが、韓国語に訳されている日本のマンガシリーズが多かった。この古本屋はA校の生徒たちが休憩時間や放課後の時間によく訪れる場所であり、自分の描いたマンガキャラクターを展示する場所でもある。生徒たちは、韓国語のマンガを



図10 延吉市のA校近くの古本屋。店内には韓国から輸入した韓国語に翻訳された日本のマンガがたくさん並べられている。壁の一面にはA校の生徒たちが描いたマンガがたくさん貼られている。（2009年9月1日、筆者撮影）

読むことによって、韓国語を覚えていくと同時に図10のように自らマンガを描くことにも進行していく。このように、朝鮮族の子どもたちは韓国語という言語媒体によって、マンガといったポピュラーカルチャーを受け入れることになり、それによって朝鮮語より韓国語により興味を持つようになる。

朝鮮族の民族教育において極めて重要な朝鮮語文科目の教科書が、生徒の興味を引くことができなくなり、受験勉強のためのものに限られるということは、学校における民族語の学習が生徒たちにとってどれぐらい意味があるかという疑問をもたせる。このような状況に応じて、2005年から朝鮮族学校における漢語文の教科書と朝鮮語文の教科書の改革作

業が行われはじめた。このような改革作業の実態を把握するために、筆者は 2009 年に追加調査を行った。それに関して、B 校の朝鮮語科目の担当教師と漢語科目の担当教師は以下のように語った。

現在は朝鮮語の作品が半分入れ替えられました。過去に比べて、現在の『朝鮮語文』科目の教科書には朝鮮（筆者注：北朝鮮を指す）の作品だけでなく、韓国の現代文学作品も載せられています。そして、もともと中国語による作品を朝鮮語に翻訳されたものの中にも、古い作品に限らず、現代作品が増えてきました。過去の教材に比べて一番いいと思う点は、やはり単に朝鮮語という言語だけでなく、朝鮮語や韓国語で書かれている作品から、さまざまな地域の文化を接することができるということです。例えば、昔はインディアンに関する内容は教科書に出たことがないですが、今回の新しい教科書にはそうした内容が載せられています。そして、さまざまな国や民族に関する内容が書かれているため、教師としても勉強になるし、面白く感じます。（B 校の朝鮮語科目の担当教師、女性、2009 年 8 月 26 日、ハルビンにてインタビュー）

今の教科書は、漢族学校の国語教科書と共通な内容が多いです。前の教科書に比べて、量も増えたとし、難度も高まっています。内容的にも、1950～60 年代の作品が多かった前の教科書に比べて、今のほうは現代作品やエッセイなどが増えました。エッセイが増えたのは、生徒たちの理解力を高めるためだと思います。（B 校の漢語科目の担当教師、女性、2009 年 8 月 26 日、ハルビンにてインタビュー）

上記の中国語科目（筆者注：中国の朝鮮族学校では「漢語科目」と呼ぶ）の担当教師から外地から B 校に来た朝鮮族生徒のほとんどは、市内出身の生徒たちに比べて中国語の使用と表現力が不十分であり、中国語の教科書内容を理解するには困難があるのは確かであるが、中国語科目の試験の成績からは大きな差は見られないと語った。

以上、A 校と B 校における教育とりわけ二言語教育について検討した。両校とも言語教育を重視し、民族語と中国語の二言語に通じるうえにグローバル化時代に適応するための外国語を身につけさせようとしている。しかし、長年二言語教育に専念してきたにもかかわらず、二言語に通じる生徒を養成することは必ずしも成功していない。その原因の一つには、『漢語文』と『朝鮮語文』の教科書自体が生徒たちおよび教師を満足させるものでは

ないことがあげられる。特に、中韓建交とともに韓国の映画やドラマおよび韓国の書籍などが中国に入ることによって、朝鮮族の生徒たちは韓国の文学書も容易に手に入れることができるようになった。したがって、朝鮮族は今まで中国で使用してきた朝鮮語は北朝鮮の言葉に近いものであることに気づいてきた。韓国の経済成長とともに韓国語の国際的な価値が高まる中で、現在朝鮮族生徒を魅了している言語は朝鮮語より韓国語である。朝鮮族学校で今まで使用してきた朝鮮語文の教科書も北朝鮮の言語に近いので、教科書としての魅力を失っている。漢族学校に通う朝鮮族生徒の増加と漢族生徒および韓国人留学生が朝鮮族学校に通うという双方向の動きの中で、朝鮮族学校はより多様な生徒のニーズを満たす学校運営をしなくてはならないという課題に迫られている。

(2) 朝鮮族生徒の国民的帰属意識とエスニック・アイデンティティ

まず、本論文の重要なキーワードの一つである「アイデンティティ」について少し説明したい。アイデンティティという用語について小野原(2004)は「自分に対するイメージ、信念、感情、評価の総体として「自分とは何か」を説明する言葉である」と述べる(小野原 2004, p.15)。また、クレア・マリイ(2011)は、アイデンティティは「自分から見た《わたし》および他者から見た《わたし》との関係において成立する」と主張する(クレア 2011, p.66)。本論文では、主に「自分はどこに属しているか」という集団的帰属意識を指すものとして「アイデンティティ」という語を用いる。なお、それは他者が見る自分と自分が見る自分の両方の交渉や統合によって構築/再構築された自己認識を指すものである。本論文ではこうした自己認識を、主に国民的帰属意識とエスニック・アイデンティティといった集団的帰属意識を指すものとして用いる。

以下では、中国の少数民族教育の重要な一環としての二言語教育が、公教育機関としての朝鮮族学校において実施されることによって、そこに通っている朝鮮族の生徒たちはどのような国民的帰属意識とエスニック・アイデンティティを形成しているのかを考察する。

a. 朝鮮族生徒の国民的帰属意識

筆者の2005年に行ったインタビューに応じたA校とB校の朝鮮族生徒たちは、全員が「中国人」としての国民的帰属意識を強固に持っていた。彼らの答えとして、以下のよう

なものが挙げられる。

中国の朝鮮族は、たしかに韓国人や北朝鮮人とは同じ民族ですが、そこ（韓国、北朝鮮）は私の先祖が住んでいたという所であるだけです。中国こそ私の国です。（香花（仮名）、女性、A校の高校三年生、延吉市出身）

中国は私が属する第一の「祖国」で、韓国と北朝鮮はそれに次ぐものです。スポーツの試合とかの場合は、まず中国のチームを応援します。（太国（仮名）、男性、A校の高校三年生、延吉市の近郊地域出身）

私は中国に生まれ、中国で育てられたから中国人です。中国語は、今中国にいるからできないといけません。しかし、中国語が自分の言語だという気はしません。朝鮮語のほうが、私の気持ちをよく表現できるし、一番親しみを感じさせる言語です。（順琴（仮名）、女性、B校の高校三年生、ハルビン市の近郊地域出身）

上記のように、A校とB校の朝鮮族生徒たちは「中国人」としてのナショナル・アイデンティティが強い。そのうえで、順琴さんのように中国語は中国で生活するために必要な言語であるが、朝鮮語が自分の言語だ、という生徒もいる。この事例からは、国民的帰属意識とエスニック・アイデンティティの間の微妙なバランスが伺える。

b.朝鮮族生徒のエスニック・アイデンティティ

朝鮮族の集住地域にあるA校の生徒たちの中には、朝鮮語が第一言語であり、ふだん朝鮮族の間で生活をしているため、漢族の人とあまり接したことがない生徒が多い。そうした生徒の中には、「朝鮮族」という民族的帰属意識に関して特に意識していない生徒もいる。それに比べて、朝鮮族が漢族と混住している地区にあるB校の生徒たちは、地域の第一言語が中国語であると同時に漢族と接するチャンスが多い。こうした生徒たちは、いつも漢族に接することから自分の民族的アイデンティティを意識する機会が多い。B校の生徒の中には、たとえ漢族の友達のほうが多く、朝鮮語ができなくても民族的帰属意識を比較的に強く持つ生徒がいる。そのB校の生徒からは以下のような朝鮮語への意識的な発言がみら

れた。

朝鮮語は朝鮮族にとって一番根本的な言語だと思います。だから、朝鮮語をちゃんと学びたいけど、客観的な要素（周りの人たちが主に中国語で話す、朝鮮語の教科書は魅力がない）の影響が大きいです。（海月（仮名）、女性、B校の高校三年生、ハルビン市の近郊地域出身）

朝鮮語が中国語よりもっと耳に慣れているし、親しみを感じさせます。（紅丹（仮名）、女性、B校の高校三年生、ハルビン市の近郊地域出身）

このように、B校においては朝鮮語は朝鮮族の生徒たちの民族的帰属意識のありかたと緊密な関係があることが分かる。その一方で、次のように朝鮮語が自分の民族的帰属意識とほとんど関係がないといったような発言もある。

朝鮮語を習うのはただ試験のためです。朝鮮語の授業は面白くないから、授業中に寝る人が多いです。（基哲（仮名）、男性、A校の高校一年生、延吉市の近郊地域出身）

私自身は朝鮮族として、中国語以外に朝鮮語ができるという言語優勢があるから、それはいいと思います。しかし、その他には特に誇りとか持っていません。（光日（仮名）、男性、A校の高校二年生、延吉市の近郊地域出身）

私は朝鮮語があまりできないけど、漢族より朝鮮族の友達ともっと親しくなれます。それは同じ民族だからです。（民洙（仮名）、男性、B校の高校二年生、ハルビン市出身）

上記の事例からみれば、B校の海月さんと紅丹さんは朝鮮語が朝鮮族にとって一番基本的な言語だと認識しており、対してA校の基哲さんは日常的に朝鮮語を使用しているにもかかわらず、朝鮮語への特別な意識はもっていない。A校の光日さんの場合は朝鮮語を社会進出のための有利な道具と考えていることが見受けられる。ここで興味深いことは、A校の朝鮮族生徒たちは、日常的に朝鮮族に接することが多く、朝鮮語が中国語より熟達しているにもかかわらず、朝鮮族としてのエスニック・アイデンティティを特に意識していないと

いうことである。対して、B校の朝鮮族生徒たちは朝鮮語がよくできなくても民族的帰属意識が強い傾向がある。

上記のように、朝鮮族の生徒たちの中国人としてのナショナル・アイデンティティと朝鮮族というエスニック・アイデンティティとは微妙なバランスを保っている。朝鮮族という民族的帰属意識は民族語の朝鮮語の能力と必ずしも一致することではないと言える。中国政府による少数民族教育政策は、朝鮮族学校という公立学校を作って、そこで中国語と民族語のペアとしての二言語教育を実施している。上記のような朝鮮族が、中国国民としての国民的帰属意識を強くもち、かつ朝鮮族としてのエスニック・アイデンティティを重層的にもっていることは、中国の二段構えの少数民族政策が機能していると言えるだろう。

4. グローバル化時代の学校選択

改革開放の実施以来、中国内における共通語としての中国語の重要性がますます高まり、また朝鮮族の地理的移動にともない脱農業といった変化が起こる中で、朝鮮族の民族教育観はどう変化してきているのだろうか。自分の子どものために、あるいは自分自身のために、彼らは学校とその教育とをどのように選択しているのか。延吉市とハルビン市における進路としての学校選択は、主に朝鮮族学校と漢族学校の二種類に分けることができる。以下では、まずこの朝鮮族学校と漢族学校の選択要因について検討する。さらに、今回調査の過程で、朝鮮族学校であるA校とB校に漢族生徒と韓国人留学生が入学していることが分かった。彼らが朝鮮族学校を選択した要因は何であろうか。

(1) 漢族学校を選択する要因

中国において朝鮮族が漢族と混住している地域は、過去においても漢族学校に通う朝鮮族の子どもが多かった。1989年の統計データによると、中国の東北部における瀋陽、長春、ハルビンの三大都市の朝鮮族生徒の70～75%が漢族学校に通っている（황유복 2002, p.117）。それに比べて、朝鮮族が集住し、朝鮮族の伝統も強固に伝承されていると見られる延辺朝鮮族自治州の場合は、朝鮮族生徒の9.22%が漢族学校に通っているにすぎない（김상철・장재혁 2003, p.108）。しかし、近年、延辺朝鮮族自治州の朝鮮族生徒の中にも

漢族学校に通う生徒が増えつつある。それに関する正確な数値は把握できないが、本研究の調査から漢族学校に通う朝鮮族生徒が増加している傾向をさまざまな場面で観取することができた。例えば A 校の校長は、2005 年現在延吉市における漢族中高一貫校である V 校には、全校生徒の 20%を占めるまでに朝鮮族生徒が「増えた」ことを指摘している。

このように、漢族学校に通う朝鮮族の子どもの増加はどのような原因があるかに関して以下の二つの事例を検討したい。

<事例 1>金海燕（仮名）、女性、朝鮮族、A 校の教師。

金さん自身は小学校から漢族学校に通った。現在 9 歳で小学校三年生の子どもが一人いる。この子どもは、幼稚園は漢族幼稚園に通い、小学校 1 年と 2 年は朝鮮族学校に通い、小学校 3 年生の時からまた漢族学校に通い始めた。金さんの家庭においては、中国語を主に使う。しかし、子どもに朝鮮語を忘れさせたくないため、家で朝鮮語も使ってきた。子どもを漢族学校に転校させた理由に関して、金さんは以下のように語る。

私たち夫婦は二人とも漢族学校に通いました。だから、家では主に中国語でしゃべっています。しかし、子どもに朝鮮語を忘れさせたくないの、朝鮮語も意識的に使っています。うちの子は、すでに 2 年間朝鮮族学校に通っていたので、基本的な朝鮮語は全部できます。漢族学校に転学させたのは、この延辺地域は朝鮮族人口が急激に減少しており、子どもたちも将来われわれとは異なる進路選択を行うと思うからです。延辺に留まっているとはかぎらないでしょう。だから、チャンスをより増やすためです。（2005 年 3 月、延吉市にてインタビュー）

<事例 2>李惠淑（仮名）、女性、朝鮮族、B 校の教師。

李さん自身は小学校から高校まで漢族学校に通った。大学卒業後ずっと地元の漢族学校で教え、その後現在のハルビン市の B 校に転職することになった。李さんの子どもは小学校からずっと漢族学校に通い、現在はハルビン市内の漢族学校の高校 1 年生である。家で、李さんは子どもと朝鮮語、中国語の両方を使って話す。子どもは朝鮮語が話せないし、書けないが、少しは聞き取れる。

以下は子どもを漢族学校に通わせた原因に関するインタビュー内容である。

問：なぜ子どもを漢族学校に通わせたんですか。

李さん：理由は簡単です。漢族学校は教師たちの教え方が上手だから。そして、教える知識量が多いです。

問：子どもが民族語（朝鮮語）ができないことについて、どう思いますか。

李さん：それはしかたないですね。選択しなければならないじゃないですか。選択するのなら中国語のほうにします。

問：子どもが将来社会に適応しやすくするためですか。

李さん：それはそうですね。もう一つは、大学では全部中国語で教えるから漢族学校を卒業していたほうが有利だからです。

上記二つの事例では、共通点は保護者の二人とも教育者であり、子どもの将来の社会進出に有利なことを考えて漢族学校を選択したことである。そして、二つの事例とも朝鮮族として朝鮮語は捨てさせたくないが、学校選択において主要には漢族学校を選択することである。

本研究の調査からみれば、朝鮮族生徒が漢族学校に通う第一の要因は、主に中国語主体社会に良く適応するためである。これは上記の二つの事例から分かる。これに関しては、朝鮮族集住地域と朝鮮族が漢族と混住する地域を比較しても、あまり違いがない。実際にも、朝鮮族が漢族と混住する地域では、一般的に居住している主体社会が中国語社会であるため、漢族学校に通う子どもが多かった。しかし、延辺朝鮮族自治州のような朝鮮族の集住地域では、従来は朝鮮族学校に通う生徒が大多数であった。しかし、現在は将来活動の場が自治州に限らず漢族社会に広がるため「中国語をよく勉強する」ことが重視されてきた。そして、保護者の中で質のより高い学校を追求する傾向も見られるようになった。

第二の要因は、朝鮮族学校の廃校によって居住地の近くに朝鮮族学校がなくなったため、仕方なく漢族学校に通うという事態が挙げられる。

過去においては、朝鮮族の村ごとに朝鮮族小学校があり、朝鮮族の郷には朝鮮族中学校があり、県には朝鮮族高等学校があった。したがって、朝鮮族の子どもたちは大学進学まで朝鮮語と朝鮮族の文化が維持できた。しかし、現在は朝鮮族の移動とともに村の朝鮮族学校は生徒がいなくなり廃校という状況にさらされている（황유복 2002, p.114）。延辺朝鮮族自治州の朝鮮族小学校は 1985 年までは 419 校であったが、1995 年には 177 校に減少した。朝鮮族中学校の数は 1985 年の 118 校（中学 92 校、高校 8 校、完全中学 18 校）から、1995 年の 49 校（中学 34 校、高校 8 校、完全中学 7 校）に減少した（同上：p.114）。

黒竜江省の実態調査によると、朝鮮族小学校は1990年の382校から1997年には51校に減少し、中学校は1990年の77校から1997年に15校しか残らずほかの学校は全部廃校となったのである（同上：p.114）。

このように、朝鮮族生徒が漢族学校を選択するのは、中国における主体社会である漢族社会に適応するための中国語重視、質の高い学校への選好、朝鮮族学校の廃校によってしかたなく漢族学校に通うという要因があることが分かった。

（2）朝鮮族学校を選択する事例

子どもを漢族学校に通わせる朝鮮族保護者が増加しつつある一方、依然として朝鮮族学校に通わせる朝鮮族の保護者はどのような人たちであろうか。そして、朝鮮族学校であるA校とB校に通っている生徒たちは、どのような原因でこれらの朝鮮族学校を選択したのだろうか。

<事例3>姜春蘭（仮名）、女性、朝鮮族、B校の教師。

姜さんには現在6歳の娘が一人いる。娘はハルビン市内のある朝鮮族小学校の附属幼稚園に1年間通った後、同じ附属学前班⁽⁹⁾で1年間、現在もその学前班に通っている。娘が上記の学前班に1年間通う時、担任の先生が4人変わった。これに対して姜さんは非常に不満を持っている。そして、現在の学前班の先生たちは責任感がなく、教え方もよくないと批判的である。

夫は自分が朝鮮族学校に通ったから、子どもを漢族学校に通わせたくないと言うんです。彼は朝鮮族の子どもは必ず朝鮮族学校に通わなくてはいけないと考えています。私も娘に朝鮮語を学ばせるのは将来にいいと思いますが、だからとして朝鮮族学校に通わなくてはいけないとは思いません。そして、今の朝鮮族学校は本当に責任をちゃんととっていません。（2005年3月、ハルビンにてインタビュー）

姜さんは子どもを朝鮮族学校に通わせることへの不安を抱いていながら、夫の意思にしたがって朝鮮族学校を選択しようとする。姜さん自身は漢族学校を卒業したが、夫は朝鮮族学校を卒業し、さらに「朝鮮族の子どもは必ず朝鮮族学校に通わせる」という考えのも

とで自分の子どもを朝鮮族学校に通わせようとする。ここでは、朝鮮族と朝鮮族学校の間
の「必然性」という伝統的な意識と、個人と教育との関係の中から生じる現実的な問題の
間の乖離を見ることができる。

<事例 4>陳雪梅（仮名）、女性、朝鮮族、大学教員。

陳さんは大学教員であり、仕事で日本や韓国によく行く。彼女には 14 歳の息子が一人
いる。息子は幼い頃祖母の家にいる時が多く、一番最初に覚えた言語は朝鮮語であった。
しかし、幼稚園はハルビンの漢族幼稚園に通ったため、それ以降はだんだん中国語を使
用することが多く、家で両親とは朝鮮語の日常用語以外にほとんど中国語を使用してい
た。両親も息子に特別に朝鮮語を教えたことはない。息子は小学校は漢族学校に通い、
その後もある有名大学の附属中学校（4 年制）に 2 年間通ったが、半年前に両親の意志で
朝鮮族学校の B 校に転校することになった。

息子を漢族学校に通わせ、さらに朝鮮族学校に転校させた原因について、陳さんは次
のように語る。

当時、息子を漢族学校に通わせたのは、一つは漢族学校のほうが朝鮮族学校より教学
の質も高いし、知識量も多いからです。将来社会に出ても中国で過ごす限り、朝鮮語よ
り中国語をもっと使うことになるでしょう。そして、もう一つの原因は正直に言って、
私が朝鮮族学校で教師として働いた経験もあるので、子どもにもっと素晴らしい教育を
受けさせたかったです。夫も私と同じ考えだったので、特に争議はなかったです。でも、
その後また朝鮮族学校に転校させるようになったのは、息子が前通った漢族学校が進学
校だったので競争が激しく、それによって息子の勉強のストレスも多いと思ったからで
す。最初は知らなかったですが、そうしたストレスで息子は体調を崩し、半年休学する
こともありました。今の学校に転校してからは、息子が寝る時間も増えることで、前よ
り背もずいぶん高くなりました。それはとても嬉しいことです。漢族学校に通っていた
時は、勉強で忙しく、毎日寝不足で、いつも疲れているようでした。そのような精神的
なプレッシャーからお腹が痛くなる症状がよく現れ、病院もいっぱい通いましたが、そ
れに対応する処方箋は見つからなかったです。息子が病気になるほど苦労させたくな
かったので、私はやはり朝鮮族学校に通わせたほうが、息子をもっと楽にさせることが
できると思いました。そして、朝鮮族学校に通わせると、自民族の言語も学べるので、朝

鮮族学校の B 校への転校を決意しました。(2009 年 8 月, ハルビンにてインタビュー)

それでは, 陳さんの息子は母親の意思で朝鮮族学校に転校した後, どのような変化が生じたのだろうか。陳さんは次のように語る。

今通っている B 校が前の漢族学校と違うところは, 宿題が少なく, スポーツ運動や課外活動が多いことです。課外活動には, さまざまな活動がありますが, その中でも良いと思われるのが, 名作を読んで感想を書いたり, 劇を演じたりすることです。前の漢族学校では, 皆成績をあげるためにいつも勉強に追われて, こんな余裕はなかったです。ここに転校してから, 息子のお腹が痛い病気もだいぶ良くなりました。朝鮮語はここに来てから入門から始めたのですが, たぶん昔から家で私と夫の間で常に朝鮮語で話をしていたため, 息子が知らずに朝鮮語を結構覚えたのではないかと思います。だから, 息子の朝鮮語の習得はそれほど問題になっていません。今回の期末試験で, 息子はクラスでは 2 番目, 学年では 4 番目の成績をとりました。(2009 年 8 月, ハルビンにてインタビュー)

上記の高学歴朝鮮族の親の発言から, 彼女は自分の子どもにより良い教育を与えるために, いろいろな方法を模索してきたことが分かる。最初は朝鮮族学校より優れていると見られる漢族学校に通わせ, その中でも比較的優秀な子どもたちが入る進学校に入っていたため, 常に競争の不安の中にさらされ, 結局一種のストレスとして体調を崩すということになった。このような状況の中で, 陳さんは息子を成績だけに追われる人間ではなく, 心身とも健全な子として育てることが重要であることを意識し, 朝鮮族学校の B 校に転校させるという戦略を行った。このような戦略による効果は顕著なものであり, 陳さんの息子は体の健康をもたらただけでなく, 自信も取り戻すことができた。そして見られるのは, 陳さんは朝鮮族学校の教育内容の変化に驚くと同時に, 今まで気づかなかった朝鮮族学校の良い点にも気が付いたことである。

それでは, A 校と B 校の朝鮮族生徒たち自身は朝鮮族学校に通うことについてどう答えているのだろうか。

本研究のインタビュー調査から, この二つの学校の生徒の中には「朝鮮族だから朝鮮族学校に通わせる」という保護者の強い意図により, 朝鮮族学校に通うことになったケース

が多く見られる。また農村出身の生徒の中には、保護者が意識的に朝鮮族学校に通わせたというより、「家の近くに朝鮮族学校があったから通うことになった」という事例もある。また、「朝鮮族が朝鮮族学校に通うのは昔からの伝統じゃないですか。両親は考えもせず私を朝鮮族学校に通わせたと思います」という事例もあった。そして、特に延吉市は朝鮮族の集住地域であると同時に、市内に小学校から大学まで朝鮮語で教える教育システムが整っているため、朝鮮族の子どもが父母と同じく朝鮮族学校に通っているケースが多かった。加えて、大学受験の時、朝鮮語で受験できることから朝鮮語を第一言語として使用している朝鮮族生徒にとっては、朝鮮族学校に通うのが「大学に進学しやすい」という要因もあった。そして、これらの朝鮮族生徒たちは両親が自分に朝鮮族学校を選択したことに関して特に違和感を抱いていない。

(3) 朝鮮族学校を選択する漢族生徒と韓国人留学生の登場

a. 漢族生徒

1992年の中韓建交以来、中国でも韓国語の需要が高まり、A校に新しい現象として漢族生徒の入学者が増えつつあり、2005年現在全校約3,132名の生徒の中で漢族生徒が約52名いる。このような漢族生徒はどのような生徒であり、彼らの朝鮮族学校に通う原因は何であろうか。

<事例5>啓明（仮名）、男性、漢族、A校の高校二年生、延吉市出身。両親とも漢族。

啓明さんの父親は裁判所長である。啓明さんの朝鮮語は非常に流暢である。幼稚園は漢族学校に通い、小学校からはずっと朝鮮族学校に通っている。両親が朝鮮語ができないため、啓明さんは家では漢語だけ使っている。

朝鮮語は朝鮮族小学校に入ってから勉強し始めた。小学校に入るまでは、朝鮮語は少しもできなかった。啓明さんは自分がどうして朝鮮族学校に通うことになったかについてはっきり分からないようだが、将来何をしたいかの質問について答える時、「自分が朝鮮族学校に通ったことで、言語的に有利だと思います」と言い、そしてそれについて次のように語った。「朝鮮語は、私が将来やる仕事において役に立つと思います。たとえ、将来私に何もできない時があっても、私にはこの言語能力があるから、他の人が私を見

る時、私は彼らよりつまり私と競争する人たちより有利でしょう。」

<事例 6> 琳潔（仮名）、女性、漢族、A 校の高校三年生。父親は漢族。母親は朝鮮族。

琳潔さんの戸籍の民族欄には「漢族」と書かれている。小学校に入学するまで、琳潔さんはずっと吉林省の和龍市に住んでいた。和龍市では朝鮮族と漢族の人口がほぼ半分ずつ占めているため、街でも朝鮮語がよく耳に入るほどである。琳潔さんは小学校一年生の時に家族と延吉市に引越し、その後ずっと延吉市内の朝鮮族学校に通っている。

琳潔さんは自分が朝鮮族学校に通うことになった理由を「中国語に加えてもう一つの言語を学べるからです」と語る。家で用いる言語は、父親とは中国語、母親とは朝鮮語である。母親は朝鮮語が話せるが、父親が朝鮮語が話せないため、二人の間には中国語だけ使っている。琳潔さんは、学校で友だちとは中国語を使わずに朝鮮語で話す。現在通っている A 校では、「みんな朝鮮語を使い、中国語を使う人はごく少ないです」という。

琳潔さんは、今勉強している朝鮮語科目の教科書内容に関して、「全部理解できるし、難しくありません」と語った。琳潔さんは、朝鮮族の文化や伝統に関する理解は主に朝鮮語科目の授業を通じて学んだ。それ以外は、韓国語の本を読んで理解する。韓国語の本は、学校の図書館から借りられるし、延吉市内の書店でも購入できる。このような韓国語の本は、主に韓国で出版されている童話、小説、マンガなどである。

上記の二つの事例からみれば、漢族生徒が朝鮮族学校を選択する要因としては、朝鮮語を第二言語として勉強することである。

1980 年代以来の改革開放とともに、中国は速やかにグローバル化の流れの中に入り、特に近隣国である韓国との交流が頻繁に行なわれている。その中で、「韓国ブーム」とともに中国内における韓国語を学ぶ人が急増している。朝鮮族学校も積極的に朝鮮族以外の生徒への門戸を開いた。したがって、上記のような朝鮮族学校にも漢族の子どもたちが通う現象が現れる。朝鮮族の集住地域である延吉市では、朝鮮族が多数を占め、朝鮮語が第一言語として使われているため、言語と文化の面において漢族が朝鮮族の影響を受けやすい。そして、中国と韓国の交流が頻繁になっている中で朝鮮族が重要な架け橋の機能を果たしている。

韓国語と中国で使われている朝鮮語はもともと同じ言語であったが、韓国と中国の歴史が異なるため、言語においてそれぞれ国語と少数民族の言葉として位置づけられている。

そしてすでに言及したように、韓国語と朝鮮語は文法においては同じであるが、語彙やアクセントにおいては違いがある。韓国語を身につけることは、漢族の子どもにとっても将来の進路選択において有利であることと考えられる。したがって、二言語教育がなされている朝鮮族学校に、韓国語とほぼ同じ言語である朝鮮語を習得させるために子どもを通わせる漢族の両親が増えつつあると考えられる。特に延吉市のような朝鮮族の集住地域では、朝鮮族の間では主に朝鮮語で交流し、他の都市に比べて朝鮮語・韓国語の書籍がより容易に入手できる。したがって、上記の漢族生徒たちの事例で確認されたように、朝鮮語が全然できない漢族生徒でも朝鮮族学校に入ってすぐ朝鮮語の言語環境に入り込むことができる。そして、朝鮮語を朝鮮族生徒と同じぐらい駆使できるようになる。A校では、朝鮮族生徒より漢族生徒のほうがより二言語に通じる現象が起こっている。

b. 韓国人留学生

B校では、2003年から韓国人留学生を受け入れ始め、2004年から正式に韓国人留学生向けのクラスを設けた。2005年3月現在高校部の生徒数は約850名で、その中に韓国人留学生が約10名いる。中学部の生徒数は約487名で、その中に韓国人留学生が約40名いる。

<事例7>ヘジョン（仮名）、女性、18歳、韓国のソウル出身。

ヘジョンさんは、父親が中国との貿易関係の仕事をしているため、中国に移動するようになった。彼女はまず中国の広州にある漢族中学校で二年間勉強をし、その後ハルビンのB校に来た。彼女が中国に留学した理由は、父親が彼女に「あなたは勉強しないから韓国では見込みがない。中国はこれからますます経済が発展するから、中国語を勉強しなさい」と言ったからである。

さらに、ヘジョンさんが漢族学校ではなく朝鮮族学校であるB校を選んだ理由は「この朝鮮族学校には韓国人の知り合いが何人かいます。午前には朝鮮族の子たちと一緒に勉強しますが、午後は数人の韓国人だけ集まって中国語を勉強するから楽しい」からである。つまり、彼女は中国で中国語を勉強する場として、漢族学校ではなく朝鮮族学校の二言語教育を利用しようとしている。

また、今通っているB校と普通の漢族学校との違いについて彼女は以下のように語った。「漢族学校にいた時は、外国人が私一人だけだったので、あまり気遣ってくれなか

ったです。それに漢族の子たちとは話があまり通じません」。

彼女は今高校一年生であるが、高校三年生まで上がって、中国で大学試験も受けるつもりである。

<事例 8> マンス (仮名), 男性, 26 歳⁽⁴⁾, 韓国の京畿道出身。

マンスさんは韓国で 5 年間仕事をしたことがある。その間に、三ヶ月中国山東省に技術を教えに来る機会があった。2001 年に、中国語が学びたくて韓国で中国語学校に一ヶ月通ったことがあるが、中国語があまり上達できなかったため、中国へ留学することを決意した。その後、雲南大学に留学し、国語学科で一年間勉強した。けれども、マンスさんにとって雲南地域は気候がいいから住みやすいが、方言がよく使われているため標準中国語を学ぶ理想的な場ではなかった。したがって、彼は中国でも言語的に中央人民放送テレビ局 (中国で最も影響力のあるメディアの一つ) の標準中国語の発音に一番近いと言われるハルビンに中国語を学びに行くことにした。

ハルビンは言葉がきれいです。この学校 (B 校) は中国語をよく教えてくれます。ハルビンで他の大学にも通ったことがありますが、韓国人が留学生の 90% を占めていたので多すぎる思いました。遊ぶにはいいですけど、韓国人の間では韓国語ばかり使いますので、中国語が学べません。学校をいっぱい調べました。(2005 年 3 月, ハルビンにてインタビュー)

マンスさんは二ヶ月後 HSK (中国漢語 (筆者注: 標準中国語を指す) 能力試験)⁽⁵⁾ を受けるつもりで、8 級に合格したら大学に進学し、合格できなければ中国内で貿易会社に就職する予定である。

上記の二つの事例から見れば、韓国人留学生が朝鮮族学校を選ぶ要因は、B 校で主要言語が中国語であるため中国語が勉強できること、学校内で韓国語が通じるという点にある。この背景には、彼らの両親が中国との貿易関係の仕事をしていることや本人が将来中国と関わる仕事を望んでいるなどの要因が影響している。

黒龍江新聞 2005 年 6 月 30 日記事によれば、2005 年現在黒龍江省に進出した韓国企業は約 1200 社がある。その中にハルビン市にあるのは約 200 社であり、その中にはハルビン市

に進出して10年以上経つ会社もある。こうしたハルビン市の投資環境に関心をもつことで、投資しにくる韓国の企業家たちが近年増えつつある。しかし、彼らの中には中国で長期にわたって居住する者もいるが、その場合には家族特に子どもを同行させることも少なくなっている。したがって、彼らにとって中国での子どもの教育特に学校選択が重要な問題になっている。このように、中国と韓国の経済的な交流が進展するとともに人の交流も増え、その結果中国に移動し、中国で教育を受ける韓国人の子どもが増えている。彼らの中国語の勉強の場として、朝鮮語と中国語の二言語教育が行われている朝鮮族学校が良い選択対象になっている。その中でも、中国語を主な使用言語としているB校のような朝鮮族学校には、さらにメリットが高まっている。

以上、朝鮮族学校に通っている漢族生徒と韓国人留学生に関して検討をしてきたが、朝鮮語を主要言語とするA校に漢族の生徒たちが入ってきたことは、A校が改革開放の時代の要求に応じて朝鮮族以外の生徒にも門を開いた結果である。中国語を主に使用しているB校が韓国人留学生の中国語学習のいい学校選択対象になっている現象は、民族学校としてのB校がグローバル化との接点を合わせ持っていることを意味する。

5. むすび：少数民族教育の新しい意味

本章では、中国の少数民族教育として公教育機関である朝鮮族学校における二言語教育の実態とその意味が、中国の改革開放政策の実施とグローバル化の中で、変容しつつあることを明らかにした。

中国政府の少数民族教育の特徴である二言語教育は、朝鮮族学校に通っている朝鮮族の生徒たちに「中国国民としてのナショナル・アイデンティティ」と「朝鮮族としてのエスニック・アイデンティティ」の双方をそれぞれに維持させようとするものである。これは、中国の少数民族政策が国内における多民族の国民統合に一定の機能を果たしてきたと言えるだろう。

その二言語教育は改革開放以来、大きな変容を遂げてきた。市場経済とともに中国内では人の移動が激しくなり、民族間および地域間の交流も深まり、その中で中国における共通語である中国語の使用価値が高まっている。したがって、朝鮮族の中でも中国語重視によって子どもを漢族学校に通わせる動向が見られる。一方では、従来通り、子どもを親と同じく朝鮮族学校に通わせている事例もまだまだ多くみられる。そうした生徒の中には、

朝鮮族の間で生活をし、朝鮮語を話し、漢族との接触も少なく、民族的アイデンティティをあまり意識しないでいる生徒も少なくない。

しかし、近年の中国と韓国の交流が進展する中で、韓国語の需要が高まり、A校のような朝鮮語を主要言語とする朝鮮族学校に朝鮮語の習得を目的としている漢族の子どもが増えつつある現象が、本研究の調査で明らかになった。そして、B校のような中国語を主に使用する朝鮮族学校に中国語の習得を目指した韓国人留学生も入りつつあることが確認された。このような状況は、従来中国政府によって「少数民族教育」と指定され自民族の生徒だけを対象にし、自民族の言語や文化を教えることによって民族の伝統を継承するという少数民族学校の教育に新しい意味を与えているのである。すなわち、少数民族学校における教育が、すでに「少数民族」に限定する教育ではなく、よりグローバルな市場のニーズに応じるものになっていることである。これは学校側が積極的に改革開放とグローバル化の流れの中で朝鮮族以外の生徒たちに門を開いた結果である。

そうした変化の中で、言語教育に使用する教科書への批判が高まっており、その内容の改定が進んでいる。朝鮮族学校の特徴とする二言語教育が、朝鮮族生徒や漢族および韓国人留学生を魅了している。一方、市場化とグローバル化の中で、さまざまな生徒の多様な需要にどのように対応し、民族学校の特徴をどのように生かすかは、現在朝鮮族学校における重要な課題になっている。

21世紀のグローバル化と新しい時代において、朝鮮族の民族語である朝鮮語の教育はこれからどうなるのだろうか。朝鮮族の移住先において、だれがその朝鮮語教育の役割を担うのか。彼らのエスニック・アイデンティティはまたどのように変化していくのだろうか。人の移動とそれともなう移動地における新しい教育の姿はどのように描出可能だろうか。これらの点は、次章以降に検討していきたい。

〈注〉

* 本章の内容は、筆者の単著論文「グローバル化時代の少数民族教育の実態とその変容：中国朝鮮族の事例」『東京大学大学院教育学研究科紀要 2007』第47巻, 2008, pp.177-187を加筆・修正したものである。

(1) 筆者のインタビューによる（2006年12月1日、北京）。

(2) 中国少数民族漢語能力試験。学校において授業をするための国家認定試験。

- (3) 就学前教育として、小学校に附設された一年制の幼児学級。
- (4) B校では、留学生の受け入れにおいて、例えば高校部に入学あるいは編入を希望する生徒に対して、まずその生徒が中国内外の国家政府が認める中学校の卒業証書があるかどうかを審査基準とする。希望者の年齢に関しては、朝鮮族や漢族生徒に対する基準とは異なり、特に制限はない。しかし、学費に関しては、2009年8月27日の筆者の現地調査によると、B校における生徒たちの一年間の学費が朝鮮族生徒の場合には500元（2013年1月3日のレートでは6,991円になる）であり、外国の国籍（留学生）の生徒の場合には1万元（2013年1月3日のレートでは13万9,828円になる）になる。
- (5) 中国漢語能力試験。中国の教育部が設けた漢語が第一言語でない中国の少数民族、華僑および外国人を対象とする中国語能力認定標準化国家試験。ランクは基礎段階と基礎後段階の漢語能力を4レベル11級に分ける。その中で、基礎レベルが1～2級、初級が3～5級、中級が6～8級、高級が9～11級になっている。

第二章 北京の「韓国城」(コリアンタウン)

—改革開放が生み出した新しい都市コミュニティ—

1. はじめに*

本章では、中国東北部から北京へ移動した朝鮮族に注目し、彼らは北京でどのようなコミュニティを形成し、どのような人たちとの関わりの中で暮らしているのかを明らかにする。そのために、近年北京で新しく形成された望京地域の「韓国城」というコリアンタウンに焦点をあて、それはどのようなコミュニティであるのか、そのコミュニティが朝鮮族の人びとにとってどのような場所であるのかを考察する。

中国における市場経済の急速な進展は、ヒト、モノ、カネ、情報などの都市への集中を加速化させ、その現象は北京のような大都市において顕著に現れている。中国内外の企業やそうした企業で働く人びとおよび彼らの家族が、さまざまな機会を求めて北京へ集まってくる。このように多様な人びとが集まってくる地域には、新しいビジネス、新しいライフスタイル、新しいコミュニティが生まれてくる。

北京には中国の各地域から上京した人びとが「浙江村」、「新疆村」などのコミュニティを創り上げている。また、日本人は長富宮一帯に、ドイツ人は燕莎友誼デパートや凱賓斯基ホテル周辺に集住するなど、外国から来た人びとがそれぞれ自分たちの集住する街を創造しつつある。北京の東北部に望京(ワンジン)という地域があり、そこには「韓国城」(ハングオチョン)と呼ばれるコリアンタウンがある。興味深いことは、このコミュニティはこれまで中国各地に住んでいた少数民族の朝鮮族の人びとと韓国から来た人びとおよび北朝鮮から来た人びとだけでなく、ここを訪れる中国人⁽⁴⁾や日本人が共同で創り上げたものだという点である。

望京は1980年代までは畑の多い北京郊外の小さな村であった。その後、人びとが徐々にこの地域に住み始めることで「睡城」(ベッドタウン)だけでなく、商業やさまざまなオフィスが並ぶ「消費之城」(消費の街)へと変貌した。さらに、北京市政府は望京を「副都心」として位置付け、そのための都市開発を進めている。

北京はソウルから飛行機で約2時間、中国の延辺朝鮮族自治州の州都である延吉からも飛行機で約2時間のところにある。望京は北京首都国際空港から車で約20分、バスで約40分かかり、北京の四環道路⁽⁵⁾と五環道路の間に位置する。北京政府は2008年のオリンピッ

クの開催を迎えるため、その準備の一環として交通改善に重点を置き、市内から空港までの所要時間を短縮させた。その結果、北京首都国際空港から望京への直行バス路線が 2007 年に開通した。

望京は、こうして空港や都心部との交通が便利になったこと、そして不動産の賃貸価格が都心部より安いことから、大小さまざまな多数の企業の拠点となっている。その中には、SAMSUNG (サムソン)、SIEMENS (シーメンス)、パナソニック、MOTOROLA (モトローラ) など世界トップ 500 の企業もある。また、中央美術大学、中国社会科学院大学院、北京中医薬大学などといった高等教育機関も設けられている。さらに、韓国国際学校のような外国人の子女が通う教育機関もある。したがって、望京は高等教育機関に通う留学生や家族連れの駐在員が好んで住む地域でもある。

望京は、中国のメディアで「韓国城 (韓国城)」、「高麗村 (高麗村)」、「韓国村 (韓国村)」、「小首尔 (小ソウル)」と呼ばれ、現地の中国人には「韓国人が多いところ」として認識されている。主としてこの地域を創り上げた韓国人の人びとの間では、望京は「코리아타운 (コリアンタウン)」、「한인타운 (韓人タウン)」の通称で呼ばれる。北朝鮮の人びとも望京の中で生活している。さらに、中国の各地で生活してきた朝鮮族の人びともここに加わり、彼らはこの地域を一般的に「望京」(ワンジン) と呼び、「韓国人が多いところ」というだけでなく「朝鮮族が多いところ」として認識している。本稿では、コリアンタウンを指す言葉として中国で新しく登場してきた「韓国城」(ハングオチョン) という言葉を用いる。「韓国城」という用語は、韓国人が多く居住する北京の望京地域を指し、中国人に分かりやすい表現として中国のメディアが使い始めた。現在、この言葉は望京以外にも中国で韓国人が集住する街を象徴する名称として使われつつある。さらに、「韓国城」は韓国ファッション関連の店や商店街を意味する言葉として、中国人特に中国の若者の中で人気を集めつつある。そして、韓国人の人びとも店を開く時に看板に「韓国城」と名付けることで、自分たちの個性を積極的に中国人にアピールしようとする現象が現れている。

本章での中国朝鮮族とは、主に 19 世紀初期以降、朝鮮半島から数次にわたり中国へ移住した人びとおよび彼らの子孫であり、中国国民として国籍を有し、戸籍上「朝鮮族」に登録されている人びとを指す。彼らはこれまで中国の東北部の黒竜江省、吉林省、遼寧省に主に住んでいたが、近年の中国の改革開放とグローバリゼーションの流れの中で、中国の都市部や国外へと移動の地を広げている。中国朝鮮族は中国の地にあってもエスニック・アイデンティティを強固に保ってきたが、そこでは子どもたちに中国の国家言語である中

国語に加えて、朝鮮族のエスニックな言語である朝鮮語を教えるという二言語教育が重要な役割を果たしてきた（趙貴花 2008, pp.177-187）。このような二言語教育は、改革開放下に国内外への移動を開始した朝鮮族にとって有利な手段を提供した。彼らは中国語と朝鮮語の双方に通じることにより、多くの領域において中国人と韓国人の間のコミュニケーションを媒介する役割を果たしている。本論文で用いる「朝鮮語」は、主に中国において少数民族としての朝鮮族が使用してきた「民族語」を指し、「韓国語」は韓国の国家言語であり、ソウル語を中心とする標準韓国語を指す。1990年代以降朝鮮族の韓国への移動と彼らの韓国人と接する機会の増加によって、朝鮮族が使用する朝鮮語は、韓国語の影響を受けることで過去において彼らが使用してきた朝鮮語とは異なってきている。すなわち、語彙や言葉の表現などにおいて「韓国語化された」朝鮮語が登場するようになった。したがって、朝鮮族の中には自分たちの使用する朝鮮語を「韓国語」と表現する者が増えてきた。

以上のことから、本章ではまず望京「韓国城」の歴史背景や街に関する描写を通じて、それはどのような街であるのかを考察する。次に、望京「韓国城」という街において、韓国人や朝鮮族、北朝鮮族の人びとおよび中国人の人びとが相互にどのような経済的および文化的な影響を与えているのかを検討する。最後に、朝鮮族の若者の事例を取り上げることで、このコミュニティが朝鮮族にとってどんな意味をもつのかを考えていく。

2. 望京における「韓国城」の誕生

(1) 望京：「小さな村」から「副都心」へ

望京という地名は、遼時代にすでに存在していたと見られる。遼時代の首都は中京（現在の内モンゴル寧城）であり、幽州（現在の北京）は当時の「陪都」（副首都の意味）として「南京」という名前も与えられていた。現在の望京と当時の孫侯（今の孫河村）という地域は、中京と幽州の間に位置する交通要所であり、戦争が多い地域でもあった。したがって、当時は望京から約 500 メートル離れている孫侯に官吏の休息所として孫侯館が設けられた。当時、天気晴朗の日にはこの孫侯館から南京城が見えたことから、「望京館」という名前も使われるようになった。明代の 1450 年には北京城の北部と東北部の望京村に敵軍の進入状況を把握するための「墩台」（高台）が建てられ、その後現地の人びとに「望京

墩」という名前で知られるようになった（戸力平 2009, p.63）。望京という地名は、このように早くから北京の出入りを見張る関所としての特徴を表す名称として現地の人びとに使われてきた。

望京が畑や墓地が多い北京郊外の小さな村から「副都心」へと変貌したのは、中国政府の都市大開発が始まった 1994 年以降のことである。『北京都市総合企画』（1991～2010）によれば、北京は人口と産業が都心に過度に集中していることから、都市建設の重点を郊外に移す戦略を行うことを計画している。そして、市区は「分散集団式」の分布を原則にし、市区中心地域とその周辺の 10 の「边缘集団」（周辺地域）から構成される。望京はその周辺地域の一部である「酒仙橋集団望京地区」（酒仙橋に属する望京地域）に生まれ、10 の周辺地域の中でも一番早く開発された地域となった。

望京は居住と商業が一体になる大規模な住宅地である。住民の構成においては、企業経営者や外資企業職員、医者や弁護士、芸能人などを含めた都市中間層が主流を占め、年齢的には若年層が多いと見られる。また、望京には IKEA（イケア）、イトーヨーカドー、ウォールマート、ロツテマート、華聯（カレン）など大型のショッピングセンターが設けられているだけでなく、パナソニックや SAMSUNG（サムソン）、SIEMENS（シーメンス）など世界トップ 500 の企業が多数進出している。望京ではこうした大手企業や都市中間層の人びとが集まってくることによって、物価がだんだん高くなり、北京の中では高収入、高消費の街として知られるようになった。

望京地域を管理する朝陽区政府は、海外で留学している中国人全般に対して彼らの帰国創業を大いにサポートし、そのための専門的な機関として「留学者創業園」を設立した。その第一段階として、1999 年に北京市政府の許可を得て望京科学技術創業園が望京先端技術産業区内に設立され、その後の 2002 年に中国国家政府との共同で「中国北京（望京）留学者創業園」が設立された。近年、北京市政府は海外における中国人留学生を重視し、彼らの北京での創業を勧めることを「首都人材戦略」の重要な一環として行ってきた。この「留学者創業園」では、海外から帰国した中国人留学生に対して積極的に優遇政策を実施している。例えば、帰国創業者に対して先端技術企業を設立した日から約 3 年間は企業所得税を免除し、最大 10 万元（2012 年 4 月 15 日のレートで約 128 万円）の創業助成金を与えている。そして、帰国創業者の子女に対して、朝陽区教育委員会所属の進学校を転入による別途料金免除で自由選択できるなどの特権を与えている⁹⁾。北京市政府は、海外での留学経験がある中国人のグローバル人材を積極的に受け入れることで、彼らの中国内の科学

技術産業への貢献を期待している。このような流れの中で、朝陽区政府も積極的に優遇政策を実施することで海外留学生を引き寄せようとしている。

こうして望京が注目されてきたことには、この地域における「韓国城」の誕生と緊密な関連がある。韓国人が望京に住み始めたのは1996年の望京新城住宅地の一期完成後であり、彼らの入居が急に増え始めたのは2000年以降のことである。それまで、この地域は外国人の入居が禁止されていたため、韓国人は主に外国人専用のマンションに住んでいた。2003年に中国政府が外国人に対する居住制限を解除すると同時に、望京が新型住宅地として開発され、賃貸などの価格が他の外国人専用のマンションより安いことから、韓国人の入居者は急速に増え始めた。その入居者の中には、駐在員、留学生、自営業者、宗教団体の所属者および彼らの家族などが含まれる。その家族の人たちの中には中国で商売をする人もいれば、家政婦を雇って自分の趣味生活を楽しむ人もいる。望京に居住する韓国人は流動性が高いため、正確な人数の把握は難しいが、2006年に出された黒竜江新聞社の調査によれば、望京には約4万人の韓国人が居住しているとされる(이진산 2006, p.118)。そして、同書によれば望京には約7万人の朝鮮族も居住している。この地域には、北朝鮮の人びとも居住している。さらに、近年は現地の中国人や日本人およびその他の国の人びとも増えることで、ますます文化の多様性を確保しつつある。

(2)「韓国城」という名前の東アジアのハイブリッド文化街の成立

地下鉄15号線の望京駅に降りて階段を上って外に出ると、左側に大通りがある。その道路の向かい側には望京地域で韓国人が一番多く居住している望京西園4区が見える。その住宅地の入り口の近くに北京首都国際空港行きのバスの停留所がある。そこにはいつも韓国人がスーツケースを持ってバスを待っている。住宅地の入り口には、中国



図11 望京西園4区住宅内の広場(2011年9月4日,筆者撮影)

人の警備員が 24 時間警備している。住宅地に入ってまっすぐ歩いていくと、大きい広場(図 11 を参照)が目の前に現れる。朝の時間にこの広場には、老年の中国人男女が体操やテニスをしている。そして、若い韓国人男女が数人集まっておしゃべりをする。夕方になると、この広場は子ども連れの男女で賑わう。その中には、子どもの手をつないで散歩する女性もいれば、ベビーカーを押しながら歩いている男性もいる。そして、ベンチに座って話をする中年女性たちや将棋を楽しむ中年男性たちも見られる。

この広場の商店街には、韓国人が経営するスーパーやテコンドー館、そして朝鮮族が経営する冷麺店などがある。この住宅地内には韓国料理やさまざまな中国の店も多いが、これらの店舗の看板(図 12)はほとんど中国語と韓国語の二言語で書かれているが、韓国語のみで書かれているものや漢語、韓国語に英語も加えて三言語で書かれているものもある。美容院から韓国語の歌が流れ、韓国料理店から焼肉の匂いが漂い、道を歩いている人からは韓国語が耳に入ることにより韓国にいるような錯覚さえ覚える。この住宅地内のスーパーには、韓国から直輸入されたコチュジャンやラーメン、菓子類および食器などが並べられ、韓国人の出入りがよく見える。望京におけるこのような住宅地内の広場やスーパーは情報交換の重要な場所でもある。誰が家政婦を雇おうとするのか、どういう仕事が見つかるのかといった情報もこういう場において情報交換される。



図 12 望京西園 4 区住宅内の飲食街 (2011 年 9 月 5 日, 筆者撮影)

望京の朝は、会社員の出勤や子どもたちの登校で忙しい時間帯である。会社員の出勤が相次ぐ中で、韓国人の母親たちが幼稚園バスを待って、子どもを送る光景が見られる。そして、早くも朝 6 時頃から数人の韓国人の中高生の姿が見られる。彼らは住宅地内の塾に向かうのである。望京の韓国人が集住する住宅地内には、彼らの子どものニーズに合わせて作られた補習校が多数存在する。

一方、望京の夜は賑やかである。韓国では、夜に数人集まって酒を飲むことが一般的であるが、望京でも例外ではない。特に、2006 年の FIFA ワールドカップが開催された時、望京におけるテレビ付きの韓国料理店は熱狂的に声援を送る韓国人で満席になったと現地の人びとは言う。しかし、韓国人の大声での声援は住宅地内の広場においても続けられる

場合があり、中国人の住民からは生活リズムが崩れるという不満の声もある。2008年以降、北京市政府の外国人に対する不動産購入の制限や韓国の金融危機などの影響で望京における韓国人の住民は急減しており、近年は夜騒ぐ韓国人が少なくなったという近隣の住民の話が聞かれる。

望京の日曜日は、教会が賑わう日でもある。韓国人の中にはキリスト教会に通う人が少なくない。韓国人の多い北京には韓国人教会が50余カ所設立されているが、望京にはその内の10余カ所がある。望京の韓国人教会はほとんど韓国人専用の教会であり、日曜日になると北京の各地域から韓国人が多く集まってくる。現地の韓国人の話によれば、教徒を多く有しているキリスト教会は、日曜日に集まる教徒だけでも約3千人にのぼると言う。望京のキリスト教会では、一般的に韓国語による説教が行われ、聖書の勉強会や聖歌隊などが組織されている。このような教会は、信徒の信仰を深める場だけでなく、故郷を離れた人たちの情報交換や仲間作りの場でもある。

南湖総合市場は望京で一番大きい市場であり、望京新城4区から歩いて約15分のところに位置している。この市場では、中国の食品や食材および日常用品を販売しているだけでなく、韓国や日本のものも販売している。中国の新鮮な野菜や魚介類、肉類、韓国のキムチやコチュジャンなどの食品や食材および韓国製の炊飯器などの厨房用具、朝鮮族に馴染みのある延辺の特産品、そして日本の酒、醤油なども販売している。特に、韓国人や朝鮮族が経営しているキムチ売り場には、韓国人はもちろん、朝鮮族、漢族、そして日本人の観光客もよく訪れる。特に、日本人の中にはたらこを買いに北京の各地からきた人びともいる。この市場には朝鮮族の販売者が多く、彼らは朝鮮族に人気のある延辺の干し魚や若布、そして東北部の特産としての唐辛子やキクラゲなどを販売している。野菜売り場にはチシャの葉やエゴマの葉もある。これらの食品は朝鮮族の食生活を支えてきたものであると同時に、韓国人の食材と共通するものである。週末になると、この市場は北京の各地域から買い物に来る朝鮮族や韓国人、そして多くの観光客で賑わう。



図 13 南湖総合市場内の朝鮮族漬物売り場 (2011年9月2日、筆者撮影)

望京「韓国城」には北朝鮮の人びともいる。彼らの個性を表現する場として北朝鮮の料

料理店が挙げられる。南湖総合市場のすぐ近くに、「平壤玉流宮」（ピョンヤンオクリュウグアン）という北朝鮮の政府の支援の下で経営されている料理店がある。この店の料理は基本的に北朝鮮の食材を使用しており、従業員のほとんども北朝鮮から派遣された若い女性たちである。この店の最大の特徴は、毎日の夕方 7 時半から約 40 分間公演（図 14）が行われるということである。チマチョゴリを着た北朝鮮の女性たちは、北朝鮮の歌や舞踊を披露し、場合によって中国と韓国の歌も歌うことがある。観光客からは花束を贈られる様子も見られる。こうした飲食と公演をペアとする北朝鮮料理店の営業戦略は、「韓国城」の一種の独特な個性を創出し、北朝鮮の人だけでなく、韓国人や朝鮮族および現地の中国人に人気である。この店を訪れる観光客は多い時には一日約 300～400 人に及ぶが、そのほとんどが韓国人である⁽⁴⁾。北京の韓国企業の社員の懇親会もここで定期的に行われる。韓国人の人びとは、北朝鮮の料理や公演に関心があるだけでなく、北朝鮮から来た従業員と話を交わすことも期待する。週末になると、この店では朝鮮族の結婚式や披露宴を行うことが多い。この店で、北朝鮮の人びとと韓国人、朝鮮族の人びとは各自自分たちの言語（北朝鮮の



図 14 望京の北朝鮮料理店「平壤玉流宮」で公演を行う様子（2011 年 8 月 31 日、筆者撮影）

言語、韓国語、中国の朝鮮語）で互いにコミュニケーションを行い、従来とは異なる形で朝鮮半島の文化を再生産している。この場において、彼らは政治的な分断を越えて、言語的および文化的に共生する空間を創造している。

日本外務省の統計によれば、2010 年 10 月 1 日現在北京に在住している日本人は約 1 万 74 人とされている⁽⁵⁾。彼らの多くは、北京の長富宮一帯に集住しているが、望京に居住している人も少なくない。望京の住宅地内や市場では日本人の会社員や主婦の姿がよく見られる。望京西園 4 区から約バスで 5 分かかるところに望京国際商業センターがあるが、そこには日本のイトーヨーカドー（図 15）がある。そして、イトーヨーカドーの中庭には「中国で初めて」と言われる「日本ラーメン横丁」（図 16）が 2011 年の夏に期間限定で設けられた。この屋台式の「日本ラーメン横丁」には、日本人の調理師や店員が勤務する 6 店舗の店が軒を並べている。ここでは、日本語によるコミュニケーションが可能であると同時に、日本の本場のラーメンが味わえることで、北京各地の中国人の若者にも人気である。

望京でこの一帯は日本文化を表現する一つの場として姿を現している。こうした日本の飲食文化は、望京だけでなく北京の人びとの食生活を豊かにしている。



図 15

望京国際商業センター内にあるイトーヨーカドーと、その中庭に期間限定で設けられた「日本ラーメン横丁」。(2011年9月2日、筆者撮影)



図 16

望京は、1994年以降住宅地として開発されてから10余年の間に韓国人や朝鮮族、北朝鮮の人びとが集住するコリアタウンとしての「韓国城」に変貌した。そして、現在は望京を訪れる北京の中国人や日本人も増えつつある。彼らは単に住宅地内の隣同士や観光客として存在するのではなく、市場や商店街のような公的な空間において飲食文化を主とする各自の個性を表現し、それを望京の文化として共同に創り上げている。このように「韓国城」という名前の東アジアのハイブリッド文化街が北京の望京に成立した。

3. 望京「韓国城」の人びと

(1) 韓国人の商業戦略の変化

望京の「韓国城」では、日常において中国語を使わずに韓国語のみで生活できる居住空間が形成されている。それが可能になったのは、この地域に韓国式の飲食店、スーパー、洋服店、美容院、塾および娯楽施設など、生活に必要な施設が設けられているからである。しかし、韓国人が暮らしやすいこの地域は、2008年以降の韓国の金融危機とともに大きな変化を経験した。金融危機による韓国ウォンの価値低下が続く中で、韓国人の駐在員や留学生にとって中国での生活費の負担が重くなるため、帰国を選択する人や、もっと安い家賃を求めて望京からほかの地域に引っ越す人が急増した。特に留学生の場合には、学費と

普段の生活費はほとんど韓国の両親からの仕送りに頼っていたため、この金融危機の影響で学業の継続を諦めざるをえない状況も生じた。韓国人を主な対象としていた飲食店や商店も、顧客の急減によって経営が難しくなり、閉店する店も増えてきた。

望京の住宅地には、韓国の飲食や衣類、アクセサリ、テコンドーなど韓国関連の店舗や施設が多く設けられていた。これらの店は、もともと主に韓国人をターゲットとし、韓国語のみ使用するほど「韓国人専用」の排他的な空間であった。しかし、より安い価格を求めて中国現地の人がびとが経営する店を訪れる韓国人が増加したり、帰国するか中国のほかの地域へ引っ越す韓国人が増えることにより、望京における韓国人が経営する店は経営難に面した。そうした経営が難しくなっている店を韓国人から引きついだのは朝鮮族の人びとであった。朝鮮族は中国語と韓国語の両方でコミュニケーションができることから、彼らは韓国人だけでなく、中国人もターゲットとする戦略を行った。その結果、朝鮮族が韓国式の飲食店の経営に成功することが珍しくなかった。成功した店舗を見て、中国で生き残ろうとする韓国人の人びとも、同様の商業戦略に挑戦し始めた。もともと韓国人の顧客だけをターゲットとしていた韓国ファッションの店も、中国人の顧客の需要に合わせて商品の値段などを調整することで、現地の中国人特に若者の消費者を増やそうとしている。

北京における韓国人社会の近年の変化について、中国で10余年滞在し、北京の在外韓人協会の現役副会長を務めている李成昊（仮名）は、以下のように語る。

最近中国に来る韓国人の多くは、中国に関する情報をたくさん集めてきます。中国語も学んでくるし、中国に関する知識もある程度得てからきます。だから、最近事業に失敗する人が少なくなってきました。昔は、中国に来る時にお金さえ持って来れば十分だという意識が一般的であり、中国人の考え方などに関しては何も知らなかったため、結局失敗する人が多かったです。今は中国も発展しているし、中国人を対象にビジネスをしようとする韓国人が増えてきています。ビジネスに成功するためには、中国のこと、特に中国人の考え方を知らなければならないと思います。（2011年9月5日、北京にてインタビュー）

韓国の金融危機に伴う韓国ウォンの価値低下と中国の近年の経済発展は、多くの韓国人の考え方を変えつつある。これまで、中国に滞在していた韓国人の多くは、韓国人コミュニティ内部のネットワークの構築を重視し、商業においても韓国人以外の人びとを消費対

象として考えることが少なかった。けれども、この金融危機と中国の経済成長は、中国で機会を求める韓国人に中国と中国人への関心を高めさせ、中国人への理解を深めようとする意識を持たせた。

(2) 「韓流ブーム」と中国人のライフスタイルの変化

a. 「哈韓族」(ハーハンズー) と望京

中国では、外国の文化に強い興味をもつ若い年齢層の人びとを指す言葉として、「哈日族」(ハーリーズー, 日本好きな人びと), 「哈韓族」(ハーハンズー, 韓国好きな人びと), 「哈美族」(ハーメイズー, アメリカ好きな人びと), 「哈法族」(ハーファーズー, フランス好きな人びと) などがある。「哈」(ハー) という言葉は、ある物事に対して強い興味を持つことを意味する。

1993年に韓国ドラマ『길투 (嫉妬)』が中国の CCTV で放映され、1997年には『사랑이 뭐길래 (愛情とは何か)』が同テレビ局で放送されることによって中国で大ヒットした(呉詠梅 2009, p.104)。その後、韓国のポピュラー音楽やテレビドラマが徐々に中国に進出することで、韓国のポピュラーカルチャーに関するブームが起き始め、このような現象を中国のメディアは「韩流(韓流)」と称した(柳承华・金源坤 2009, p. 48)。

中国人の中には、近年韓国のドラマ、音楽、映画だけでなく、キムチ、コチュジャンなどの韓国食品や韓国の電気製品、韓国での観光およびショッピングなどに大きな関心を持つ人びとが増えつつある(同上: p.48)。そして、韓国の音楽やファッションに強い興味をもち、韓国語の習得を目的に韓国への留学を考える青少年も現れている。このような韓国のポピュラーカルチャーに強い興味をもつ若い人たちを中国では「哈韓族」(ハーハンズー) と呼ぶ。「哈韓族」と呼ばれる若い人たちは、髪型、服装、化粧、アクセサリ、携帯電話だけでなく、韓国の音楽に熱狂し、表情まで韓国ドラマの主人公の真似をしたりする。彼らは韓



図 17 ソウルからファッション衣類などを直輸入し、販売しているショッピングセンター「望京韓国城」(2011年9月5日, 筆者撮影)

国文化を身近に感じるために、そうした情報を求めて都市の中を探し求める。望京「韓国城」は、韓国文化が溢れる場所として「哈韓族」には聖地のような空間になっている。彼らはこの「韓国城」において韓国語を耳にし、韓国料理で味覚を刺激し、韓国の服装やアクセサリーで外見を飾り、カラオケで韓国語の歌を歌うことで気持ちを表現し、街で「アンニョンハセヨ」（こんにちは）という韓国語の挨拶を交わすことで、自分たちの独自のアイデンティティを構築している。

韓国ファッションに強い関心を持つ中国の若者の需要に合わせたかのように、望京にはここ 2、3 年の間にさまざまな韓国ファッションの店が増え、2009 年にソウルのファッションを代表する東大門ファッションセンターの衣類を直輸入して販売するショッピングセンター（図 17）が設立された。このショッピングセンターでは、女性衣類を主にアクセサリー、鞆および食器、寝具などの生活用品を韓国から直輸入し、中国の若年層をターゲットしようとする。中国の急速な経済成長と「韓流ブーム」の中で、望京「韓国城」は韓国のファッションをリアルタイムで接する空間を創造することで、北京における若者のファッションをリードしようとする。

b. 飲食と居住にみる中国人のライフスタイルの変化

望京「韓国城」における韓国人の集住と中国での「韓流」ブームは、望京の中国人のライフスタイルに変化をもたらした。以下では、主に飲食と居住の二つの側面からその変化について検討したい。

2003 年に韓国ドラマ『대장금（大長今）』が中国で放映され、大人気を得ると同時に、中国人の韓国料理への関心が高まった。特に、韓国料理の中で代表的な漬物であるキムチが中国人の食卓に現れ始めた。望京の「韓国城」では、キムチは住宅地内のスーパーや近くの市場ですぐ入手できるため、中国の人びともキムチに関心を持つようになった。中国人の中には、自らキムチを作る人も増えてきた。キムチの作り方は、インターネットで中国人による詳細な説明が書かれていると同時に、作る全過程の動画も載せられているため、中国人にも学びやすくなっている。中国人のキムチへの受け入れは、彼らにとって異文化体験への挑戦であるだけでなく、新しいライフスタイルの創造でもある。

望京に韓国人が多く住むことによって、現地の住宅の内装も従来とは異なるスタイルに変化している。望京の韓国人住民たちは、賃貸マンションで暮らすことが一般的である。

したがって、マンションの持ち主は韓国人の長期の賃貸を狙って、部屋の内装を韓国人になじみのあるスタイルに合わせる傾向がある。その例の一つとして床暖房が挙げられる。中国の伝統的な暖房方法は、部屋の壁などに熱水供給パイプ式の「暖気」(ヌアンチー)を設置して、部屋を暖める。しかし、韓国式の暖房方法は、床を加温することで部屋を暖める。北京の望京でよく使われる床暖房は、一般的に温水式と電気式の二種類がある。温水式は、床の下に 60℃以下の暖かい水を通すパイプを設置し、地域で管理されている温水供給所から温水がパイプを通じて送られるものである。電気式は、発熱体を床の下に組み込み、電気を入れることで床面が温まる。両方とも、風の対流で温めるエアコンとは異なり、均一の温かさが得られる。熱が足から上に上昇する「頭寒足熱」の特徴があるため、床暖房に慣れている韓国人には大好評である。このような床暖房は、現地の朝鮮族や中国人にも積極的に受け入れられている。

望京の住宅の内装のもう一つの特徴は、韓国式のインテリアである。近年、望京では新しい宿泊施設として韓国式の「민박 (民宿)」(ミンバク)が現れた。こうした民宿は、最初は韓国人のために設けられた宿泊施設であり、主に韓国人や朝鮮族によって経営されてきた。経営者は、韓国人の宿泊者に快適さを与えるために、部屋のインテリアや家具の選択において韓国のを模倣するほか、韓国の衛星テレビ番組も視聴できる設備を取り入れている。ダイニングルームでのテレビの置き方やソファの並べ方、寝室内の家具のスタイルまで韓国式を模倣している。韓国式のインテリアに関する情報は、韓国ドラマやインターネットでの個人ブログを通じて広がり、朝鮮族および中国人の生活に入りつつある。

このように、望京「韓国城」の中国人の人びとは、外来文化としての韓国の飲食や居住のスタイルに興味を持ち、それを積極的に受け入れることで、自分たちの新しいライフスタイルを創出している。こうした床暖房が設置されている高層マンションに住み、食卓にはキムチが現れ、日常においては外国語を耳にすることが、一種の望京のライフスタイルとして、北京の人びとの中でイメージされるようになった。

(3) 朝鮮族と韓国人の関係

望京「韓国城」で韓国人と緊密な関連がある人びととしてまず挙げられるのが朝鮮族である。朝鮮族の北京への移動は、1949年から始まり、1990年代以降に加速した。1949年の中華人民共和国の設立以降、朝鮮族の北京での定着が徐々に行われた。それは主に、朝

鮮族が集住する中国の東北部から北京の大学に進学し卒業した人びとが、国家政府の職業配置あるいは軍、党、政府系統の人事変動により、北京地域に定着する形で始まった(황유복 2002, p.129)。1992年の中国と韓国の国交正常化以降、韓国の政府機関やさまざまな団体および大手企業の北京への進出とともに、製造関係の工場が北京に隣接している天津、河北地域に設立されるようになった(이진산 2006, p.117)。したがって、首都圏には韓国人が増加するようになり、それによって韓国企業への就職や韓国人と関連があるサービス業に従事する朝鮮族も増えるようになった。

中国の東北部から北京への朝鮮族の移動が増え始めた1990年代以降、北京のほかの地域に比べて住宅価格や家賃が比較的安いことから望京に住む朝鮮族が多かった。その後、望京における韓国人住民の増加とともに、韓国企業への就職や韓国人家庭での家政婦の職などを求めて入居する朝鮮族が増えてきた。望京で韓国人が経営する会社や店は朝鮮族を採用する機会が多い一方、朝鮮族が行っているビジネスも韓国人と多く関わっている。例えば、望京には不動産会社が多いが、そうした会社は朝鮮族や韓国人がそれぞれ経営するものが多く、韓国人が経営する場合にも中国語と朝鮮語が話せる朝鮮族を従業員として雇用することが一般的である。ほかにも飲食店、カラオケ、語学学校、ファッション関連の店や野菜市場などの場において、朝鮮族の人びとは中国人と韓国人の間で媒介する役割を果たしている。

韓国人が集住する望京の住宅地においては、言語が通じないことによる住民の間の摩擦が頻繁に発生している。韓国人の中には中国語による意思疎通が難しい人が多く、中国人の住民の中でも韓国語が話せる人は少ない。したがって、地域のマナーや生活習慣をめぐるトラブルに対する相互のコミュニケーションは難しくなっている。この現状を踏まえて、望京地域の地域管理事務室では、中国語と韓国語の両方でコミュニケーションが可能な朝鮮族を地域協力管理員に採用することを決定した。望京で韓国人が一番多く居住している地域を管理する南湖派出所(主に住民の登録などを管理する地域管理事務室)では、すでに5人の朝鮮族を地域協力管理員として採用している(马晓燕 2008, p. 121)。

望京に住んでいる朝鮮族の職業と居住環境は多様である。彼らの中には、大手外資企業や国家機関で働き、比較的収入が高く、安定的な生活をしている都市中間層がいる一方、職業と収入が安定せず、家賃が安い地下や半地下の部屋を借りて生活する出稼ぎ労働者もいる。出稼ぎ労働者の中には、地方の農村から北京の韓国人家庭への家政婦職を目指して上京する朝鮮族が少なくない。北京に移動した朝鮮族の多くは朝鮮族学校を卒業しており、

朝鮮語が話せることから、韓国人と関連のある業種に従事するチャンスが与えられている。朝鮮族と韓国人の人びとは、さまざまな領域において雇用関係を維持しているが、必ずしも互いにスムーズに溶け込むわけではない。韓国人と朝鮮族の関係について、張麗娜・朴盛鎮・鄭信哲（2009）は「韓国人が中国において事業を発展させるためには、朝鮮族の協力は欠かせないように見えるが、彼らは朝鮮族に対して信頼感が足りず、さらに朝鮮族を無視する傾向がある。朝鮮族のほうも、彼らが経営する多くの企業や韓国人向けあるいは韓国人と共同に事業を推進することにおいて、彼らの韓国人に対する配慮が足りず、相互間に隔たりが存在する」（張麗娜・朴盛鎮・鄭信哲 2009, p.116）と指摘している。

李成昊（仮名、北京の在外韓人協会の現役副会長）は、韓国人と朝鮮族の関係について次のように語る。

中国僑胞（筆者注：朝鮮族を指す）が望京を活性化させています。この地域に韓国人の会社が多く営業しているオフィスビルが主に四つありますが、そこには多くの中国僑胞が職員として仕事をしています。そして、現在北京には一日に約 1 万人の韓国人が移動していますが、もし中国僑胞がいなければ、誰がそれらの韓国人たちに通訳をしてくれるか想像もつきません。それほど、韓国人にとって中国僑胞は重要な存在であり、中国僑胞にとっても韓国人は無視できない存在だと思えます。両者は一種の共存関係を維持していますが、お互いに壁を作っているように思われます。韓国人と中国僑胞が、お互いにより素直に向き合う姿勢が必要だと思えます。（2011 年 9 月 5 日、北京にてインタビュー）

朝鮮族と韓国人のこのような相互不信になった原因については、今後引き続き検討すべきであろうが、こうした両者の相互信頼の欠如は、彼らの仕事以外の場における関係にも影響を与えている。その一つの表れとして、朝鮮族と韓国人の両方ともそれぞれ自分たちのネットワークの構築を重視していることが見られる。特にキリスト教会での集まりを見ると、朝鮮族は朝鮮族同士、韓国人は韓国人同士で集まることがほとんどであり、地域のサッカーチームが、朝鮮族だけで組まれることも一般的である。このように、望京における朝鮮族と韓国人の人びとは、公的な場においては互いを必要として、特に経済的に協力し合う緊密な関係を維持するが、仕事以外のプライベートにおいては相互一定の距離を置きながら生活するという微妙なバランスが見られる。

(4) 朝鮮族の人から見た望京

朝鮮族は、朝鮮半島から中国の東北部に移住した初期から現在に至るまでその多くが朝鮮語を維持し、飲食および冠婚葬祭においても移住初期のスタイルを多く継承してきた。特に飲食において、現在でも朝鮮族の家庭ではコチュジャンやキムチは欠かせないものになっている。彼らは自ら唐辛子を乾かしてコチュジャンを作り、大豆で味噌を作ることが多い。中国東北部の朝鮮族の集住する農村や都市の一部の住宅地内では、朝鮮族のキムチ保管用の穴倉もよく見られる。そのほかにも、餅や冷麺、特定の山菜および犬肉料理などが伝統的な「民族料理」として朝鮮族の中で長年継承されてきた。朝鮮族タウンと言われる延吉の西市場や瀋陽の西塔はもちろん、朝鮮族が比較的少ないハルビン市内の朝鮮族向けの商店でもこのような食品が長年販売されてきた。

朝鮮族が北京に移動した時、彼らは望京「韓国城」における韓国料理や市場で販売されている食品や食材が、自分たちが今まで継承してきたものと共通していることに気付いた。望京「韓国城」は、朝鮮族の中でだんだん知られるようになり、便利な食生活や共通の言語（韓国語/朝鮮語）、そして職を求めてこの地域に移住する人が増えてきた。そして、望京から離れた地域に居住している朝鮮族の中にも、韓国食品や食材および朝鮮族の伝統料理を求めて定期的に望京を訪れる人が多い。

以下では二人の朝鮮族の若者の事例を通じて、望京「韓国城」が朝鮮族にとってどのような場所であるのか検討する。

<事例1>徐基峰（仮名）、男性、26歳、朝鮮族、黒竜江省出身、外資企業社員。

徐さんは黒竜江省で朝鮮族学校（小学校から高校まで）に通い、現地の大学を卒業した。婚約者（朝鮮族女性）が北京にいるため、徐さんは北京にあるアメリカ資金の企業に就職し、2007年に望京のマンションを購入した。徐さんは現在仕事の関係で、中国と日本を行き来している。望京で家を購入したのは、この地域が食事に便利であると同時に、外資企業がたくさんあるため、今後転職（外資企業を希望）を考える際に便利だという考えによる。食事に便利だということは、望京には焼肉などのような韓国料理が多いと同時に、コチュジャン（韓国風唐味噌）、デンジャン（韓国の味噌）のような食品も購入しやすいことを指す。また、徐さんは望京には飲食店やスーパーの「外卖」（配達サービス）が充実しているため、生活に便利だと言う。そして、望京には朝鮮族料理店も

多いことから、朝鮮族の友達と会う時の理想的な場所になっている。徐さんは北京に移動する前には黒竜江省に住んでおり、当時も朝鮮族が経営する韓国料理店で食事をする事があったが、その味に比べるとやはり望京の韓国料理は本場の味がすると言う。両親が韓国で仕事をしているため、徐さんは韓国にも数回行ったことがある。したがって、彼は自分の食習慣が徐々に「朝鮮族式」から「韓国式」に変わってきていることに気付いた。徐さんは、望京では食以外にも、さまざまなショッピングセンターがあるため、買い物も望京地域内で済ませるのでとても便利だと言う。

<事例2>金明淑（仮名）、女性、25歳、朝鮮族、黒竜江省出身、中国国家資金の企業の社員。

金さんは2009年に黒竜江省の大学で修士号を取得した後、北京の大手中国国家資金の企業に就職した。北京に移動した理由は主に二つある。一つは母親（ロシアを行き来しながら貿易を行っている）が北京で家を購入したことであり、もう一つは金さん自身が「華やかな都市」である北京に憧れていたからである。金さんは、北京が生活に便利であると同時に、努力すればそれに値するチャンスが得られると考えている。

金さんは望京のコリアンタウンに住んでいないが、そこに行くことは多い。それは主にコチュジャンを買ったり、中高生時代（朝鮮族学校に通った）の朝鮮族の同級生たちと会うためである。金さんは小さい時から、家でコチュジャンとキムチを食べていた。それらはすでに彼女の食生活の中で重要な位置を占めていた。金さんは現在母親と一緒に住んでいるが、母親は家のコチュジャンを切らずとすぐ望京の南湖総合市場に買いに行くと言う。自宅から南湖総合市場までは、まずバスで約1時間、それから三輪バイク（北京で短距離の間を移動する際の交通手段）で約10分かかる距離である。金さんの母親はこの市場に行く時に、場合によって韓国の味噌、餅、スンデ、スケトウダラ、エゴマの葉など、北京のほかの地域では入手しにくい韓国食品も購入する。

金さんの朝鮮族同窓会はいつも望京で行われている。望京で集まるのは、「皆で昔のように楽しめる」からである。ここでの「昔のように」ということは、金さんが中学と高校の時、同級生たちとの間で使っていた言語（朝鮮語あるいは朝鮮語と中国語を混ぜて使う言語表現）、一緒に食べていた朝鮮族料理と中国の東北料理、そして一緒に楽しんでいた韓国のカラオケなどを総合的に指す。彼らが望京で選ぶ料理店は、一般的に朝鮮族が経営するものである。その理由には、韓国料理店より値段が安い点もあるが、朝鮮族

の店には朝鮮族の人びとが好きな料理があるだけでなく、朝鮮語が気楽に話せる空間が設けられているため、居心地良さを感じるからである。

複数の言語（中国語、朝鮮語、日本語、英語）が駆使できる金さんが朝鮮族の同級生たちと会う時に使用する言語は、朝鮮語と漢語をほぼ半分ずつ混ぜる二言語の併用であった。例えば、文章的な流れは朝鮮語で話す、朝鮮語に訳しにくい中国語はそのまま引用するということである。朝鮮族が経営する店においては、このような朝鮮族の独自の会話のスタイルが自由に行うことができる言語空間が形成されている。都市空間における朝鮮族料理店という独特な場所は、朝鮮族の人びとを惹きつけ、「朝鮮族文化」を再生産する役割を果たしている。

「朝鮮族の好きな料理」というのは、韓国料理とも中華料理とも似ていながらそのいずれとも異なる朝鮮族の食文化である。金さんの話によれば「朝鮮族の店には炒め物があるが、漢族の店と比べると、やはりお母さんの手作りの匂いがする」。ここでの「炒め物」は、元々中華料理の一種であるが、朝鮮族が中国で長年暮らしている間にその料理方法を受け入れ、また独自の味付けを発展させたものを指す。例えば、炒める時に油を少なめに入れることや、辛味をする場合には四川料理とは異なる唐辛子を使用するため、味が異なることが含まれる。

上記の二つの事例から、北京の朝鮮族にとって望京は彼らの食生活を満たすことにおいて重要な場所になっていることが分かる。その一方で、徐さんのように望京は職場として適切な場所であると同時に、日常的に韓国料理に接することができるし、配達サービスも充実しているため、仕事と居住の両方において「便利で居心地いい」場所になっている事例もある。望京に居住しても、地域社会とはあまり関わりがないが、「コチュジャンが購入できるから便利」、「韓国料理が食べられるから嬉しい」など韓国の食文化に触れるだけで満足している人もいる。他方で、金さんのように望京には住んでいないが、定期的に韓国食品を購入したり、朝鮮族の同窓会を行うために望京に来る朝鮮族も少なくない。望京「韓国城」は、朝鮮族にとって生活のコアであり、アイデンティティの核となる場所になっている。

中国と韓国の国家間の交流が途絶えていた期間が40余年あったにもかかわらず、韓国人と朝鮮族は食文化などにおいて共通性を持っていたことが、このような居住空間や商業的な環境を通じて確認させられた。さらに、朝鮮族社会の中で韓国への行き来が頻繁になっ

ている今日において、韓国の現代の衣食住の文化は朝鮮族の日常生活に大きな影響を与えている。筆者が出会った望京の朝鮮族の中には、自分の居住空間を「韓国化」している人もいた。具体的には、部屋の中を韓国製の小物で飾ったり、韓国製のカーテンをかけたり、韓国語の聖書の言葉が書かれている額を壁にかけたり、韓国製に似ている家具を購入したり、ベランダに小さい丸テーブルと二つの椅子を備えたりすることが見られた。これらはどれも韓国の現代生活のスタイルであり、朝鮮族や中国人のライフスタイルとは異なる。従来、中国の東北部においてほとんど朝鮮族のみで形成されていた農村的エスニック・コミュニティの中で暮らしていた朝鮮族は、北京へ移動し、そこにおける中国人および韓国の人びとと接する中で、自分たちのライフスタイルを変化させてきている。北京の「韓国城」は、朝鮮族の人びとが自分たちの維持してきた言語（朝鮮語）と食生活を保ちながら、新しい環境に適応していく土台を創り上げている。

(5) 望京「韓国城」に関する多様な情報ネットワーク

望京「韓国城」の活性化とともに、この地域に関心を持つ人びとによるインターネット上での情報が急速に広がっている。望京に関する情報サイトは多種多様であるが、主に以下の四種類に分けることができる。

一つ目は、中国人の人びとが作ったインターネットサイトである。例えば、望京の地域住民や望京に関心がある中国人向けに作られた「望京網」(<http://www.wangjing.cn>)が挙げられる。このサイトは、望京の地域内におけるさまざまな問題に関する議論が行われたり、スポーツ関係の集まりに関する知らせや、不動産賃貸、美味しい飲食店およびファッション関連の店などに関する情報が流れている。しかし、韓国人の参与度はほとんど無に近い。

二つ目は、韓国人が作成した韓国語の個人ブログである。韓国に住んでいる韓国人の多くも、中国に望京という「코리아타운 (コリアンタウン)」／「한인타운 (韓人タウン)」があることをよく知っている。彼らはインターネット上の個人ブログへのアクセスによって望京に関する情報を獲得する機会が多い。初めて北京に行く人でもインターネットで望京への交通情報や宿泊情報、観光情報などを獲得すれば、中国語を使わなくても北京で観光を行うことができる。韓国人による個人ブログや韓国人向けの商業的なブログには、韓国人になじみのある韓国式の民宿である「민박」(ミンバク)の内部写真が掲載されたり、

望京地域の韓国人の行きやすい場所に関する詳細な情報が書かれているため、渡航する前の彼らの不安を解消させることができる。ほかにも、望京で長期滞在する韓国人のための不動産情報や子どもの教育情報などもそれらのブログに掲載されているため、現地での生活を始めようとする韓国人にとって重要な情報源となっている。

三つ目は、朝鮮族のエスニック・メディアによる情報サイトである。例えば、黒竜江新聞のインターネット版では、朝鮮族社会の新しい動きに常に注目しており、北京へ移動した朝鮮族に関する記事も数件確認できる。望京に関する情報としては、朝鮮族の生活実態や商業情報などに関する内容が載せられている。このようなエスニック・メディアは、移動の時代における朝鮮族の視点や朝鮮族の声を反映することにおいて重要な役割を果たしている。

四つ目は、その他の外国人観光客によるブログ情報である。望京を訪れる観光客の中には日本人も多い。彼らは、キムチや明太子のような韓国の食品と日本の食品・食材を購入するために望京を訪れることが少なくない。日本人によるブログには望京「韓国城」に関する多様な情報が見られる。あるブログでは、望京の南湖総合市場でキムチや明太子の売り場を発見したという情報や、望京にイトーヨーカドーやラーメン横丁があるなどの情報が提供され、それを見て同じ場所を訪れる人が増えてきたことも確認できる。

このように、望京がさまざまな国や地域の人びとの注目を集めていることが、インターネットでの情報ネットワークの多様性からも観察できる。それぞれの住民が互いに自由に意見を交換する場は管見のかぎり見つからないが、これは彼らの間の言語の制約が大きいことによると考えられる。けれども、上記の四種類の情報ネットワークに見られるように、異なる言語を用いる各住民が各自自分たちの言語で発信する情報は、その言語に通じるより多くの国や地域の人びとが望京を訪れる際の重要な情報源になっている。望京「韓国城」に関する情報の多様化は、このコミュニティの一種のインフラになっている。

4. むすび

新しい生活様式が採用されるのはまず都市であり、外来の文化もまず都市に摂取され、そこを拠点として伝達されてゆく（倉石 1997, p.8）。中国は、改革開放後に市場経済の活性化とともに、多くの分野で劇的な変化を経験している。特に、外国の人びとや企業の中国への進出とともに、彼らの中国人に与える文化的な影響は少なくない。

本稿で取り上げた望京「韓国城」は、中国の各地から移動してきた朝鮮族と韓国からきた人びとおよび北朝鮮の人びと、ここを訪れる中国人や日本人が共同で創り上げた多文化、多国籍コミュニティである。韓国人、朝鮮族、北朝鮮の人びとは、この街において従来の朝鮮半島と似て非なる形で彼らの文化を再生産している。彼らの出身地同士は政治的にはそれぞれ分かれているが、この「韓国城」でキムチなど彼らの共通の食べ物を食べ、経済的にも緊密な関係を有している。そして、彼らの言語（韓国語、中国の朝鮮語、北朝鮮の言語）は発音や語彙、表現方法などにおいて、多少差異が見られるとしても、この空間において彼らは各自自分たちの言語で互いにコミュニケーションを行うことができる。中国内外からそれぞれ北京に移動した彼らは、自分の言語でコミュニケーションができることで、リラックスを感じ、一種の解放感を味わう。この「韓国城」における韓国人や朝鮮族および北朝鮮の人びとは、政治的な関係を越えて、経済的、言語的および文化的に共生できる空間を創り上げている。

また、望京「韓国城」は決して韓国人や朝鮮族および北朝鮮の人びとによる閉鎖的なエスニック・コミュニティを形成したり、あるいはエスニック・ビジネスとしての観光地になっているのではない。居住と商業が一体になっている望京は、韓国料理に馴染みのある日本人の好んで住む場所でもある。この街において、日本人はキムチなどを消費するだけでなく、韓国人や朝鮮族とともに同じ市場において日本の食品を販売し、ショッピングセンターでラーメン街を作ることで、自分たちの個性も積極的に表現している。さらに、「韓国城」のキムチや韓国式のインテリアはすでに中国人の生活に入り始め、「韓国城」における韓国のファッションや音楽、テレビドラマといったポピュラーカルチャーは、韓国文化に強い関心を持つ中国の若者の「哈韓族」（ハーハンズー）を集めさせる。

望京「韓国城」では、多様な国や地域や都市からきた人びとが集まり、彼らによって新しいライフスタイルが創出される。それは観光目的の模倣としてではなく、日常的な生活文化として生きられている。キムチといった朝鮮半島においては伝統文化の要素であるものが、望京という都市環状新興特区に移動した時、そこではエスニックであって、もはやエスニックではない新興文化の要素となっている。グローバル化の中で、こうした中国、朝鮮半島、日本を中心とする東アジアの文化特区が北京の望京に成立された。そして、飲食と言語、居住スタイルを特徴とするこの特区のライフスタイルが、韓国人や朝鮮族および北朝鮮の人びとに限らず、より多くの人びとを惹きつけることで、この街は増大し続けている。

〈注〉

- * 本章の内容は、筆者の単著論文「北京の『韓国城』(コリアンタウン) —改革開放が生み出した新しい都市コミュニティ」『成蹊大学一般研究報告』第46巻第5分冊, 2012, pp.1-20) を加筆・修正したものである。
- (1) 本論文では朝鮮族を中国の漢族やほかの少数民族の人びとと区別するために、主に朝鮮族以外の中国国籍を持つ人びとを「中国人」と呼ぶ。
- (2) 北京の地理的位置を説明する際に、現地の人びとは環という用語を用いる場合が多い。北京の街の分布は、故宮を中心に、それを巡って環状道路が七環まで漸次に設けられている。二環目から七環目までの道路は高速道路である(一環目は高速道路ではなく、現地の人びとに「内環(路)」と呼ばれている)。四環道路は1999年に開通し、長さは約65.3キロメートルで、北京の都心から約8キロメートル離れたところにある。五環道路は2003年に開通し、長さは約98.58キロメートルである。五環道路は北京と近隣の省と市を繋げる主要な道路になっている。
- (3) 新京報2005年10月18日記事「“海归”子女任挑朝阳名校」(「海外から帰国」の子女は朝陽区内の進学校を自由に選択できる)
<http://news.sina.com.cn/c/2005-10-18/01057192634s.shtml> (アクセス: 2012年3月15日)
- (4) 国民日報2010年4月27日記事「베이징 옥류관 짝 채운 한국 관광객들」(北京の「玉流宮」をいっぱいにした韓国の観光客たち)
<http://news.kukinews.com/article/view.asp?page=1&gCode=kmi&arcid=0003648709&cp=du> (アクセス: 2012年5月9日)
- (5) 「海外在留邦人数調査統計」平成23年速報版(平成22年10月1日現在) 日本外務省
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/11/pdfs/2.pdf> (アクセス: 2012年5月1日)

第三章 北京へ移動した朝鮮族の言語意識と子どもの教育 —中国語、英語の重視と「民族語」の維持をめぐる—

1. はじめに

本章では、北京在住の朝鮮族の言語意識とその子どもたちの朝鮮語の習得について考察する。

中国における市場経済の活性化とともに、1980年代以降さまざまな機会を求めて農村から都市へ、小都市から大都市へと移動する人びとが急増している。中国政府の『中国流動人口発展報告 2010』によれば、2009年の中国の移動人口は2.11億に達しているとされる⁽¹⁾。中国内における地域間の人の移動が加速化する中で、今まで中国の周辺地域に住んでいた少数民族の人びとの都市への移動も増加している。人民日報の2010年9月16日の記事によれば、現在中国で毎年移動する少数民族の人数は約1000万人とされる⁽²⁾。彼らの多くは仕事を求めて沿海地域や北京、上海といった大都市に集まってくる。その中で、近年注目されるのが少数民族としての朝鮮族の移動である。

北京は中国の首都として、中国の地方から多くの人たちがさまざまな機会を求めて集まってくる。中国の2010年の人口統計によれば、2010年11月1日現在北京市の常住人口（北京市の戸籍を有する者と有していない者が含まれる）は約1961.2万人とされる⁽³⁾。その中で、北京市の戸籍を有する常住人口は約1256.7万人であり、北京以外の省から移動してきた人口は約704.5万人であるとされる。このように、中国における厳しい戸籍制度にも関わらず、地方から北京へ移動する人が驚くほど多い。

中国の改革開放と韓国との交流が進展する中で、朝鮮族は朝鮮語⁽⁴⁾ができることにより、中国と韓国間の経済的・政治的・文化的なさまざまな交流の現場で媒体の役割を果たしている。前章では、中国の東北部から北京に移動した朝鮮族の人びとは、北京で韓国人や北朝鮮の人びと、現地の中国人および日本人と一緒に「韓国城」という名前の東アジアのハイブリッドな文化街を創出したと述べた。本章では、まず北京ではどのような朝鮮語／韓国語の教育機関があるのかを明らかにし、北京韓国語学校という朝鮮族知識人が設立した民営の学校の言語教育の実態を明らかにする。次に、朝鮮族若年層の子どもに対する漢語や英語の重視と朝鮮語の維持に関する葛藤と努力に関するさまざまな形を分析する。最後に中国に戸籍制度が地域間の移動を行う子どもの教育にどのような影響を与えるのかを考えたい。

2. 北京の朝鮮族と北京韓国語学校

(1) 中国における韓国語の需要の拡大と大学での韓国語学科の設置

1992年の中国と韓国の国交正常化とともに、中韓両国間の政治的、経済的、文化的な交流は急速に進展している。その流れの中で、より多くの機会を求めて韓国語を習得する中国の人びとや中国語を習得する韓国の人びとが増えつつある。中国においては、韓国企業の中国現地における従業員の採用と1990年代後半から始まった「韓流ブーム」の影響の中で、韓国語の学習者が急増し、彼らのための教育機関も多様に現れている。

朝鮮語学科が中国の大学で初めて設けられたのは1949年である。この時期に北京大学、延辺大学、中央民族大学、洛陽外国語大学に朝鮮語学科が設立されたが、そうした朝鮮語学科は中国政府によって朝鮮族を対象とした「民族教育」の機関として位置付けられた。しかし、1992年に中国と韓国が国交を結ばれるとともに、復旦大学と山東大学には韓国語学科が設立され、2008年には中国全域で国立、私立の大学および職業技術大学など約80校において韓国語学科が設立された(우영란 2008, pp.260-262)。北京大学でも、1945年以降朝鮮・韓国語文化学科において朝鮮語が一つの科目として設置されていたが、2009年には新しい学部の韓国語学部として独立した。このように、中国と韓国の国交正常化により、中国で韓国語は朝鮮語とは異なる新しい言語科目として誕生し、高等教育のカリキュラムの中に正式に編入されるようになった。そして、韓国語は、中国で今まで維持してきた朝鮮語と同じ地位、あるいは朝鮮語を超えようとする言語的な地位を占めようとする。

中国の大学における韓国語学科の教員は、主に延辺大学の朝鮮語文学科や中央民族大学の朝鮮語文学科出身の人が多く、最近では韓国の大学で韓国語を専攻した漢族の教員も増加している。もちろん、韓国の大学の教員を招へいすることも継続的に行われている。近年、このような韓国語学科を卒業した学生たちは国内だけでなく、韓国の大学院に進学し、学位を取得した後、中国に戻って大学の韓国語学科の教員職に就く者が増えつつある(차한필 2009, p.130)。このように、中国の高等教育機関における韓国語学科の設立とそうした学科の増加は、中国における韓国語の需要が高まることを表しているだけでなく、朝鮮族や漢族および韓国の人びとにも新たな就職の機会を与えている。

(2) 北京韓国語学校におけるグローバル人材の育成

北京韓国語学校は、夜間および週末に授業を行う補習校であり、1989年に朝鮮族の知識人で大学で教鞭を執っているRさんにより設立された。Rさんがこの学校を設立したことには、次世代の朝鮮族の「民族語」の継承と中国と韓国の交流に寄与できる人材養成を目的とする考えが込められている。Rさんは1987年に約1年間アメリカの大学に客員教授として滞在している中で、アメリカにおける韓国人社会に関心を持ち、特に週末に韓国人の子どもたちが通う韓国語の補習校に注目していた。1988年に彼は韓国の国際学術会議に参加することを機に、韓国の約10大学での講演を行い、当時ソウルで開催されたオリンピック開幕式にも参加することができた。こうしたことを経験することで、Rさんは中国と韓国の国交が結ばれることを予見した。そして、Rさんは中韓両国の国交が結ばれる場合には、両国の交流に寄与できる多くの人材が必要になることを意識し、その準備の一つとしてソウル大学の韓国語教科書を一冊持ってアメリカに戻った。その後中国に帰国し、ソウルで持って帰った韓国語の教科書を中国人に分かりやすく再編成したうえで、1989年に中国内で出版した。

1989年3月に、Rさんは北京政府の認可を得て、民営の学校としての北京朝鮮語学校を設立した。Rさんは、中国の朝鮮族の人びとに彼らの「民族語」を教えると同時に、中韓両国の交流のための人材養成を目的とし、受講者に朝鮮族が使用する朝鮮語より世界的に通用する韓国語を教えることを決意した。韓国語を教えるということを強調するために、Rさんは学校名を「北京韓国語学校」とつける予定であったが、当時はまだ中国と韓国の国交が結ばれていなかったことから、その学校名は政府に許可されなかった。したがって、学校の設立当時は「北京朝鮮語学校」と命名することになった。しかし、1992年の中韓両国の国交が結ばれることで、1994年には「北京朝鮮語学校」という学校名を正式に「北京韓国語学校」に改名することができた。

北京韓国語学校は、北京で唯一の基礎韓国語認定試験(Basic KLPT)の試験拠点でもある。そして、同試験対策のクラスも設けられている。2007年から世界韓国語認定試験委員会執筆の教材を使用しているが、この試験の成績は韓国における多くの大学と企業において職員採用や留学生選抜の基準になっている。したがって、韓国進出を目指して資格を取得するためにこの学校を訪ねる人も増えつつある。

a.多様な受講生と開かれた言語空間

以下においては、北京韓国語学校における受講生について見てみよう。北京韓国語学校の受講生は、主に北京の大学に通っている学生、地方から上京した朝鮮族の社会人、そして漢族学校に通う朝鮮族の子どもたちなどで構成されている。ほかに、漢族やその他の少数民族の人びともいる。Rさんは、朝鮮族以外の受講生たちをも積極的に受け入れている。2006年に筆者が現地調査を行った際に、北京韓国語学校の受講生は約150名で、講師は約15名（その中に韓国人が約3名）いた。第一期受講生たちは、1989年から3年間の勉学を経て卒業した人たちであり、その人数は約450名に達している。彼らの多くは、韓国企業や中国企業に就職した。当時、彼らに対する企業側の求人活動も活発に行われ、北京韓国語学校の卒業生の就職が比較的容易であったという。受講生の中には、それまで仕事が見つからなかった人でも韓国語を習得することで、韓国関連の職につくようになり、生活に大きく変化が生じた。



図18 北京韓国語学校の出張レッスンで韓国人講師が授業を行う様子（2007年6月19日、筆者撮影）

北京韓国語学校の受講生の多様性について、韓国人講師の金美善⁽⁵⁾（仮名）は次のように語る。

受講生は朝鮮族のほうが多かったです。漢族も少なくないし、蔵族（チベット族）や回族の人も何人かいました。彼らの中に20代が多く、その中には会社員もいましたが、学生のほうがもっと多かったです。韓国への留学を目指している人もいますが、朝鮮族の人たちはほとんど自民族の言語を学ぶことを目的としていました。それは日常生活において朝鮮族の人たちと交流するにも必要だし、就職する時にも有利だからでしょう。漢族の場合は、趣味で学んでいる人もいるし、韓国関連の仕事の必要に応じて学んでいる人もいます。そして、ほかの少数民族の学生の中には、自分の将来にきっと何か役に立つだろうと思って、韓国語を第二外国語として学んでいる人もいます。彼らは韓国に対して興味をもっているようですが、それが勉強の一つの要因になるのではないかと思います。（2007年6月15日、北京にてインタビュー）

このように、北京韓国語学校に通う受講生は朝鮮族に限らず、漢族やほかの少数民族など多様な人びとで構成されている。そして、彼らの多くは若い人たちであることが分かる。彼らがこの学校に通う原因として、朝鮮族の場合には自民族の人びととコミュニケーションを行うための道具としての韓国語の習得と韓国への留学、そして就職のための言語習得などが挙げられる。漢族やほかの民族の受講生の場合には、韓国と関連がある仕事に就くことや韓国への理解を深めることが言語習得の目的であることが明らかである。北京韓国語学校は、上記のさまざまな受講生のニーズに合わせて、開かれた言語空間を創造している。

以下においては、田麗娜（仮名、23歳）という朝鮮族の若者の事例を通じて、北京韓国語学校に通う朝鮮族の受講生の実態を明らかにする。田さんは遼寧省出身で、現在北京のある大学に在学している。彼女は小学校から高校まで地元の漢族学校に通い、小さい頃から家庭の中で両親とずっと中国語を使用してきた。田さんは朝鮮語がほとんど話せなく、高校卒業するまで母親が朝鮮語を教えようとしても、学ぶ意欲がなかったため学ばなかったという。そんな彼女は北京の大学に通い始めてから、朝鮮語の習得の必要性を強く感じるようになった。そのきっかけについて田さんは次のように語る。

今の大学には朝鮮語学部があるので、朝鮮族の学生もたくさんいます。彼らは皆朝鮮語が話せます。私は朝鮮族として、まだ自分の民族語が話せないのがよくないと思いました。同郷会（同じ遼寧省出身の人びとが集まる会）にはよく参加しますが、参加しにくる朝鮮族はほとんど朝鮮語が話せます。私だけが毎回座っているだけで、彼らの話は何も聞き取れなかったのが、とても制限されている感じがしました。それで、朝鮮語を勉強しようと決意しました。（田麗娜、2007年6月15日北京にてインタビュー）

北京韓国語学校に通い始めたこと理由として、田さんは自分が朝鮮族であることと、朝鮮族の友達と朝鮮語で話を交わすことを希望したのである。田さんは朝鮮族の友人の集まりでは、彼らの間で一番多く使われる言語が朝鮮語であるが、何も聞き取れない自分が彼らとの間に壁があることを感じるようになる。このような経験は、田さんに自分が「朝鮮族」であることを意識しても、「朝鮮語」ができなければ朝鮮族の共同体に入れないことに気づいた。したがって、彼女は朝鮮族の友達と同じ言語共同体に入るために、朝鮮語を習得することを決意した。

田さんは知人の紹介により、2004年から約2年間北京韓国語学校に通い、韓国人の金美善講師のクラスで韓国語を学んだ。けれども、田さんは北京韓国語学校に通い始めてから気づいたのは、自分が学んだのは韓国語であり、朝鮮族の間で使われている朝鮮語とは少し異なるということであった。そして、「朝鮮族の友達は、皆中国で使われている朝鮮語を使っていて、韓国語には少し違和感を感じているように思った」と気づくようになる。そうした言語的な微妙な雰囲気の中で、田さんは自分が学校で学んだ韓国語は主に韓国人との間で用いることにした。田さんは韓国語を学んだため、朝鮮族が使用するなまりのある朝鮮語はあまり話せないが、朝鮮族の友人たちの話が聞き取れるようになり、さらに彼女の韓国への留学にも有利になったという。

将来、田さんは韓国に留学して広告やメディアに関する知識を学び、中国と韓国との間の貿易に関する仕事をしようと考えている。彼女が留学先として韓国を選んだ理由には、中等教育の段階ですでに英語をある程度学んだため、英語圏に留学するよりは、留学費用が比較的少ない韓国に行って韓国語を習得することと、そこで専門知識を高めることである。彼女は現在韓国への留学を計画しており、そのための奨学金を申請している。田さんは留学を通じて韓国語の熟達と専門知識の習得を達成させようとし、それが将来の就職に有利だと考えている。

北京には、田さんのように家庭や学校において朝鮮語を習得していなかった朝鮮族の若者が少なくない。Rさんはそうした朝鮮族の若い人たちに韓国語を学ぶチャンスを与えようとして、北京韓国語学校を設立し、彼らに韓国語の習得を通じて、朝鮮族のコミュニティだけでなく、韓国人の人びともコミュニケーションができるように助けている。

北京韓国語学校は営利を目的とするのではないため、試験対策のクラス以外の授業は全部無料で行っている。学校経営における費用はRさんの個人の資金から支出されるが、その資金の源は主に彼自身が海外で行った講義や講演などによる謝礼金を集めたものである。これは、朝鮮族知識人の次世代の「民族語」喪失への憂慮とグローバルな人材の育成のために行う献身的な努力であると言えよう。しかし、資金不足のため、安定した教室が確保できなく、常にRさんの所属する大学内やその周辺の中小学校内の教室を借りて授業を行っている。そして、Rさんは現在自分の年齢のことも考慮した上で、学校を若い世代に担わせようとしている。

北京韓国語学校が今後どのような発展をもたらすかに関しては、引き続き注目する必要があるだろうが、多くの朝鮮族がすでに中国東北部を離れてさまざまな地域に移動する今

日、公教育機関としての朝鮮族学校がない移動地においても子どもたちに「民族語」が学べる新たな学校作りへの挑戦とその一定の可能性を提示していると言えよう。

3. 北京における朝鮮族の言語意識と子どもの教育

(1) 中国語と英語の重視による漢族学校選択

移動する人びとにとって、移動先の言語の習得は極めて重要である。朝鮮族の多くは、これまで中国の東北部に集住し、特に朝鮮族で構成されている朝鮮族の村で、朝鮮語を共通言語とし、中国語が話せなくても不自由なく生活をしてきた。しかし、近年東北部の集住地域を離れて北京や上海および中国のさまざまな都市や地域に移動した朝鮮族は、日常において漢族の人びとと接することが避けられなくなっている。そんな状況の中で、彼らは自分たちの中国語の能力が不十分であることを意識するようになった。そして、これからは朝鮮族の集住地域に留まるとは限らない彼らは、子どもには朝鮮語より中国語の習得をより重視するようになった。

朝鮮族の中で中国語を重視する傾向が強まる中、高学歴朝鮮族の人びとはどのような言語意識を持っているのだろうか。人びとの国際間および地域間の移動が急激に増加する中で、一つの言語の習得だけでは移動可能な国や地域も制限される。多くの企業が国際的なマーケットを広げることに於いて、多言語が駆使できるグローバル人材を求める傾向があるように、個々人もグローバルな舞台上で活躍できるように多様な言語を習得しようとする動きが見られる。

以下においては、北京在住の朝鮮族の事例を取り上げることで、彼らは子どもにどんな言語を習得させようとするのかについて検討する。

<事例1> 朴玄錫（仮名）、男性、35歳、朝鮮族、専門職。

朴さんは、小学校から高校まで朝鮮族学校に通い、北京の大学に進学。大学卒業後、故郷の遼寧省に帰って仕事をしていましたが、7年前に再び北京に戻ってきた。現在は韓国と関連がある仕事に従事している。彝族（少数民族名）の女性と結婚し、子どもはまだいないが、朴さんは次のような教育観と言語意識をもっている。

中国で暮らしているから中国語をちゃんと学ばなくてはなりません。そして英語も重要です。韓国語の中にも英語がたくさん入っているからです。もし子どもが生まれて、北京に質のいい朝鮮族学校ができたならそこに通わせたいです。けれども、漢族学校に通わせたほうが、朝鮮族学校に通わせるより社交範囲が広がると思います。中国社会に適応するには社会的な人脈が非常に重要です。子どもを漢族学校に通わせるか朝鮮族学校に通わせるかまだ決められないですが、私は民族意識が強いほうで、やはり子どもに自分の民族語を学ばせたいです。もし子どもが朝鮮語ができなければ、将来韓国に留学させることも考えられるし、その後またアメリカに留学させるのも良いのではないかと思います。(2006年12月4日、北京にてインタビュー)

<事例2>韓珍姫(仮名)、女性、34歳、朝鮮族、大手韓国企業の社員。

韓さんは、出身地の吉林省から北京に移動して約5年半になる。現在小学校3年生の娘が一人いる。娘は北京で漢族幼稚園に通い、その後漢族小学校に入学したが、夫が海外に単身赴任しているため、しばらく娘を郷里の母親のところで漢族学校に通わせている。娘を漢族学校に通わせた理由は、娘自身が朝鮮族学校に行くことを嫌がることと娘に中国語と英語を習得させたほうが娘の将来の進路に有利であるという韓さんの考えによる。韓さん自身は朝鮮族学校を卒業し、そこで受けた中国語と朝鮮語の二言語教育が現在十分役割を果たしているとするが、子どもの言語教育においては中国語と英語をより重視している。

中国では中国語ができないといけません。韓国企業にも中国語ができないと入れないからです。しかし、英語ができればどこへも行けます。子どもを留学させるとしても韓国へは留学させたくありません。韓国も欧米の学歴を認めるから、世界で公認される資格を取らせたいです。でも、朝鮮語は自民族の言語だから捨てたくはありません。将来、家で教えたり、家庭教師を雇ったりすることもできると思います。(2006年12月5日、北京にてインタビュー)

上記の二つの事例から見られる共通点は、子どもの言語教育における中国語と英語の重視および朝鮮語の継承への戸惑いである。朴さんと韓さんとも、まず中国で生活するためには漢族と接することは必要不可欠であることを意識し、そのために熟達した中国語能力

が必要であることに気づいている。したがって、二人とも子どもを漢族学校に通わせることが一番望ましいと考えている。事例1の朴さんは、自分が朝鮮族学校において中国語と朝鮮語の二言語教育を受けたが、中国の主流社会に進出するためには中国語能力と漢族との繋がりが重要であることを意識し、子どもには漢族学校の教育を受けさせたいと考えている。

それでは、上記の二つの事例に出た「中国語ができる」ことと「中国語をちゃんと学ぶ」という言葉は何を指すのだろうか。これまで、朝鮮族学校に通った朝鮮族、その中でも朝鮮族の集住する延辺朝鮮族自治州などに住んでいた朝鮮族は学校と家庭および地域において、共通言語として朝鮮語を用いていた。彼らにとって、中国語は主に学校の中国語科目の授業に使用する言語であり、大学受験のための言語であるため、日常生活においては必ずしも必要な言語ではなかった。したがって、彼らの中国語はテキストに留まる言語であり、その言語に対する理解やその言語による会話能力は漢族の子どもたちと多少異なることが見られる。

コミュニケーションを行うことにおいて、相手の行動や反応を予知するためには、相手の理解しやすい言語や言葉で、伝えようとする情報を適切に発信する必要があると考えられる。そして、そうした情報伝達がスムーズに行われた場合には、その言語を用いる集団やそうした環境に適応しやすくなるだろう。それでは、子どもたちの場合、どのようにして自分と異なる言語を用いる人びとの言語や言葉を習得し、その言語に「こめられた」ものをよりよく理解することができるのだろうか。スザーン(1997)は、「こどもたちは、同年代のこどもたちとのつきあいをとおして、会話能力をみにつけていくのだ」(スザーン1997, p.281)と指摘する。この視点から見れば、朝鮮族の子どもたちが中国語を習得することにおいて望ましいのは、彼らの同年齢の中国語を母語とする漢族の子どもたちとつきあうことで、中国語の表現力を身につけていくことであろう。そして、表現力に限らず、読み書き能力も漢族と同等のレベルに達しようとする場合には、彼らと同じ教室で同じ教科書の内容を学ぶことが有効な方法であると言えよう。上記の二つの事例でも、こうした考えによって子どもに中国語を十分学ばせ、漢族の子どもたちとのネットワークを築かせるために漢族学校に通わせようとする事と考えられる。

朝鮮族の中では、今まで朝鮮語を第一言語として習得する場合が一般的であるが、そうした人たちは中国内における活発な移動の過程において、自分が中国語を第一言語とする人に比べて、不利な立場に置かれていることに気付く。したがって、彼らは自分の子ども

には中国語を第一言語として身に付くことを期待する。朝鮮族の中国語と英語の重視は、彼らがそれらの言語話者との同等な言語能力を獲得することで競争力を高め、より多くの社会進出の機会を得ようとしている。

過去において、中国の朝鮮族学校では日本語は朝鮮語と発音と文法において共通点が多いことから学びやすい言語としてカリキュラムに組み込まれたとしたら、近年は国際的な活動において一番有力な言語としての英語がますます重視されている。英語は世界的に使用範囲が広い言語であるため、その言語を習得することによって、自分たちの活躍の場を広げようとする朝鮮族のグローバル意識が観察される。さらに、言語の社会的な「力」が、その言語が駆使できる人の社会的な活動に大きな影響を与えることを意識することで、朝鮮族の若い人たちはより多くの言語的な「力」を獲得しようとしている。

上記の二つの事例に見られる共通点としては、子どもに「民族語」としての朝鮮語を維持させたいが、それが公的な教育機関において正式な科目として設置されていないため、家庭教育や外国への留学によって習得させることを考えている。上記の二つの事例とも朝鮮語への選択順位が中国語や英語の次になるが、依然として「民族語」として位置付けることは、朝鮮語が彼らのエスニック・アイデンティティを支えることにおいて核となるものであることを意味する。彼らは、子どもの受容に合わせて朝鮮語を補習させようとすることが見られる。彼らは自分たちのエスニック・グループへの繋がりも重視し、朝鮮語を維持することで朝鮮族の人びととの「われわれ」意識を構築しようとしている。このように、朝鮮族の若い人たちその中でも高学歴者の場合には、子どもの言語習得において、中国語と英語を最も重視するが、それは必ずしも彼らの朝鮮語の放棄を意味するのではないことが明らかになった。

こうした朝鮮族の言語意識は、彼らの重視する言語の社会的地位にも関係する。中川(1996)は、「言語の地位ということに関しては、国家語・公用語などとして用いるかどうか、教育の対象あるいは教育の媒介言語として用いるかどうかといったようなことが問題になるわけだ」(中川 1996, pp.274-275)と指摘する。朝鮮族がこれまで使用してきた朝鮮語は、延辺朝鮮族自治州においては公用語として認められ、中国東北部の朝鮮族学校においては正式な科目として定められ、学校の教授言語としても用いられた。しかし、彼らが移動した北京、上海を始めとする中国東北部以外の地域においては、朝鮮語が初等教育や中等教育の授業科目になることや教育の媒介言語になることはない。中国語は中国の国家語であり、中国全土において圧倒的な権威を持っていることは言うまでもないだろう。英語

も中国の中等教育のカリキュラムの中で一番多く設ける外国語科目であり、近年の中国人の外国への移動や中国に入国する外国人の増加とともに、中国における英語の需要もますます高まっている。

こうした移動先における言語の社会的背景から、近年の朝鮮族の言語意識も大きく変化している。彼らは中国で社会的な言語地位が高い中国語や国際的に通用する英語を重視するようになった。朝鮮族の若い人たちは、自分は親の世代とは異なり、子どもに朝鮮族社会に限らずより広い範囲で活躍できるようにするため、複数の言語を学ばせようとしている。すなわち、彼らは子どもを単に朝鮮語しかできないマイノリティとして育てようとするのではなく、中国のマジョリティとしての漢族や国外の多くの人びととコミュニケーションを行う言語力およびそうした人たちと競争する能力をもつグローバルな人材として育てることを目指している。朝鮮族のこうした子どもへの言語戦略は、子どもに社会進出への有利な道具を与えるだけでなく、子どもを国家や地域を越えて活躍するグローバル人材として育成しようとする朝鮮族親たちのグローバル意識の表れである。

(2) 家庭教育と学校外教育による朝鮮語の継承

北京在住の朝鮮族は子どもが小学校に入学する際に漢族学校に通わせるのが一般的である。したがって、そうした子どもたちの朝鮮語の習得も難しくなる。けれども、子どもに朝鮮語を学ばせるためにさまざま工夫を行う朝鮮族の親たちがいる。それでは、彼らはどのような方法で子どもに朝鮮語を学ばせるのだろうか。以下においては、朝鮮族の家庭教育と補習クラスといった学校外教育によって子どもに朝鮮語を学ばせる事例を通じて検討したい。

a. 家庭内における朝鮮語の維持と継承

北京における朝鮮族の子どもたちが朝鮮語を習得する環境として、まず家庭内の言語環境が挙げられる。興味深いことは、子どもの言語習得を促す要因は、一つは家庭内における共通言語であり、もう一つは子どもとコミュニケーションを行う相手がどの言語を使うかである。以下では、まず一つの事例を見てみよう。

<事例3> 崔銀珠（仮名）、女性、33歳、朝鮮族、中国国家機関に勤務。

崔さんは小学校から高校まで吉林省の朝鮮族学校に通い、延辺の大学を卒業した。その後、北京のある国家機関に就職し、1999年からずっと北京に居住している。崔さんは6歳の娘が一人いて、もうすぐ小学校に入学することになる。今は漢族幼稚園に通い、小学校も漢族小学校に進学する予定である。このような決定には、北京に公立の朝鮮族学校がないことも原因として挙げられるが、崔さんのように夫婦共働きの場合には、学校が家に近いことも重要な要素になる。しかし、崔さんの夫は娘に民族語の朝鮮語を教えずなくてはならないという考えが強く、自ら娘に朝鮮語を教えたりする。さらに、朝鮮語の教科書もすでに購入してある。崔さんは、三年前までも娘が朝鮮語を学ぶことを嫌がっていたため教えようとしなかったが、現在は娘が朝鮮語を学びたがるため、教えることができるという。娘は朝鮮語で話すことに積極的ではないが、朝鮮語で答えることを求められるとそれに従うことが多い。夫婦とも忙しいため、崔さんは現在両親に北京に来てもらい、一緒に暮らしながら子どもの面倒を見てもらっている。家の中では全員朝鮮語を使う。娘が朝鮮語を学びたがる原因には、朝鮮語が祖父母とコミュニケーションをとるための一番重要な手段であることを意識しているため、自ら進んで朝鮮語を学ぼうとしていることにある。（2007年6月21日北京にてインタビュー、2010年3月22日電子メールによる追加インタビュー）

崔さんの家庭では、朝鮮語は共通言語であり、3世代の間の一番有力なコミュニケーションの媒体である。崔さん夫婦は共働きであるため、子どもの学校選択において、自宅から距離が短い学校を優先に考えていることから漢族学校が一番良い選択対象になっている。漢族学校のカリキュラムには朝鮮語が入っていないため、学校教育による子どもの朝鮮語の習得は不可能である。したがって、崔さんは朝鮮語を家庭教育によって補おうとしている。彼女は子どもの受け入れ状況を把握しながら少しずつ家庭教育の中に取り組んでいる。それに対して、子どもは最初は朝鮮語に興味を持たないことから、徐々に興味を持つようになる。その大きな原因は、日常において朝鮮語を主に使用する祖父母と一緒に暮らすことにある。子どもは、祖父母と話を交わすためには中国語はあまり通じなく、朝鮮語が必要であることを意識するようになる。祖父母とコミュニケーションをしたいという願望が強いことによって、子どもが朝鮮語を学ぼうとする意欲が出たのであろう。

すなわち、子どもたちは相手とのコミュニケーションを求める時に、そのコミュニケー

ションを行うことにおいて一番必要とする言語を意識し、それを習得しようとする。特に、相手が一つの言語のみ使用する場合、そうした動きがより顕著に現れる。すなわち、子どもたちは朝鮮語しか使用しない祖父母とコミュニケーションをするためには、自分が朝鮮語を学ばなければ相手と話が通じないことを強く意識することで、自ら朝鮮語を学ぶ行為へと繋がる。このような現象は、日本に移動した朝鮮族の家庭でもよく見られる。祖父母の世代、すなわち朝鮮語を第一言語とし、日常においてほとんど朝鮮語のみ用いる朝鮮族の人びとは、孫たちの朝鮮語の継承において重要な役割を果たしている。

また、朝鮮族の世代間の絆が強いことも上記の事例から見られる。特に親の場合には孫の子育てなどへの支援を惜しまないことが分かる。そして、家族の世代間交流において共通の言語がとても重要になる。朝鮮族の国内外への移動が急速に進展する中で、子どもたちにとって朝鮮語の習得が必要になることには、必ずしも社会的需要やエスニック・アイデンティティの構築などより、上記のような家族の世代間交流が目的であることも重要な原因として見ることができる。

b.補習クラスへの親の期待と子どもの学習意欲の低下

北京で朝鮮族の子どもたちが学校外教育において朝鮮語を習得できる一つの空間として補習クラスが挙げられる。以下では、こうした漢族学校に設けられている「朝鮮語クラス」に注目し、そこに通っている生徒の事例を取り上げる。

筆者は 2007 年から 2011 年の間に北京での現地調査を通じて、北京には少数ながら漢族学校において「朝鮮語クラス」が非公式に設けられていることが確認できた。しかし、このような「朝鮮語クラス」は学校の正式なカリキュラムの中に編入されるのではなく、放課後に参加自由の補修クラスとして朝鮮語を教えている。以下においては、J 小学校の朝鮮語クラスに通っている金星（仮名、男の子、小学校 6 年生）の事例を中心に、この生徒の保護者が「朝鮮語クラス」を選択した原因と金さんの朝鮮語の習得の実態を明らかにする。

金さんは父親が 1992 年に仕事で北京に派遣される際に同行してきた。母親は数年前から日本で働いている。金さんは、小学校 4 年生までほかの小学校の朝鮮語クラスに通っていたが、その学校が今の学校と合併することで転校してきた。前の学校にいた時も昼間には漢族学校に通い、夕方には朝鮮語クラスで朝鮮語の授業を受けていた。前の学校も今の学

校も全寮制であり、週末だけ家に帰ることが許可されている。このような規則が厳しい学校に息子を通わせたのは、「この学校では朝鮮語が学べるから」という理由で金さんに朝鮮語を習得してほしいとの父親の願望によるものであった。

J小学校では、夕方6時半からほとんど毎日二コマ（一コマ40分）の朝鮮語授業が設けられている。朝鮮語を教える教師は朝鮮族で、J小学校の専任の教師である。各学年に一つの朝鮮語クラスがあり、各クラスに一人の朝鮮族の担任の教師がいる。教科書は延辺の出版社から朝鮮族向けに出版した朝鮮語の教材を使用している。

父親の苦心にもかかわらず、金さんは今学期に朝鮮語の授業に一回も出席したことがない。それは「興味がない。学校の宿題もいっぱいあるから、時間が足りない」という理由であった。こんな金さんがこの学校に転校したのは、父親の「朝鮮語を学ぶのは、朝鮮族の伝統だから」という考えに従ったからである。

家庭内において、父親が朝鮮語で話しかけてくることに対して、金さんは常に中国語で答えている。朝鮮語の習得について金さんは次のように語る。

朝鮮語をあまり使いたくないこともありますが、よく話せないのがもっと大きな原因です。使いたくないのは、朝鮮語の魅力を感じていないし、中国語をもっと使いたくなるからです。朝鮮語授業の先生の教え方も下手だと思います。英語授業の先生ははっきり説明してくれるので分かりやすいですが。(2007年6月20日、北京にてインタビュー)

自分の朝鮮語能力が低いと考えている金さんと異なり、彼の父親は息子が朝鮮語の授業に欠席することが多いにも関わらず、朝鮮語を少しでも学んだことに満足している。

息子は朝鮮語があまり話せませんが、韓国ドラマを観るのが好きで、「翻訳、下手だなあ」と言ったりします。だから、韓国語が結構聞き取れるのではないかと思います。不思議なのは、朝鮮語は話せないけど、文章はある程度書けますね。やはり朝鮮語クラスに通った効果があると思います。(2007年6月20日、北京にてインタビュー)

金さんにとって、中国語は第一言語で、朝鮮語は第二言語あるいは第三言語になっている。彼は父親の意思によって朝鮮語クラスに入り、朝鮮語という言語自体に特に興味を持っていないが、好きな時に学ぶということが続けている。すなわち、自分の都合によって

朝鮮語クラスに参加したり参加しなかったりする。そこには、親の朝鮮語授業への期待と子どもの学習意欲の低下との間にずれが生じている。広田（2003）の指摘のように、「子供は、大人が権利を認めようが認めまいが、個々に認識—判断をする独立した主体であるから、大人の意図通りの反応を一律にするわけではない。『教える』という行為と『学ぶ』という行為の間には、大きな断層があるのだ」（広田 2003, p.11）。

金さんにとって、朝鮮語は「民族語」というより韓国ドラマのようなポピュラーカルチャーに接するための道具としてもっと意味があると言えよう。このように、生活における必要性やその言語的な魅力および教師の教え方などが、金さんの朝鮮語を学ぶ意欲に直接影響を与えている。けれども、金さんの父親の朝鮮語クラスへの期待から、朝鮮語クラスが朝鮮語を学びさらに朝鮮語を使用する空間を与えているため、朝鮮語を獲得することにおいて重要な役割を果たしていることは否定できないだろう。

c. 「民族語」の習得とエスニック・アイデンティティ

エスニック言語とエスニック・アイデンティティの間にはどのような関わりがあるのか。朝鮮族の人びとはなぜ朝鮮語を維持・継承しようとするのか。本章で事例として取り上げた田さんは自分が朝鮮族であり、朝鮮族の友人と朝鮮語で話をしたいという要因が彼女の朝鮮語の習得を促したと言える。そして、崔さんの子どもの場合には、朝鮮語が祖父母とのコミュニケーションのために必要不可欠な言語になっているため、自ら朝鮮語を学ぼうとする。津田（1990）は、人間は他者とのコミュニケーションを介して、自己のアイデンティティを形成し、他者との連帯感を得るためには、同じ言葉を話す他者とのコミュニケーションが必要になると指摘する（津田 1990, p.89）。上記の田さんと崔さんの場合にも、こうした友達や祖父母との連帯感を得るために、朝鮮語を学ぶ行為として考えられる。

それでは、小さい頃から漢族学校に通ったが、両親は朝鮮族である家庭で育った田さんの場合には、朝鮮族の友人と出会う前には朝鮮族というエスニック・アイデンティティを有していたのだろうか。そうした帰属意識があったとしたら、どのような形で現れていたのだろうか。

私は高校まで漢族学校に通い、周りに朝鮮族も非常に少なかったけど、自分のエスニック・アイデンティティはかなり強いと思います。両親から民族に関する教育を受けたことはあまりなかったのですが、私は朝鮮族の伝統文化や民族衣装が大好きで、朝鮮族

としての誇りも持っています。私は朝鮮族の人に出会うと、非常に親しみを感じます。街を歩く時に、私は人の見た目からすぐ「この人は朝鮮族だ」と判断することができます。(田麗娜, 2007年6月19日, 北京にてインタビュー)

すなわち、田さんは朝鮮語が話せなくても、民族衣装を含めた朝鮮族の伝統文化に関する理解を深めており、さらに朝鮮族の身体的および文化的な特徴を覚えることで、自分と朝鮮族の人びとと連帯感を感じていた。そうした連帯感は彼女に親しみを感じさせることで安心感を抱かせる。こうした身体的および文化的に覚える感覚は、鄭暎恵(2005)が指摘する「言語化されずに身体化された記憶」⁹⁾と共通であるだろう。田さんのように、漢族学校に通ったにもかかわらず、朝鮮族の文化や特徴を意識することが、その後の朝鮮族の友人作りや朝鮮語の習得を促したと考えられる。

朝鮮族のエスニック・アイデンティティは不変なものではなく、常に変化を伴うものであり、場合によって弱まったり、強まったりする。筆者の調査に応じてくれた朝鮮族の中には、本人が朝鮮族学校に通った経験がある場合には子どもを漢族学校に通わせようとする人がいる一方、本人が漢族学校に通った経験がある場合には子どもは朝鮮族学校に通わせるなど多様な事例が見られた。そのほかにも、以下のように子どもを高校まで漢族学校に通わせたが、朝鮮語ができないことに悔しさを感じることで、韓国の大学に留学させる事例も見られる。

<事例4>具春英(仮名), 女性, 40代, 朝鮮族, 自営業, 黒竜江省出身。

具さんは過去において中国の東北部のある漢族学校で10年間音楽教師として勤めた経験がある。7年前に北京の望京地域に移住し、現在飲食店を経営している。北京に移住した理由は妹が北京で自営業をやっていることと、望京地域は朝鮮族と韓国人が集まって住んでいるため、住みやすいと判断したからである。息子が一人いるが、中国で漢族高校を卒業した後、北京の大学で2年間通い、現在は韓国の大学に留学している。具さんは息子を漢族学校に通わせたことを後悔している。

朝鮮族だから、自分の民族語を学ばなきゃいけないと思います。息子が韓国に行く前には朝鮮語が全然話せなかったのです、私とずっと中国語を使っていました。中国語を使うと心が通じない気がします。今は息子が韓国語を少し話せるので、とても嬉し

いです。将来嫁も朝鮮族ならいいですね。息子も私になぜ漢族学校に通わせたか責めています。でも、それは朝鮮語を学んでも必要ないと言われる時代（筆者注：中国の文化大革命の時代を指す）だったし、中国では中国語ができなければいけないと思ったからです。でも、改革開放以降韓国語ができると就職の道ももっと広がるし、収入も高くなります。それで、今息子を韓国に留学させています。（2006年12月2日、北京にてインタビュー）

具さんの事例から見られるのは、朝鮮語と韓国語の習得は、高収入の職につくためのいい方法であるだけでなく、朝鮮族のエスニック・グループへの帰属感、そしてもっと身近に感じるのが親子の心の距離の短縮である。それは、具さん自身がいくら漢族の人びとの中で暮らし、日々中国語を使用するとしても、彼女のアイデンティティの核を占めている部分は朝鮮族であることを示すものであり、それが朝鮮語という言語手段によって表現されている。具さんが息子との中国語による心的距離は、息子が韓国語を習得することにより、徐々に短縮されていることが分かる。

このように、朝鮮族の朝鮮語や韓国語の習得は、その言語の市場価値やコミュニケーションに必要であるからだけでなく、彼らの朝鮮族としてのエスニック・アイデンティティを支える重要なものであると言えよう。

4. 中国の戸籍制度と移動する子どもたち

中国の戸籍制度は農村戸籍と非農業戸籍という二分構造を呈している。このような戸籍制度の一つの重要な目標と機能は、人の移住と移動をコントロールすることである。現在中国におけるさまざまなほかの制度の改革に伴い、その実際の効果は少し低下しているが、その機能は依然として存在する（陆益龙 2003, p.459）。

戸籍制度の厳格な区分は、移動する人びとの生活に不便を与えることで居住の不安定をもたらすが、その中で子どもの教育に与える影響が一番大きい。1990年代以来、中国の移動先の戸籍を持たない非戸籍定住人口の子どもの教育が義務教育における最大の難題になっている（葛新斌・胡劲松 2007, p.95）。新京報の2010年7月17日の記事によれば、親とともに地方から北京へ移動し、現地で義務教育を受ける段階の子どもたちは2009年に約41.8万人に達し、北京における生徒総数の約40%を占める。しかし、このような義務教育

段階の子どもたちが北京の公教育機関で教育を受けることが容易ではない。

教育における戸籍の影響は、主に教育を受ける場所の問題に現れている。すなわち、個人がどこで教育を受ける権利があり、どこで教育を受ける権利がないのかという問題である。現行制度の規定によれば、個人は自分の常住戸籍所在地にだけ一般教育を受ける権利がある。もし戸籍所在範囲を超えた地域で教育を受ける場合には、それに相応する「借読費」⁷⁾を要求される場合が多い。そして、その「借読」学校に入るにも政府の許可やコネが必要となる場合もある(陆益龙 2003, p.459)。2009年以降、地域によって政府による「借読費」請求の規定は排除されつつあるが、学校による公式あるいは非公式の請求は依然として多く存在する。

中国の現行試験制度も戸籍あるいは戸籍所在地と直接な関連がある。全国统一試験を受ける場合、非戸籍所在地では受ける権利がない(同上: p.324)。特に、大学受験の場合は必ず戸籍所在の省や市の学校で試験を受けるのが規定されている。しかし、試験は全国统一であっても、地域によって、さらに学校によって使用する教科書が異なる場合があるため、移動する子どもたちにとって大学受験における不利な点は免れない。したがって、子どもたちが親とともに移動するか、それとも親と離れ離れの生活をするのか、あるいは親が子どものために再移動するかの問題に直面する。上記のような中国における戸籍制度は、人の移動を制限する強制手段であり、移動する人びとの次世代の育成に直接的な打撃を与えている。

中国の少数民族政策は個人ではなくエスニック・グループを単位とし、かつ民族自治地方内で実施されるため(岡本 2008, p.172)、民族自治地方を離れた個々人の少数民族には適応しなくなっているからである。

金星さんの場合も大学受験の時に戸籍所在地に帰らざるえない問題に直面している。それは北京の戸籍を有していないため、戸籍所在地の吉林省に戻らなければ、大学受験ができないからである。金さんの父親は、吉林省の教育の質が北京より高いと考えており、それが息子の大学受験に不利になると憂慮している。それは、彼の親戚の子どもの一人が北京で公立の中学校に通った時は成績がクラスで3番目ぐらいだったが、黒竜江省のある朝鮮族学校に転校した後はその学校のクラスで40番目という成績が出たため、不安を感じたからである。金さんの父親も、息子を戸籍所在地の学校に転校する際に朝鮮族学校を予定しているが、現在の息子の朝鮮語のレベルでは大学受験の時に全部朝鮮語で回答するのは難しいと考えている。その場合には、中国での少数民族の生徒に対する優遇点数としての

10点を得ることができないということである。少数民族の生徒であっても、大学受験の際に、自民族の言語で回答しない場合にはその優遇政策の対象にはなれないからである。

筆者が2006年にインタビューした韓珍姫さんの場合にも、2011年に北京で再びインタビューを行った時には、娘が戸籍の所在地である吉林省の学校に通っていることが確認された。韓さんによれば、小学校6年生まで娘を北京の学校に通わせたが、北京の戸籍がないため、大学受験の時は必ず戸籍所在地に帰らなければならないということであった。そして、大学受験のためには、戸籍所在地の学校で中学校から通う必要があるという。それは、大学受験のためには、現地の高校入試の成績と高校三年間の会考の成績が必要であり、現地の高校に進学するには、現地の中学三年間の会考の成績が必要になるということである。したがって、戸籍所在地で大学受験をするためには、中学校から現地で通う必要がある。韓さんは夫とともに北京で働いているため、しかたがなく娘を郷里の母親に預けた。

韓さんは北京に来て約10年になるが、北京の戸籍は有していない。今の会社は外資企業なので北京戸籍の申請もできないという。彼女は家族が北京の戸籍を持っていないことが、子どもと離れ離れの生活を送らせるとは思わなかったという。韓さんは子どもを吉林省に送る前にいろいろな方法を考えた。その一つに、娘を北京で高校まで通わせてから、外国へ留学させることである。けれども、周りの人びとの経験から、娘がまだ価値観などはつきり定まっていない時期に外国に行かせることは、娘が移動先で悪い影響ばかり受ける可能性があるかと心配することで断念したのである。したがって、やはり中国の大学に通わせ、自立した人格が形成された後に留学させたほうが安心だと考えている。韓さん夫婦は外国資本の企業に勤めているため、中国では高所得層といえ、娘の留学費用も負担できると考えている。韓さんは年に2~3回娘に会うことができるが、娘は休暇の時に一人で吉林省から北京に来る。しかし、娘は毎回吉林省に戻る時に泣くため、韓さんも娘と一緒に暮らせないことに胸を痛めている。

このように、中国内で人びとが地域間の移動を行なうことにおいて、さまざまな新たな問題が生じている。しかし、それに対応しようとする中国政府の動きはまだ顕著に見られない。地域別に厳格に分けられた中国の戸籍制度は、政府にとっては人の地域間移動が過度に行われることを防ぐ方法としての有効な手段になるとしても、移動する人びとの移動先での定着や子どもたちの教育を受ける機会を大きく制限し、彼らの家族のありかたさえ揺るがしている。

5. むすび

グローバル化と中国の改革開放は、中国のさまざまな面において大きな影響を及ぼしている。特に、人びとの国内外への移動が加速化する中で、彼らの従来のライフスタイル、価値観および子どもへの教育観は大きく変化している。

その中で、朝鮮族の人びとは国民国家の枠組みを超えるよりグローバルな社会の一員として居場所を模索しようとする意識を持ちはじめ、そのための知識や能力を備えようとする。まず、朝鮮族の若年層は子どもの教育において、親世代の朝鮮語重視から中国語と英語の重視へと意識を変えている。朝鮮族の人びとは、自分たちが今まで住んでいた東北三省を離れて移動した時、それまで自分たちの生活圏は朝鮮族のエスニック・グループの中に限られ、中国の漢族を主とする中国社会には入れなかったことに気づく。その一つの原因に、彼らは朝鮮語に習熟するが、中国語能力が不十分だと意識することである。したがって、彼らは自分の子どもには主流社会に進出させ、より大きな活躍の場を提供し、そのための中国語や英語の重視が行われる。彼らは「民族語」を最も重んじる朝鮮族の従来の教育観から、主流社会に進出するための言語の習得をより重視することへと変化してきた。

しかし、その中でも子どもに家庭教育や補習校などのさまざまな教育を通じて「民族語」としての朝鮮語を維持させようとする人も少なくない。このように、さまざまな方法で子どもに朝鮮族のエスニック言語である朝鮮語を継承させようとすることには、朝鮮族の親たちの言語を通じて家族の絆や朝鮮族共同体との繋がりを維持しようとする考えがあり、それは文化的なアイデンティティの表れであると言えよう。

また、中国の都市と農村、そして各地域の出身を厳格に区分する戸籍制度は、移動する子どもたちに大きな影響を与えている。親とともに北京へ移動し、北京の学校に通うが、戸籍は依然として東北部の出身地にある子どもたちは大学受験のために、再び東北部の戸籍所在地の学校に転校しなければならぬことに直面している。北京と地方との間の教育格差なども挙げられ、移動する子どもたちの転校における適応の問題や学習意欲の低下などを心配する親も少なくない。そして、こうした中国の戸籍制度によって、いくら移動先で長期滞在しても、現地の戸籍を有していないことで、彼らは再び出身地に戻らざるをえないことから、自分たちが中国東北部の出身であると同時に朝鮮族であることを再認識させられる。

〈注〉

- (1) 中国政府门户网站 2010 年 6 月 26 日《我国流动人口达 2.11 亿 未来人口流动呈四大态势》(中国政府網 2010 年 6 月 26 日の記事「我が国の移動人口は 2.11 億に達している 未来人口移動の 4 大情勢」)
http://www.gov.cn/jrzg/2010-06/26/content_1638133.htm (アクセス : 2012 年 12 月 4 日)
- (2) 中国政府门户网站 2010 年 9 月 16 日《我国少数民族流动人口目前大部分进城务工经商》(中国政府網 2010 年 9 月 16 日の記事「我が国の少数民族の移動人口は、現在のほとんどが都市へ移動し、アルバイトや商業を営んでいる」)
http://www.gov.cn/jrzg/2010-09/16/content_1703606.htm (アクセス : 2012 年 12 月 4 日)
- (3) 京华时报 2011 年 5 月 31 日 《北京户籍常住人口近三成人户分离》
(京華時報 2011 年 5 月 31 日の記事「北京の戸籍常住人口の 3 割は人の居住地と戸籍登録地が異なる。」)
<http://news.sina.com.cn/c/2011-05-31/092022560785.shtml> (アクセス : 2012 年 12 月 5 日)
- (4) 本論文では、朝鮮語と韓国語という用語を用いるが、朝鮮語は主に中国で朝鮮族が使われている民族語を指し、韓国語は韓国で国語として規定されている言語を指す。朝鮮語は朝鮮族が朝鮮半島から中国に移住した初期に使われていた言語を基に、彼らが中国で長年居住する中で中国語の影響を受けた言葉である。韓国語は 1948 年の大韓民国の成立とともに国語として命名され、その後語彙の編成における英語や日本語などの外来語の影響を受け、更なる変化が生じている言語であり、中国の朝鮮語とは語彙や文法、言葉のアクセントなどにおいて共通点もあれば、相違点もある。
- (5) 金美善 (仮名), 36 歳, 韓国出身。北京のある大学の博士課程に在籍。北京韓国語学校の韓国語講師。中国にくるまで韓国のある新聞社で働いていたが、その時に中国語を少し習得していたことから、新たなチャンスを求めて中国へ来た。
- (6) 鄭暎恵は「言語化されずに身体化された記憶と、複合アイデンティティ」(2005) という論文の中で、在日韓国人の言語を介さずして覚えた祖先の故郷への記憶を「身体化された記憶」としてとらえている。本論文でも、朝鮮語が話せない朝鮮族が日常生活の中で、言語を介さずに覚えた朝鮮族の生活習慣や朝鮮族へのイメージなどを指す

言葉として鄭（2005）「身体化された」という表現を用いて説明する。

- (7) 「借読費」は中国政府に規定により、一学期に 200 百元である。北京市や広東省などの地域においては政府により 2009 年 1 月 1 日から義務教育段階における「借読費」が廃止され、中国教育部も 2010 年 12 月に《小学管理规程（小学校管理規定）》における非戸籍地の小学校で教育をうける生徒に対する「借読費」規定を正式に廃止した。しかし、その名目を変えた「賛助費（助成金）」、「择校費（学校選択費）」などの費用が学校により正式あるいは非正式に請求されることが各地で台頭し始め、その金額は 1 万元以上に上る。

第四章 高学歴者が「帰郷」するとき

—韓国在住の朝鮮族のアイデンティティの揺らぎをめぐって—

1. はじめに*

本章では朝鮮族の韓国⁽⁴⁾への移動を「帰郷」ととらえ、学歴が彼らの「帰郷」においてどのような影響を与えるのか、朝鮮族の人びとは韓国でどのように受け入れられているのか、「帰郷」先において彼らのアイデンティティはどのように変化しているのかを考察する。

近年のグローバル化の進展とともに、かつて、出生地を離れて植民地や外国へ移動し、定住していた人びとが、故国へ再移動（「帰郷」）する事例が顕著となり、注目されている。そうした人びとは、親戚訪問や就労、結婚、留学などさまざまな目的を持って故国へ「帰郷」するが、これまでは経済的要因に焦点をあてて議論されることが多かった。本章では、故国へ「帰郷」する人びとの、先祖の故郷への憧れに対する現実の齟齬によるアイデンティティの変容といった文化的要因に注目する。

故国への再移動の現象をとらえる用語として、近年日本で最も使われているのが「帰還」である。「帰還」に関して、大川（2010）は「帰国（者）」という語と比べて「return はたんに『戻る』という、より客観的、中立的な用語である」（大川 2010, p. 30）と指摘し、「一時的な訪問ではなく、本国⁽⁵⁾の国籍を取得し、定住を目的とした永久的な帰還を意味する」（同上：p. 31）と定義している。一方で、本論文では「帰郷」という語を用いる。本論文の「帰郷」とは、かつて出生地を離れて外国で生活していた人びとおよび彼らの子孫が、「故国に帰る」という安らぎを求めて、一時的あるいは長期的に故国に戻ることを意味する。すなわち、「帰還」の客観性に対して、「帰郷」は移動する人びとの移動に関する主観的位置づけを重視した用語である。したがって、それは「同じ民族」として受け入れられることを求めてのことであり、そのことによって安らぎをもたらされることを期待する移動である。本論文で指す朝鮮族の人びとが求める「安らぎ」とは、彼らが韓国へ「帰郷」することで、自分たちが中国でこれまで「民族語」としての朝鮮語を維持・継承してきたことや朝鮮族独特な文化を維持してきたことなどが、韓国の人びとに肯定的にとらえられると同時に、彼らに言語文化的に「同じ民族」として受け入れられることを求めるものである。そうした受け入れによって、故国に戻ることに伴う安心感と解放感を得ることを指す。

これまで韓国在住の朝鮮族に関する研究では、出稼ぎ労働者に焦点をあてることが多く、特に彼らの韓国における法的、経済的、社会的地位に関して活発な議論が行われてきた。その中でも、例えばユンファン・キムヘラン(윤황・김해란 2011)の研究では、韓国在住の朝鮮族移住労働者たちの法的地位に関して、「中国朝鮮族は韓国の在外同胞であるが、ほかの国に居住する在外同胞たちと同等な待遇を受けておらず、また国籍が中国である朝鮮族は外国人労働者の待遇を受けている」(윤황・김해란 2011, p. 57)と指摘する。そして、経済的地位に関しては、初期の朝鮮族移住労働者たちの教育レベルが高くないことや従事する業種も限られていたため、彼らの経済的地位が非常に低いと述べる(同上: p. 57)。また、社会的地位が低い仕事に従事していることから、彼らは韓国人に差別されたり蔑視される社会的地位に止まってしまったと分析する(同上: p. 57)。このほかに、韓国在住の朝鮮族の葛藤に関して分析したヨスギョン(여수경 2005)の研究がある。ヨスギョンは、朝鮮族の人びとにとって韓国は「外国」ではなく、憧れの対象であり、帰るべき場所として認識された「母国」であると指摘する(여수경 2005, pp. 243-277)。けれども、彼らは帰った韓国において社会的に受け入れられることがなく、むしろ差別されることで、アイデンティティの葛藤を経験することを提示している。

このように、先行研究では韓国在住の朝鮮族は法的および社会的に受容されないことに焦点が当てられてきたが、本章の結論を先取りすれば、韓国において高学歴朝鮮族は法的および社会的に受容されている。一方、高学歴朝鮮族が社会的に受容されているからとして、彼らのアイデンティティが確立されているとは必ずしも言えない。そこで、高学歴者と「帰郷」先の社会の関係から、「帰郷」によるアイデンティティの積極的な構築/再構築がなされていることを検討したい。

本章では、上記の問題関心に基づいて、朝鮮族の韓国への「帰郷」において、学歴の有無がどのような影響をもつのか、韓国では朝鮮族の人びとをどのように受け入れているのか、「帰郷」によって高学歴朝鮮族の「中国人」と「韓国人」との間のアイデンティティがどのように揺らいでいるのか、彼らのアイデンティティの構築/再構築は子どもの教育にどのような影響を及ぼすのかを、高学歴朝鮮族の事例を中心に考察する。

2. 中国朝鮮族について

中国朝鮮族とは、19世紀以降朝鮮半島から数次にわたり中国へ移住した朝鮮人および彼

らの子孫であり、中国の国民として中国国籍を有し、戸籍上「朝鮮族」に登録されている人びとを指す。これまで朝鮮族は、主に中国の東北三省（吉林省、遼寧省、黒竜江省）に集住していた。中国における 2000 年の人口統計によれば、朝鮮族の人口は 192 万 3,842 人とされている⁽⁹⁾。

朝鮮族は中国の地にあっても朝鮮半島の出自を忘れず、エスニック・アイデンティティを強固に保ってきた。その背景には子どもたちに中国の国家言語である中国語に加えて、朝鮮族のエスニックな言語である朝鮮語を教えるという二言語教育が重要な役割を果たしてきた。中国政府による公教育機関での二言語教育によって、朝鮮族の人びとは中国人としての国民的帰属意識と朝鮮族としてのエスニック・アイデンティティの両方を相互にバランスをとりながら維持してきたと考えられる（趙貴花 2008, pp. 177-181）。本稿で用いる「朝鮮語」は主に、中国において少数民族としての朝鮮族が使用してきた「民族語」を指し、「韓国語」は、韓国の国家言語であり、ソウル語を中心とする標準韓国語を指す。

これまで中国に住んでいた朝鮮族の人びとは、自分たちの言語だけでなく、朝鮮族の独特なライフスタイルも維持・継承してきた。金旭賢（1999）によれば、朝鮮族は 19 世紀半ばごろから 100 年余もの間、中国で漢族・満族など他の東北諸民族とともに土地を開拓しながら、始終自民族の言語・文字・風俗習慣など伝承してきた（金旭賢 1999, p. 119）。1949 年以降、中国政府は少数民族政策として少数民族の集住地区に自治機関を設置し、少数民族の人びとに運営させることによって彼らに自治権を与えていた。朝鮮族の自治機関である延辺朝鮮族自治区（1955 年に延辺朝鮮族自治州と改称された）も、1952 年に設立された。中国東北部には朝鮮族の自治県や自治郷、自治村も多数存在するが、そこでは朝鮮族の人びとの集住によるエスニック・コミュニティが形成された。そうした朝鮮族のコミュニティの中で、彼らは日常において朝鮮語を共通言語として使用し、飲食、服装、冠婚葬祭などにおいても朝鮮半島の人びとに似ているライフスタイルを維持してきた。

また、朝鮮族の人びとは配偶者選択においても朝鮮族の血統の維持への努力を行ってきた。植野（1999）は、「朝鮮族は他民族との通婚を望まず、かなり遠距離であっても、同民族との結婚を維持しようとしている」（植野 1999, p. 85）と述べる。実証的なデータは管見の限りでは見当たらないものの、朝鮮族の中には 1 世だけでなく、2 世や 3 世の人びとの中にも、漢族やほかの民族との結婚が少なく、朝鮮族同士の結婚が多い、と朝鮮族の人びとは思っている。こうした朝鮮族の血統の維持への努力は、韓国においても広く知られている。

このように、朝鮮族は自分たちの言語とライフスタイルを維持・継承することにより、国境の向こう側の韓国と北朝鮮においては、自分たちと言語的および文化的に共通性を持つ兄弟や親戚が暮らしていることを想像してきた。しかし、第二次世界大戦後から中韓建交として中国と韓国の国交が結ばれた 1992 年までの 40 余年の間に、彼らの多くは韓国へ行くことも、韓国に対する情報を得ることもできなかった。中国と韓国の国交が結ばれることで、朝鮮族は正式に韓国へ「帰郷」し、自分の兄弟や親族の人びとに会うことができた。

3. 「帰郷」先における社会的排除と包摂

(1) 朝鮮族の韓国への「帰郷」

2012 年 7 月 31 日の韓国法務部の統計によれば、韓国に居住している韓国系中国人（筆者注：中国朝鮮族を指す）は約 46 万 7,981 人とされている⁴⁾。朝鮮族の韓国への移動は、1988 年のソウルオリンピック以降から公式に始まったと見られる。韓国では 1986 年から KBS ラジオ社会教育放送（2007 年に「韓民族放送」に改名）で、朝鮮族を対象とした離散家族探しプログラムを作成し、放送した。中国における朝鮮族の多くは、その放送を視聴することで、韓国にいる親戚を確認することができた。彼らは、韓国政府により旅行証明書を発行してもらうことで、簡素な手続きを経て韓国を訪問することができた。グオンテファン・バクグァンソン（권태환・박광성 2005）によると、この時期に韓国の親戚の招へいで香港を経由して韓国を訪問した人たちが、始めて韓国の地を踏んだ朝鮮族たちである（권태환・박광성 2005, pp. 151-152）。このように、中国朝鮮族の韓国への移動は、親戚訪問という「帰郷」の形で始まった。その「帰郷」する人たちの中には、韓国が生まれ故郷である朝鮮族 1 世やその子女の朝鮮族 2 世の人たちがほとんどであった。

しかし、1992 年に韓国政府は朝鮮族の入国を厳しくし、親戚訪問者の年齢を 55 歳以上に限定し、滞在期間も最大 90 日に制限した。この時期から、朝鮮族の韓国への「帰郷」も容易に行われなくなった。同時期から、韓国への入国の制限にもかかわらず、中国の漢薬材を韓国で販売することや就労を通じて稼ぐことを目的にさまざまな方法で韓国に入国する者も現れ始めた。ここで、少し中国の当時の社会的背景をみると、1990 年代以降の中国では、市場化が急速に進み、農村と都市の人びとの収入の格差も広がっていった。したがっ

て、より良い仕事を求めて農村から都市へ、小都市から大都市への人の移動が急速に進行した。また、1990年代後半から中国の大学の授業料も大幅に上昇する⁽⁵⁾ことで、家計の教育負担も増大した。こうした社会変動の中で、子どもの教育を重視する朝鮮族の人びと、その中でも特に農業で生計を立てる人びとにとって、子女の教育費用は大きいものであった。したがって、彼らの中には就職の機会を求めて、中国の東北部を離れ、比較的経済が発展している中国の大都市や沿海都市へ移動する人もいれば、韓国へ移動する人もいた。韓国は朝鮮族の人びとにとって、自分たちのルーツと親戚を確認する故国であるだけでなく、言語や文化において共通するところが多いことから、ほかの国に比べて仕事を見つけやすいことと比較的に暮らしやすい国として認識されていた。就労を主な目的として韓国に入国した朝鮮族の中には、日常生活において朝鮮語を主要言語として用いてきた朝鮮族 2 世の人びとが多数を占めるが、仕事の環境やライフスタイルにおいて中国より韓国に憧れることから韓国への入国を希望する朝鮮族 3 世の人びともいる。

しかし、韓国で働く朝鮮族の人びとには韓国で通用する技術や資格がほとんどないため、彼らの中には単純肉体労働に従事する者が多かった。そして、彼らは韓国への入国のために多額の資金を費やしたことから、現地での合法滞在期間が過ぎても中国に戻ることができず、非合法的な身分で引き続き現地に滞在することが多かった。同時に、韓国政府は朝鮮族に対して入国審査を厳しくし、彼らの韓国での滞在期間もさらに制限することで非合法滞在者を減らそうとしていた。在留資格違反として取り締まりの対象となった朝鮮族に関する報道が韓国メディアで続出する中、朝鮮族は韓国社会で徐々に「不法滞在者」や「出稼ぎ外国人労働者」としてのイメージが強まっていった。

1999 年の在外同胞法の設立とともに、朝鮮族の法的な「在外同胞」身分の確保と彼らの韓国での合法的な長期滞在をめぐる、朝鮮族の人びとと韓国の市民団体は韓国政府に対して数次にわたる抗議を行った。その結果、2003 年 11 月 29 日に盧武鉉（ノムヒョン）前大統領がキリスト教の教会であるソウル朝鮮族教会へ訪問したのをきっかけに、2007 年 3 月 4 日から就業訪問制度が正式に実施された。就業訪問制度により、朝鮮族の韓国への入国制限は大きく緩和され、彼らの韓国での滞在期間が最大 5 年に拡大された。韓国に親戚をもたない無縁故朝鮮族の韓国への入国もより容易になり、非合法滞在者も一定の条件が揃えば、合法滞在者への身分転換が可能になった。この時期以降、韓国メディアでは「朝鮮族不法滞在者」や「朝鮮族」という用語の使用が減り、朝鮮族を指す言葉として「中国同胞」あるいは「韓国系中国人」という用語の使用が増えるようになった。

2000年以降、中国の改革開放の進展とともに、朝鮮族の中には外国へ留学する人びとが急増している。そうした留学する人びとの中には朝鮮族3世の若い人たちが主流を占めている。彼らの中には、日本やアメリカなどの国に留学する者もいれば、韓国に留学する者もいる。韓国に留学する朝鮮族の場合には、より良い教育を受けることだけが彼らの移動の目的であるだけでなく、「祖父母の故郷に一度住んでみたい」や「韓国の人びとや韓国の文化をもっと知りたい」という自分のルーツを探ろうとする文化的な理由も彼らが韓国へ「帰郷」する一つの要因になっている。

(2) 「朝鮮族」と「中国同胞」というカテゴリー

韓国で朝鮮族を指す言葉は多様である。例えば、「조선족(朝鮮族)」、「중국사람(中国人)」、「교포(僑胞)」、「중국동포(中国同胞)」、「한국계중국인(韓国系中国人)」などが挙げられる。韓国人は、一般的に朝鮮族を「조선족(朝鮮族)」、「교포(僑胞)」と呼ぶ場合が多い。「중국동포(中国同胞)」という言葉は、在外同胞との繋がりを強調する市民団体や一部の学者、そしてメディアで主に使われている(박광성 2006, pp. 171-172)。「한국계중국인(韓国系中国人)」という言葉は、出入国管理局の統計データで朝鮮族を指す言葉として使われ始め、最近メディアの報道記事にもよく見られる。韓国在住の朝鮮族の人びとは、自分たちのことを「조선족(朝鮮族)」あるいは「교포(僑胞)」や「동포(同胞)」と自称することが多い。

以下では、二つの側面から韓国で使われている「中国同胞」と「朝鮮族」という言葉について検討する。第一に、韓国の在外同胞法に注目して、同法において「在外同胞」とは何を指すのか、同法における朝鮮族の法的地位はどのようなものであるかを分析し、第二に、韓国社会において「朝鮮族」と「中国同胞」という言葉をどのように使い分けているのかを分析することで、朝鮮族への社会的まなざしについて考えていきたい。

まず、第一の課題について検討する。韓国では1999年9月に「在外同胞の出入国および法的地位に関する法律」(以下は「在外同胞法」と略)が制定された。この法律では、「在外同胞の大韓民国への出入国および大韓国内における法的地位を保障する」ことを目的とし、「在外同胞」の定義を「在外国民」と「外国国籍同胞」の二種類に分けている。同法における「在外国民」とは、「大韓民国の国民として外国の永住権を取得した者、あるいは永住の目的で外国に居住している者」であり、「外国国籍同胞」とは「大韓民国の国籍を保

有したことがある者、あるいはその直系卑属として、外国国籍を取得した者の中で大統領令が定めた者」を指す⁽⁶⁾。

この1999年の在外同胞法の「在外同胞」定義によって、大韓民国政府の成立（1948年8月15日）前に国外に移住することで、大韓民国の国籍は取得できず、移住国の国籍を取得した約300万人におよぶ中国およびCIS⁽⁷⁾地域などの朝鮮半島出身の人びとは、法的に「在外同胞」の範囲から排除された。

したがって、同法は韓国の市民団体および人権団体に「在外同胞差別法」として批判され、彼らによって憲法訴願が提出された。その憲法訴願を受け付けた韓国の憲法裁判所は、2001年に上記の条項に対する憲法不合致判定を下し⁽⁸⁾、韓国国会では2004年2月9日に「1948年以前に出国した者も在外同胞である」との在外同胞法の改定案を通過させた⁽⁹⁾。しかし、この改定案に対する韓国法務部の施行は依然として保留姿勢を取っている。

韓国における在外同胞法は、1999年以降に数回の改定が行われてきたが、中国およびCISなどの国における朝鮮半島出身の人びとに対して大きく門戸を開いたのは2009年12月1日以降のことである。韓国政府はその目的に関して「中国、CIS（独立国家連盟）などの地域の同胞たちが国内への出入国・滞在および事業活動をするにおいて不便がないようにし、韓民族という誇りを持って、母国との交流などを拡大できるようにするためである」⁽¹⁰⁾と発言する。この時期に実施された「在外同胞」（F-4）資格の付与対象者は、主に4年制大学を卒業した者、公務員や大学教員、法人企業の代表および職員、農業や船舶などの分野における高級技術者、居住国で公認された同胞団体や芸術団体の代表などの人びとに限られていた。すなわち、高学歴者や社会的に認められている資格を持つ者および比較的に安定的な仕事に従事している者に対して、法的な「在外同胞」地位を与えることである。これに加えて、改定内容には「訪問就業（H-2）資格を持っている者であっても、韓国内外で4年生大学以上の学歴を有する者で、国内単純労働業種に就業しないという誓約書を提出する者であれば、在外同胞（F-4）資格変更の申請を行うことができる」という項目も加えられた。この段階で、高等教育を受けた朝鮮族は明確に「在外同胞」としての法的地位が与えられた。けれども、高等教育を受けていないと同時に単純肉体労働に従事する朝鮮族に対しては、依然として在外同胞法の法的保護対象から外していた。

韓国の在外同胞法がさらに改定され、施行されたのは2010年4月26日以降である。韓国政府は2012年4月12日に「国内の人力不足が深刻な特定業種で長期に勤めている訪問就業（H-2）同胞に対して、本人が希望する期間内に長期就業が可能な在外同胞（F-4）資

格に変更する」ことを発表した⁽¹¹⁾。特に、製造業、農畜産業、漁業などの職種や看病人、家事ヘルパーなどの仕事で、一年以上同一職場で勤務する者は「在外同胞 (F-4)」ビザが許可された。したがって、上記の職種に従事している一部の朝鮮族も、学歴にかかわらず法的に「在外同胞」としての地位が与えられた。

韓国法務部の2012年7月31日の統計によると、中国国籍で「在外同胞」(F-4)資格(ビザ)を有している者は約10万1,422人(その中で韓国国内での居住先を申告した者は約9万9,210人)とされる⁽¹²⁾。この人数は、韓国在住の約46万7,981人とされる朝鮮族の総数に比べればまだ少数にすぎない。2011年8月23日にソウルの中国同胞教会で、在外同胞法の適用を求めるための記者会見を開き、出席した400人の朝鮮族が、約1万1,393人の署名をもらった憲法訴願審判請求書を憲法裁判所に提出する⁽¹³⁾ことで、自分たちの「同胞」としての法的権利を求めている。彼らは、韓国において法的に「同胞」として認められることを希望すると同時に、それによる韓国での滞在も比較的制限が少なくなることで安心して暮らせる生活の自由を求めている。

韓国政府の朝鮮族に対する「在外同胞」の定義と受け入れ姿勢の揺らぎは、韓国社会における人びとの朝鮮族へのまなざしにも影響を与えている。以下では、本節の二番目の課題である韓国社会では「朝鮮族」と「中国同胞」という言葉がどのように捉えているのか見てみよう。まず、ソウルのあるNGO団体の代表であるYさんの「同胞」という言葉についての話から聞いてみよう。

中国から朝鮮族同胞たちがたくさん来ることで、韓国社会では在外同胞に対する関心が高まりました。最初は「교포 (僑胞)」という言葉が多く使われていましたが、在外同胞法が制定されてから、概念上で「교포 (僑胞)」から「동포 (同胞)」のほうに移ってきました。現在は「동포 (同胞)」という言葉がもっと使われています。(中略)韓国社会で「중국동포 (中国同胞)」と呼んだときのまなざしと「조선족 (朝鮮族)」と呼んだときのまなざしは異なります。「중국동포 (中国同胞)」は「우리와함께 (私たちと一緒に)」を意味しますが、「조선족 (朝鮮族)」という言葉には、見下したり、違質感を持っていたりするという意識が表れています。(2009年8月6日、ソウルにてインタビュー)

すなわち、「同胞」という言葉は、韓国人の人びとにとって相手を「われわれ」の一員として受け入れることを意味する。けれども、「朝鮮族」という言葉には「他者」として排除

する意味が含まれると言えよう。こうした朝鮮族の呼び名をめぐる摩擦は、韓国内だけでなく、韓国以外の国においても、彼らが接し合う場では生じる。

2010年1月21日の韓国の聯合ニュースでは『『朝鮮族』の代わりに『中国同胞』と言いましょう』⁽⁴⁾という題目の記事が載せられた。内容としては韓国の国立国語院により日常に使用する言語表現の中で人を差別する言葉に対し、その代案を示したものである。その記事では、「朝鮮族」と「中国同胞」という言葉の使用に関して、以下のように指摘している。

(国立国語院は)「朝鮮族」,「未亡人」など何気なく使用する言葉が場合によって相手を差別する意味で通用されることもある点を指摘し、ほかの言葉を使用することを提案した。特に、「朝鮮族」という言葉は中国にあるいくつかの少数民族の中でわが民族(筆者注:朝鮮族を指す)とほかの民族を区分する際に使う言葉で、「中国同胞」や「在中间同胞」がもっと望ましい表現であると説明した。(聯合ニュース 2010年1月21日の記事)

朝鮮族の人びとは、中国において自分たちを指す「朝鮮族」という名称を、自分たちが中国政府に中国国民として認められると同時に朝鮮半島の民族的な出自を表すという両方の意味が含まれる言葉として認識しているため、ほとんど抵抗なく使用してきた。しかし、同様な言葉が韓国においては肯定的な意味でとらえられているのではなく、排他的な意味が含まれていることに気づき、朝鮮族の人びとにとっては受け入れがたいものになっている。

したがって、朝鮮族の中にはアイデンティティの葛藤と抵抗を覚える人びとが増えてきた。韓国人に対して「われわれを『교포(僑胞)』あるいは『동포(同胞)』として呼んでほしい」と希望する朝鮮族が増加すると同時に、「中国同胞」と自称する朝鮮族も現れた。一方で、「韓国人が私たちを『교포(僑胞)』や『동포(同胞)』と呼ぶよりは、『조선족(朝鮮族)』と呼んでほしい」と差別用語を積極的に用いることで、韓国人との境界を顕在化させることもある。

(3) 言語の「違い」による摩擦

韓国に「帰郷」した朝鮮族の中には、中国において中国語と朝鮮語の二言語教育を受け、日常生活においてほとんど朝鮮語のみ使用していた人たちが多く、特に、朝鮮語を第一言

語とする多くの中高年の朝鮮族の人びとの韓国への移動は、言語が通じるということが重要な原因に挙げられる。しかし、彼らが維持してきた「民族語」は必ずしも「帰郷」先の韓国において同じ言葉として受け入れられるわけではなかった。むしろ彼らが「韓国人と異なる」と判断される一つの指標にもなっている。

福岡(1993)によれば、日本で生まれ育った「在日」の場合には、朝鮮語・韓国語ができない若者のほうが多数派であるが、彼らは日本社会で日本人たちから「日本人ではない」とみなされ、韓国へ移動した時にも、韓国の人びとから「韓国人ではない」と見られることもある(福岡 1993, pp. 52-55)。それは、「在日」の若者たちが韓国語を話せないこともあるが、彼らの髪型や服装、表情といった雰囲気から韓国の人びとに「韓国人ではない」、「日本人である」と判断されるからであるとのことである(同上: p. 52)。彼らと比べて、外見上韓国人と区別しにくい朝鮮族の場合には、彼らを韓国人と区別する重要な基準になるのが、朝鮮族独特なイントネーションを有する朝鮮語である(여수경 2005, p. 267)と여수경は指摘する。

それでは、まず中国の東北三省に定着している朝鮮族の出自をみると、彼らは主として今日韓国の江原・京畿・忠清・慶尚・全羅の各道から集団的に移住した人々の2~3代目が大部分を占めている(池春相 1999, pp. 173-174)。したがって、朝鮮族の朝鮮語は移住初期から地方語という特徴を有し、さらにその言語が主に中国の中国語の語彙やその言語表現などの影響を受け、現在の朝鮮語を形成していると見られる。

中国と韓国の国交が断絶された40余年の間(第二次世界大戦後~1992年)に、韓国内では国家言語としての韓国語の統一(多くの地方語の統一)が進行した。さらに、英語や日本語などの外国語の影響を受け、語彙だけでなく、文字の表記やアクセントにおいて、さらにファッションブルな言語として変容した。そして、韓国語は社会的な上下関係を明確に区分するための言語表現が発達している。この点では朝鮮族の使用する朝鮮語と少し異なる。しかし、韓国語と中国の朝鮮語には規範文法の用語と規範文法の内容において、相違点より共通点が多い(이주형 2008, p. 65)との指摘もある。

宮岡(1996)は、「同一民族内でも、社会的変種や地域的変種(方言)、限られた集団でのみ使用される特定の語彙やことば遣いなどは、ときに隠語的あるいは秘教的な魅力をそなえて連帯感と帰属意識をたかめ、それぞれの集団をまとめあげるはたらきをする。(中略)その一方で、このような社会化の大きな力である言語や方言は、社会的差別や心理的コンプレックスを生むという直接的な機能をもつ」(宮岡 1996, pp. 36-37)と指摘する。韓国

語と朝鮮語との間の「差異」は、言語的な「差異」だけでなく、韓国社会における朝鮮語への「差別」という社会的文化的な構造を生み出した。

朝鮮族の中には、朝鮮語の「なまり」を克服する努力と「朝鮮族」であることを隠す者が増えはじめた。「完璧な韓国語を学びたい。でも、よくできない。昔の朝鮮語のなまりはずっと残っている」⁽¹⁵⁾とし、朝鮮族同士のプライベートな場においては、自分の「なまり」のある朝鮮語を用いることを好むが、公の場においては朝鮮語の「なまり」を隠して韓国語の使用に努力を惜しまない人たちが年齢にかかわらず多く見られた。特に、若い子どもがいる若い朝鮮族の人びとからは、「子どものために朝鮮語のなまりを直したい」⁽¹⁶⁾という話も聞かれた。

朝鮮族の使用する朝鮮語に対して、必ずしも肯定的でない韓国社会のまなざしは、朝鮮族の人びとに自分たちが長年維持・継承した「民族語」としての朝鮮語に対して疑問を持たせた。朝鮮族の人びとは自分が何者かというアイデンティティの葛藤を抱くと同時に、次世代にはどんな教育を受けさせるのかを悩むことになった。

4. 高学歴朝鮮族のアイデンティティの揺らぎ

韓国に「帰郷」した朝鮮族の中には、単純肉体労働に従事している者が多数を占めるが、2000年以降は留学や就職などを目的とする朝鮮族の若い人たちの韓国への移動が増え、注目を集めている。韓国法務部の統計によれば、2012年7月31日現在、韓国における韓国系中国人(筆者注:朝鮮族を指す)の留学生数は約1,742人とされている⁽¹⁷⁾。朝鮮族の中には、すでに韓国の大学院を修了後、現地の企業や高等教育機関に勤めている者も少なくない。さらに、新しい現象としては、日本など韓国以外の国に留学した朝鮮族が学業を終えた後、韓国で就職する者がいる。その中には、朝鮮族の個々人の希望によって韓国の就職先を見つける場合もあれば、韓国の高等教育機関や企業が積極的に海外の朝鮮族人材を獲得する場合もある。

こうした比較的容易な留学や難度の高い就職によって韓国へ移動した若い朝鮮族の移動には、より良い教育やより良い仕事の環境、そして先祖の故郷に対する理解を深めたいという文化的な要因が含まれている。日本在住の高学歴朝鮮族の中には、毎年韓国に渡って祖父母の戸籍を確認し、祖父母の生まれた故郷で生活体験をすることで、自分のルーツを探ろうとする者もいる。

以下においては、高学歴朝鮮族が韓国に「帰郷」した時、彼らのアイデンティティがどのように変化しているのかを見てみよう。

韓国社会では、3K 業種を主とする単純肉体労働に従事する朝鮮族を「外国人出稼ぎ労働者」や「外国人」として扱い、「他者」として排除する傾向がある。しかし、高学歴朝鮮族の中でも専門職に従事する者に対しては、「韓国人」や「同胞」として受け入れることが見られる。この場合の「韓国人」という用語は、国民的帰属意識を意味するより、「韓民族」という「民族」的な帰属意識を強調するものであり、仲間意識を指すものである。

中国において、朝鮮語と朝鮮族の伝統文化を維持・継承してきた朝鮮族、その中でも日常生活においてほとんど朝鮮語のみ使用してきた朝鮮族の人びとにとって、「帰郷」として移動した韓国で「外国人」として排除される経験は、これまで思い描いてきた「故郷」のイメージの崩壊につながる。したがって、彼らは韓国の人びとに「同じ民族」として受け入れられないことから、自分たちは「韓国人」ではなく、「中国人」であることを確認させられる。こうしたアイデンティティの変化は、高学歴者の朝鮮族の中でも見られる。

韓国では人びとの所得が学歴に左右される傾向が強く（尹敬勲 2010, p. 6）、韓国社会で高学歴者は高所得者になるという意識が一般的である。朝鮮族の中でも高学歴者は韓国での社会的地位の上昇が比較的容易であり、大手企業や大学への就職の道が開かれている。彼らには、朝鮮族の単純肉体労働者への社会的な排除のまなざしはあまり見られず、積極的な受け入れが見られた。このような韓国社会の受け入れ方に対して、朝鮮族の人びとは自分をどのように規定しているのだろうか。下記の事例を通じて検討したい。

<事例1>張華淑（仮名）、女性、30代、朝鮮族、2000年に韓国に留学。韓国で修士号と博士号を取得。専門職。

私は自分が韓国人で、在外同胞だと思います。娘にも「私たちはただ中国で生まれ、そこで暮らしていただけだ」と言っています。私は中国にいた時も自分が完全に中国人だとは思いませんでした。朝鮮族と韓国人は同じ民族だと思います。しかし、ここ（韓国）で生活してみたら、韓国人たちとは暮らしてきた環境が違うから、お互いの考え方が異なることを感じました。朝鮮族は中国式の考え方と韓国式の考え方の二つを混合して、朝鮮族なりの文化を形成してきました。そういう違いはありますが、私と夫は韓国で韓国人とずっと仲良く過ごしています。（中略）相手に親切に近づくと、相手も親切に受け入れてくれます。（2007年3月6日、ソウルにてインタビュー）

張さんの事例からは、まず彼女は自分が「韓国人」で「在外同胞」である意識を強く持っていることが見られる。そして、その背後には彼女と彼女の夫が周りの韓国人に対して積極的に接する姿勢を持っているだけでなく、韓国人の人びとからも彼らを積極的に受け入れることが観察できる。張さんは韓国の大学で修士号と博士号を取得した後、現地で専門職に従事している。彼女の夫も朝鮮族で、同じく韓国で修士号と博士号を取得し、現地で大手企業に勤めている。このように、夫とともに高学歴を有し、韓国での社会的上昇や現地の人びととの融合がスムーズに行われている張さんは、「朝鮮族と韓国人は同じ民族だ」という意識を強固に持っている。そして、張さんは自分を「韓国人」や「在外同胞」として規定するだけでなく、自分が「朝鮮族」であることも肯定的に捉えている。

それでは、ほかの高学歴朝鮮族はどのようなアイデンティティを構築／再構築するのだろうか。下記の二つの事例では、上記の張さんとは異なり、「中国人」意識が強くなることが見られる。

<事例2>宋明月（仮名）、女性、30代、朝鮮族。2001年に韓国に留学。韓国で修士号と博士号を取得。専門職。

中国にいた時、私は自分のエスニック・アイデンティティについて悩んだことがなかった。なぜなら、自分が少数民族の中の一つ（朝鮮族）だと思っていたからです。しかし、韓国に留学に来てからアイデンティティの悩みが生じ始めました。韓国にきてから3年目までは自分に「私は中国人だ」と言い続けてきました。ところが、心のどこかで「私は完全な韓国人でもなく、完全な中国人でもないような気がする」と悩んでいました。けれども、韓国での滞在が4～5年目になると、だんだん「私は中国人なのか。韓国人にもっと近いじゃない。私はもう考え方まで韓国人によく似ている」と思い始めました。私はもう考え方とか生活習慣まで全部韓国人のようになっていくような気がします。そして、私が韓国人と結婚することによって、そういう考えがもっと強くなってきたと思います。（2007年3月6日、ソウルにてインタビュー）

宋さんは、中国にいた時は中国国民としての中国人であると同時に少数民族としての朝鮮族である二重のアイデンティティを相互矛盾なく維持してきた。しかし、彼女が韓国に移動した時に、最初は自分を「中国人」と規定することから、徐々に「中国人」なのか「韓国人」なのかの二者択一のアイデンティティの葛藤を覚えることになる。宋さんは、中国

にいた時は朝鮮族の集住する村で生活をし、漢族との接触も少なかった。ライフスタイルも「中国式」とは少し異なる朝鮮族の独特なライフスタイルを維持してきた。さらに、韓国に留学し、現地での長年の生活と韓国人男性との結婚によって、彼女のライフスタイルは「中国式」より「韓国式」になっていく。そうした「韓国式」のライフスタイルは、宋さんの「韓国人」意識を強めている。けれども、彼女のアイデンティティはそこで定まるものではなく、その後も変化を呈している。上記の2007年のインタビューから3年後の2010年に、筆者が再びインタビューを行った時、彼女は次のように語った。

周りの韓国人たちは私を「韓国人」として見ているようですが、私は自分がやはり「外国人」だと思います。つまり、「朝鮮族」で「中国人」だということです。子どもを産んで国籍を換えたら変わるかもしれませんが、今は自分が「韓国人」だと思いません。私はただ、韓国人たちと学び合いながら、朝鮮族の中に私のように誠実で最善を尽くす人もいることを見せたいです。(2010年10月22日、ソウルにてインタビュー)

事例2からは、高学歴者の宋さんが韓国に移動した初期の「中国人」意識が、その後「中国人なのか韓国人なのか」の戸惑いへ、さらにその後再び「中国人」意識が強くなることへのアイデンティティの再構築の過程が観察できる。それでは、3年前に自分の考え方や生活習慣が「韓国人のようになっている」と述べた宋さんが、なぜ自分のアイデンティティを「外国人」で「朝鮮族」、そして「中国人」として再構築するようになったのだろうか。そこには、社会的要因が作用していることと考えられる。宋さんの「朝鮮族の中に私のように誠実で最善を尽くす人もいることを見せたい」という発言から、韓国社会で朝鮮族に対する否定的なイメージが一般的であると言えよう。宋さんの「中国人」そして「朝鮮族」としての帰属意識が再び強くなっているのは、韓国社会における朝鮮族への排除のまなざしに対する一種の抵抗意識の現れであるだろう。そして、宋さんから見られるのは韓国社会における朝鮮族のイメージを変えたい意識と、そのために自分を肯定的にとらえると同時に自らの努力によって韓国の人びとに認めてもらうことであった。

<事例3> 金泰原(仮名)、男性、30代、大手企業の社員、韓国で修士号を取得。

金さんは中国の黒竜江省のある朝鮮族の集住する町で生まれ育った。朝鮮族学校に通い、所属の高校の推薦で黒竜江省のある大学に進学し、日本語を専攻した。大学卒業後、金さ

んは日本語を専攻したこともあり、日本へ留学したい気持ちがあった。けれども、父親の「韓国は祖父母の故郷だから、行ってみないか」という一言で、金さんは2003年に韓国へ留学した。金さんは韓国で修士課程を終えてから、韓国の大手企業に就職した。韓国で数年生活してきた彼は、自分の帰属意識と今後の移動について次のように語る。

私は今の会社で、ほかの部署の同僚から、「なぜ中国語がそんなに上手なの？」と聞かれたことがあります。私が「中国人」であることを相手が知った後は、また「なぜ韓国語がそんなに上手なの？」と聞かれました。周りの韓国人は私のことを「朝鮮族」ではなく、「韓国人」として見ているようです。韓国人の知人の中には「あなたは中国人じゃなくて、韓国人だよ」と言う人が多いです。たぶん私が仕事においても韓国人に負けないうくらい頑張っているからかもしれませんが、私はやはり自分が「朝鮮族」で「中国人」だと思います。国籍を変えらるとして、それが変わらと思わないうし、いつかは中国に帰らつもりなので、北京に家も購入してあります。(2010年1月20日、ソウルにてインタビュー)

上記の事例2と事例3から、韓国における「在外同胞」に対する社会的包摂には限界があることが言えよう。「韓国人」というカテゴリーが国籍によって国民を規定するものではなく、「民族」的な同一性を指す言葉であるならば、「中国朝鮮族」という名称のように、中国国民としての朝鮮族を「中国人」として受け入れると同時に、韓民族を指す「韓国人」として認めることも不可能ではないだろう。しかし、韓国在住の高学歴朝鮮族の人びとは、社会的文化的に「中国人」なのか「韓国人」なのかという選択に迫られるため、アイデンティティの葛藤と揺らぎを経験するようになる。

朝鮮族の人びとはこうした社会的環境の中で、上記の事例に見られるように、協調と抵抗を行いなうながらアイデンティティを再構築していく。非高学歴朝鮮族の中でもアイデンティティの抵抗が見られるが、彼らに見られる高学歴者との違いは次のようである。彼らは、まず「韓国人になる」努力を行なう、その目標が達成できなうかった段階で、自ら「中国人」あるいは「朝鮮族」としてのアイデンティティを構築し、それを肯定的に捉えようとする傾向が見られる。けれども、非高学歴朝鮮族の中にも自らの努力で朝鮮族のイメージを変えようとする現象が現れている。

このような朝鮮族の韓国社会に対する抵抗や妥協の行為に関して、例えば田辺(2003)

は「アイデンティティとはコミュニティの理念や規則、あるいはその中心となるモデルへの一方的な同一化あるいは協調によって形成されるのではない。むしろ、その中心性に対する抵抗や妥協、あるいは交渉という相互作用によって、アイデンティティははじめて具体的な形をとって現れる」(田辺 2003, p.222)と指摘している。その「コミュニティの理念や規則、あるいはその中心となるモデル」は何を指すのかに関する議論が必要であるが、稿を改めて論じたい。

上記の三つの事例とも 30 代の朝鮮族で韓国の大学院で教育を受けた高学歴朝鮮族である。三人とも周りの韓国人の人びとから「韓国人」として「同胞」として受け入れられていることが分かる。そうした社会的なまなざしに対して、事例 1 の張さんは自分が「韓国人」で「在外同胞」であることを主張し、「朝鮮族」と「韓国人」の間の文化的な違いも意識している。しかし、事例 2 の宋さんと事例 3 の金さんの場合には、韓国での滞在が長くなるとともに、「韓国人」と「朝鮮族」の間の境界を意識することになる。特に韓国に滞在する朝鮮族は、単純肉体労働に従事する人が多く、宋さんと金さんの親戚の中にも単純肉体労働に従事する者がいる。したがって、韓国社会の高学歴朝鮮族への受け入れの姿勢は、必ずしも高学歴朝鮮族のそうしたまなざしへの従順な従いをもたらすことではなかった。

高学歴朝鮮族の若い人たちは、韓国への「帰郷」によって、アイデンティティは変わるものであることに気づいた。彼らの中から、「韓国にいる時は、自分の『中国人』意識が強くなるが、中国に帰ると、今度は自分の『朝鮮族』、場合によっては『韓国人』意識が強くなると思う」⁽¹⁸⁾との声も聞かれたが、朝鮮族の人びとはアイデンティティが移動先によって変化することを意識している。複数のアイデンティティを有している朝鮮族にとって、それぞれのアイデンティティが相互交渉によって、どのアイデンティティが強化されるかにより、彼らの「帰郷」先も変わるし、「帰郷」の意味も変わっていくと考えられる。朝鮮族のこのようなアイデンティティの変容は、彼らを取り巻く人びととの相互関係の中で構築され、常に変化するものである。

5. 子どもへの教育戦略

韓国における朝鮮族の若い人たちのアイデンティティの再構築は、彼らの子どもの教育にも影響を及ぼしている。高学歴朝鮮族の若い人たちは、子どもにはどのようなアイデンティティを獲得させるかを考え、そのための教育を行おうとしている。

すでに取り上げた張さん、宋さんと金さんは、それぞれ子どもの教育についてどのように考えているのだろうか。まず、韓国人と結婚し、韓国で定住しようとする宋さんの発言から見てみよう。

私は自分が「中国人なのか、韓国人なのか」のことで悩んできたので、子どもにはそのようなことを経験させたくありません。そういう経験がもたらすいい面もあるけど、「私は一体誰なのか」と悩むことになるので非常に疲れます。(中略) 夫は公教育が始まる時期から子どもに韓国で教育を受けさせたいと言っていますので、私も特にそれに反対していません。(宋さん、2007年3月6日のソウルにてインタビュー)

宋さんは、自分が経験した「韓国人」なのか「中国人」なのかというアイデンティティの葛藤から、自分の子どもにはより単一化したアイデンティティを構築させようとする。すなわち、子どもを韓国政府の学校制度に入れることで、「韓国人」というアイデンティティを獲得させることである。韓国で定住する非高学歴の朝鮮族の場合にも、子どもに「韓国人と同じ教育」を受けさせ、一般の韓国人の子どもたちと「同じ出発点」になることを目指す傾向がある。そうした非高学歴の朝鮮族親の場合には、言葉においては自分の「なまり」のある朝鮮語ではなく、韓国の国家標準語を子どもに学ばせようとするだけでなく、子どもに多様な塾に通わせることで学力においてもほかの韓国の子どもに劣らないように教育戦略を行っている。

次に、将来北京に住む予定であり、子どもは現地の一般の漢族学校に通わせようとする金さんの話である。

今はソウルに住んでいますが、将来は北京に定住するつもりです。子どもが生まれたら北京の漢族学校に通わせたいです。その原因は、中国で暮らすためには中国語が一番重要だからです。韓国語も忘れてはいけないと思いますが、新聞が読めるぐらいでいいと思います。(金さん、2010年1月20日、ソウルにてインタビュー)

韓国の大手企業に勤めている金さんは、会社でも認められ、周りの韓国人たちからも「韓国人」として受け入れられている。けれども、自分はやはり「中国人」で「朝鮮族」だと自己規定する金さんは、将来中国に帰ろうとし、子どもを中国で育てようとする。さらに、

中国で暮らしていた時は朝鮮語を主に使用してきた金さんが、「中国で暮らすためには中国語が一番重要だ」と考えることで、子どもを漢族学校に通わせようとする。けれども、「朝鮮族」としての帰属意識をもっている金さんは、子どもに最低限の韓国語を習得させることでエスニック・アイデンティティを継承させようとする。

最後に、「同胞」そして「韓国人」と自己規定する張さんの子どもの教育についてどのように語るのか見てみよう。

私は漢族学校に通いましたが、娘は朝鮮族学校に通わせたいです。自民族の言語を覚えてほしいです。娘は今（韓国の）「子どもの家」（筆者注：日本の保育園と類似する施設）に通っていますが、韓国のお辞儀の仕方やキムチの作り方を学んだり、韓国の伝統文化の体験もしています。そうした経験は、娘に大きな影響を与えていると思います。娘が中国で漢族学校に通うと、考え方とかアイデンティティなどにおいて、完全に「中国人（筆者注：主に漢族を指す）」になってしまうと思います。けれども、朝鮮族学校に通わせると、娘が「私は韓国人で、今中国に住んでいるだけだ」と思うでしょう。中国で生活するには中国語が一番重要でしょうが、（都市では）朝鮮族学校に通っても中国語は自然に学べると思うので、特に心配していません。娘が将来自分の友達に、自然に、堂々と「私は朝鮮族だ」と話せることを願っています。（張さん、2007年3月6日、ソウルにてインタビュー）

張さん自身は中国で漢族学校に通ったが、子どもは朝鮮族学校に通わせようと考えている。その主な原因は、子どもが朝鮮族学校に通い、朝鮮語を習得することで、「朝鮮族」そして「韓国人」という帰属意識を持つことができるという張さんの考えにある。張さんは自分の経験から、一つの言語を読み書きできるようにするには、家庭環境では不十分であることを意識する。したがって、彼女は朝鮮族学校の教育に期待し、その学校教育によって子どもに朝鮮語能力と「朝鮮族」としてのアイデンティティを獲得させようとする。このように、親自身の「韓国人」、「在外同胞」そして「朝鮮族」としてのアイデンティティの構築が、彼らの子どもの「朝鮮族」意識や「韓国人」意識の獲得に積極的な影響を与えていることが分かる。そして、子どもにそうしたアイデンティティを積極的に獲得させようとする親の考えは、中国の朝鮮族学校の教育の再生産も促進していると言えよう。

6. むすび

本章では、中国朝鮮族の韓国への「帰郷」において、学歴が彼らの韓国での法的社会的地位および現地の人びととの融合過程においてどのような影響を与えているのかを議論してきた。

韓国の在外同胞法をみると、韓国政府は最初に朝鮮族の人びとを「在外同胞」の範囲から排除することから、徐々に彼らを「同胞」として認めつつあることが確認された。けれども、そうした「同胞」としての法的地位はまだ朝鮮族全員に与えるものではなく、高等教育を受けた者や特定の分野で技術資格を有する者など、社会的に寄与できるあるいはその可能性がある一部に朝鮮族に限って与えるものである。

韓国政府の朝鮮族に対する「在外同胞」の定義や彼らに対する受け入れ姿勢の揺らぎは、韓国社会における朝鮮族へのまなざしにも影響を与えている。韓国で単純肉体労働に従事する朝鮮族は、社会的に「外国人出稼ぎ労働者」や「中国人」として排除される一方、高学歴を有する朝鮮族の場合には「同胞」として「韓国人」として受け入れられる傾向が見られる。さらに、高学歴朝鮮族の場合には、韓国での社会的地位の上昇も比較的容易であることが本研究によって明らかになった。

朝鮮族の韓国への移動は、「帰郷」の安らぎを期待していたものであるが、彼らは「帰郷」先において、必ずしも長年の移民生活に対する「帰郷」の安らぎを感じることはなかった。韓国で「韓国人」とは異なる他者としての「中国人」として排除される経験は、朝鮮族のこれまで思い描いてきた「故郷」のイメージの崩壊につながる。したがって、朝鮮族の人びとは自分たちがどこに帰属するのか、「中国人」なのか「韓国人」なのかというアイデンティティの葛藤を抱くようになる。

一方、韓国の在外同胞法と現地社会における高学歴朝鮮族への受け入れ姿勢は、高学歴朝鮮族の「同胞」意識や「韓国人」としての意識を持つことに積極的な役割を果たしている。もう一方、多くの高学歴朝鮮族は必ずしも韓国社会の積極的な受け入れに従順に従うことではなく、自ら「中国人」そして「朝鮮族」としてのアイデンティティの再構築を行い、さらにそれを自ら肯定的にとらえることで、一種のアイデンティティの抵抗を行うことが明らかになった。

高学歴朝鮮族の人びとは、韓国への「帰郷」によって、アイデンティティは常に変化すると同時に、変えることもできることに気づいた。彼らは、教育がアイデンティティ形成

の装置であることを認識し、自分の子どもにはどのようなアイデンティティを獲得させるかを考え、そのアイデンティティの獲得の有効な手段として教育戦略を行っている。

このように、朝鮮族の韓国への「帰郷」において、高学歴は彼らの韓国への移動を比較的容易にさせると同時に、移動先における社会的上昇や現地の人びとと融合する過程において有利な要素として作用している。また、「帰郷」先における高学歴朝鮮族のアイデンティティの構築／再構築は、彼らの次世代の教育のありかたや子どものアイデンティティの獲得にも影響を与えている。

〈注〉

* 本章の内容は、筆者が日本国際文化学会創立 10 周年記念特別シンポジウムで発表した内容をまとめた報告書『「帰郷」とアイデンティティの再構築：韓国における高学歴朝鮮族の事例を中心に』（日本国際文化学会編 2012『インターカルチュラル 10』[特集]『国際文化学 3.11 後の展望』 pp. 104-114）の一部を用いて、再構成したものである。

(1) 中国朝鮮族の北朝鮮への移動に関する統計データが管見の限りではないため、本稿では北朝鮮に関しては扱わない。

(2) 移住の起点となった国、移民を送り出した国を指す。

(3) 中華人民共和国国家統計局第五回人口統計データ

<http://www.stats.gov.cn/tjsj/ndsj/renkoupucha/2000pucha/html/t0201.htm>（アクセス：2011年6月14日）

(5) (韓国) 出入国・外国人政策本部ホームページ

http://www.immigration.go.kr/HP/COM/bbs_003/ListShowData.do?strNbodCd=noti0097&strWrtNo=100&strAnsNo=A&strOrgGbnCd=104000&strRtnURL=IMM_6070&strAllOrgYn=N&strThisPage=1&strFilePath=imm/（アクセス：2011年9月20日）

(5) 中国では、1989年ごろから、経済が高度成長期に入り、全大学生を対象に授業料徴収政策が始まった（徐，2003）。その後、授業料は直線的に上がり、1999年には27倍以上にまで一気に上昇した（徐，2005）。

(6) 在外同胞の出入国と法的地位に関する法律 第 6015 号第 2 條 韓国法務部編 1999 「在外同胞의 出入國과 法的地位에 關한 法令」（在外同胞の出入国と法的地位に関する法令）

p. 1

- (7) 独立国家共同体, 英語: Commonwealth of Independent States, 略称: CIS,
ロシア語: Содружество Независимых Государств, СНГ) は, 旧ソビエト連邦の 12 カ国で形成された国家連合体 (コモンウェルス) である。
- (8) ハンギョレ新聞 2003 年 11 月 18 日記事「재외동포법 개정안 ‘차별’ 해소나 정당화냐 (在外同胞法改定案「差別」解消なのか正当化なのか)」
<http://legacy.www.hani.co.kr/section-001065000/2003/11/001065000200311180039127.html> (アクセス: 2012 年 9 月 27 日)
- (9) 在外同胞新聞 2011 年 8 月 24 日記事「중국동포들 ‘55 세 미만만 취업 말도 안돼’ (中国同胞たち「55 歳未満のみ就業, 話にならない)」
<http://www.dongponews.net/news/articleView.html?idxno=19543> (アクセス: 2012 年 9 月 27 日)
- (10) HiKorea (韓国法務部, 知識經濟部, 労働部が共同で開設した外国人のための電子政府の代表的なホームページ) 2009 年 11 月 27 日の公知事項「중국, CIS 동포, 재외동포 (F-4) 자격부여 대상 확대안내 (中国, CIS 同胞, 在外同胞 (F-4) 資格付与対象拡大案内)」
<http://www.hikorea.go.kr/pt/index.html> (アクセス: 2012 年 9 月 5 日)
- (11) 同上, 2010 年 4 月 12 日の公知事項「방문취업 (H2) 동포의 재외동포 (F-4) 자격변경 안내 (訪問就業 (H2) 同胞の在外同胞 (F-4) 資格変更案内)」
<http://www.hikorea.go.kr/pt/index.html> (アクセス: 2012 年 9 月 5 日)
- (12) 上掲 (韓国) 出入国・外国人政策本部ホームページ (アクセス: 2012 年 9 月 5 日)
- (13) 聯合ニュース 2011 年 8 月 23 日記事「중동포 “개정 재외동포법 전면 시행” (中国同胞「改訂在外同胞法 全面実行」)」
<http://www.yonhapnews.co.kr/bulletin/2011/08/23/0200000000AKR20110823108400004.HTML?did=1179m> (アクセス: 2012 年 9 月 20 日)
- (14) 東亜ニュース 2010 年 1 月 21 日記事「'조선족' 대신 '중국동포' 로 말하세요 (「朝鮮族の代わりに「中国同胞」と言いましょう)」
<http://news.donga.com/Culture/3/07/20100121/25568171/1> (アクセス: 2011 年 6 月 20 日)
- (15) 筆者のインタビューによる (2008 年 9 月 17 日, ソウル)。
- (16) 筆者のインタビューによる (2007 年 3 月 6 日, ソウル)。

- (17) 上掲（韓国）出入国・外国人政策本部ホームページ（アクセス：2011年6月10日）
- (18) 筆者のインタビューによる（2010年11月5日，ソウル）。

第五章 ソウルのガリボン「同胞タウン」

—朝鮮族労働者と韓国人市民団体が共同に創りあげた街—

1. はじめに

本章ではソウルにおける朝鮮族の典型的な集住地域である九老（グロ）区のガリボンドンという街に焦点をあてて、朝鮮族の生活について考察する。ガリボンドンは男性を主とする朝鮮族の単純肉体労働者たちが多く居住する場所である。朝鮮族が多いため、この街では朝鮮族を対象とする商業も盛んに行われている。朝鮮族の人びとのなまりのある言語や彼ら特有の文化もこの街において維持され、さらに表面化していることが観察された。この街で朝鮮族の人びとはいくつかの韓国人市民団体とも緊密な関係を有していることも見られた。以下では、これらの点を具体的に描写する。

ソウル特別市は世界都市の建設を目指して、2007年7月にソウル市内の「Global Zone」⁴⁾の構成事業を発表した。しかし、この「Global Zone」という外国人集住地域は主に経済的に豊かなバンポドンのソレ村（フランス人が集住する街）やイチョンドンの「little Tokyo」（日本人が集住する街）などが含まれている。外国人労働者の集住地域としてのガリボンドンやロシアーモンゴル街、ネパール街などは上記の「Global Zone」の対象にならない。その中でも、ソウルで一番規模が大きい外国人居住地域として中国朝鮮族が集住しているガリボンドンは、「古くて、貧しく、治安が悪い」というイメージが強いことから、ガリボンドンの均衡開発促進委員会により再開発に対象と定められ、その姿を消そうとしている。

ソウル市の九老区役所の統計によれば、2008年11月現在ガリボンドンの朝鮮族人口は約7,175人とされている。ソウルの地下鉄7号線の南九老（ナムグロ）駅に降りて改札口に向かって歩いていくと、周りから中国の延辺地域のなまりのある朝鮮語が耳に入る。この駅周辺を韓国人の人びとは一般的に「꼭방촌（くぐり部屋村）」、「벌집촌（蜂の巣村）」、「차이나타운（チャイナタウン）」、「조선족타운（朝鮮族タウン）」、「연변촌（延辺村）」、「연변거리（延辺街）」、「조선족거리（朝鮮族街）」と呼んでいる。「동포타운（同胞タウン）」という名称は、この街における韓国人市民団体によって付けられた。地域的には、主に朝鮮族の集住するガリボン総合市場一帯を指す。朝鮮族の人びともこの街を「동포타운（同胞タウン）」と呼び、「가리봉（ガリボン）」と親しく呼ぶこともある。この街には朝鮮族だけでなく、中国の漢族の人びとも居住しており、彼らがここで店舗を開設することも多い。

したがって、朝鮮族の若い人たちの中にはこの街を「차이나타운 (チャイナタウン)」と呼ぶ者もいる。

本章では、ガリボンドンにおける朝鮮族と韓国人市民団体の人びとの両方が好んで使う「동포타운 (同胞タウン)」という言葉を用いる。前章で述べたように、韓国社会で高学歴朝鮮族は「同胞」として「韓国人」として受け入れられるが、朝鮮族の単純肉体労働者は「外国人労働者」として「朝鮮族」として社会的に排除される場合がある。したがって、このような多様な朝鮮族を指す言葉はそれぞれ韓国社会における朝鮮族への受け入れや排除のまなざしの表現として朝鮮族の人びとに意識されている。朝鮮族の集住するガリボンドンは韓国の一般のメディアでは「延辺タウン」や「朝鮮族タウン」といった韓国の主流社会とは相容れない異文化空間としてとらえる傾向がある。しかし、ガリボンドンにある韓国人の市民団体は朝鮮族を積極的にサポートし、朝鮮族の人びとを自分たちの「同胞」として見ることで、この街を「同胞タウン」と称することになった。朝鮮族の人びともガリボンドンを自分たちと韓国人との間の距離を縮めることを感じさせる「同胞タウン」という名称を好んで使っている。

本章では、まずガリボンドン「同胞タウン」における街における朝鮮族の飲食文化や住居環境の特徴を分析する。次に、ガリボン「同胞タウン」における韓国人市民団体と朝鮮族との関わりを分析することで、朝鮮族労働者たちがこの街に集まってくる要因を検討する。最後に、ガリボンドンが再開発と朝鮮族労働者たちの新たなコミュニティの創造および彼らのライフスタイルの変化などについて見てみたい。

2. ガリボンドンにおける朝鮮族の文化

地下鉄南九老駅の3番出口から外に出ると、下り坂の大通りがある。すぐ目に入るのは大通りの両側にある多くの中国語の看板である。それらの看板に書いてある「延吉」や「北京」などの中国の地名や、「羊肉串 (羊串焼き)」や「冷面 (冷麺)」などの看板は、この街が中国人特に朝鮮族と関連があることを意識させる。この一帯が韓国のメディアで呼ぶ「조선족타운 (朝鮮族タウン)」であり、朝鮮族の人びとや韓国人市民団体の人びとが呼ぶ「중국동포타운 (中国同胞タウン)」である。

大通りに沿って坂道を降りていくと、右側に「취업정보 (就業情報)」と書いてある職業仲介所が数か所見られる。それらの仲介所の前には、短期雇用および長期雇用の情報が張

られている。職種，年齢制限，日当あるいは月給などが書かれ，大きな文字で「교포환영（僑胞歓迎）」と書かれているものもある。ここで「교포（僑胞）」は主に中国朝鮮族を指す言葉である。朝 6 時頃から南九老駅の労働市場には，日雇い労働者が現れ始め，仕事を探す様子が見られる。ガリボンドンは韓国で日雇い労働者が職探しの重要な場所であり，ここには複数の労働市場が設けられている。もともとは労働者のほとんどが韓国人であったが，近年は朝鮮族の人びとの単純肉体労働への加入とともに，言語が通じることに加えて韓国人より低い賃金で朝鮮族が雇われることが増える。こうした状況によって，韓国人の日雇い労働者の中では朝鮮族の人びとが自分たちの仕事を奪っているとの不満の声もある。



図 19 南九老駅近くのある仕事仲介所の看板。右側の大きい文字は「中国僑胞」と「内国人」（韓国人を指す）であり，左側に書かれているのは看病や掃除などの仕事の種類である。（2009年8月6日，筆

道を前に進んでいくと，職業紹介所，携帯電話販売店，両替所，銀行，カフェ，カラオケ，飲食店，旅行社，教会，中古家具販売店，カラオケなどのさまざまな店があり，この地域が商業地域だけでなく，住宅地でもあることが分かる。

南九老駅から約 5 分離れているところに，道が三つに分かれているが，真ん中の道は商店街の入り口でガリボン総合市場に繋がる。商店街に入っていくと，中国の延辺にいるような錯覚をするほど「延吉」，「龍井」など中国東北部の朝鮮族が集住する地域名や犬肉など朝鮮族が好む料理の看板が見える。さらに，「飯店」，「電話房」，「小吃部」（家庭料理屋）などの中国語で書かれている看板からチャイナタウンというイメージが浮ぶ。そのような店の中に入ると，店員や客の中には中国語で話を交わす人が多く，特に飲食店の場合には，メニューが中国語のみに書かれていることが少なくない。客の中には朝鮮族や漢族など中国からきた人たちがよく見られるが，観光にきた韓国人もいる。「電話房」と書かれている店は電話カフェであり，週末になると中国に国際電話をかける人で賑わう。このガリボンドンの商店街は，朝鮮族と中国の漢族そして現地の韓国人がともに一つの商圈を形成している。

商店街には中国語の歌が流れ，道の両側には「노래방（カラオケ）」と書かれている看板がよく目に入る。大きな文字の「중국노래방（中国カラオケ）」や「노래방（カラオケ）」

に小さい文字の「중국가요 (中国歌謡)」を加える書き方も行われている。これらのカラオケには、韓国の歌と中国の歌が収録されているが、中高年の朝鮮族の娯楽の重要な場所でもある。彼らは仕事の後のリラクスの時間や同窓会・同郷会を行う時に、このようなカラオケを訪れ、中国の歌や韓国の古い歌を歌うことで中国にいる家族や親戚を思い出し、中国での生活の記憶を再生産する。



図20 ガリボン「同胞タウン」(2009年8月6日, 筆者撮影)

この商店街をまっすぐ歩いていくと、左側に一つの市場が見えてくるが、その入り口に「가리봉종합시장 동포타운 (ガリボン総合市場 同胞タウン)」と書かれている看板が見られる。ここがガリボン一帯の代表的な市場であり、小さな空間であるが、朝鮮族や中国の漢族の人びとがよく購入する品物が多く販売されている。例えば、香菜や乾し豆腐、臭豆腐、ラー油、月餅、塩卵など中国の代表的な食品や食材が含まれる。



図21 ガリボン総合市場の入り口(2011年4月24日, 筆者撮影)



図22 ガリボン総合市場で販売している中国のラー油、月餅、味の素、塩漬けのアヒル卵など。(2011年4月24日, 筆者撮影)

ガリボン総合市場一帯の商店街には中国式の飲食店が多く、韓国人の中では本格の中華料理を味わえる代表的な場所として知られている。彼らは、香菜(ジャンチャイ)、クミンシードの独特な香りやギョーザ、豚肉天ぷら、火鍋などなじみのある料理を求めてここを訪れる。ガリボン総合市場の入り口のすぐ隣には餃子店が一か所あるが、そこは朝鮮族が経営する中国の東北料理店である。豚天ぷらが本場の味である評判があり、インターネッ

トを通じて韓国人の中でも情報が広がり、その味を求めて訪れる人が後を絶たない。

ガリボン総合市場で延辺料理の代表的なものと言われるのが羊串焼きである。これはもともと中国の新疆の料理であるが、朝鮮族がその料理方法を受け入れ、また独自の味付けをして発展させたものである。中国で羊肉串焼きは、炭火で炙るという料理方法を初めて商業化させた食べ物である。この羊串焼は中国の東北部で最初に受け入れ、その後中国全



図 23 ガリボンドンの市場には朝鮮族が好んでいる羊串焼きや犬肉料理の店舗が数軒並んでいる。(2011年4月24日、筆者撮影)

土で広がった。スパイスとしての唐辛子と独特の香りがあるクミンシードを羊肉につけて食べる方法は、辛い料理に慣れている朝鮮族に愛好されるようになった。そして、朝鮮族の人びとが羊串焼きのもともとの新疆風の味をさらに自己流に進展させたものが今の定番の延辺料理になっている。この料理は朝鮮族の韓国への移動とともに国境を越え、韓国において定着しつつある。最初はガリボンドンのような朝鮮族の集住する地域において朝鮮族の人びとに主に消費されていたが、それがだんだん羊肉にあまりなじみのない韓国人にも積極的に受け入れられるようになり、人気を集めている。

ガリボンドンでは、中国の饅頭やギョーザなどの麺類も多く販売している。そして、ここでは旧正月の時には、中国の漢族の人びとだけでなく、朝鮮族の人びとも大晦日にギョーザを作って食べるなど中国の東北部の春節の過ごし方を行っている。朝鮮族のこうした韓国人とは共通しながら異なる生活習慣は、韓国人の注目を集め、彼らに中国文化への理解を深めさせる一つの機会を与えている。このように、朝鮮族は韓国への移動とともに、自分たちの食文化も同時に移動させ、移動先の人びとにも影響を及ぼしている。

ガリボンドン一帯を「中国同胞タウン」と名付けた中国同胞タウン新聞社の編集局長である Y さんは、この地域の特徴に関して以下のように語る。

中国同胞タウンには、韓国と中国の文化が巧みに組み合わせられて形成された中国同胞—朝鮮族たちの独特な文化が表れています。実際、朝鮮族たちの飲食文化は中国に近いが、韓国の歌をよく歌うし、遊び方も韓国に近いと思います。それが、この朝鮮族の集住する（ガリボン）地域の特性だと思います。(2009年8月6日 中国同胞タウン新聞社にてインタビュー)

このように、韓国人の Y さんからみると、中国朝鮮族は中国と韓国の両方の文化を併せ持つ「朝鮮族の独特な文化」を有している。ガリボンドンの「同胞タウン」には、朝鮮族がだんだん集まってくることにより、彼らの特徴のある飲食店、市場、宿泊所などが形成された。ここは朝鮮族の労働者たちが集住することで、彼らにとって居心地良い独特な空間が形成されている。

以上、ガリボンドンにおける食文化を中心に見てきたが、この地域に多く居住している朝鮮族の人びとはどんな住宅に住んでいるのだろうか。ガリボン総合市場をまっすぐ通っていくと、目の前に坂道が現れるが、この一帯がソウルで「꼭방촌（くぐり部屋村）」と呼ばれる多世帯住宅の多い地域である。ここは家賃が安いことから比較的収入が少ない人びとが住む街であるが、その中に朝鮮族の労働者たちもいる。

「くぐり部屋村」は、過去においてグロ公団で働いていた地方から上京した韓国人の女工たちが住んでいたところから、現在は中国、モンゴル、フィリピン、パキスタンおよび韓国人などさまざまな国の人びとが住む地域へと変化してきた。その中に朝鮮族も少なくないが、彼らの中には毎日の生活費も保障できない日雇い労働者もいれば、生活費を最大限に抑えることで月収のほとんどを中国の家族に仕送る人もいる。ほかに、一人暮らしの朝鮮族低所得高齢者もいる。次の節では、この「くぐり部屋村」について見てみよう。

3. 労働者たちの出発点となるガリボンドンの「くぐり部屋村」

ソウルは、市内を北西方向に流れる川—漢江（ハンガン）を中心に、江南地域と江北地域に分けられている。ガリボンドンは江南地域の九老区に属し、漢江の西南側に位置している。韓国では 1950 年代以降から 1990 年代後半のアジア金融危機までの間に起こった高度経済成長のことを、市内の中心を流れている漢江にちなんで「한강의 기적（漢江の奇跡）」と呼んでいる。

1964 年に韓国輸出産業公団が設立され、ソウルの九老区にこの輸出産業公団第一団地が設立された。それ以降、この公団は「구로공단（九老公団）」と呼ばれるようになった。韓国経済の牽引車の役割を果たした九老公団は、1970～80 年代に靴、衣類、重工業などを中心に労働集約的産業が集中し、韓国の輸出産業の前進基地になっていた。当時、この公団で働いていたのは地方から上京した 10 代の女工たちがほとんどであったが、公団には宿舎が設けられていないため、彼らの約 6 万人が家賃の安いガリボンドンで生活の基盤を立て

ていた。女工たちが3~6㎡のくぐり部屋に住み込み、一軒家にくぐり部屋が数十部屋に分けられる場合もあることから、こうした住宅は「벌집 (蜂の巣)」と呼ばれ始め、ガリボンドンは「꼭방촌 (くぐり部屋村)」あるいは「벌집촌 (蜂の巣村)」と呼ばれるようになった。

2000年代に入ってから産業構造が変わるとともに、先端産業会社の進出が増え、九老公団は「구로디지털단지 (九老デジタル団地)」に改名された。

デジタル産業の集中とともに女工たちがガリボンドンから姿を消してしまい、彼らに代わってガリボンドンの「くぐり部屋村」に入ってきたのが外国人労働者たちであった。2平米未満の一人の空間に、トイレは共同に使われているくぐり部屋の家賃は10万~30万ウォンであるが、入居の際に保証金が要求されないこともあり、住居の費用が最低限に抑えられる住居地として外国人労働者の入居が増えるようになった。

ここで、韓国の部屋の賃貸の仕方について少し説明しておきたい。日本と異なり、韓国では部屋の賃貸において主に「전세 (傳賃)」(ジョンセ)と「월세 (月賃)」(ウォルセ)の二種類に分けられる。「傳賃」(ジョンセ)は不動産の所有者に一定の金額を預けて、その不動産を一定期間借りて使用することである。借りた不動産を所有者に返す時には預かった金額の全額を返してもらうことになる。その「傳賃」(ジョンセ)の金額は数千万ウォンから数億ウォンまでさまざまである。契約期間は一般的に2年間であるが、この期間に「傳賃」(ジョンセ)の全額を渡した場合には月ごとの家賃は請求されない。「傳賃」(ジョンセ)の金額が高いため、金銭的な余裕のない人たちは「月賃」(ウォルセ)を支払うことが多い。これは、一括でなく月ごとに家賃を支払う方法であり、一般的に入居の際に保証金(敷金)が必要とされる。その保証金も一般的に約百万ウォンから数千万ウォンまで多様である。こうした「傳賃」(ジョンセ)と「月賃」(ウォルセ)に分けられ、「月賃」(ウォルセ)の場合にも入居の際に巨額の保証金を必要とする韓国の不動産の賃貸方法は、経済的に余裕のある人にとっては有利な仕組みになる一方、経済的に困窮な人にとっては大きな負担になる。

ガリボンドンの「くぐり部屋村」は、ソウルで入居費用が最低限に抑えられる地域であ



図24 ガリボンドンの「くぐり部屋村」と呼ばれる住宅地 (2011年4月24日、筆者撮影)

ることから、中国から出稼ぎにソウルに来たばかりの朝鮮族の最初の身置き場所の一つになっている。そして、この地域は非合法朝鮮族の避難所のような存在でもあった。訪問就業制が実施されるまで、朝鮮族の韓国への入国制限が厳しかったため、合法期間が過ぎても引き続き韓国に滞在する非合法滞在者が増加した。彼らの多くは、中国と韓国の賃金格差によって韓国で稼ぐためであるが、非合法的な身分によって警察に捕まえる不安から、ガリボンドンを一つの避難所として身を置くこともあった。ガリボンドンが韓国メディアで朝鮮族を照明する代表的な場となっているにもかかわらず、非合法滞在者がここを避難所として考えることには、この地域における朝鮮族同士が助け合うことも重要であるが、そのほかにもこの地域で彼らをサポートするさまざまな韓国人市民団体があることが重要な原因になる。そうした市民団体が助けてくれることで、朝鮮族の人びとはこの地域に安心感を抱いている。

韓国政府の受け入れ政策の緩和とともに、朝鮮族の非合法滞在者の多くは合法者へと身分転換が可能になり、職探しや韓国での生活におけるさまざまな手続きも簡素化された。そして、韓国での滞在期間が長い朝鮮族の中に、安定的な仕事を見つけ、経済的な余裕も出た人はより良い居住環境を求めてほかの地域に引越していく人も増えてきた。

2006年6月に、ソウル市政府によって韓国の「立ち遅れている地域」と判断されたガリボンドンは、「都心駅中心圏開発示範地区」と選定され、その名前も「ガリボン」の代わりに、先端未来型都市を意味する「KAIV(KAIV Korea Advance & Innovative Valley)」という名前が付けられた。「都心駅中心圏開発示範地区」というのは、駅中心圏に対する高密度の開発として、大衆交通が発達した地域に住宅、商業、業務施設などを複合開発することを指す。ガリボン 125 番地一帯の約 33 万 2929 m²がガリボン再整備促進地区と指定され、2015年にはデジタルビジネスセンターに変貌することになる。

ソウル政府のこうした再開発計画に対して、現地の住民や商人たちの中には賛成と反対の両方の意見が含まれていた。韓国人の住民の中にはガリボンドンの撤去と開発に対して、補償金を期待していると同時に、朝鮮族を含めた外国人とは共住することを嫌うことから、開発に賛成する人が多かった。そして、この地域における韓国人の非正規労働者の中には、朝鮮族が自分たちの仕事を奪っているという意識も高く、朝鮮族の地域離れを希望していた。しかし、朝鮮族の住民にとって、ガリボンドンは彼らの生活基盤であり、朝鮮族同士が集まるコミュニティである。朝鮮族にとって、ここは仲間同士で支え合うことによって安心して暮らす居心地良い場所である。開発を反対するもう一部の人びとはガリボンドン

の商人たちである。彼らの中には朝鮮族もいる。この商人たちは対策委員会を組む、九老区と住宅会社に補償対策などを要求しているが、まだ確実な補償制度が定められていないのである。

ガリボンドンの再開発計画が公開されてから数年経ち、政府による撤去作業が徐々に行われ、反対する人の中には希望を持たず新たな居住先を求めて離れる人が増えてきた。離れる朝鮮族の中には、移動先がそれぞれ異なる傾向が見られる。家賃の安い部屋を求める人たちは新たな「くぐり部屋」を探して各地を奔走している。そして、ソウルにおける朝鮮族の集まっているほかの地域に移動する人もいれば、韓国人との触れ合いを希望し、一般の韓国人が住むマンションへの入居や、韓国人の多い商店街に店舗を新設するなどの動向も見られる。朝鮮族のもっとも多く引越す地域としては、ガリボンドンに隣接しているヨンドンポ区の大林洞（デリムドン）である。大林洞はもともと朝鮮族の一つの集住地域でもあることから、ますます拡大しつつある。



図 25 朝鮮族の人びとで賑わう地下鉄大林（デリム）駅近くの商店街（2011年4月24日、筆者撮影）



図 26 大林洞（デリムドン）の商店街における売店では朝鮮族に人気の中国式のキムチが販売されている。（2011年4月24日、筆者撮影）

ソウル新聞の2009年10月29日の記事によると、ヨンドンポ区の大林洞（デリムドン）がすでにソウルで外国人が一番多く居住している地域となっている。この雰囲気は、貧しいイメージを与えるガリボンドンの「同胞タウン」とは異なり、明るくて活気があふれている。地下鉄デリム駅近くには大きな商店街があるが、この商店街にもガリボンドンのように中国料理や朝鮮族料理の店および旅行会社などさまざまな店舗が軒を並べている。興味深いのは、この街では至る処に中国語と朝鮮語の二言語を混じり合った朝鮮族独特の言語表現が耳に入る。そして、中国における朝鮮族自治州内の延吉市の街でよく見られる朝鮮族と同じように、このソウルのガリボンドンの街においても朝鮮族の人びとは周りの

人びとの視線を特に意識しなくて自分たちのなまりのある朝鮮語で話を交わしている。朝鮮族が経営する店では、店主が客に対して韓国語を使わず中国語のみ対応することもある。ここでは、朝鮮族の人びとが自分たちの言葉で自由にコミュニケーションを行う言語空間が形成されている。この街で歩いている朝鮮族の人びとの顔には不安や焦りの気色はほとんど見られず、一定の自信と堂々さが観察される。この地域では、朝鮮族の巨額の投資による商業が発展しつつある。彼らの店舗の新設やビルの購入などの現象は、これまで韓国社会に映されている社会的底辺に置かれている単純肉体労働者としての朝鮮族像とは異なる新たな朝鮮族の姿を映している。韓国の朝鮮族の集住地域における朝鮮族の定住意識について調査した召현선（2010）は、ソウルのグロ（九老）一帯を中心に形成された朝鮮族のコミュニティは一時的な共同体ではなく拡大発展し、定着することと推測している。

4. ガリボンドンにおける朝鮮族と韓国人市民団体の相互関係

ガリボンドンは朝鮮族労働者が集住する地域として知られているが、ここが彼らの「居心地良い」場所になった背景にはそこにおけるいくつかの市民団体の懸命な努力と離すことができない。その代表的な団体としては、中国同胞タウン新聞社、朝鮮族教会、そして中国同胞教会などが挙げられる。この三つとも韓国人が設立した団体であり、朝鮮族を主な対象としている。中国同胞新聞は朝鮮族の韓国での滞在のための法律的な地位を確保するための政府への異議申し立てや政府の政策を迅速に朝鮮族の人びとに伝える役割を果たしている。朝鮮族教会は朝鮮族の人びとの人権獲得のための運動の場でもあり、彼らが知り合い、慰め合う場としての役割も果たしている。また、中国同胞教会は単に宣教だけでなく、朝鮮族を含めた外国から来た労働者が韓国で経験する産業災害、暴力、病気、賃金滞払、詐欺、死亡などのさまざまな困難に対して、彼ら自身が解決しにくいことに対して相談に応じ、その多くを解決してあげることを行ってきた。特に外国人動労者に宿泊を提供したり、彼らに無料で病気を治してあげたり、労働現場で事故で死亡した人たちの死後のさまざまな権利の獲得などのために闘ってきた。

上記の三つの団体とも朝鮮族の韓国社会における正当な権利を求め、今までの朝鮮族の韓国での合法滞在の資格と期間の延長をめぐる政策の改善に決定的な役割を果たしてきた。以下においては筆者が主に調査を行った中国同胞タウン新聞社と朝鮮族教会に焦点をあて、この二つの団体はそれぞれどのような団体であり、朝鮮族とどのような関わりがあるのか

について検討する。

(1) ガリボンドンの韓国人ジャーナリスト

地下鉄 7 号線の南九老駅から、ガリボン総合市場に向かう道中にジョンペンビルという建物がある。その 3 階に中国同胞タウン新聞社がある。この新聞社には毎日就労や滞在資格などの相談にくる朝鮮族で賑わう。この新聞社は韓国人ジャーナリストの Y さんによって 2003 年に設立された。同新聞社には、毎日約 20～30 人の朝鮮族が訪れる。仕事探しや航空券の購入、さらに法律相談などの原因による。週末には約 70 人訪れる場合もある。職員は筆者が調査を行った 2009 年 1 月には 7 人（その中に非常勤は 2 人）で、その中で 6 人は朝鮮族女性であるが、彼女たちは全員韓国人の配偶者であり、その中には韓国国籍を取得した人もいる。新聞購読者はほとんど朝鮮族で約 600 人に及ぶが、一番多かった 2006 年には約 2500 人に達したことがある。

Y さんは大学で英語文学を専攻し、卒業後の 2001 年から 2003 年の間にソウル朝鮮族教会で創刊された「東北アジア新聞」の記者として働いた。彼は記者として取材を行う中で、朝鮮族と接し始めるようになり、それがきっかけで自ら中国同胞タウン新聞を創刊するようになった。2001 年当時には韓国における朝鮮族に対する滞在制限も厳しかったため、非合法滞在者が多かった。親戚訪問や短期研修などで韓国に入国した朝鮮族がお金を稼ぐために、合法滞在期間を過ぎても現地に留まることが多かった。中国同胞タウン新聞が出版、配布されることによって、韓国社会における朝鮮族の人びとの生活現状や韓国の受け入れ政策に関する詳しいことが朝鮮族の人びとの中で広く知られるようになった。

Y さんは朝鮮族単純肉体労働者たちの生活現場に足を運び、彼らの声に耳を傾く中で、「韓国の保守勢力による「民族統一」は言葉に過ぎず、現実はそれとは逆である」ことを感じた。そして、Y さんは韓国で非合法滞在者の身分で常に強制追放されることを恐れている朝鮮族や朝鮮族 1 世の老人たちに対する「故国」としての韓国が彼らに対する冷たい態度に怒りを感じ、朝鮮族のために代弁しようとすることを決意した。

韓国政府の朝鮮族受け入れ政策は常に変化しているため、朝鮮族は韓国政府に対する信頼が乏しく、誰かが責任を持って政府の確実な情報を伝達してもらい、自分たちの声も政府の新しい政策の施行に繋げることを希望していた。その役割を果たしたのがジャーナリストの Y さんである。Y さんは中国同胞タウン新聞社の代表として、韓国政府から朝鮮族

に対する最新の政策情報を一番早く新聞に記載し、朝鮮族からの反応をもとに政策の不適切な部分を、政府に改善することを求め、それが改善されるまで戦ってきた。

訪問就業制が実施されるまでは、Yさんは不法滞在者の権利を求めるために奔走し、他の市民団体との努力で彼らの合法的な身分への転換を実現した。その後は朝鮮族の更なる法的な権利を求めると同時に、彼らの韓国での長期滞在をめぐる職業指導として生涯教育院を開設し、職業に関する資格取得をめぐる講座を開いた。

さらに、中国同胞タウン新聞社は「화합과공존 (和合と共存)」を主旨に、ガリボンの商人たちと朝鮮族住民、そして朝鮮族留学生たちとのネットワークを構築し、ガリボン町の朝鮮族社会の社会的なイメージを改善しようとしてきた。その努力の一つとして、2004



図 27 2005年の「ガリボン仲秋韓中歌自慢」。朝鮮族留学生、ガリボン商人たち、現地の住民、中国人と韓国人が交じり合っ
て歌を披露。(出自：<http://blog.daum.net/phil228/5432723>
アクセス：2012年7月16日)

年から始まったガリボン町の「仲秋韓中文化祭」が挙げられる。この行事は、「在韓朝鮮族留学生ネットワーク」とガリボン町商人連合会が共催し、中国同胞タウン新聞社の主管のもとで行われた。2004年9月28日に行われた同行事は約1万5,000余人の朝鮮族が参加する大盛況を収めた。

ガリボン町において現地の住民と朝鮮族の間および韓国政府と朝鮮族の間で重要な役割を果たしているジャーナリストのYさんは中国同胞タウン新聞社を設立したことについて、次のように語る。

ガリボン町は中国同胞が一番多く居住している地域であったし、彼らがいなくて地域の経済が動かないところでした。そして、ガリボン町は中国の東北3省から来た同胞たちが居住しながら、韓国の地域住民たちと一緒に暮らす地域であったが、同胞たちとの喧嘩も多かったし、地域住民たちも同胞たちがいるからこそ生計を維持できたが、

だとして彼らが同胞たちに良い思いだけを抱いているわけでもなかったです。それで、私はガリボンドンを起点として地域住民と朝鮮族の人びとが仲良く暮らすことができる地域共同体を作ろうとし、この地域で新聞社を設立し、新聞名を「中国同胞タウン新聞」と名付けました。(2009年8月6日、中国同胞タウン新聞社にてインタビュー)

Yさんが設立したこの新聞社は朝鮮族の人びとが互いに知り合い、情報交換をする場所にもなっている。韓国における朝鮮族にとって、韓国を見る一つの窓口になると同時に自分たちの声を反映する重要な場所にもなっている。この新聞社は韓国政府からも信頼を受け、政府が韓国内の朝鮮族の実情を把握するための重要な窓口になっている。Yさんは韓国政府に対する朝鮮族の代弁者の役割を果たしているだけでなく、朝鮮族と韓国人の融合において重要な媒介者の役割を果たしている。彼は紙面だけでなく、インターネットでも新聞のホームページを開通し、国内外の多くの読者に向けて情報を発信している。

(2) 朝鮮族教会：運動と情報交換の場

朝鮮族が韓国において休日によく行く場所としてキリスト教会が挙げられる。中国朝鮮族の中では世代によって通う教会が少し異なる。一方、若い世代は居住地域近くの一般の韓国人が通う教会に行く場合が多く、韓国人と接することを重んじる傾向が見られた。もう一方、中高年の場合には朝鮮族が集まってくる教会に通う傾向があり、自分たちのネットワークを強めることが見られた。

韓国における若い世代の朝鮮族の中には、深いキリスト教的な信仰を保つ者が少なくない。その中でも特に女性の場合には、毎週キリスト教会を訪れ、「祈祷する時が一番心の安らぎを感じる」と語る者もいる。こうした若い世代と比べて、中高年の朝鮮族の場合には朝鮮族が多く集まる教会に通うことが多いが、必ずしも宗教的信仰が強いとは言えず、教会に集まってくる朝鮮族の人びととの交流を楽しみ、互いに必要な情報交換をすることが多い。日曜日に朝鮮族教会にいくと、教会の前にはいつも数人の中年の男性および女性たちが集まっている風景が見られる。特に数人の男性がしゃがんで、地面に一枚の新聞を敷いて環状に囲み、夢中に何かをする様子(図28)が見られる。近づいてみると、それは中国の将棋を遊んでいることが分かる。彼らのなまりのある中国の朝鮮語から朝鮮族であることも確認できる。そこでは歓声や笑い声が流れ、中国の街角でよく見られる風景が再現



図 28 朝鮮族教会の園庭で数人の朝鮮族男性が集まって将棋をする様子
(2009年8月2日, 筆者撮影)



図 29 朝鮮族教会の二階のフロアで週に一回行われる無料の理髪。
(2009年8月2日, 筆者撮影)

されている。このような朝鮮族同士の楽しみ方は、彼らがこの教会を訪れる一つの要因でもある。

朝鮮族教会は九老区の九老 6 洞に位置され、地下鉄の大林（デリム）駅から約 8 分かかる場所にある。この教会は、1999 年に韓国人神父の K さんにより設立された。K さんはソウル大学とアメリカの神学大学院を卒業した経歴があり、市民運動家として長年活動してきた。彼が朝鮮族教会を設立した理由は、神父の職業を維持しながら市民運動を続けられるためであった。それは朝鮮族を相手に教会を設立すると、平日に訊訪をしなくても日曜日の説教だけをすれば神父の身分を維持することができることによる。平日は韓国人を対象にした市民運動に時間を費やすことができるため、神父と市民運動の両立が可能になるということである。朝鮮族の人たちの中にも平日は仕事で忙しいため教会に行くのも困難である事情があり、韓国人神父と朝鮮族教徒の互いの需要によってこの朝鮮族教会が誕生したのである。

しかし、K さんは「朝鮮族教会を運営していく過程で、朝鮮族の苦しみを直接耳にすることで、だんだん朝鮮族教会を始めることになったのが、同胞たちのために働くようにと神様が私を送ってくれたことを悟るようになった」と語る。したがって、彼は朝鮮族の権利を求めて韓国政府との戦いを行ってきた。朝鮮族の不当待遇をめぐって政府に対して数回抗議を行い、10 日から 25 日に至る数回の断食デモを行うことで、政府の政策改善をもたらしたことが少なくない。特に、朝鮮族の韓国での合法滞在期間を拡大するために、中国同胞タウン新聞社や他の市民団体との共同の努力によって、2003 年 11 月 27 日に盧武鉉（ノムヒョン）前大統領の朝鮮族教会への訪れを向かえ、その後「訪問就業制」という朝鮮族社会に転換期をもたらした重要な政策の実施を実現した。現在 K さんは、朝鮮族の「民族語喪失」の問題を憂慮し、中国に滞在している朝鮮族の子どもたちが韓国でも教育を受け権利を求めることに関心を寄せている。

朝鮮族教会が設立した当時に通っていた教徒は約 20 人だったが、2009 年 8 月現在ソウル教区では約 200 人、安山教区では約 100 人に達している。教徒の中で仕事のため、二週間に一回出席する人が多いため、実際の教徒の人数は約 400~500 人になるという。教徒の中には中高年の男女が多数であり、白髪の老人もいる。そして、建築現場や飲食店で働く単純労働者が多い。彼らには月に 1~2 日しか休みが取れない人もいるが、その日には教会を訪れることで疲労を解消しようとする人も少なくない。

ここで朝鮮族教会に通うある朝鮮族女性の話から、彼女にとってこの教会はどんな意味

があるのかを見てみよう。

<事例1>韓文玉（仮名）、女性、50代、中国遼寧省出身、朝鮮族、2001年に来韓。

韓さんは中国にいた時は農業に従事し、収入が不安定であったため、次女が中学校を卒業した時に、韓国への出稼ぎを決意した。韓さんは、2001年に4万元（2010年10月のレートで約49万円）を手数料を払い、親戚訪問ビザで韓国に入国した。夫は、1997年に同じく親戚訪問ビザで韓国に来たが、当時の手続きの費用として12万元（2010年10月のレートで約147万円）をブローカーに渡した。現在は二人とも「就業訪問」ビザで滞在している。長女は、2009年に「就業訪問」ビザで来韓し、次女も2007年に韓国に留学にきて、現在大学3年生である。韓さん夫婦は、韓国に来る当時に背負った借金は全部返済したが、現在は俳優志望の次女の巨額の学費を稼ぐために一生懸命働いている。韓さんは飲食店で働き、夫は建築現場で働いている。

日曜日には休みますが、家族全員が朝鮮族教会に行きます。ここは同胞たちの困難、辛いことを解決してくれるし、神様に頼るところです。教会に通うことは、このような共同体の中でお互いに助け合い、頼り合うことなので、とても良いと思います。朝来てお祈りをして、賛美歌を歌うことで慰まれ、疲れもとることができます。さらに、ここは朝鮮族が集まってくるのでお互いに話が通じることがとても嬉しいです。教会に通うため、ほかの同窓会や親戚の集まりには行く時間もないし、控えています。（2009年8月2日、朝鮮族教会にてインタビュー）

上記の韓さんの場合は、家族四人とも韓国で暮らし、日曜日には全員朝鮮族教会に通っている。韓さんの家族の絆はとても強く、最初は父親一人で韓国へ入国したが、その後家族全員が次々に韓国に渡り、韓国で生活している。さらに、韓さん夫婦は生活の質を高めるために、韓国に出稼ぎに行って一生懸命働いているが、娘の教育に関する責任感が強く、過労にもかかわらず娘の高額な学費を稼ぐために力を惜しまない。韓さんにとって、この教会に通うことは、自分と同じ背景、同じ言語、同じ信仰をもつ人たちに出会う場であり、自分の韓国社会でのさまざまな苦悩を吐露し、それを解決してくれる頼りできる場である。彼女にとって、そこは親戚や同郷の友人の集まりより重要な場所になっている。そこは、韓国社会において抑圧された自分を解放させる場であり、仲間たちの中に帰属することを

感じることで、自分を肯定的にとらえることができる。このような共同体の中で、一種の宗教的な儀式を通じて、彼らは「守られる」という安心感と安らぎを感じることになる。

5. 朝鮮族労働者たちのライフスタイルの変化

中国朝鮮族が 1988 年のソウルオリンピック以降から韓国への移動を始めて、すでに 20 余年が経っている。その間に、韓国政府の朝鮮族への受け入れ政策も多く変化し、朝鮮族の生活にも大きな変化が生じている。

まず、朝鮮族の業種と労働現場における役割において大きな変化が見られる。移動初期においては 3K 業種その中でも単純労働に従事する朝鮮族が多かったが、彼らの中にはだんだん技術職に就く人が増えてきた。2010 年 2 月 7 日の吉林新聞は「2000 年代に入って韓国の建築現場で大規模に流入した中国朝鮮族はほとんど重要でない仕事をする雑夫として働いていたが、10 年後の今日に彼らは大工、スリップフォーム工法、鉄筋などの各領域で熟練工に成長し、あるいは中間管理者級の組長に昇格して建築現場の品質を左右している」⁴⁾と韓国メディアによる報道を掲載した。また同紙によれば、韓国建設会社は中国経済が急速に成長する中で、中国朝鮮族の韓国への流入が減ることを恐れていると報道した。建築現場だけでなく、飲食店においても朝鮮族の雑事をすることからキッチンの重役を勤めることへと変化も生じている。

さらに、朝鮮族の中には重労働離れの現象も現れている。過去において、朝鮮族は月に 1～2 日の休みしか取れない重労働に従事したが、韓国での滞在期間が長くなるにつれて週末には休める仕事を希望し、家族や親戚、友人と余暇を過ごす時間を作ろうとしている。そして、韓国に対する理解が深まるとともに、自分たちの韓国と中国での仕事や生活経験を生かす商業を行う人も増えてつある。さらに、中国と韓国の両方を生活圏とし、韓国に仕事がある時にそこで働き、暇な時には中国へ帰るという「季節動労者」も現れてきた。そして、若年層の中には専門職に従事する人も増加している。

次に、朝鮮族の家族や親戚および友人との繋がりについて見てみよう。韓国に移動した朝鮮族は、生活が安定すると家族や親戚を中国から呼び寄せる場合が多い。韓国政府の受け入れ政策の緩和とともに、家族と親戚の呼び寄せは比較的容易になり、すでに数十人の親戚が韓国で集まることも希な現象ではない。さらに、子どもの結婚式も、両親や親戚の多くが韓国にいるため、子どもが中国やほかの国から韓国に渡り、そこで挙式をあげる

こともよく見られる。そして、昔は韓国に滞在している両親が中国の子どもや親戚に会いに行くことから、だんだん子ども（小中学校の子どもを含む）が冬休みに両親に会いに韓国に入国する場合が増えてきた。また、韓国への移動の初期においては金銭的な余裕がなく、中国と韓国との間の出入りが厳しく制限されていたため、数年間中国に帰ることができない人が多かったが、近年になると兄弟姉妹そろって中国に帰国し、高齢の両親とともに旧正月を過ごす人も増えてきた⁹⁾。これは朝鮮族に対する韓国への入国が緩和されたことと韓国での朝鮮族の生活が一定の安定を迎えたため、彼らのライフスタイルも変化していることと考えられる。

韓国の朝鮮族は、休日や祝日には家族や親戚で集まったり、中国からきた人たちの同郷会や同窓会に参加したりする。彼らの韓国における生活の中で家族の絆を一番重要視する一方、中国からきた知り合いとの繋がりも大切にしている。彼らにとって、中国や韓国で築いた知人、友人との信頼関係が知り合いの少ない韓国において仕事探しや悩み相談のいい相手になっている。

第三に、朝鮮族の居住環境の変化について見てみよう。出稼ぎに韓国に行った朝鮮族は、最初は現地の物価が高いため、「くぐり部屋」や半地下の部屋を借りて住む場合が多く、滞在期間が長くなるとともに、経済的にも余裕があり、居住環境がより快適なマンションや一戸建ての住宅に移す傾向が見られる。彼らは、韓国の賃貸に関する理解も深めることになり、「傳貰」（ジョンセ）で部屋を借りるほうが「月貰」（ウォルセ）より効率的であることを意識する。特に家族や親戚が多い場合には、共同でマンションや一戸建てのアパートを「傳貰」（ジョンセ）で借りて生活することで、助け合うこともよくある。しかし、彼らはガリボンドンで「くぐり部屋」を離れるとしてもその地域を離れようとする人も多い。彼らは自分たちの集住する街を形成し、そこにおいて仲間同士で助け合うことで、安心感を覚え、そうしたコミュニティから自分たちの新たな姿を創造しようとする。ガリボンドンの再開発とともに、多くの朝鮮族がその地域に隣接する大林洞（デリムドン）に引っ越す現象もその表れである。

6. むすび

本章では、出稼ぎにソウルに移動した朝鮮族の労働者たちが集住する街であるガリボン「同胞タウン」に焦点をあて、それは朝鮮族と韓国の市民団体および現地の商人たちが共

同に創りあげた街であることを示した。前章でも言及したように、朝鮮族の単純肉体労働者たちは韓国において社会的底辺に置かれ、彼らの従事する業種や経済的な要因から「貧乏な外国人」として韓国の人びとに疎外される対象となった。そうした社会的立場に置かれている朝鮮族の労働者たちに手を伸ばしたのは、韓国の新聞社や教会といったさまざまな市民団体であった。ガリボン「同胞タウン」はそうした韓国の市民団体と朝鮮族の労働者たちおよび現地の韓国人や中国人の商人たちが共同に創りあげた街であり、朝鮮族の人びとにとって「居心地いい」場所になっている。この街で、朝鮮族の人びとは韓国人とは異なる自分たちの飲食と娯楽文化を維持し、自分たちのなまりのある朝鮮語と中国語を使用することで「自分たちの世界」を創造している。

しかし、朝鮮族の労働者たちの独特な生活の空間は再開発という名目のもとの崩壊させられようとしている。こうした状況の中で、彼らが考えたのは新たな朝鮮族のコミュニティを作ることであった。彼らはガリボンドンに隣接しているデリム（大林）という地域に新しい朝鮮族の集住するコミュニティを作りつつある現象がすでに現れている。しかし、彼らの新しいコミュニティは必ずしも過去のような閉鎖的な空間ではない。彼らはすでに閉鎖的な空間に身を置くことで外部社会から自分を守ろうとするのではなく、韓国社会と向き合い、変化する自分たちの新たな姿を積極的に表現しようとしている。

〈注〉

- (1) この「Global Zone」には主に三種類含まれる。一つ目は、ビジネス中心地としての「Global Business Zone」が5ヶ所、二つ目は外国人集住地域としての「Global Village」が6ヶ所、三つ目は外国人集中訪問地域としてのグローバル文化交流ゾーンが5ヶ所である。その中の「Global Village」は、生活環境の改善を通じて外国人のソウル定着を誘致するための外国人集住地域を指す。
- (2) 吉林新聞 2010年2月7日記事「조선족 없으면 한국 아파트 못짓는다 (朝鮮族がいなければ韓国のマンションが建てられない)
http://www.jlcnwb.com.cn/society/content/2010-02/07/content_25599.htm (アクセス：2010年10月23日)
- (3) 吉林新聞 2010年2月15日記事「설맞이 귀향길 뜰해지고 방방곡곡서 설원다」(正月を迎え、里帰りに足が遠のき、所々で過ごしている)

http://www.jlcxwb.com.cn/cxz/content/2010-02/15/content_25214.htm (アクセス :
2010年10月23日)

第六章 高学歴朝鮮族の先を見つめる子育てとハイブリッド・アイデンティティ

1. はじめに*

本章では、留学や就職で日本に移動した高学歴朝鮮族に焦点をあて、彼らの日中韓 3 国におけるダイナミックな移動の実態と家庭における子どもへの言語教育戦略および彼ら自身の新しいアイデンティティの創造について考察する。

グローバリゼーションの進展と世界的な高度人材獲得競争の激しい中、近年の新しい動向として留学や就職による高学歴者の国際移動が増えつつある。現在、アジアの豊かな専門職人材の動向が世界的な注目を集めているが、東アジアから最も多くの「高学歴移民」を送り出しているのは中国で、その数は 120 万人に及ぶ（マノロ 2009, p.14）。中国の中でも、日中韓 3 国の間を活発に移動しているのが中国朝鮮族である。

中国では 1978 年に改革開放政策が実施され、国家や各政府機関からの公費派遣の留学政策が主として推進された。私費留学を奨励する政策は 1981 年に打ち出され、1984 年には中国政府により「自費出国留学に関する暫定規定」が公布されることで、私費留学が全面的に解禁された（坪井 2007, p.155）。日本法務省の人口統計データによれば、2010 年現在日本における外国人数は約 213 万 4, 151 人であり、その中で人数が最も多いのが中国人で、約 68 万 7, 156 人とされている⁽¹⁾。その「中国人」と登録されている人びとの中には、中国の漢族だけではなくさまざまな少数民族も含まれるが、日本政府による統計データでは彼らの総称として「中国人」と記載されているため、民族別に人数を分けることは難しい。本研究の調査対象である日本在住の中国朝鮮族は、人数の把握は難しいが、約 6~7 万人に推定され、首都圏には約 4~5 万人が滞在していると見られる⁽²⁾。朝鮮族の日本への移動は、1980 年代の大学教員の海外研修による移動から始まったと見られ⁽³⁾、1990 年代からは企業研修生や留学生が増え始めた。

朝鮮族の人びとは、これまで中国の東北部（黒竜江省、吉林省、遼寧省）に主に住んでおり、中国の地にあってもエスニック・アイデンティティを強固に保ってきた。その背景には子どもたちに中国の国家言語である中国語に加えて、朝鮮族のエスニックな言語である朝鮮語を平行して教えるという二言語教育が重要な役割を果たしてきた。朝鮮族の 3~4 世の若い人たちは、朝鮮族学校において中国語と朝鮮語だけでなく、外国語として日本語

あるいは英語も習得することができた。こうした多言語能力によって、彼らの東アジアにおける交流の最前線で活躍する機会が飛躍的に増加している。

1990年代以降、中国の改革開放と市場化の中で、朝鮮族の人のびとは中国内はもとより、韓国、ロシア、日本、北朝鮮、アメリカなどへと活躍の場を広げている。朝鮮族の海外への移動と移動先での長年の滞在とともに、彼らの中にはすでに移動先の国籍を取得した者もいる。本論文では中国の戸籍に「朝鮮族」と登録されている者だけでなく、海外へ移動し、移動先の国籍を取得したとしても、自ら「朝鮮族」と主張する者は「朝鮮族」と呼ぶ。なお、本論文で用いる「高学歴者」という用語は、高等教育を受けた者を指し、主に出身国や移動先の国の高等教育機関で教育を受けることで学士や修士、博士の学位を授与された者を指す。本論文で用いる「言語教育戦略」とは、親が一定の目標をもち、子どもに一つあるいは複数の言語を習得させるために、意識的および計画的に行う教育的行為を指すものである。

筆者は2010年1月から2012年9月の間に、東京、名古屋、京都、大阪などの都市においてフィールドワークを行った。主に朝鮮族がよく集まる街や飲食店などで参与観察し、朝鮮族の家庭を訪問し、彼らが使用する言語や居住環境および地域特性などを多角的に観察した。そして、本調査では約23名の20代前半から50代前半の朝鮮族の男女に対してインタビューを行ったが、本章ではその中で代表的な事例を引用しながら論述する。

以上のことから、本章ではまず日本在住の朝鮮族の日中韓3国における移動の実態を明らかにし、その次に高学歴朝鮮族の子どもへの言語教育のさまざまな形について分析し、最後に移動する朝鮮族自身の新しいアイデンティティの構築について考察する。

2. 日中韓3国を一つの生活圏とする朝鮮族

日中韓3国は、地理的に近接し、歴史的、文化的に関係が深く、近年経済的な相互依存関係が深まる中、その域内の人の移動がかつてないほど活発化している。その中でも、この三カ国の域内において積極的に移動を行っている人たちがいるが、彼らは日本に在住する朝鮮族である。

中国から日本に移動してきた朝鮮族の背景には、彼らの多くが中国の中等教育において外国語として日本語を習得したことが一つの要因になる。中国東北部の朝鮮族学校では中学1年から高校3年までのカリキュラムの中で、これまで日本語を外国語として設置する

が多かった。それは歴史の中で中国の東北部が旧満州地域として日本語の影響を受けていたことと、日本語が朝鮮族の使用する朝鮮語と発音や文法などにおいて類似点が多いことから、朝鮮族に習得しやすい言語として認識されていたことなどが要因として考えられる。

以下では、日本在住の3人の朝鮮族の事例を通じて、彼らの日中韓3国の域内における移動の実態を明らかにする。

(1) 留学・就職を主とする移動

現在日本に住んでいる朝鮮族は1990年代以降に留学で来日した朝鮮族がその主流を占めるが、彼らは主に20代前半から30代前半の間に留学を行った朝鮮族3~4世の人たちである。彼らの中には、日本で学業を終えた後、中国に帰る者もいれば、日本で就職して滞在し続ける者もいる。そして、留学や就職などを目的で、アメリカや韓国などの国へ移動する者もいる。

<事例1> 朴志桓（仮名）、男性、30代、朝鮮族、中国で学士号、韓国で修士号、日本で博士号取得、専門職。

朴さんは中国東北部のある朝鮮族の集住する村で生まれ育った。その村には約1000世帯の朝鮮族が集住していたため、朴さんは幼い頃から日常において朝鮮語のみ使用し、中国語を使わなくても不便はなかった。小学校から高校まで朴さんは地元の朝鮮族学校に通い、大学受験の時は優秀な成績で中国内のある名門大学に進学した。大学卒業後、ある偶然な機会に、知り合いを通じて韓国の大学の教員と連絡をとるようになり、それをきっかけに韓国への留学を決意した。朴さんが韓国への移動を決めたことには、学業以外にも「母国に一度住んでみたいし、韓国の人や韓国の文化についてももっと知りたかった」という理由もあった。朴さんは韓国の大学で修士課程の勉強をする一方、博士課程への進学を目指していた。自分の専門分野では日本で行われている研究が中国や韓国より優れていることに気づいた朴さんは日本への留学を準備した。日本にいる昔の大学の先輩から指導教員を紹介してもらい、2002年に日本に留学した。来日した後は、奨学金を得ながら、博士課程での勉学・研究を通じて、無事に博士号を取得した。その後、帰国する予定だったが、日本で仕事が見つかることで、朴さんは引き続き日本に滞

在することを決意した。

朴さんは、自分が国際移動を行うことには、学業以外にも「若いうちに、いろいろな文化を体験したい」ということが一つの原因でもあるという。彼は、現在毎年仕事や親族の訪問などで、日本と中国そして韓国の間を行き来している。今後について、「仕事によって、さらに国際移動を行う可能性がある」と語った⁽⁴⁾。

<事例 2> 呉文成 (仮名), 男性, 30 代, 朝鮮族, 中国で学士号, 日本で修士号と博士号取得, 専門職。

呉さんは、中国東北部のある朝鮮族の集住する町で生まれ、高校の時までそこで育った。小学校から地元の朝鮮族学校に通い、成績が優秀で飛び級をした経験もある。大学受験の時は北京の名門大学に進学し、卒業後は北京で就職した。呉さんは中等教育で日本語を習ったが、仕事をする中で、業務上日本語の能力をさらに高める必要があることを意識し、友人の助言を得て日本へ留学した。呉さんは 2000 年に来日し、日本語を習得したらすぐ帰国する予定だったが、日本の大学で修士課程、博士課程を経て博士号も取得した。中国で就職することを考えていた呉さんは、ある日、韓国のある大学から来た一本の電話で韓国への就職を決めた。この決断について、呉さんは「韓国を選んだというよりは、(韓国の) 大学を選んだと言える。その大学の知名度や研究環境、そしていろんな可能性と機会を考えて決意した」と語る。

けれども、呉さんにとって韓国はまた特別な地でもあった。彼は朝鮮族 3 世で、韓国は祖父母の生まれた故郷でもある。約 10 年前から呉さんは年に一回ほど韓国に行き、祖父母の故郷である慶尚北道に足を運んだりする。そこにはすでに親戚も見つからないが、呉さんは祖父母の戸籍を確認し、祖父母の生まれた地で現地の生活を体験することで、先祖の歴史を辿り、自分のルーツを確認しようとしている。呉さんの両親と兄弟は中国に住んでいるため、呉さんは定期的に中国にも帰る。呉さんは、韓国の大学に就職したが、必ずしもずっと韓国に住む考えはなく、仕事の必要によってさらに国際移動を行なう可能性があるという⁽⁵⁾。

上記の二つの事例から、朝鮮族の若い人たちの中には留学や就職などで日中韓 3 国の間を移動していることが分かる。こうした三つの国において高等教育の各段階を経てきた朴さんや中国と日本で高等教育を受け、韓国で就職する呉さんのようなケースは一部の高学

歴朝鮮族エリートによく見られる現象である。けれども、ほかにもさまざまな原因で中国から日本へ移動し、さらに親戚訪問や結婚やビジネスなどを目的に、日本から韓国へ移動する朝鮮族もいる。

上記の事例に見られる共通点は、より良い教育とより良い仕事の環境などを求めて国際移動を行なうことである。そして、移動先を国で選ぶのではなく、本人と直接関連がある大学など、より小さな単位で考えることが明らかである。そして、朴さんと呉さんとも国際移動を行なう際に、友人や知人のネットワークを活用していることも観察できる。

また、朴さんと呉さんの日中韓 3 国における移動は、単に勉学や仕事のための移動に限るものではない。中国で朝鮮族としてのエスニック・アイデンティティをもち、朝鮮族学校に通った彼らにとって、韓国は「祖父母の故郷」として常に心の中に描かれていた。そうした先祖への記憶と故国への想像が、彼らの韓国への移動を促している。そして、朴さんと呉さんとも中等教育で中国語と朝鮮語以外にも外国語として日本語を学んだことが、彼らの日本への移動を促進した一つの潜在的な要因としても考えられるだろう。さらに、朴さんの「若いうちに、いろいろな文化を体験したい」という考えは、ほかの若い朝鮮族にもよく見られるが、これは国際移動を行なう朝鮮族の人びとがより良い教育環境や労働環境を求めているだけでないことを示している。

朝鮮族の若い人たちは、すでに中国内だけでなく、より広い外の世界に目を向け、活躍の範囲を広げつつある。彼らはこうした国際移動の中で、自分が誰なのか、どんな言語を学ばなければならないのかを意識し始める。さらに、彼らは子どもにはどんなアイデンティティを構築させ、どんな言語を学ばせ、どんな教育を受けさせるのかを考えるようになった。

(2) 両親の滞在地が「帰る場所」となる移動

日本に滞在している朝鮮族の家族や親戚の人びとは、中国だけでなく、韓国にも多く居住している。それは、中国東北部に集住していた朝鮮族が、1992 年の中韓国交正常化とともに、親戚訪問や出稼ぎ、結婚および留学などを目的に韓国に移動し、現地に滞在し続ける人が増えてきたからである。2012 年 7 月 31 日の韓国法務部の統計によれば、韓国在住の韓国系中国人（筆者注：中国朝鮮族を指す）は約 46 万 7, 981 人とされている⁶⁾。

日本に留学している朝鮮族の中には、留学費用の多くを韓国で働いている両親の仕送り

に頼る者もいる。そして、日本の朝鮮族の中には、正月や休暇の時に両親や親戚がいる韓国に移動し、そこで休暇を過ごす者も少なくない。結婚を迎える朝鮮族の若いカップルたちは、両親や親戚が多い韓国で結婚式を挙げることも一般的である。筆者が出会った日本在住のある30代の朝鮮族女性は、4年前に韓国で結婚式を挙げた。韓国には、彼女の両親だけでなく、親戚も約30名住んでいる。その親戚のほとんどは中国から出稼ぎで韓国に移住し、その中にはすでに韓国の国籍を取得した者もいるという⁷⁾。

留学で日本にきた朝鮮族の中には、勉学を終えた後に日本で就職する者が少なくないが、女性の場合には卒業直後に会社に就職しても、結婚・出産した後には仕事への復帰あるいは再就職が難しくなることが多い。仕事を続けようとする女性の場合には、中国や韓国にいる両親に子育てを支援してもらうことも珍しくない。その場合には、両親が日本に来て短期滞在(3カ月～6カ月)する場合もあれば、子どもを中国や韓国にいる両親に預ける場合もある。そして、下記の事例のように、両親に子どもを預けることができないが、子どもを連れて両親のところに定期的に「里帰り」する場合もある。

<事例3> 金美玲(仮名)、女性、30代、朝鮮族、主婦、中国で学士号、日本で修士号取得。夫も朝鮮族。長女は4歳、次女は7カ月。

金さんは中国の黒竜江省出身で、中国の大学では日本語を専攻した。2000年に留学で来日し、大学院に進学して修士の学位を取得した。その後、東京のある会社に就職したが、長女に次いで次女を出産することで会社を辞するようになった。夫は現在日本のIT関係の会社に勤めている。実父はすでに亡くなり、実母は約15年前に出稼ぎにソウルに移動し、すでに韓国の国籍を取得している。韓国には、中国から移動してきた親戚が約15名滞在している。金さんは実母と義母(夫の母親)ともに韓国に滞在していることから、定期的に子どもを連れて韓国に行く。2011年に日本で東北大震災があった時にも、金さんは子どもたちの安全を考慮して二人の子どもを連れて韓国の実母の家に行き、そこで約3カ月滞在した。金さんの妹は中国で暮らしているため、金さんは妹に会うために中国に帰ることもある。将来、家族でどこで定住するかに関して、金さんはまだはっきり決めていないが、日本を離れる場合には、中国あるいは韓国に移動する予定だという。その中でも、金さんは「韓国と比べると、中国の生活にもっと慣れているが、韓国には母親がいるため、韓国へ移動する可能性が高い」と語る⁸⁾。

このように、金さんの四人家族は日本で暮らしているが、妹は中国に居住し、実母と義母および親戚の多くは韓国に滞在している。すなわち、金さんの家族と親戚の人びとは日中韓 3 国にそれぞれ滞在しているのである。そして、金さんは実母と妹および親戚の人びとと会うために中国だけでなく、韓国を訪問することも多い。特に、二人の子どもの母親である金さんは、実母がいる韓国に「里帰り」することが多くなる。日本を離れて再移動を行う際にも、金さんが中国より韓国を優先的に考えるのは、韓国が彼女にとって生まれ育った場所でもなく、実母がいることで安らぎを感じさせるために、一つの「帰る場所」となっているからである。

近年、中国における朝鮮族の子女の中にも両親が韓国で長期滞在する場合には、彼らの韓国への入国と現地での短期滞在が比較的容易になっている。しかし、中国や韓国の人びとが日本へ移動する場合には、ビザの制限が厳しく、親戚訪問や観光としての短期滞在が容易ではない。この点では、日本在住の朝鮮族の日中韓 3 国間の移動が比較的容易に行われている。

以上見てきたように、高学歴朝鮮族の日中韓 3 国間の移動には主に、この三つの国の言語が駆使できること、より良い高等教育とより良い仕事の環境を求めていること、そして両親の滞在地を一つの「帰る場所」とするなどの要因が含まれることが明らかになった。日本の朝鮮族にとって、日中韓 3 国はすでに国境を超えた一つの生活圏になっている。

3. 日本在住の朝鮮族の子どもへの教育選択

日本在住の朝鮮族の中には、日本で勉学を終え、仕事をしながら家庭を作り、出産や子育てを日本で経験する者が多い。子どもの成長とともに、彼らは子どもにどのような教育を受けさせるのかを考えるようになる。以下では、主に高学歴朝鮮族に焦点を当て、彼らの教育選択について検討する。

(1) 「より良い教育」を求めて

日本で長期滞在する朝鮮族の中には、日本の福祉や保育制度の充実さ、生活の便利さおよび食品の安全性などに魅力を感じ、さらに中国に比べて日本のほうが子どもの勉強のプレッシャーが少ないという意識から子どもを日本で育てようとする者が少なくない。筆者

が調査を行った段階で、日本における朝鮮族は 20 代から 40 代にわたる若年層が主流を占めているが、その中で 20～30 代の既婚者の場合には、彼らの子どもたちは保育園や幼稚園など小学校の入学前の年齢の子どもたちが多く、40 代以降の朝鮮族の場合には小学校や中学校に通う年齢の子どもがいる家庭が多い。そうした子どもたちのほとんどは日本で生まれ育ち、さらに日本の教育機関で教育を受けている。

しかし、朝鮮族の親たちは子どもが小学校に入る前から学校選択をめぐって悩みを抱えている。例えば、子どもを日本の一般の公立学校に通わせるか、日本の韓国・朝鮮系の学校に通わせるか、華僑の子女が通う中華学校に通わせるかなどの悩みが挙げられる。そして、子どもにより国際的な教育を受けさせるためにインターナショナルスクールを希望する親も多いが、学費が高い（年間学費が約 200 万円）ことから断念する人が多い。中華学校の場合、近年中国の経済成長とともに日本での中国語の需要も高まることで、中華学校への入学の希望者は中国人や華僑に限らず、日本人の子どもたちも増えつつある。そのため、中華学校への入学をめぐり競争が激しくなっている。東京で暮らしている朝鮮族の場合には、子どもの学校を考える際には、居住地域と夫婦の勤め先との距離も考えなければならないため、横浜に集中している中華学校は自宅と勤め先が東京都内にある朝鮮族にとっては空間的な距離が遠いため諦めざるを得ないことが多い。

子どもを日本の一般の学校に通わせる場合には、小学校は公立に通わせるが、中学校の段階からは家庭内の経済状況や子どもの成績によって、私立学校を希望する親もいる。彼らの中には、私立学校は学費が高いが、公立学校より教育に熱心であるという意識が一般的に存在する。

中国に帰ることを予定する朝鮮族の場合、よく挙げられる理由としては夫婦両方あるいはその片方が中国での就職や中国への転勤である。ほかにもよく挙げられるのが子どもを中国で育てたいという理由である。中国で育てたいということには、「子どもに成長に良い環境を与えたい」ことがよく挙げられたが、その「良い環境」とは主に良い教育環境と良い家庭環境および良い地域環境を指すものであった。これに関しては以下の事例を見ていきたい。

私が中国に帰りたくない一番重要な原因は子どもを中国で育てたいからです。もちろん、中国の学校教育も足りないところが多いと思いますが、日本と比べたらもっと責任感が強いと感じられます。中国では、幼稚園ですでに漢字や英語、そして楽器も教えていま

す。けれども、日本の保育園では遊ぶこと以外に何も教えないように思います。それから、私が中国で子どもを育てようとする最も重要な理由は、良い親子関係を作りたいからです。日本人の親子関係はとても冷たく感じられます。日本で育った周りの中国人の子どもたちを見ても、普段親に対する態度とか日本人の子どもたちと同じように見えます。私は、自分の子どもがやはり中国で育ったほうが祖父母とも一緒にいられるし、もっと暖かい家族関係が作れると思います。(全鳳花(仮名), 2011年7月28日, 東京にてインタビュー)

このように、全さんは子どもを中国で育てたいという考えから、夫とともに数年暮らした日本を離れ中国へ帰ることを決意した。全さんが子どもを中国で育てたい理由は二つ挙げられ、その一つは中国の学校教育を受けさせたいことであり、もう一つは最も重要な理由である子どもを中国で育てたほうが「良い親子関係」と「暖かい家族関係」が作れるということである。全さんが日本の学校教育より中国の学校教育に対する期待が大きいのは、幼稚園での幼児教育を含めた中国の学校教育がより多くの知識を与えるため「責任感が強い」と考えていることによる。それは、中国では子どもたちの教育における競争がすでに幼児の時から始まり、そのため幼稚園での幼児教育においてすでに小学校の入学のための科目を教えたり、子どもの資質を伸ばすための習い事を教えたりする。こうした中国の教育スタイルに慣れている朝鮮族の人びとは、日本の保育園や幼稚園における自主性を育てる「遊び」を中心とする保育や教育に対して、その「ゆとり」教育の良さも認めながら、一定の不安も抱いている。すなわち、子どもがそうした「ゆとり」の中で競争力が落ちることで、将来激しい競争の中で敗者として落とされるのではないかということへの不安である。そうした不安を解消するために、全さんが選んだのは日本の学校教育ではなく、中国の学校教育であった。全さんが抱えている不安は彼女だけでなく、日本在住の多くの中国人が抱えている悩みでもある。しかし、日本に残ることを決意した朝鮮族の中には、後述するように子どもに対する教育を学校教育にだけ頼るのではなく、家庭教育や学校外教育を積極的に行っている。一方、中国に帰ることを予定する朝鮮族の場合には、子どもを中国の学校に適応しやすくするために、小学校に入る前に帰国することが多い。

全さんが中国に帰るもう一つの理由である「良い親子関係」や「暖かい家族関係」を作るということは、全さん自身が中国で経験してきた家庭関係や親戚および友人や近隣との付き合い方などの再生産を意味する。朝鮮族の人びとの中には家族や親族および親戚との

繋がりを重んじる者が多い。全さんもそうであるが、彼女が目指す「暖かい家族関係」も子どもが両親だけでなく祖父母や親戚の人びととも日常的に接し合うことで、より豊かで繋がりの強い家族関係を作ることである。全さんは、子どもをそうした家族コミュニティの中で育てることで家族の「暖かさ」を感じさせ、子どもも将来同様な家族関係を維持・継承することを期待している。こうした朝鮮族の家族関係も朝鮮族親の主体的な考えと戦略的な行為により、次世代へ再生産されようとしている。

中国に帰る朝鮮族の中には、必ずしも子どもを朝鮮族学校に通わせるのではなく、漢族学校に通わせるのも多い。その一つの原因は、彼らは中国の東北部以外の大都市に行くことも多いため、そこには朝鮮族学校がほとんどないからである。子どもを漢族学校に通わせる場合、朝鮮族の言語や文化は家族や親戚と接する中で学んでいけるという意識が朝鮮族の中では一般的に存在する。そのため、漢族学校に通わせることで子どもに中国語を学ばせ、朝鮮族の言語やライフスタイルは家庭の中で覚えることが、「日本で日本語しか話せない日本人として育てるよりいい」と考える親もいる。このように、朝鮮族親たちが学校を選択することにおいて、どの言語が習得できるかは一つの大きな選択基準となっている。

ほかに、子どもの教育において「初等教育を中国で、中等教育は日本で、高等教育は英語圏で」というように教育の各段階をそれぞれ異なる国で経験させようとする朝鮮族の親もいる。柳小燕（仮名、30代）さんは12年前に来日し、日本で大学を卒業した後、日本の会社に就職した。その後、会社で出会った朝鮮族男性と結婚し、子どもを出産した。しかし、出産後の再就職が難しいため、2年前に2歳の子どもの中国の両親に預けて、就職活動とパートの仕事を続けている。子どもが中国の生活に慣れていくことによって、柳さんは子どもをすぐ日本に連れてくるのではなく、小学校も中国で通わせようと考えている。その理由には、母親に子育てを助けてもらうことで柳さんはもっと働けるし、夫婦で日本で稼いだ金を中国に送金することで、子どもが中国でもっと「良い教育」が受けられるという柳さんの考えによる。柳さんが言う「良い教育」とは、日本より中国の教育機関のほうがより多くの知識を与えてくれるし、中国では日本より少ない金額でもっと多様な補習校に通うことができるということである。そして、子どもが中国語も学んでほしいから、小学校まで通えば中国語は忘れないだろうと考えている。けれども、柳さんは中国の教育だけでは国際的に活躍するためには不十分だと考え、子どもの中等教育は日本で受けさせ、大学はアメリカに留学させることを考えている。特に、アメリカに関して柳さんは一種の憧れを抱いており、自分が行けなかったことを子どもには行かせてより良い教育を受けさ

せたいという意識を持っている。子どもが中学校に入る時日本に連れてくることを考えている柳さんは、日本で学校を選ぶとしても公立学校ではなく私立学校を希望している。それは劉さんが、私立学校は学費が高いが公立学校に比べて教育の質が高いと意識しているからである。そのために、彼女は懸命に働いて子どもの学費を貯蓄しようとしている。けれども、子どもが中学校の時に日本の学校に入るには、日本語や日本の生徒たちとの付き合いなどにおいて適応できるのかという不安も抱いている。子どもに各教育段階をそれぞれ異なる国において「良い教育」を受けさせようとする柳さんの考えから、朝鮮族の若い人たちは、自分の受けてきた教育のいい面も同じく子どもに与えようとすると同時に、自分が受けられなかった「より優れた教育」も子どもに受けさせようとする親の教育熱心さと教育への期待値の高さが観察される。グローバル化時代に対応できる多様な言語と多様な文化的背景およびより豊富な知識を身につけることが、多くの朝鮮族の親たちに共通に見られる子どもへの教育選択と教育戦略である。

(2) 子どもの潜在能力を伸ばす教育

日本で高等教育を受けた朝鮮族女性たちは、子どもを育てることにおいて、学校教育に応じる知識の習得も重視するが、子どもの才能を発掘しそれを伸ばすことも重視している。例えば、子どもが3~4歳になると算数や国語（日本語）の塾に通わせる親もいれば、英語や思考力向上のレッスンを受けさせる親もいる。それから、女の子の場合には、ピアノやバレエなどを学ばせることがよくある。日本在住の朝鮮族や中国人の人びとにとって、日本の保育園は「勉強の場」ではなく「遊びの場」としてのイメージが強い。したがって、教育熱心な親たちは子どもに学校外教育を利用してさまざまな才能を伸ばそうとしている。

中国では、満3歳~6歳までの子どもたちは幼稚園（中国では「幼児園」と呼ぶ）に通うことが一般的である。日本と異なり、中国の幼稚園では小学校に似ているカリキュラムを組み、一般的に最年少のクラスから子どもたちに国語（中国語）、算数、外国語（一般的に英語が多い）などの科目を教えている。したがって、幼稚園の段階から子どもたちは、すでに小学校への入学の準備としての「勉強」を中心とする生活を始める。近年中国の経済成長とともに、人びとの生活も比較的豊かになり、したがって親たちの子どもに使う教育費も増加している。特に都市においては、親たちが教育投資として子どもが小学校に入学する前から英語や絵描き、舞踊、ピアノなどを学ばせるのが一般的な現象として現れて

いる。

こうした幼稚園の頃から勉強中心でさまざまな習い事もする中国の子どもたちと比べて、日本の朝鮮族の子どもたちは小学校に入学する前にどんなことを学んでいるのだろうか。以下の事例を通じて考えてみたい。

李明華（仮名）さんの四人家族は東京都内の川沿いの新築高層マンションに住んでいる。マンションの入り口には二重のセキュリティが設置され、部屋の防音設備も優れている。李さんの家には日当たりのいい 13 畳のリビングがある。そのスペースの広さと部屋の防音がいいため、二人の子どもは家にいる時はいつもこのリビングで大声で叫んだり、走ったりしながら遊んでいる。また、このリビングの片隅にはピアノが置いてある（図 30 を参照）。李さん夫婦は長女がピアノクラスに通い始めてから、家でも練習ができるようにピアノを購入したのである。日本在住の朝鮮族の家庭では、李さんの家庭のように子どもにピアノを学ばせると同時にピアノも購入することが珍しくない。



図 30 ピアノの練習をしている朝鮮族家庭の子ども（2012 年 11 月 14 日、筆者撮影）

それでは、李さんは子どもになぜピアノを学ばせているのか。ピアノ以外にまたどんなことを子どもに学ばせているのだろうか。

今娘は 4 歳ですが、何か彼女に合うことをやらせたいです。そのためにいろいろ試していますが、今娘はピアノとバレエ、そして塾に通っています。バレエを学ばせるのは、娘がダンスや歌が好きであることもありますが、女の子だから姿勢もきれいになってほしいからです。国語（日本語）の塾に通わせるのは、娘が 3 歳の時にベネッセの講座を受けていたのですが、当時送ってもらった平仮名表を見て、自分で全部覚えたのでびっくりしました。中国では 3 歳頃になると幼稚園とかですでに文字を学びますが、日本の保育園や幼稚園ではなかなか教えてくれません。私は自分が住んでいる国の言語がとても重要だと思います。なぜなら、その言語を覚えるといろいろな情報を獲得することができるからです。たとえば、街の看板に何が書いてあるとか。娘はすでにある程度学ぶ能力があると思いますので、塾に通わせています。現在通い始めたばかりですが、娘がとても楽しんでいるようですので、今後も続けたいと思います。しかし、このよう

なことは子どもがいやがらないことを前提にしています。(李明華, 2010年7月12日, 2011年8月16日, 東京にてインタビュー)

李さんは中国で大学を卒業し、日本に留学して修士号を取得した。李さんの夫も中国で大学を卒業し、さらに日本に留学して修士号を取得した後、日本の大手会社に勤めている。李さんは日本で二人目の子どもを出産することで仕事を続けることが難しく、会社を辞めることになった。李さんの四大家族はすでに日本の永住権を取得することで日本で長期滞在することを決意し、東京都内でマンションも購入した。けれども、場合によって中国に帰ることも考えている。したがって、中国に帰ることも考えていることから家では子どもたちに意識的に中国語を教えることもある。家庭内における中国語の教育に関しては本章の第4節で詳しく述べる。

李さんは日本で暮らしている間には日本語の習得も重要であると考え、保育園や幼稚園での日本語の習得だけでなく、塾の教育を通じて子どもの日本語力を高めようとしている。そして、李さんは子どもに言語だけでなく、ピアノやバレーなどを学ばせようとする。それは、子どもに音楽の才能があると意識することでその才能を伸ばそうとするだけでなく、子どもの身体的な成長や子ども自身が興味を持つかどうかという多方面における考慮に基づいた決断である。しかし、李さんの子どもへの期待とともに習い事も増やしていくことが見られるが、これは無意識に子どもへの負担を増やしていく恐れもあるだろう。けれどもここで注目することは、李さんは子育てをする中で、子どもへの教育を単に日本の教育機関や自分の周りの親たちの子育てやり方を模倣したりするのではなく、中国にも目を向け、中国の教育方法も取り入れている。それは、子どもが将来より多くの子どもたちと競争することを意識し、そうした競争に向かうための一定の能力を備えさせることと潜在能力を最大限に伸ばしたいという親の教育観が観察される。

以下では、子どもの潜在能力を伸ばそうとするもう一人の朝鮮族の事例である。

娘は今3歳ですが、毎週脳の発達や思考力に関するレッスンを受けています。娘に遊ぶ中で興味を持たせるのが目的です。娘も興味を持っているようなので続けさせています。子どもが興味を持たないことは無理にやらせたくありません。(全鳳花(仮名), 2010年11月30日, 東京にてインタビュー)

全さんは李さんほど子どもに多くのことを学ばせてはいないが、彼女が選択したのは子どもの思考力を鍛える教育であった。この点は李さんの事例と少し共通する部分でもある。すなわち、二人とも子どもに単に知識を与えるのではなく、多様な情報に対する処理能力や考えて判断する能力などの思考力を鍛えようとするのである。彼女たちの求めている豊かな知識と優れた思考力は、ますます競争が激しくなる現代社会において個々人が社会的変化や自分の置かれている状況などを把握し、そうした変化に迅速に対応し、自分を向上させるための重要なスキルであると言えるだろう。高学歴朝鮮族の女性たちは、こうしたスキルを現代社会を生きる一つの方法として子どもに身につけさせようとし、そのための教育を積極的に行っている。

4. 高学歴朝鮮族の子どもへの言語教育戦略

日本で育つ朝鮮族の子どもたちは、日本の保育施設や教育機関（幼稚園、小学校、中学校など）に通うことが一般的である。しかし、朝鮮族の親その中でも高学歴朝鮮族の親たちは単に子どもを日本の保育施設や教育機関の教育に頼るだけでなく、家庭内における教育も積極的に行っている。彼らは家庭教育の中でも言語教育を重視し、家庭によって子どもに一つの言語を教える場合もあれば、複数の言語を同時に教える場合もある。しかし、それらの家庭に共通に見られるのはそれぞれの家庭内で複数の言語が使用されていても、主には一つの言語の教育に専念していることである。本論文ではその代表的なものとして、中国語を重視する家庭、朝鮮語／韓国語を重視する家庭、日本語を重視する家庭の事例を取り上げる。

なお、本研究で用いる「中国語」は、中国で一般的に「漢語」や「普通話」と呼ばれる中国の国家標準語を指し、「朝鮮語」は、主に中国において少数民族としての朝鮮族が使用してきた「民族語」を指す。そして、「韓国語」は韓国の国家言語であり、ソウル語を中心とする標準韓国語を指す。そして、朝鮮族が使用する朝鮮語を北朝鮮の言語と区別するために、北朝鮮の国語は「北朝鮮語」と称する。1990年代以降、朝鮮族の韓国への移動と彼らの韓国人と接する機会の増加および韓国のドラマや音楽などの影響の中で、朝鮮族がこれまで使用してきた朝鮮語は徐々に変化している。すなわち、韓国語の影響を受けることで、語彙やアクセントおよび言葉の表現などにおいて朝鮮語の「韓国語化」が進行している。したがって、朝鮮族の人びとの中では朝鮮語と韓国語の区別があいまいになっている。

こうした現象に基づいて、本論文では朝鮮語と韓国語の両方を含めて、「朝鮮語／韓国語」という表記を用いる。

以下では、5つの家庭の事例を通じて、それぞれの家庭内における言語使用状況と言語教育の実態を明らかにする。

(1) 中国語を重視する家庭

近年の中国経済の著しい発展とともに、世界各地からさまざまな機会を求めて中国を訪れる企業や人びとが急速に増加している。その流れの中で、中国語の国際的な市場価値も高まり、国際移動を行なう朝鮮族の中にも、次世代の中国語の習得を重視する者が増えつつある。日本在住の朝鮮族の場合には、子どもの中国語教育を家庭教育の中に取り組みることが多く見られる。以下では、夫婦とも朝鮮族である2つの家庭と妻は朝鮮族で夫は日本人である1つの家庭の事例を見てみよう。

<事例4>李明華（仮名）、女性、30代、主婦、中国で学士号、日本で修士号取得。夫も朝鮮族。長女3歳、長男4か月。

日本の永住権を取得したのですが、中国には私と夫の両方の親と親戚がいるので、いつか帰る可能性もあります。だから、子どもたちも中国人として、中国語が分からなければならないと思います。そして、何より私は朝鮮語より中国語にもっと慣れているので、子どもたちにも中国語で話しかける場合が多いです。夫は朝鮮語を使うのが好きなので、普段夫との間では中国語と朝鮮語を混ぜて話す場合が多いです。娘は保育園に通っているため普段日本語を使うことが多いですが、できれば家の中では中国語を話すようにしています。朝鮮語は子どもたちが祖父母とコミュニケーションをとるために必要な言語だと思いますが、私と夫の間では朝鮮語を使うことも多いので、子どもたちが自然に覚えていくのではないかと思います。小学校に入る頃からまた英語も学ばなければならないので、子どもたちにあまり負担をかけたくありません。朝鮮語や韓国語と比べて、中国語がもっとも学びにくいと思いますので、子どもたちに小さい時から少しずつ中国語を覚えさせたいです。(2010年7月12日、東京にてインタビュー)

李さんが子どもたちに中国語を教えようとするには主に三つの理由がある。一つ目

は、李さんにとって中国語が一番使い慣れている言語であり、二つ目は中国に帰る可能性を考えているからである。そして、三つ目は子どもたちに中国語を学ばせることで中国人という国民的帰属意識を獲得させようとするからである。したがって、日本の学校教育では習得しにくい中国語を家庭教育で補おうとしている。そして、李さんは自分の言語習得経験から中国語は言語的に短期で容易に習得できるものではないと判断するため、子どもが小さい時から少しずつ習得していけるように自ら指導している。ほかに、李さんの言語教育には選択的な戦略も見られる。すなわち、家庭内で中国語の使用と教育を重視するが、朝鮮語の教育には力を特に入れていないと言えよう。李さんは子どもたちが朝鮮語を主に使用する祖父母とコミュニケーションをとるためには朝鮮語を学ぶことが望ましいが、子どもたちが複数の言語を同時に習得することには大きな負担があると判断し、朝鮮語は夫婦の間で用いることによって、子どもたちが自ら習得していくことを期待している。

<事例5>張仁哲（仮名）、男性、40代、会社員、中国で学士号と修士号取得、日本で博士号取得。日本国籍取得。妻も朝鮮族。長女12歳、次女9歳。

私と妻の間ではいつも中国語を使います。娘たちは日本の学校に通うので日本語がもっと上手ですが、中国語も覚えてほしいから、家ではできれば中国語を使うようにしています。でも、家庭内だけでは中国語がちゃんと学べないので、娘たちを家の近くの中国語学院に通わせています。それまで娘たちは中国語をある程度聞き取れましたが、ほとんど話せなかったです。中国語学院に通い始めてからは、中国語をよく聞き取れるし、ある程度話すこともできるようになりました。娘たちが中国の祖父母と中国語で電話するのを楽しんでいるのを見て、とても嬉しいです。韓国語は、昔私が子どもたちに教えようと思って、韓国の友人から教科書を送ってもらったことがありますが、仕事が忙しかったので教える暇がなかったです。妻は朝鮮語や韓国語ができないので、諦めました。私は中国で朝鮮語を習ったのですが、あまり使うことがなかったので今はほとんど忘れしました。子どもたちも将来たぶん朝鮮語や韓国語より中国語をもっと使うことになるのではないかと思います。（2010年9月4日、東京にてインタビュー）

日本国籍を取得した張さんの場合には、子どもたちに中国語を学ばせるのが必ずしも中国に移動させるためではない。彼は中国語が中国の両親や親戚の人びととコミュニケーションを行うための重要な道具であることと、子どもたちが将来中国語を用いて諸活動を行

う可能性を考えたことから、子どもたちに中国語を習得させようとしている。そして、中国語は張さんと妻との間で一番多く使われる言語であり、家庭内において共通言語になっている。朝鮮語／韓国語は妻が駆使できないため、家庭教育にも取り入れることができなかった。こうした家庭内の言語使用状況から、夫婦間で共有できる言語が子どもに再生産される可能性も高いと考えられる。しかし、家庭内の言語環境だけでは言語教育の効果が顕著でないことを意識した張さんは、語学学校という学校外教育も利用することで言語教育の目標を達成しようとしている。

<事例6>姜雪（仮名）、女性、30代、会社員、日本で学士号取得、カナダに1年留学。夫は日本人。長女4歳。

夫との間では基本的に日本語を使います。夫は日本人ですが、昔中国で中国語を少し習ったことがあるので、たまに中国語も使います。特に私の母親が中国から日本に来る時は、夫はいつも中国語で私の母親とコミュニケーションを行います。娘は保育園に入るまでは、中国語と韓国語（祖母との間では韓国語をよく使う）をよく使いました。しかし、保育園に入ってから日本語がちゃんと聞き取れなかったもので、それ以降は家でほとんど日本語を使っています。最近では、私がまた娘に簡単な中国語を教え始めています。娘が小学校に入る前に、中国の実家に送って中国語をもっと学ばせようかと考えています。夫も娘が中国語を学ぶのをとても賛成しています。私が中国人だし、実家も中国にあるから、子どもが中国語が学べる環境をちゃんと生かさなければもったいないと思います。子どもが中学校に入ってからでは、カナダに留学させることも考えています。

（2012年9月10日、東京にてインタビュー）

夫が日本人で、すでに日本国籍を取得した姜さんは、家庭内では日本語を使うことが多いが、場合によって中国語も使っている。中国語を少し学んだことがある夫も子どもが中国語を学ぶことに賛成しているため、姜さんは家庭内で子どもに少しずつ中国語を教えるように努力している。さらに姜さんは、自分が中国語という言語資本を持っていることと、中国にある親族のネットワークも活用することで、積極的に子どもに自分の言語資本を継承させようとする。

ほかにも日本人男性と結婚した朝鮮族女性の中には、夫との間では日本語のみ使用していても、子どもには中国語を習得させるために、夏休みや冬休みに中国にいる兄弟の家に

子どもを送って短期留学させる現象も見られる。韓国の場合にも、韓国人男性と結婚した朝鮮族女性の中には、子どもに中国語を学ばせるために、中国の東北部にある実家に子どもを送り、現地の朝鮮族学校に約 1 年間留学させる現象が現れている。こうした家庭内では自分の持っている言語資本を生かすにいが、国境を超えた親族のネットワークを活用することでその言語を子どもに習得させようとするのが、近年移動する朝鮮族の中で増えつつある。

上記の三つの事例とも、親は「中国語は教育投資に値する言語である」と認識しているため、家庭教育だけでなく、語学学校の教育および中国への短期留学などのさまざまな方法を用いて、子どもの中国語を習得させようとしている。

(2) 朝鮮語／韓国語を重視する家庭

日本在住の朝鮮族の中には、朝鮮語を「朝鮮族」と定義する際の重要な基準として認識する者が少なくない。特に夫婦とも朝鮮族で、二人の間で朝鮮語／韓国語を用いることが多い場合、「朝鮮族だから、子どもも朝鮮語を学ばなければならない」という考えが強く、子どもに朝鮮語／韓国語を習得させようとする傾向がある。さらに、近年朝鮮族の韓国への移動の増加および中国と韓国との経済的文化的な交流が増える中で、朝鮮族の人びとは朝鮮語／韓国語の習得をエスニック・アイデンティティを維持するための手段として考えるだけでなく、就職にも有利な一つの言語として認識することもある。

グローバル化の進展は、ヒトや物、カネだけでなく、国境を越える情報の伝達を加速化させている。今日、すでに国際移動を行わなくても、海外の情報を容易に獲得することができる。日本在住の朝鮮族の人びとは、インターネットを通じて中国だけでなく、韓国の音楽や映画、テレビドラマなどのポピュラーカルチャーを日常的に接している。一部の朝鮮族女性にとって、韓国ドラマを観ることがすでに彼女たちの生活の一部になっている。韓国ドラマを通じて、朝鮮族の女性たちは韓国の言語やライフスタイルおよび韓国の人びとの価値観への理解を深めている。ある朝鮮族女性から「韓国ドラマをよく観るけど、韓国語の表現が面白い」という声も聞かれた。この「韓国語の表現が面白い」という言葉は、韓国語の語彙の豊かさとその言語がもたらす親近感を指すものである。また、朝鮮族女性の中には、韓国ドラマに出る男性主人公の外見や言語使用および感情表現などに親しみを覚えることで、ほかの国の男性より「格好いい」と感じることも多く見られた。生まれ故

郷を離れて日本へ移動した朝鮮族にとって、「郷愁」を慰める一つの方法が、言語的および文化的に親近感を持たせる韓国ドラマといったポピュラーカルチャーに接することであった。

以下では、家庭教育において朝鮮語／韓国語の使用を重視する 2 つの家庭の事例を見てみよう。

<事例 7>全鳳花（仮名）、30 代、朝鮮族、日本で学士号を取得、会社員。夫も朝鮮族。長女 4 歳。

私は家で夫とは韓国語をよく使いますが、子どもとは日本語を使うことが多いです。テレビで流されているのも日本語だし、保育園で使うのも全部日本語なので、子どもは当然日本語を一番多く使うようになります。けれども、できれば家で子どもに韓国語を使うようにしています。私の両親は、娘が生まれた時から毎年日本にきて約半年滞在するので、そのおかげで娘が祖父母から韓国語をたくさん学ぶことができました。夫の両親は数年前からずっと韓国に住んでいるので、毎年のお正月には私が子どもを連れて韓国に行きます。娘は今韓国語があまり話せないですが、結構聞き取れます。韓国語で話しかけたりすると、何を言っているのか分かっているようで、すぐ日本語で返事してくれます。うちはいつか中国に帰るつもりなので、中国語は帰国してから学んでも大丈夫だと思います。今はせっかく日本にいるから、日本語も覚えてほしいし、朝鮮族だから韓国語もできないとだめだと思います。中国に帰ると、韓国語は一つの外国語にもなるので、学んでおいたほうが子どもが大きくなった時にきっと役に立つと思います。（2010 年 11 月 30 日、東京にてインタビュー）

全さんの子どもは日本の保育園に通っているため、ほとんど日本語しか話せないが、全さんは家庭教育を通じて子どもに韓国語を習得させようとしている。それは、韓国語が家族三世代の間でコミュニケーションを行うための一番重要な言語であるだけでなく、朝鮮族としてのエスニック・アイデンティティの獲得するための方法であり、そして一つの外国語としても将来就職にも役立つと考えているからである。特に、全さんの「朝鮮族だから韓国語もできないとだめだ」という言葉には、朝鮮族のエスニック言語を失うことは「朝鮮族」でなくなるという意味が含まれている。自分の親の世代が朝鮮語を維持してきたように、全さんは自分の子どもにもその言語を維持・継承させようとしている。それは、渡

辺（2004）が指摘したように「民族固有の文化や世界観を次世代に伝達し、次世代がそれを継承していくためには、それが反映されている言語が必須である。いわば、いわゆる（他の言語に）翻訳不可能な部分こそ、その文化の特質であると言えるかもしれない」（p.134）からであろう。

全さんは、中国語は中国に帰った後でも十分な言語環境が与えられると考えているため、日本にいる間は中国語の教育を行っていない。日本語は現在日本に住んでいると同時に、子どもが日本の保育園に通うために必要な言語であるが、将来に活用できるもう一つの外国語として考えているため、家庭内でも子どもとの間では日本語を用いることが多い。全さんは、中国語と日本語は居住国の言語であるため、社会的な言語環境が十分だと考えるが、韓国語は韓国に住まない限り子どもが自然に習得できる環境が不十分であることを意識し、積極的に家庭教育に取り入れようとしている。

<事例8> 申明愛（仮名）、30代、朝鮮族、会社員、中国で学士号取得、日本で専門学校卒業。夫は韓国人。長男3歳。

夫は韓国人で、私も母語は朝鮮語（主に中国にいた時に使っていた朝鮮語を指す）なので、夫の間では韓国語を使うほうが便利です。子どもも韓国語ができなければならぬと思うので、保育園では日本語を使い、家では韓国語を使うようにしています。夫は息子を韓国人として育てたいから、小学校に入学する時には韓国の学校に通わせたいと言っています。私の実父母や義母、そして親戚の多くも韓国に住んでいるので、私も韓国で暮らしたいと思います。夫は子どもが中国語も学んでほしいと言っていますが、家で私一人だけが中国語を使うのはなかなか難しいです。私は、むしろ子どもに中国語より世界的に通用する英語を学ばせたいです。今年の初めからベネッセの英語教材を使っていますが、子どもがDVDを見て少しずつ覚えていきます。でも、家で主に使うのはやはり韓国語です。（2012年9月2日、東京にてインタビュー）

申さんが家庭内で韓国語を主に使うのは、夫婦との間で一番多く使われるのが韓国語であると同時に、子どもにも習得させたいからである。申さんの三大家族は現在日本で生活しているが、将来韓国に帰ることを予定し、子どもが小学校に入学する際には韓国の学校に入れようとする。子どもに韓国の学校教育を受けさせたいという考えには、申さんの夫が子どもを「韓国人」として育てたいという意識が強いことによる。したがって、申さん

の家庭は事例7の全さんの家庭と異なり、韓国へ移動するための準備として家庭内で韓国語の教育を行っている。そして、申さんは日本語は日本で暮らすためには必要な言語であり、子どもが保育園で習得することに任せているが、必ずしもそれを一つの言語資本として蓄積しようとする意識はあまり見られない。そして夫は申さんが中国語が駆使できることから子どもにも中国語を教えることを希望するが、申さんはむしろ世界的に使用範囲が広く、自分は十分習得できなかった英語により投資する価値があると考え、子どもに英語を習得させようとしている。

上記の事例7と事例8の共通点は、韓国語の教育を行う原因の一つが、子どもに「朝鮮族」あるいは「韓国人」というアイデンティティを獲得させることである。けれども、両者の異なる点は、全さんは日本や中国（東北部の朝鮮族学校以外の教育機関）の学校教育では保障できない朝鮮語／韓国語を家庭教育によって補おうとする一方、申さんは子どもを韓国の学校に通わせるためにその準備の一環として家庭内で韓国語の教育を行うことである。

（3）日本語を重視する家庭

日本在住の朝鮮族は、まず日本で生活するためには日本語を習得することが必要になる。本章で取り上げた朝鮮族はほとんど中国の中等教育で日本語を外国語として習得し、さらに日本の高等教育機関で教育を受けたため、日常生活における日本語の使用には特に困難を感じない。そのため、彼らは日本語を学び始める自分の子どもへの指導もできる。彼らは子どもが保育園や幼稚園に通う前から、日本語を教え始めることが多い。けれども、子どもが保育園で保育士やほかの子どもたちとのコミュニケーションがある程度できるようになると、すでに述べたように家庭内で主に中国語や朝鮮語／韓国語を教える場合が少なくなる。しかし、下記のように家庭の中で子どもとは日本語のみ用いる場合もある。

<事例9>徐英実（仮名）、女性、30代、中国で学士号、日本で修士号取得、現在博士後期課程在籍。夫も朝鮮族。長男4歳。

私は、子どもがまず一つの言語をちゃんと学んでほしいです。今は日本に住んでいるから、日本語をしっかり学べばそれでいいと思います。家で私は夫の間では朝鮮語と中国語そして日本語の三つの言語を混ぜて使うことが多いですが、息子とはほとんど日

本語のみ使います。息子は朝鮮語が少し聞き取れますが、あまり話せません。私の母親や姉妹そして親戚の多くは普段朝鮮語／韓国語を使いますので、息子もある程度学べると思います。将来中国に帰る予定なので、中国語は中国に帰ってから学んでも間に合うと思います。中国で暮らすためには、中国語をちゃんと学ばなければならないと思うので、子どもが小学校に入る時は中国の漢族学校に通わせるつもりです。私が日本のことが好きだからかもしれませんが、息子が日本にいる間に日本語をちゃんと学んでほしいし、中国に帰っても忘れないでほしいです。将来息子が中国の学校に通っても、夏休みとかに日本に来てもっと日本語を学んだり、日本社会を体験できるようにしてあげたいです。(2011年12月18日、名古屋にてインタビュー)

中国に帰ることを予定している徐さんは、日本で子育てする間に子どもに中国語を教えるのではなく、日本語の習得に専念させている。そのために、子どもが保育園で日本語を学ぶだけでなく、家でも日本語のみ使用できるように積極的に言語環境を作っている。徐さんは居住国の言語をちゃんと学ぶべきという考えを持ち、日本にいる間には子どもに日本語を習得させている。それは中国に帰ると、日本語に接する環境が限られているため、日本にいる時の社会的な言語環境を最大限に生かしたいという考えによる。けれども、徐さんが子どもに日本語の習得を重視することは、単にそれを一つの言語資本として蓄積するという考えに限るものではない。それは、徐さんの「日本人の仕事に真摯に取り組む姿勢や人への思いやりなどに魅力を感じる。息子にも是非そういった面を見習ってほしい」⁹という文化的な側面から、子どもに理解を深めさせると同時に学ばせることが重要な目的である。そのために子どもが自ら情報収集を行ったり、日本語によってコミュニケーションを行う際の重要な道具として日本語を習得する必要があると強く意識している。

以上、家庭教育においてそれぞれ中国語、朝鮮語／韓国語、日本語を重視する5家庭の事例を見てきた。これらの事例から、日本在住の高学歴朝鮮族の人びとは子どもの教育において主に三つの言語を考えていることが分かる。すなわち、居住国の言語、家族の間でコミュニケーションをとると同時に「朝鮮族」や「中国人」という帰属意識を獲得させるための言語、そして今後の移動や子どもの将来の就職に有利な言語などである。そして、彼らはそれぞれの言語を子どもに習得させるために、学校教育と語学学校のような学校外教育および家庭教育といったさまざまな教育の方法を用いて、それぞれの教育の目標を達成しようとしている。

しかし、その中でも高学歴朝鮮族の親たちは特に家庭教育を重視し、自ら持っている言語文化資本を家庭の中での教育を通じて積極的に次世代に継承させようとしている。朝鮮族の親たちが家庭内において言語教育戦略を行うことができることには、彼ら自身が三言語あるいは四言語の言語資本を有すると同時に高等教育を受けたことが不可欠である。複数の言語を身につけることによって、居住国での適応やさらなる移動の準備そして家族や親戚との繋がりおよびエスニック・アイデンティティの維持といった拮抗する諸要素のバランスを保つことが、移動する高学歴朝鮮族の生き方であり、彼らの次世代への教育の臨み方でもある。このように、日本在住の高学歴朝鮮族の家庭内の言語使用と言語資本の再生産は、彼らのはっきりとした目標と子どもの受容に合わせた戦略的行為によって進行されている。

5. ハイブリッド・アイデンティティの構築

(1) 高学歴朝鮮族のハイブリッド・アイデンティティの創造

日本在住の朝鮮族は、一般的に日本の人びとから「中国人」と呼ばれている。それに対して、朝鮮族の人びとも一般的に「中国人」と自称する。彼らの「朝鮮族」としてのエスニックな部分は、日本社会であまり知られていないと同時に、あまり問われないものでもある。それは主に、朝鮮族の人びとの自己主張によって周りの人びとに知られる場合もあれば、単に朝鮮族のエスニック・グループの中で維持される場合もある。朝鮮族の中で「日本人の方に自分が朝鮮族であることを説明しても、相手がよく分からないし、関心もないようだ」という発言がよく聞かれる。こうした「朝鮮族」というエスニックな部分が日本社会で明確にカテゴリー化されていないことが、むしろ朝鮮族の人びとに自分たちのアイデンティティを自由に表現する空間を与えていると考えられる。

グローバル化の進展とともに人の国際移動が急速に増加する今日、移動する人びとの帰属意識も多様に変化している。平野（2000）は「現代の重層的な国際社会のなかでは、個人は異なる次元上の複数の集団に、意識の強度に違いはあっても、同時に帰属することを意識する。今日の国際社会のなかで、個人のアイデンティティは複合的な性格を帯びるようになってきているのである」（平野 2000, p.193）と述べ、個人の複合的なアイデンティティについて指摘した。そして、Schumann（2011）は、トルコ系ドイツ人の事例を取り上

げ、彼らの中で行われるドイツ文化を受容するのか、それとも自分たちのエスニック文化を維持するのかという両者の間の絶え間ない交渉は、一種の特別なアイデンティティを創造すると主張する (Schumann 2011, p.2)。すなわち、自分の文化を選択することでもなく、相手の文化を選択することでもなく、両方の文化をもつことで、「Third Space」(第三スペース)とも呼ばれるものとしての「Hybrid Identity」(ハイブリッド・アイデンティティ)が創出されるとしている。

本論文で取り上げた朝鮮族の中でも、国際移動によってアイデンティティが多様に変化していることが見られる。彼らの中には、移動によって「中国人」意識や「朝鮮族」意識が強くなる場合もあるが、新しい現象としては自分の属する国籍にこだわらず、複数の国や地域およびそれとは異なる次元の共同体にも強い帰属意識をもつことが見られた。朝鮮族のこうした新しいアイデンティティの構築は、主に文化的な要素による自己規定である。本研究では、個々人の内面における複数の文化の交渉あるいは統合による新しいアイデンティティの創造に注目することで、Schumann が定義した「ハイブリッド・アイデンティティ」という語を用いる。

それでは、以下では具体的な事例を通じて移動する朝鮮族のハイブリッド・アイデンティティの構築について検討する。まず 30 代前半に日本に留学し、すでに日本国籍を取得した林さんの事例を見てみよう。

<事例 10>林晋洙 (仮名), 50 代前半, 中国で学士号, 日本で修士号と博士号を取得, 専門職。日本国籍取得。

最初に日本に来た時に、日本人の方から「あなたは何人ですか」と聞かれましたが、当時はとても答えにくかったです。私は、自分が中国から来たが「朝鮮族です」と答えると、彼らは理解できないようでした。それを説明するのも、とても難しかったです。その後、また息子との対話もあったのですが、息子は日本で生まれ育ったので、私が中国から来た朝鮮族と言っても、彼はなかなか理解できなかったようです。そうした理解してもらえないことで、私は一体自分が何者だろうという葛藤を経験しました。それで、考えた末に、それも日本に来てから約 10 年経った後ですが、自分のことを「東北アジア人」と自称することにしました。それは、近年私が東北アジアのさまざまな国 (主に中国, 韓国, 北朝鮮, 日本, ロシア, モンゴルなど) や地域を訪問することが多かったですが、それらの国の言語もある程度できるし、それらの国の人びとも仲良くしてきて

いるので、そうした地域にも親しみを感じているからです。これで、私のアイデンティティの問題は解決できたと思います。それに対して、息子も納得できたようです。(2011年12月17日、京都にてインタビュー)

林さんは仕事による海外出張が多いが、中国の国籍であることと海外への移動の際にビザの申請の手続きが複雑であるため、出張の日程に合わない場合が多いことから、6年前に日本国籍を取得した。林さんは自分が国籍を変えたのは、国際移動が自由にできることが目的であるため、名前は昔のままだという。そして、林さんは多様な国へ移動する中で、すでに「朝鮮族」という言葉だけでは自己規定できなくなったことに気づいた。彼が上記の東北アジアのそれぞれの国や地域に帰属意識をもつことになったのは、来日してから約10年経った後のことであり、それまではさまざまな呼び名で自称したりしていた。けれども、林さんが自称する「東北アジア人」という言葉には、「中国人でもあり、朝鮮半島（韓国と北朝鮮両方を含む）の人でもあり、日本人でもあり、モンゴル人でもある」ことを意味すると同時に、その反対である「中国人でもなく、朝鮮半島の人でもなく、日本人でもなく、モンゴル人でもない」ことも意味すると語る。それは、林さんの中にある多様な言語や文化がそれぞれ彼の一部であると考える時には、そうした言語や文化が各自創造される地域やそこにおける人びとと一定の共通点があると言えるが、単に一つの地域に時間的および空間的に深く関わることを基準として規定する場合には、彼をどの国や地域の人としても定義できないということである。

ベネディクト・アンダーソン(2007)は、「国民とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である—そしてそれは、本来的に限定され、かつ主権的なもの〔最高の意志決定主体〕として想像される」(ベネディクト・アンダーソン 2007, p.24)と定義している。こうした「国民」概念は、主に国籍の属する国に限定することを指し、近代社会において正当性をもっていた。したがって、このような国民概念では林さんの「中国人でもあり、韓国人や北朝鮮人でもあり、日本人でもある」という定義は成立しにくいのである。平野も指摘したように「近代においては、個人が帰属意識をもつべき集団は、国民あるいは国民国家に限定された。(中略)平面的な構造の国際社会のなかでは、個人が国家Aに帰属するということは、同時にそれ以外のどの国家にも帰属できないということに等しかった。Aの国民であることが個人の人格そのものでさえもあった」(平野 2000, p.193)。グローバル化時代における人びとの国際移動が日常化しつつある今日、人びとのライフスタイルも

大きく変化している。すでに複数の国や地域において人生のそれぞれの時期を過ごす人びとが増えている中で、従来の国民概念では彼らの帰属を規定することに限界があるだろう。

したがって、移動する朝鮮族の人びとは国籍や出身のエスニック・グループに拘らずに、文化的な側面から自分の帰属を規定し、新しい自分を表現しようとしている。白石（2007）は「共同体は、その成員となる人々によって「我々」という一体性をもつ集合体として想像されることで成立する。それは人々の文化的アイデンティティの問題である。すなわち、一人ひとりの成員が、自己の帰属に関する時間的空間的な意味の創造／想像を行い、あるいは、創造／想像された時間空間を自己のものとして受容することである」（白石 2007, p.203）と指摘している。上記の林さんは、複数の国や地域の人びとと言語的文化的に相互に認識し、相互に受け入れることで「われわれ」意識を持つことになった。そして、彼はそうした複数の国や地域を一つの空間的な共同体として想像することで、その共同体に帰属意識をもつことができた。

このほかにも、国際移動を行う朝鮮族の若者の中には、国民的帰属意識に加えて日常において本人と密接な関係がある企業といった集団に対する帰属意識をも新たに獲得する事例が見られる。以下では、中国でアメリカ資本の会社に就職した後、日本に派遣され、日本と中国の間を行き来する朝鮮族の若者の帰属意識の変化について見てみよう。

<事例 11>徐基峰（仮名）、男性、20代、朝鮮族、中国で学士号を取得、アメリカ資本の企業の社員、日本に転勤。

私は自分の「中国人」としての国民意識が薄くなっていると思います。それに代わってきたのは、会社への帰属意識と自己認識です。今の私にとって最大の利益集団は会社であり、私のほとんどの社会活動は会社の環境を通じて表すことになります。それに個々人の競争力が最も重要になっています。中国にいた時は、常に国家情勢によく関心を寄せていたし、自分のやっていることを常に国家の発展につなげて考えていました。しかし、企業に勤めてからは企業意識がだんだん強くなり、自分と企業との関連性にだんだん気づくようになりました。特に多国籍企業は利益を創出することが前提になりますが、多様な考え方や価値観が受け入れられることもあるため、そうした環境がますます好きになってきました。（2010年2月13日、東京にてインタビュー）

徐さんは中国で暮らしていた時は、中国国民として「中国人」意識が強く、常に自分を

国と関連づけて考えることが多かったが、企業に勤めてからは国より企業への帰属意識を強く持つようになった。そして、特にアメリカ資本の企業に勤めるようになり、さらに日本に転勤することで徐さんのそうした変化はより顕著に現れている。中国で生まれ育ち、朝鮮族学校に通うことで中国語と朝鮮語、そして日本語を習得し、その後英語も独学した徐さんは、多様な考え方が受け入れられる多国籍企業の中で自分の居場所を見つけ、それによって「居心地良さ」も感じるようになった。ここでの「居心地良さ」とは主に、ある集団において、個人がその集団の多数の人びとにその一員として認められると同時にその個人の背景や個性などがその集団の人びとに受け入れられることで、安心感を得ることを指す。そして、個人はそうした集団の中で緊張感をほぐし、心を解いて自分を表現することで、一種の喜びと満足を感じ、したがって心理的な安定をもたらすことができる。徐さんの場合には、彼が自分の中にある多様な文化的な要素による価値観や考え方が多国籍企業といった集団において受容され、それによってこれまで維持してきた多様な言語的文化的な要素を肯定的にとらえることができた。さらに、そうした言語や文化的な要素を隠すことなく、表現できることと引き続き維持できることによる一種の安心感を覚える。したがって、徐さんはこの企業に居心地良さを感じることで、その集団への帰属意識を強く持つようになったのである。

このように、林さんと徐さんは国際移動の中で自分の中にある複数の言語や文化に気づくことで、彼らのアイデンティティは大きく変化している。彼らは移動の中で自分が誰なのかを考えるようになり、したがって主体的に自分を表現するようになった。国民国家の枠組みを超え、政治的および歴史的な枠組みを超えた一種のハイブリッドな文化的アイデンティティが高学歴朝鮮族の中で創出されている。

(2) 子どもの名前と親のアイデンティティ

日本で生まれた朝鮮族の子どもたちは、両親によって作られた名前が中国式、韓国式、日本式などさまざまであり、その読み方も多様に表われている。その読み方が日本語読みなのか、中国語読みなのか、韓国語読みなのかによって、その意味も少し異なる。例えば、「李」という名字の中国語読みは「リ」であるが、韓国語読みは「イ」になる。日本における朝鮮族の親自身の名前は漢字の発音において、その発音を中国語読みにして使用してきたが、彼らの子どもの場合には必ずしも中国語読みの名前が再生産されておらず、韓国

語読みや日本語読みにすることも多い。以下では日本在住の朝鮮族の子どもたちの名前の諸相とそこに表われている親の考えやアイデンティティについて検討したい。

朝鮮族の子どもたちの名前の中には、「徐百合（じょゆり）」のように、名字は親の名字のままであるが、名前は日本人の名前によくある名前の発音と漢字を選ぶことが珍しくない。さらに、子どもの名前において、「金(きん)政(まさ)浩(ひろ)」のように漢字を見ると韓国や中国で使われる名前だと推測されるだろうが、読み方を見ると興味深いところがある。「金」という名字は「きん」という呼ぶ場合もあるし、「きむ」という呼ぶ場合もある。日本在住の中国人（朝鮮族を含む）の場合には「きん」と発音するケースが多いが、韓国人の場合には韓国語の発音に近い「きむ」と発音することが一般的である。「政浩」を「まさひろ」と発音する場合には、日本人の名前に判断されやすいだろう。をれを中国語として発音する場合には「チョンハオウ」となり、韓国語として発音する場合には「ジョンホ」となる。そして漢字としての音読みは「せいごう」になる。このように、一つの名前において漢字の選び方とその読み方の選択には、朝鮮族の多様な考えが込められている。

以下では、日本で生まれた朝鮮族の子どもたちの名前をめぐって、親の考えについて見てみよう。

日本国籍を申請した時に、家族の名字を統一する必要があつて、家族全員が夫（漢族）の名字の「張」に統一しました。そして、子どもたちの名前を漢字は変えなくて、発音だけを変えました。つまり、日本人が読みやすいように、中国式ではなく、日本式の読み方にしました。なぜなら、長男と次男のもともとの名前の発音は、「かくぐん」「かくしょう」という中国式の読み方だったため、保育園で保育士たちがそれを発音しにくかったようです。それで、(日本に)帰化する時に子どもたちの名前を、名字は変えなくて、名前だけを日本人になじみのある発音に変えました。別に外国人だから日本で差別を避けるために行った戦略ではありません。(姜海月(仮名)、2010年3月28日、東京にてインタビュー)

子どもの名前を日本人が読みやすいようにするために、日本式の読み仮名を付けた姜さんと比べて、下記の李さんの場合には日本文化を取り入れたいという考えから、子どもの名前の発音を日本式の読み仮名にしている。

私は日本が好きで、日本に留学にきました。そして、すでに日本で10年以上暮らしています。娘と息子も日本で生まれたので、子どもたちの名前に日本の文化も取り入れたいという気持ちが強かったです。娘と息子の名前の漢字は、中国人や韓国人の名前によく見られる文字ですが、その読み方は日本人の名前によく見られる「みえ」と「まさお」という発音を使っています。(李明華, 2010年7月12日, 東京にてインタビュー)

上記の二つの事例から、朝鮮族の若い人たちの中には子どもの名前の付け方やその読み方において、多様で柔軟な考えを持っていることが分かる。二つ目の事例の場合には、移動先の日本が好きで子どもの名前にも日本の文化を表現したいという考えがあり、一つ目の事例の場合には日本での集団生活において子どもの周りの人たちへの配慮として、彼らが呼ばれやすいように名前の発音を変えるなどの行為が見られる。李さんの発言からは、李さん自身の中にある日中韓3国の言語的文化的側面が子どもの名前に十全に反映されていることが分かる。李さんの場合には、子どもの名前が日中韓3国のどの国においても通用することを期待して作った名前でもあると考えられる。それは、親がこの三つの国を一つの活躍の場として考えていると同時に、それぞれの国や地域に対して一種の文化的な帰属意識を有していると言えよう。

また、上記の事例以外とは異なり、一部の朝鮮族の中には子どもが外国人として学校で日本人の子どもたちにいじめられることを恐れ、子どもの名前を日本人の名前に変えるケースも見られる。そうした人の場合には、子どもが小学校に入る前に日本に帰化し、日本国籍を取得することで家族の名字と名前を全部日本人と見られる名前に変えている。けれども、彼らの元来使用していた名前は依然として家族や親戚および友人(日本人以外の友人を指す)の間では使い続ける場合が多い。移動先において状況によって子どもの名前を変更することは、新しい社会環境に置かれている不安とそうした環境の中で最大限に子どもを守ろうとする親の行為として考えられる。

ほかにも、朝鮮族の子どもの中には「美蘭」(みらん/びらん)のように、朝鮮族の中で伝統的に付けつづけてきた名前を抵抗なく子どもに付ける場合も多い。そして、韓国の好きな俳優の名前を子どもに名づけることもある。

このように、子どもへの名前から、日本在住の朝鮮族の多様で柔軟な考え方と彼らの中に複数の文化の統合によるハイブリッドなアイデンティティが形成されていることを見ることができる。多くの朝鮮族にとって、名前は単にエスニック・アイデンティティを表現

したり、自分のエスニックな出自を隠したりするための手段ではなく、自分の文化の多様性や個性を積極的に表現する一つ方法であると考えられる。

(3) 朝鮮族のハイブリッドな食生活

朝鮮族の人びとは中国で暮らしていた時には中国式と韓国・朝鮮式の結合による朝鮮族の独特な食文化を維持していたが、彼らが日本に移動した時にはそれまで維持してきた食生活にさらに日本食や洋食も積極的に取り入れている。日本在住の朝鮮族は普段の食生活において、一般的に中国式の炒め物（豚肉と野菜の炒めなど）を作ることが多いが、韓国式のデンジャンチゲやキムチなども食生活の一部として欠かせない。それに、朝鮮族式のムチュム（野菜や山菜などの和え物）や日本式の焼き魚、煮物、すきやき、洋式のハンバーグやサラダ、インド式のカレーなども普段の食卓に頻繁に現れる。特に、キムチ（白菜キムチ、大根キムチ、水キムチなど）は家庭内で作る場合もあれば、新大久保（東京都内）のコリアンタウン（図 31 と 32 を参照）やインターネット上の通信販売を通じて購入する場合もある。コチュウジャンのような伝統的な調味料は、韓国食品店で購入する 경우가多いが、中国の実家から自家製のものを送ってもらう場合もある。

以下では張さんと李さんの家の食卓の食べ物について見てみよう。

中国にいた時は母親がいつもコチュジャンやデンジャン、キムチを作っていました。それで、小さい頃から私はそれらを食べていたのですが、日本に来て後も食べ続けています。コチュジャンや漬物は毎年中国の実家に帰る時、母親と義母が作ったものを日本に持ってきます。キムチは妻もよく作っています。お正月とかの時には新大久保（コリアンタウン）に韓国のお餅やトックを買いに行ったりします。娘たちは私が食べるのを見て、よく真似して食べたりします。長女はすでに辛いものを平気で食べるようになりました。けれども、娘たちの好きな食べ物は私より多様なので、妻は娘たちのためにハンバーグや日本食もよく作ります。このような多様な食生活は子どもたちにきっと何かの影響を与えていると思います。（張仁哲，2010年9月4日，東京にてインタビュー）

うちの普段の食生活には中華料理，韓国料理，日本料理がそれぞれ入っています。中国式の炒め物もよく調理し，子どもは餃子が好きなので普段よく作ります。中国のラー

油とか乾豆腐、香菜などの食材を家の近くの中国食品店でよく買います。韓国のコチュジャンやキムチなども中国にいる時からずっと食べてきたもので、今も続けています。コチュジャンは韓国食品店で買ったり、義母が日本にくる時に作ってもらったりします。夫はキムチが大好きなので、今は自家製で作れるようになりました。私と夫は韓国風のチゲが好きで、味噌も韓国味噌を使って調理することが多いです。けれども、子どもたちが生まれてからは、日本の味噌も好きになりました。日本の味噌は味が浅いので、子どもたちが飲む味噌汁にはぴったりだと思います。日本の焼き魚や煮物、お鍋もおいしいし、体にいいと思うのでよく作ります。娘もこのような多様な食生活にすでに慣れているようです。(李明華, 2010年7月12日, 東京にてインタビュー)

上記のように、日本在住の朝鮮族は中国に暮らしていた時からコチュジャンやキムチのような祖父母の手料理を家庭内の食生活の一環として継承してきたことが分かる。こうした朝鮮族の食文化が、彼らの移動とともに国境を越え、移動地において定着している。そうした中国で維持してきた食文化が日本での生活においても依然として維持され、それが朝鮮族の次世代にも継承されつつある。それだけでなく、日本在住の朝鮮族の人びとは、移動先で出会った新しい食品や食材も積極的に家庭の食生活に取り入れている。特に朝鮮族の母親たちは子どもの健康を考慮して食材を選ぶことが多く、これまで維持してきた料理にこだわらず、刺激性の少ない日本の食材や子どもの好きな洋食も抵抗なく家庭料理の中に組み入れる傾向がある。

一方、朝鮮族の家庭の食生活において、親が子どもの影響も受ける場合も多い。子どもたちが日本の保育園や幼稚園および学校で給食を食べることで、日本食に徐々に慣れていく。したがって、子どもたちは保育園や学校で食べた日本食を家庭の中でも求めることが多くなる。そうした子どもの希望を受け入れることで、家庭内の食卓も変化していく。例えば、朝鮮族親にとってカレーやハンバーグは必ずしもなじみのある食べ物ではないが、「子どもが好きだから」という理由から、試す段階から徐々に受け入れるようになる。そして、子どもたちも保育園や学校では中華料理や韓国料理を食べることが少ないが、家庭内では親が毎日食べるのを見て、徐々に受け入れていくようになる。したがって、夫婦とも朝鮮族の家庭では、毎日中華料理や韓国・朝鮮料理、日本食および洋食といった多様な料理が同時に食卓に現れるのはすでに珍しいことではない。

朝鮮族の人びとは、日本での滞在期間が長くなるにつれて、徐々に日本の料理を受け入



図 31

新大久保のコリアンタウン。ここには韓国から直輸入した食品・食材を販売するスーパーが多い。そして、韓国の本場の味を味わえる韓国料理店や韓国のポピュラーカルチャーに関する店も多い。さらに、朝鮮族料理店や中華料理店もある。(2009年5月1日、筆者撮影)



図 32



図 33

池袋のリトルチャイナタウン。地下鉄池袋駅北口近くにある中国食品店と中国書店。この一帯の中国食品店には朝鮮族もよく訪れるため、韓国食品コーナーも設けられている。(2010年11月9日、筆者撮影)



図 34



図 35 池袋の朝鮮族料理店。この店では、朝鮮族料理の代表的な羊串焼きやムチュムだけでなく、中国東北料理や韓国料理も提供している。(2010年11月9日、筆者撮影)



図 36 日本の大みそかに餃子を作る朝鮮族家庭。(2012年12月31日、筆者撮影)

れていくが、そうした過程においても自分が中国で食べていた朝鮮族料理や韓国料理および中国の東北料理を放棄することはほとんどない。彼らは中国や韓国の食品や食材、そしてそうした地域の料理を求めて新大久保のコリアンタウンや池袋のリトルチャイナタウンを定期的に訪れる。また、彼らは同窓会や同郷会などの集まりがある時には、朝鮮族料理店を訪れる場合が多い。彼らが朝鮮族料理店を訪れることには、そこが彼らにとって朝鮮語や中国語で気楽にコミュニケーションができる言語空間であるだけでなく、そうした店には羊串焼きやムチュムといった朝鮮族の代表的な料理や中国東北料理および韓国料理も提供しているからである（図 35 を参照）。朝鮮族の家庭内の多様な食生活がこうした朝鮮族料理店においても同様に現れている。朝鮮族の人びとの中には、それぞれの国境を越えたさまざまな料理が相互矛盾なく、それぞれ居場所が与えられている。彼らのこのような多様な食べ物への積極的な受け入れ方と継続的な維持は、それぞれの食べ物と関連する空間的な記憶や想像およびそこにおける人びととの連帯感を意識させる一種のアイデンティティの表れでもあると考えられる。すなわち、日本在住の朝鮮族のハイブリッドな食生活は彼らのハイブリッド・アイデンティティの表れでもある。

6. むすび

本章では日本在住の高学歴朝鮮族の日中韓 3 国における移動の実態と彼らの家庭教育における言語教育戦略を明らかにし、高学歴朝鮮族の新しいアイデンティティについて Schumann の「Hybrid Identity」（ハイブリッド・アイデンティティ）という概念を用いて説明した。

朝鮮族の人びとが中国の朝鮮族学校において中国語と朝鮮語および外国語として日本語を習得したことが、彼らの東アジアの域内における移動を活発化させている。特に、高学歴朝鮮族の若い人たちは、より良い教育やより良い仕事の環境を求めて、日中韓 3 国間で移動している。そして、両親や親戚の人びとの国際移動も彼らの移動を促している。特に、韓国は朝鮮族にとって先祖の生まれた地としての「故国」とすると同時に、若い朝鮮族の場合には両親や親戚の多くが中国から韓国に移動し、さらに韓国で長期滞在しているため、彼らにとって韓国は中国に加えてもう一つの「帰る場所」となっている。その中でも、国際的な移動が比較的容易である日本在住の朝鮮族にとって、日中韓 3 国はすでに国境を超えた一つの生活圏となっている。

朝鮮族の人びとは国際移動の中で、自分は誰なのか、どんな言語を学ばなければならないのかを意識するようになり、さらに子どもの言語習得やアイデンティティの獲得についても考えるようになった。日本在住の高学歴朝鮮族の人びとは子どもへの言語教育を重視し、一般的に三つの言語を考えている。すなわち、居住国の言語、家族の間でコミュニケーションを行うための道具であると同時に「朝鮮族」や「中国人」という帰属意識を獲得するための言語、そして今後の移動や子どもの将来の就職に有利な言語などである。高学歴朝鮮族の人びとは、こうした三つの言語を学校教育だけでなく、家庭教育や語学学校といった学校外教育を通じて、それぞれの言語を子どもに習得させようとしている。

日本在住の高学歴朝鮮族の人びとは特に家庭教育を重視し、学校では習得しにくい中国語や朝鮮語／韓国語を家庭教育によって子どもに習得させようとしている。中国に帰ることを予定する家庭では中国の学校では習得しにくい日本語の教育を重視する場合も見られた。こうした言語教育戦略を行う朝鮮族親たちは、三言語あるいは四言語の言語資本を有し、出身国や移動先の国で高等教育を受けたという特徴がある。高学歴朝鮮族の人びとは、国際移動の中で自分たちの言語資本に目覚め、長期的な視野から子どもたちが激しい競争社会の中で生き残るための一種の生きる力として、自分たちの言語資本を戦略的に次世代へ再生産しようとしている。

また、朝鮮族の多言語能力とダイナミックな国際移動は彼らのアイデンティティにも影響を与えている。家庭教育において子どもに中国語を教えるのか、朝鮮語／韓国語を教えるのかによって、朝鮮族親の「中国人」意識や「朝鮮族」意識に強弱の変化が観察された。一方、日本在住の高学歴朝鮮族の中には、国籍や出身のエスニック・グループにこだわらず、複数の国や地域およびそれとは異なる次元の共同体に同時に帰属意識を持つ現象が見られる。彼らは国際移動の中で主体的な考えをもつようになり、言語的文化的な側面から自分を規定することで、政治的および歴史的な枠組みを超えたハイブリッドな文化的アイデンティティを創造している。このような彼らは、子どもにも多様で柔軟なアイデンティティの構築を目指していると考えられる。戦略的な言語教育はそのための手段でもあるだろう。

〈注〉

* 本章の内容は、筆者の単著論文「高学歴中国朝鮮族の移動：先を見つめる子育てとハイ

ブリッド・アイデンティティ」成蹊大学アジア太平洋研究センター紀要『アジア太平洋研究』第37号，2012，pp.47-63 を加筆したものである。

- (1) (日本) 法務省登録外国人統計

http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html (アクセス：2012年7月5日)

- (2) 東洋経済日報 2010年8月13日の記事「<オピニオン>韓国経済講座 第120回」

http://www.toyo-keizai.co.jp/news/opinion/2010/post_4078.php (アクセス：2012年7月5日)

- (3) 同上

- (4) 筆者のインタビューによる (2011年6月2日，東京)。

- (5) 筆者のインタビューによる (2010年2月18日，2011年6月7日，東京)。

- (6) (韓国) 出入国・外国人政策本部ホームページ

http://www.immigration.go.kr/HP/COM/bbs_003/ListShowData.do?strNbodCd=noti0097&strWrtNo=100&strAnsNo=A&strOrgGbnCd=104000&strRtnURL=IMM_6070&strAllOrgYn=N&strThisPage=1&strFilePath=imm/ (アクセス：2012年9月20日)

- (7) 筆者のインタビューによる (2012年9月2日，東京)。

- (8) 筆者のインタビューによる (2011年7月29日，千葉)。

- (9) 筆者のインタビューによる (2011年12月18日，名古屋)。

終章

本論文は、1990年代以降中国内外へと活発な移動を行っている中国朝鮮族に着目し、移動における彼らのアイデンティティの変容および子どもの言語選択と教育戦略の実態を明らかにすることを目的とした研究である。論文は3部6章で構成されており、第I部（第1章）では中国東北部における朝鮮族学校の二言語教育の実態を明らかにし、第II部（第2章、第3章）では朝鮮族の中国内における移動を北京の事例を取り上げて、彼らの居住空間の変化と子どもの朝鮮語の維持をめぐる教育を中心に考察した。第III部（第4章、第5章、第6章）では朝鮮族の国外への移動に注目し、韓国と日本の事例を通じて、特に高学歴朝鮮族のアイデンティティの構築／再構築と彼らの子どもの言語選択と教育戦略について検討した。

朝鮮族の人びとはこれまで主に中国の東北部に集住し、そこにおいて自分たちの独特なライフスタイルや言語（朝鮮語）と教育（朝鮮族学校における教育）を維持してきた。中国では少数民族教育の重要な一環として、公教育機関としての朝鮮族学校において国家言語の中国語と朝鮮族の言語である朝鮮語の二言語教育を実施している。筆者は本研究で朝鮮族学校における二言語教育の実態を把握するために、延吉市とハルビン市における現地調査を行い、下記のような結果が得られた。

まず、上記の延吉市とハルビン市（都市ごとに各一校を調査校とした）における朝鮮族生徒のほとんどが中国語と朝鮮語の両方を駆使できることが明らかになった。しかし、この二つの言語能力は必ずしも一致することがなく、一方の言語がもう一方の言語より熟達していることが分かった。具体的に言えば、延吉市の場合には朝鮮族生徒たちは地域や家庭において主に朝鮮語を使用する環境に置かれている。そして、学校空間においても、学校の教授言語から日常のコミュニケーションの言語まで朝鮮語中心の比較的単一な言語使用状況に置かれているため、延吉市の朝鮮族生徒たちは中国語より朝鮮語のほうがより熟達している。これに比べて、ハルビン市の朝鮮族生徒たちの場合には、地域的な言語環境としては中国語が第一言語であり、家庭内においては、市内出身の生徒たちは中国語が主であるか若しくは朝鮮語と中国語の併用が一般的である。それから、ハルビン市の朝鮮族学校の場合には、学校の教授言語および日常会話において、中国語が主で、ときには朝鮮語も使用する程度である。したがって、ハルビン市内出身の朝鮮族生徒の中には中国語が第一言語になり、朝鮮語はあまり話せない生徒が多い。一方、ハルビン市の近郊地域から

来た朝鮮族生徒の場合には、朝鮮族の集住する村で生活してきたことが多いため、彼らにとって朝鮮語が第一言語であり、中国語はあまり話せないことが一般的であった。こうした朝鮮族生徒たちの言語能力に影響するものとして、地域や家庭および学校における言語環境も重要であるが、それ以外にハルビン市の場合には学校以外の地域の書店などでは朝鮮語／韓国語の書籍が購入しにくいし、学校の朝鮮語教科書は古いため朝鮮語に興味を持っていないという生徒の声もある。それと比べて、延吉市の場合には近年韓国との交流が多く、地域の書店や学校近くの古本屋でも韓国の図書やマンガなどのポピュラーカルチャーに接することが比較的容易であるため、生徒たちはそうした図書を通じて韓国語により興味を持つことになる。

次に、延吉市とハルビン市の朝鮮族生徒の帰属意識について見てみよう。この二つの学校において筆者のインタビューに応じた生徒全員が「中国人」としての国民的帰属意識を強固に持っていた。一方、彼らの「朝鮮族」としてのエスニック・アイデンティティは多様であり、強い者もいれば弱い者もいることが確認された。それは彼らの朝鮮語能力と必ずしも一致するのではなく、漢族の人びとと接することの多寡によって少し異なることが見られた。例えば、延吉市の朝鮮族生徒の場合には、普段朝鮮族のコミュニティの中で生活するため、漢族の人びととあまり接したことがない生徒が多い。そうした生徒の中には、「朝鮮族」というエスニック・アイデンティティに関して特に意識していない生徒もいる。しかし、ハルビン市の朝鮮族生徒の場合には、地域の第一言語が中国語であると同時に日常において漢族の人びとと接する機会が多いことから、自分の民族的アイデンティティを意識するようになることが多い。その中には、たとえ漢族の友達が多く、朝鮮語ができなくても民族的帰属意識を比較的強く持つ生徒もいる。このことから、朝鮮族の生徒たちはほかの民族の人びとと接することによって、自分が「朝鮮族」であることを確認させられることが言えよう。

延吉市とハルビン市の朝鮮族学校で現地調査を行うことで、また次のような興味深い現象が見られた。すなわち、近年の中国と韓国の交流が進展する中で、朝鮮語を主要言語とする延吉市の朝鮮族学校に朝鮮語の習得を目的としている漢族の子どもが増える一方、中国語を主に使用するハルビン市の朝鮮族学校では中国語の習得を目指した韓国人留学生が増加することである。このような状況は、従来中国政府によって「少数民族教育」と指定され自民族の生徒だけを対象にし、自民族の言語や文化を教えることによって民族の伝統を継承するという少数民族学校の教育に新しい意味を与えている。すなわち、少数民族学

校における教育が、すでに「少数民族」に限定する教育ではなく、よりグローバルな市場のニーズに応じるものになっている。これは学校側が積極的に改革開放とグローバル化の流れの中で朝鮮族以外の生徒たちに門を開いた結果である。

こうした中国東北部の朝鮮族学校には、近年中国内のほかの都市や地域および国外へ移動した朝鮮族が再び自分の子どもを通わせる現象も現れている。朝鮮族学校では現在すでに二言語だけでなく、外国語としての英語や日本語の教育も行っている。こうした多言語の教育を特徴とする朝鮮族学校は、朝鮮族やほかの民族および外国の子どもたちを惹きつけている。中国内外のさまざまな子どもたちの多様な需要に合わせた朝鮮族学校は、言語的および文化的にハイブリッドな学校としてますます重要な役割を果たすと考えられる。

近年、中国東北部の朝鮮族学校で中国語と朝鮮語および外国語としての日本語（あるいは英語）を習得した朝鮮族の若い人たちが、中国の改革開放と市場化の中で中国内外へと活発な移動を行なっている。本研究は、朝鮮族が比較的によく移動する地域や都市としての北京、ソウル、東京を中心に彼らの移動の実態を把握しようとしたものである。

第Ⅱ部においては、まず北京へ移動した朝鮮族の現地での生活を把握するために北京の望京地域に新しく生まれた「韓国城」というコリアンタウンに注目して考察した。筆者は、このコミュニティが中国の各地から移動してきた朝鮮族と韓国からきた人びとおよび北朝鮮の人びと、そしてここを訪れる中国人や日本人が共同で創り上げた「韓国城」という名前の東アジアのハイブリッド文化街であることを提示した。

望京「韓国城」は、決して韓国人や朝鮮族および北朝鮮の人びとによる閉鎖的なエスニック・コミュニティを形成したり、あるいはエスニック・ビジネスとしての観光地になっているのではない。居住と商業が一体になっている望京は、韓国料理に馴染みのある日本人の好んで住む場所でもある。この街において、日本人はキムチなどを消費するだけでなく、韓国人や朝鮮族とともに同じ市場において日本の食品を販売し、ショッピングセンターでラーメン街を作ることで、自分たちの個性も積極的に表現している。さらに、「韓国城」のキムチや韓国式のインテリアはすでに中国人の生活に入り始め、「韓国城」における韓国のファッションや音楽、テレビドラマといったポピュラーカルチャーは、韓国文化に強い関心を持つ中国の若者の「哈韓族」（ハーハンズー）を集めさせる。

グローバル化の中で、こうした中国、朝鮮半島、日本を中心とする東アジアの文化特区が北京の望京に成立された。そして、飲食と言語、居住スタイルを特徴とするこの特区のライフスタイルが、韓国人や朝鮮族および北朝鮮の人びとに限らず、より多くの人びとを

惹きつけている。

北京へ移動した朝鮮族は職業においても多様である。彼らの中には、中国国家機関や大手外国資本の企業に勤め、比較的収入が高く、安定的な生活をしている都市中間層がいる一方、職業と収入が安定せず、家賃が安い地下や半地下の部屋を借りて生活する出稼ぎ労働者もいる。出稼ぎ労働者の中にも、多くは中国東北部の朝鮮族学校を卒業しており、朝鮮語が話せることから、韓国人と関連のある業種に従事するチャンスが与えられている。北京で長期滞在する若い朝鮮族の場合には、子どもが生まれることで子どもの教育に関して考えるようになる。北京で仕事をし、生活する朝鮮族にとって、一番重要な社会的言語は中国語である。したがって、彼らは子どもに中国語を習得することを重視し、将来子どもが国際的に活躍できるように英語を習得することを希望している。そのため、朝鮮族の親たちは子どもを漢族学校に通わせるのが一般的である。けれども、彼らは朝鮮語を完全に放棄するのではなく、家族との繋がりを維持するために、家庭教育を通じて子どもに朝鮮語を教える場合もある。一方、北京在住の朝鮮族の中には、自分と同じく子どもが学校において朝鮮語を習得することを求める親もいる。しかし、北京には公教育機関としての朝鮮族学校がないため、子どもを昼間には漢族学校に通わせ、放課後や週末には朝鮮語／韓国語の補習校に通わせる場合もある。そうした補習校として代表的なのは、北京で朝鮮族の知識人が設立した民営の韓国語学校が挙げられる。ほかにも、公式ではないが一部の漢族学校において朝鮮語の補習クラスが設けられることもある。このように、さまざまな方法で子どもに朝鮮族のエスニック言語である朝鮮語を継承させようとすることには、朝鮮族の親たちの言語を通じて家族の絆や朝鮮族コミュニティとの繋がりを維持しようとする考えがあり、それは文化的なアイデンティティの表れであると言えよう。

中国において、都市と農村そして各地域の出身を厳格に区分する戸籍制度は、移動する子どもたちに大きな影響を与えている。親とともに北京へ移動し、北京の学校に通うが、戸籍は依然として東北部の戸籍になっている子どもの場合は、大学受験のために再び東北部の戸籍所在地に戻らなければならない。北京と地方との間の「教育格差」なども挙げられ、移動する子どもたちの転校における適応の問題や学習意欲の低下などを心配する親もいる。こうした中国の戸籍制度によって、いくら移動先の都市で長期滞在しても、現地の戸籍を獲得することが難しいため、朝鮮族の人びとは再び東北部の出身地に戻るようになるが、そうした再移動によって彼らは自分たちが中国東北部の出身であると同時に朝鮮族であることを再認識させられる。

第Ⅲ部においては、朝鮮族の外国への移動に注目し、韓国と日本の事例を取り上げて、移動先における朝鮮族のアイデンティティの変化と子どもの教育について論じた。まず、筆者は朝鮮族の韓国への移動を「帰郷」ととらえ、「帰郷」先において彼らはどのように受け入れられているのかを分析した。朝鮮族の人びとは、先祖の地であるはずの韓国において、必ずしも長年の移民生活に対する「帰郷」の安らぎを感じるのではなく、さまざまな軋轢を経験している。韓国で単純肉体労働に従事する朝鮮族は、社会的に「外国人出稼ぎ労働者」や「中国人」として排除される一方、高学歴を有する朝鮮族の場合には「同胞」として「韓国人」として受け入れられる傾向があることが本研究によって明らかになった。韓国の人びとに「韓国人」と異なる他者としての「中国人」として排除される経験は、朝鮮族のこれまで思い描いた「故郷」のイメージの崩壊につながる。したがって、朝鮮族の人びとは自分たちがどこに帰属するのか、「中国人」なのか「韓国人」なのかというアイデンティティの葛藤を抱くようになった。こうした韓国の社会的なまなざしに関して、筆者は韓国政府の在外同胞法において朝鮮族を「同胞」として認める姿勢の揺らぎが一つの原因であることを指摘した。

韓国政府や韓国社会の高学歴朝鮮族に対する受け入れ姿勢は、高学歴朝鮮族に「同胞」意識や「韓国人」としての帰属意識を持たせることに積極的な役割を果たしている。しかし、韓国における単純肉体労働者への社会的な排除のまなざしは高学歴朝鮮族のアイデンティティの揺らぎと葛藤をもたらしている。多くの高学歴朝鮮族は自分がどこに帰属するのかを悩み、自ら「中国人」そして「朝鮮族」というアイデンティティを再構築することで韓国社会に対する一種のアイデンティティの抵抗を行うことが見られた。

高学歴朝鮮族のアイデンティティの再構築は彼らの子どもの教育にも影響を与えている。高学歴朝鮮族の人びとは、韓国へ「帰郷」することによって、アイデンティティは常に変化すると同時に変えることもできることに気づき、教育がアイデンティティ形成の装置であることを認識するようになった。彼らは自分の子どもにはどのようなアイデンティティを獲得させるかを考え、そのアイデンティティの獲得の有効な手段として教育戦略を行っている。例えば、韓国で定住することを考えている高学歴朝鮮族の中には、自分が経験した「韓国人」なのか「中国人」なのかというアイデンティティの葛藤から、自分の子どもにはより単一化したアイデンティティを構築させようとする現象が見られる。すなわち、子どもを韓国政府の学校制度に入れることで、「韓国人」というアイデンティティを獲得させようとする。また、将来中国に帰ることを予定している高学歴朝鮮族の中には子どもを

漢族学校に通わせる場合と朝鮮族学校に通わせる場合の両方が見られた。親が過去において朝鮮族学校を卒業し、朝鮮語を主に使用していた場合でも「中国で暮らすためには中国語が一番重要だ」と考え、子どもを漢族学校に通わせようとする。けれども、その親が「朝鮮族」としての帰属意識をもっている場合、子どもに最低限の朝鮮語／韓国語を覚えさせることで、エスニック・アイデンティティを継承させようとすることも見られた。それから、子どもを中国の朝鮮族学校に通わせようとする朝鮮族の親の場合には、本人が中国の漢族学校を卒業しても、「朝鮮族」という帰属意識を有し、さらに韓国において「同胞」として「韓国人」としてのアイデンティティを再構築したことが積極的な役割を果たしていることが確認された。すなわち、韓国において法的および社会的に高学歴朝鮮族に対して「同胞」として認めようとする姿勢は、高学歴朝鮮族自身だけでなく、彼らの子どもにも「朝鮮族」意識や「韓国人」意識を獲得させることに積極的な影響を与えている。さらに、そうしたアイデンティティを獲得するために、親が子どもを朝鮮族学校に通わせることで朝鮮族学校の教育の再生産も促している。

韓国のソウルには朝鮮族の単純肉体労働者たちが集住するガリボン「同胞タウン」という街がある。そこでは、韓国において社会的底辺に置かれ、重労働に従事する朝鮮族の労働者たちが、社会的な排除のまなざしから自分を守るために「自分たちの世界」を創造している。けれども、この地域は朝鮮族だけで構成されているのではなく、韓国人が設立した新聞社や教会といったさまざまな市民団体と中国人や韓国人を含めた商人たちもいる。特に、複数の市民団体は韓国における朝鮮族の人権保護や法的地位の獲得および仕事や生活におけるさまざまな困難を解決することに重要な役割を果たしている。彼らのサポートがあって、ガリボンドンは朝鮮族の人びとにとって「居心地いい」場所になっている。けれども、朝鮮族の労働者たちの独特な生活空間は政府の再開発という名目のもとの崩壊しようとしている。こうした状況の中で、彼らが考えたのはほかの地域において自分たちの新しいコミュニティを創ることであった。すでにそうした動きも見られる。けれども、彼らが目指す新しいコミュニティは、必ずしも過去のような外部社会から自分を守るための閉鎖的な空間であるのではなく、積極的に韓国社会と向き合い、過去とは異なる変化した自分たちの姿を表現する開かれたコミュニティである。

最後に、日本へ移動した朝鮮族について見てみよう。中国国内や韓国へ移動した朝鮮族に比べて、日本へ移動した朝鮮族は比較的に学歴が高く、多言語能力を有し、さらに社会的地位や賃金の高い仕事に従事する者が多い。彼らは現地社会の人びとと積極的に接し合

い、前向きな考えでかつ主体的に活動を行い、積極的に自分で人生を選んでいこうとする人びとである。彼らは移動の中で、自分は誰なのか、何を目指しているのかをはっきり意識し、そのために努力を惜しまない人たちである。新しいライフスタイル、新しい人生観をもっている彼らは、自分の子どもたちにも同じ生き方を与えようとしている。

日本における高学歴朝鮮族の人びとは中国の朝鮮族学校で身につけた多言語（中国語、朝鮮語、日本語あるいは英語）能力によって、東アジアの域内において活発な移動を行っている。国際移動が比較的容易である日本在住の朝鮮族にとって、日中韓 3 国はすでに国境を越えた一つの生活圏になっている。彼らは、より良い教育やより良い仕事、そして両親や親戚との再会などを求めて日中韓 3 国の間を移動している。

日本在住の高学歴朝鮮族の人びとは、子どもの将来についても前向きであり、子どものさまざまな可能性を考えて教育を行っている。彼らは子どもの言語習得を重視し、一般的に三つの言語（居住国の言語、家族の間でコミュニケーションを行うための道具であると同時に「朝鮮族」や「中国人」という帰属意識を獲得するための言語、そして今後の移動や子どもの将来の就職に有利な言語など）を考えている。高学歴朝鮮族の人びとは、こうした三つの言語を学校教育だけでなく、家庭教育や語学学校といった学校外教育、そして場合によっては子どもを中国の親族のところに預けるなどの方法を用いて、習得させようとしている。彼らは、家庭教育を通じて日本の学校で習得しにくい中国語や朝鮮語／韓国語を教える場合が多い。また、中国に帰ることを予定している朝鮮族家庭の場合には、家庭の中でも子どもに中国の学校では習得しにくい日本語を教えることがある。それは単に、一つの言語資本の蓄積という考えだけでなく、「日本人の仕事に真摯に取り組む姿や人への思いやりなどを子どもに見習ってほしい」という親の考えが込められている。

こうした言語教育戦略を行う朝鮮族の親たちは、三言語あるいは四言語の言語資本を有し、出身国や移動先の国で高等教育を受けたという特徴がある。複数の言語を身につけることで、居住国での適応やさらなる移動の準備そして家族や親戚との繋がりおよびエスニック・アイデンティティの維持といった拮抗する諸要素のバランスを保つことが、移動する高学歴朝鮮族の生き方であり、彼らの次世代への教育の臨み方でもある。さらに、高学歴朝鮮族の人びとはこうした多様な言語を身につけることを、激動する 21 世紀を生きるための一つの方法として考えているため、自分たちの言語資本を戦略的に次世代へ継承させようとしている。

このような多言語能力を有し、ダイナミックな国際移動を行う朝鮮族の人びとの帰属意

識もほかの移動先とは異なる様相を呈している。家庭教育において子どもに中国語を教えるのか、朝鮮語／韓国語を教えるのかによって、朝鮮族の親の「中国人」意識や「朝鮮族」意識に強弱の変化が多少見られるが、それとは異なる新しいアイデンティティの創造も見られる。日本在住の高学歴朝鮮族の中には、自分の国籍や出身のエスニック・グループにこだわらず、複数の国や地域およびそれとは異なる次元の共同体に同時に帰属意識を持つ者も現れている。彼らは国際移動の中で主体的に考え、言語的文化的な側面から自分を規定することで、政治的および歴史的な枠組みを超えた文化的アイデンティティを獲得している。こうした個人の中で複数の文化の交渉と統合が行われ、それによって構築される複合的な帰属意識を筆者は「ハイブリッド・アイデンティティ」という言葉が適すると考えている。このような朝鮮族の人びとは、子どもにも多様で柔軟なアイデンティティの構築を目指していると考えており、戦略的な言語教育はそのための手段でもありとえられる。

以上のように、本研究は朝鮮族その中でも高学歴朝鮮族に焦点をあてて、彼らの日中韓3国における主体的な活動の実態を把握し、彼らのアイデンティティの変容と子どもの将来に向けての教育構想を明らかにしたものである。

朝鮮族の人びとは中国の東北部において100年以上居住し、村を中心とする農村的な民族共同体において彼らの言語とライフスタイルを維持・継承してきた。それが、1990年以降から中国内外へと急激な移動を行なうことで、彼らの生活空間や接する人びとおよび子どもの教育環境は大きく変わってきている。そうした朝鮮族社会の大変動によって朝鮮族の危機説も続出する中、本研究は移動する一人ひとりの朝鮮族の主体的活動に注目することで、彼らの移動と教育の実態を明らかにしようとしたものである。以下においては、本研究で主に論じてきた朝鮮族の移動先における生活空間やアイデンティティ、言語および教育が互いにどのような関わりがあるのかを、まとめていきたい。

(1) 移動する人びとの新しい生活空間の創造

本研究の調査地である北京とソウルにおいては、それぞれ移動する朝鮮族の人びとが集って生活するコミュニティが創られていた。両者は似ていながら異なる特徴を呈示している。以下では、この二つのコミュニティが朝鮮族の人びとにとってそれぞれどのような場所であるのかをまとめる。

北京では、1990年代以降に北京政府の都市大開発の一環として望京という地域に新しい

住宅地が開発され始めた。当時は、この地域が都心より少し離れており、家賃が比較的安く、空港にも近いということから、北京在住の韓国人の人びとが入居し始め、同時期に彼らと言語的文化的に共通性をもつ地方から北京へ移動した朝鮮族の人びとも望京に徐々に住むようになった。韓国人や朝鮮族の住民が増えることで、彼らをターゲットとする飲食やビジネスを中心とする商業・サービス業が発達するようになり、韓国人や朝鮮族に加えて北朝鮮の人びともこの地域において飲食サービス業を営むことになった。そうした中で、望京地域はコリアンタウンとして徐々に中国内外に知られることで、この街は「韓国城」という名前が与えられるようになった。特に、この地域は北京でも不動産や物価が上昇することで、ますます高所得層が居住する地域として姿を変えてきた。北京における中国人の中にもこの地域に住むことを希望する者が増加し、この地域の中国人住民たちは韓国・朝鮮文化を積極的に受け入れている。また、日本人の人びとも近年ここを訪れることが多く、さらにこの地域において自分たちの文化も積極的に表現している。

このように、北京における「韓国城」というコリアンタウンはさまざまな国や地域の人びとを惹きつけている。この新しいコリアンタウンは閉鎖的なエスニック・コミュニティや観光地に限るものではなく、より多くの人びとに開放的であるため、飲食や居住のスタイルおよびファッションなどを中心とするこの地域のライフスタイルが、多くの人びとに親しみや魅力を感じさせ、彼らを集めさせている。例えば、現地の中国人や日本人およびほかの国の人びとが望京のライフスタイルを求めてこの地域に集まってくる。韓国人や朝鮮族や北朝鮮の人びとも、この場において政治的な関係を超えた、経済的、言語的、文化的に共生できる空間を創造している。彼らのそれぞれの言語は多少差異が見られるとしても、この空間において彼らは各自自分たちの言語で互いにコミュニケーションを行うことができる。朝鮮族の人びとにとって、この街は彼らが中国東北部を離れた地における新しい生活空間である。その中には、日常において朝鮮語を主に使用し、朝鮮族の食習慣をずっと維持してきた人びとが多いため、彼らは望京のコリアンタウンという空間において自分たちの言語や食習慣を引き続き維持できることで、安心感を感じるようになる。彼らはすでに中国東北部における朝鮮族共同体のような主に朝鮮族の人びとで構成されているコミュニティに住むことがすでに難しくなり、望京のように韓国人や中国人および日本人など多様な人びとが共生する空間において生活するようになった。このように生活空間が変化することによって、彼らの飲食や居住スタイルも過去と似ていながら異なる形に変化している。こうした朝鮮族の移動地における生活基盤となる空間が、朝鮮族の人びとに移動

先の社会に適応していくための土台を提供していると同時に、彼らに一定のアイデンティティの安定も与えている。さらに、このコミュニティにおける朝鮮語／韓国語の使用と朝鮮半島の料理に接することが、朝鮮族の子どもへの言語的文化的な再生産を行うことにおいて積極的な役割を果たすことと考えられる。

ソウルの場合には、朝鮮族の集住する地域としてガリボンดอนの「同胞タウン」が挙げられる。1960年代以降、韓国の輸出産業公団の団地がガリボンドンに設立され、その公団に勤めていた女工たちがガリボンドンに住んでいたことから、この地域は家賃の安い「くぐり村」として知られるようになった。2000年代以降韓国における産業構造が変わり、女工たちもガリボンドンを離れることになった。その後、安い家賃を求めてこの地域に住み始めたのが外国人労働者たちである。その中で朝鮮族の人びとが多数を占めている。外国人労働者にとって、この地域は入居費用を最低限に抑えられる地域であるため、移動初期にこの地域に居住することが多い。朝鮮族の場合には、労働者たちは社会的底辺に置かれているため、社会的に排除されることが多く、この地域は彼らにとって都市空間の中で自分たちを守る一つの場所でもある。それは朝鮮族同士の助け合いもあるが、この地域には彼らをサポートする多数の韓国人市民団体があるため、彼らにとっては比較的安心して暮らせる場所である。また、この空間において、朝鮮族の人びとは自分たちのなまりのある朝鮮語を自由に話すことができるし、朝鮮族料理や中国東北料理といった彼らが中国で維持していた食文化や娯楽文化および人との付き合い方を維持することができる。このコミュニティも、朝鮮族の人びとだけでなく、韓国人市民団体や現地の韓国人と中国人の商人たちが共同に創り上げている。特に、朝鮮族の人びとと韓国の市民団体との積極的な接触から、韓国における成熟した市民社会の一端を見ることができる。この点に関しては、今後引き続き考察を進めていきたい。こうしたコミュニティは移動する朝鮮族労働者たちの拠り所であり、彼らのアイデンティティの核と感じられる場所である。

このように、朝鮮族の人びとは移動先においてさまざまな人びとと共に「居心地良い」生活空間を創造している。そうした空間は、朝鮮族の移動先によってそれぞれ異なる形を呈しているが、共通に見られるのは彼らの言語の維持・継承と新しいライフスタイルの創造およびアイデンティティの安定などにおいて重要な役割を果たすことである。

(2) 移動先の社会的まなざしとアイデンティティの変容

朝鮮族の人びとは、中国において国民として少数民族としての法的地位が明確に与えられている。社会的にも彼らは一般的に「中国人」として「朝鮮族」として受け入れられている。中国政府の少数民族政策により、朝鮮族の人びとは自分たちの自治機関（例えば延边朝鮮族自治州）を有しており、そうした自治地域やほかの朝鮮族の集住地域において、自分たちの言語（朝鮮語）を維持し、伝統的な祝日を祝い、飲食、服装、居住のスタイルや冠婚葬祭などを含めた彼ら独自のライフスタイルを維持することができた。そして、中国政府の少数民族教育の実施によって、朝鮮族の子どもたちは朝鮮族学校において二言語教育を受け、それによって自民族の言語を次世代に継承させることができた。こうした少数民族の言語と文化に対する中国政府の制度的な保障によって、中国東北部の朝鮮族の人びとはその2世や3世にわたって自民族の言語を維持・継承することができた。こうした背景の中で、朝鮮族の人びとの中でも特に朝鮮族学校の中等教育において二言語教育（中国語と朝鮮語の教育）を受けた若い朝鮮族の人びとは、中国国民としての帰属意識と朝鮮族としてのエスニック・アイデンティティの両方をバランスを取りながら維持することができた。すなわち、彼らは自分たちが堂々たる「中国人」であると同時に、朝鮮半島にルーツを持つ「朝鮮族」としての二重のアイデンティティを相互矛盾なく維持してきた。

しかし、朝鮮族の人びとは近年の国際移動とともにアイデンティティの葛藤や揺らぎを経験している。そうした中で、再び「中国人」や「朝鮮族」というアイデンティティを再構築することもあれば、「韓国人」や「中国同胞」というアイデンティティを獲得することもある。そして、「中国人」アイデンティティが表に出され、「朝鮮族」アイデンティティは内面化する場合もある。さらに、国や地域およびエスニック・グループにこだわらないハイブリッドな文化的アイデンティティを創造する場合もある。このように、朝鮮族の帰属意識は移動によって多様にそして柔軟に変化している。

朝鮮族のアイデンティティの変化の背景には、彼らの移動先における受容や排除といった受け入れ方と大きく関連する。本研究では朝鮮族の移動先として北京、ソウルおよび東京を主に取り上げたが、それぞれの移動先における朝鮮族のアイデンティティの構築のしかたは異なっている。北京の場合には、朝鮮族の移動する前と比べて大きな変化は見られなかった。ただ、彼らが子どもの教育選択や言語選択から、「朝鮮族」意識が薄くなったり、強くなったりすることが見られた。例えば、子どもを漢族学校に通わせることで、漢族との繋がりを重んじる親もいれば、子どもに朝鮮語を習得させることで「朝鮮語」意識も持たせたいという親もいる。また、北京に公立の朝鮮族学校がないにもかかわらず、子ども

を朝鮮語補習クラスが設けられている漢族学校に通わせることで、朝鮮語を習得させ、それによって「朝鮮族」というエスニック・アイデンティティを継承させたいという「朝鮮族」意識が強い朝鮮族の事例も見られる。また、最初は「朝鮮族」ということにあまり意識していなくても、家族の中で朝鮮族というエスニック・アイデンティティが強い者がいる場合、それに影響されることで子どもに朝鮮語を獲得させたいという意識をもつこともある。こうした現象は朝鮮族同士の結婚家庭によく現れる。北京の場合には、以上のように朝鮮族への社会的まなざしの影響を受けることが少なく、朝鮮族の個々人の考えによってアイデンティティも少し異なることが分かる。

ソウルに移動した朝鮮族のアイデンティティの変化は、彼らのほかの移動先に比べてより顕著に現れている。朝鮮族の人びとの韓国への移動が、最初は「親戚訪問」という形での故国への「帰郷」が行われた。けれども、その後中国との賃金格差などによる出稼ぎという形での移動が増えてきた。さらに、近年は朝鮮族の若者や高学歴者による故国への文化的な「帰郷」も行われている。けれども、彼らに共通に見られるのは、韓国の人びとに「同じ民族」として受け入れられたいという意識である。しかし、学歴や職業による差別や、なまりのある朝鮮語と韓国語との間の言語的な「差異」を強調することにより、韓国では社会的文化的な差別構造を生み出した。このような差別構造が形成されたことには、韓国政府の在外同胞法における「同胞」の定義の曖昧さや朝鮮族の人びとに「在外同胞」という法的地位を与えることに対する姿勢の揺らぎなどが大きく影響していると筆者は考えている。こうした背景も含めて、朝鮮族に対して韓国社会のまなざしは、朝鮮族の人びとのアイデンティティの葛藤と揺らぎをもたらしている。特に高学歴朝鮮族の場合には、「中国人」なのか「韓国人」なのかの二者択一への戸惑いを感じることが多い。その中には、自ら「中国人」そして「朝鮮族」としてアイデンティティの再構築を行うことで、自分の社会的立場を確認し、アイデンティティのバランスを保とうとしている。すなわち、社会的に否定的にとらえるアイデンティティそしてそのアイデンティティを有する集団を差別の対象として扱う場合には、その集団による抵抗を招くことになる。朝鮮族の場合には、高学歴朝鮮族の中には、自ら「中国人」そして「朝鮮族」として自称することで、一種のアイデンティティの抵抗を行うことが多く、非高学歴者の中には「韓国人」になれないことから、「中国人」や「朝鮮族」そして「同胞」として自称することで自分を肯定的にとらえようとする動きが見られる。けれども、韓国社会の朝鮮族に対する受け入れの眼差しは積極的な役割も果たしている。高学歴朝鮮族の中には、韓国において「韓国人」そし

て「同胞」として受け入れられることで、自ら「韓国人」としてのアイデンティティを構築し、同時に自分が「朝鮮族」であることも自ら肯定的に捉えることができる事例もある。このように、韓国在住の朝鮮族の人びとは韓国の人びとから見られる「自分」と自分が見る「自分」との間にずれが生じることで、葛藤を経験し、自分の中で交渉や統合を経てアイデンティティの再構築を行い、精神的な安定を求めようとしている。

日本の場合には、アイデンティティはより多様に自由に表現されている。日本において朝鮮族の人びとは社会的に「中国人」として見られると同時に、朝鮮族側からも「中国人」として自称するのが一般的である。朝鮮族のエスニックな部分は、主に朝鮮族の人びとの自己主張によって周りの人びとに知られる場合もあれば、単に朝鮮族のエスニック・グループの中で維持される場合もある。日本社会では「朝鮮族」ということやそのエスニック・グループに関して、あまり知られていないと同時に、あまり問われてもいないものである。すなわち、「朝鮮族」ということに対して日本では一種の「無関心」な社会的まなざしを呈している。けれども、こうした「無関心」は必ずしも差別を伴うものではないと同時に社会的にも「朝鮮族」が明確にカテゴリー化されていないため、むしろ朝鮮族の人びとに自分たちのアイデンティティを自由に表現する空間を与えていると考えられる。日本在住の朝鮮族の中には、日本への移動によって「中国人」意識が強くなった者もいれば、「朝鮮族」意識が強くなった者もいる。そして、個人の言語的文化的な多様性から時間的空間的な境界を超えた複数の国や地域に同時に帰属意識をもつ者や、国民的帰属意識に加えて日常的により緊密な関係がある企業といった集団に対する帰属意識を新たに獲得する者もいる。彼らは言語的文化的に自分を規定し、ハイブリッドなアイデンティティを主体的に創造することで、新たな自分を積極的に表現しようとしている。彼らにとって、すでに「朝鮮族」という名称だけでは自分を十分表すことができなくなっている。

以上のように、日中韓 3 国における三つの都市において、それぞれ異なる社会的環境における朝鮮族のアイデンティティ構築／再構築のありかたがどのように異なっているのかを見てきた。ある社会において、その社会の成員たちが新しく入ってきた人びとに対してどのような受け入れ方をするかは、入ってきた人びとの現地での生活や心理的な安定、彼らと移動先の人びととの相互関係の構築に大きな影響を与えている。本研究では、筆者が朝鮮族の移動先において彼らの生き方を描き出すことで、アイデンティティのありかたが従来のような一貫したものでもなく、固定的なものでもなく、人びとの彼らの置かれた社会的環境やさまざまな要素に左右されながら、その都度選択され、柔軟に変化していこう

とするものであることが観察された。こうした変化の中で構築／再構築されていくアイデンティティのありかたを、本研究では「ハイブリッド」という言葉で表現する。

(3) エスニック言語の維持・継承における教育の役割

本研究で取り上げたエスニック・マイノリティとしての朝鮮族の人びとは、さまざまな国や地域へと移動する中で、彼らの「朝鮮族」意識や「中国人」意識が強弱の違いはあるとしても、まだ完全に無くなることはない。そして、エスニック・アイデンティティやナショナル・アイデンティティだけでなく、家族や親戚とのコミュニケーションのためにも、朝鮮語／韓国語や中国語といった言語の維持が必要になる。特に、子どもに「朝鮮族」や「中国人」としての帰属意識を継承させようとする場合には、依然としてそうした言語（朝鮮語／韓国語や中国語）の教育を求めることが一般的に見られる。

一つの言語を維持・継承することにおいて、教育は極めて重要な役割を果たす。特に移動する人びとにとって、移動先の言語と異なる母語を維持すると同時に次世代にも継承させることは容易なことではない。そうした移動する人びとの言語を維持・継承するためには、移動先における彼らの言語を使用できる言語環境も必要であろうが、より重要なのは子どもにその言語を習得させる教育を行うかどうかである。

子どもの教育においては一般的に、行われる場として学校教育、家庭教育、学校外教育などが含まれる。以下では本研究で取り上げた朝鮮族の言語教育において学校教育や家庭教育および学校外教育にそれぞれどのような役割を果たしているのかを見てみよう。

まず、学校教育について見てみよう。朝鮮族は、中国においてその2～3世にもわたって自民族の言語を維持してきた。彼らは100年以上にわたり中国で暮らしている中でも、自民族の言語を維持・継承できた背景には、彼らが自民族の言語を共通語とする農村的民族共同体を維持してきたと同時に、次世代に民族語の教育を行ってきたからである。すでに述べたように、朝鮮族の人びとは中国においては、東北部を主とする地域において自民族の人びとと集住することが多く、そうした民族共同体の中で日常において自分たちの言語を用い、自分たちのライフスタイルを維持することができた。そして子どもの教育においては、特に中華人民共和国が成立（1949年）した後の中国政府の少数民族政策によって、少数民族学校としての朝鮮族学校において、朝鮮族の子どもたちは中国語と朝鮮語をペアとする二言語教育を受けることで朝鮮語の聞く能力だけでなく、話す、読む、書く能力も

身につけることができた。

このような中国東北部で生活していた朝鮮族は、中国内外への移動とともに移動先における彼らの言語環境は大きく変化していき、子どもの教育環境も大きく異なってくる。そうした新しい環境において、朝鮮族の言語意識も大いに変わってきている。本研究では移動する朝鮮族が重視する言語を、主に居住国の言語、家族間のコミュニケーションに必要な言語であると同時に「朝鮮族」、「中国人」という帰属意識を獲得するための言語、そして今後の移動や子どもの将来の就職に有利な言語などの三つの言語に分けて分析した。しかし、彼らの移動先においては東北部の朝鮮族学校のように、彼らが希望する複数の言語を同時に習得できる公的な教育機関はないため、彼らは次世代の言語習得に関して悩むことになる。したがって、朝鮮族の親たちは子どもの言語教育において、学校教育に頼ることで一つか二つの言語習得に専念させるか、それとも複数の言語を習得するために学校外教育を行うかの選択に迫られている。こうした移動による状況の変化の中で、朝鮮族の人びとは自分はどんな言語を習得しなければならないのか、子どもにはどんな言語を習得するかを主体的に考えるようになった。彼らの中には、学校教育に大きく頼る事例も見られた。例えば、北京の場合には中国語を重視する親は、子どもを朝鮮族学校ではなく、漢族学校に通わせることで中国語の熟達の目標を達成させようと考えている。そして、ソウルの場合には、子どもに「韓国人」という帰属意識を獲得させるために韓国の教育機関に送り、子どもに「中国人」という帰属意識を獲得させるためには中国の漢族学校に通わせようとする事例が見られた。また、東京の場合にも子どもに中国語を学ばせるために中国の漢族学校を選択したり、子どもを「韓国人」として育てるためには韓国の教育機関に送ろうとする親たちがいる。このように、学校は依然として言語習得やアイデンティティの獲得のための一つの重要な教育空間として認識されている。

次に、家庭教育について見てみよう。本研究では、北京、ソウル、東京に移動した朝鮮族その中でも高学歴朝鮮族の人びとは、子どもの言語習得において積極的に家庭教育を行っていることが観察された。北京では家庭教育において朝鮮語を教えることが見られ、ソウルでは家庭教育において中国語を教える事例が見られた。それに比べて、日本在住の朝鮮族の場合には、家庭教育において子どもにより多様な言語（中国語、朝鮮語／韓国語、日本語など）を教える傾向がある。それは、日本に移動した高学歴朝鮮族の人びと自身が、複数の言語（中国語、朝鮮語、日本語、英語）が駆使できるため、彼らは子どもの言語習得の指導に活用できる知識がある。北京の場合には、家庭内において子どもに朝鮮語を教

えることは家族の間のコミュニケーションを行うことが主な目的である一方、ソウルでは中国に帰るための準備として子どもに中国語を教えたりする。また、日本の場合には言語教育の目的も多様であり、家族の間でコミュニケーションを行うことや子どもに「中国人」や「朝鮮族」という帰属意識を獲得することおよび今後の移動や子どもの将来の就職などに有利になるなどが含まれる。特に、朝鮮族同士の結婚家庭においては、夫婦の間で用いる言語が多様であるため、子どもの言語習得において重要な言語環境を提供している。日本の朝鮮族の親たちが子どもに多様な言語を教えることには、彼ら自身が多様な言語や文化を獲得していることやそれによってハイブリッドなアイデンティティを構築しているにも関わる。このように、朝鮮族の事例から見れば、親が多様な知識と柔軟なアイデンティティを有している場合には、そうした文化資本を次世代に継承させる可能性が高く、それが行われる場として家庭教育は重要な機能を果たしていると言えよう。

最後に、学校外教育について見てみよう。ここで指す学校外教育は主に学校教育と家庭教育以外の教育のことである。移動する朝鮮族の親たちは、移動先において学校外教育を積極的に利用していることが見られた。特に日本在住の朝鮮族の場合、そうした傾向が顕著に現れている。その親たちは教育熱心であると同時に、経済的にも余裕があるため、学校外教育を通じて子どもに言語（英語や日本語や中国語など）や算数や思考力を高めるレッスンを受けさせる場合もあれば、ピアノやバレエなどの習い事をさせる場合もある。これは一種の都市中間層の教育のスタイルと言えよう。ほかに、北京の場合には現地に朝鮮族学校がないため、子どもに朝鮮語を習得させようとする朝鮮族の親たちは、北京韓国語のような民営の補習校や漢族学校における朝鮮語補習クラスを積極的に利用する者もいれば、子どもに言語を学ばせるために家庭教師を雇うことを考えている親もいる。また、ソウルの場合には子どもを塾に通わせることで、英語を学ばせたり、算数や国語としての韓国語を学ばせる親もいる。このように、日中韓 3 国における移動する朝鮮族は学校教育や家庭教育以外にも学校外教育を利用することもある。それは主に、親が子どもを指導する時間がなかったり、その能力が足りなかったり、家庭教育を行っても教育の目標が達せなかった場合には、学校外教育を求めることがよく見られた。このように、学校外教育は学校教育や家庭教育で実施できない教育を補助的に行う役割を果たし、移動する人びとにとってその需要はますます高まることと考えられる。

以上、日中韓 3 国における移動する朝鮮族の人びとの子どもへの言語教育について見てきた。彼らは中国内外へと移動する過程において、自分たちのアイデンティティを考える

と同時に子どもにもどのようなアイデンティティを獲得させるかを考え、そのアイデンティティの獲得の有効な手段として教育戦略を行っている。すなわち、朝鮮族の親たちは子どもにどんなアイデンティティを獲得させるのかを考え、そのためにはどんな言語が必要なのか、その言語を獲得するにはまたどのような教育が必要なのかを考えている。彼らは主体的に学校を選び、教育の内容を選んでいる。そして、学校教育だけに頼るのではなく、学校教育で実施できない教育を家庭教育や学校外教育を通じて補おうとしている。このような積極的に自分で人生を選んで行こうとするのが移動する朝鮮族の生き方であり、彼らの次世代への教育の臨み方でもある。

以上において、本研究で主に考察してきた朝鮮族の移動における新しい生活空間の創造や移動先社会のまなざしと朝鮮族のアイデンティティの構築／再構築に与える影響およびエスニック言語の維持・継承における教育の役割などについてまとめた。

このように、本研究では人類学的な研究方法を用い、複数の国や地域においてフィールドワークを行うことで、中国朝鮮族の歴史的な大移動に視座をおいて、一人ひとりの主体的な動きや考えに注目し、彼らの声に耳を傾けることで、彼らの移動先での葛藤や包摂および希望や文化創造を記述することができた。こうした複数の国や地域における人びとに関する記述によって、国民国家の境界的制約にも拘束されない広い視野において個々の人間の生き方を理解し、さらに移動する人びとだけでなく、彼らの家族や親戚および彼らと移動先の人びととの人間関係なども把握することができた。これらは、統計データや理論的枠組みでは見られないものである。

人の移動をめぐる問題は、政治学、経済学、歴史学、社会学、教育学、人類学など多様な側面からの検討を要する課題である。国際移動を行う人びとが急増する今日において、さまざまな国や地域や都市における文化の多様性は急速に進行している。そうした中で、移動する一人ひとりが何を求め、移動先の人びととどのような関係性を構築し、彼らの次世代はどうなるのかなどを理解することはますます重要になると考えられる。朝鮮族の人びとの移動の実態と彼らの考えや文化創造を反映してきた筆者は、今後も彼らの動向に注目していきたい。

参考文献

<日本語文献>

- 青木恵理子 1993「第1章 人間と文化」『文化人類学[カレッジ版]』医学書院
- 飯田哲也・坪井健編 2007『現代中国の生活変動』時潮社
- E.A.シュルツ/R.H.ラヴェンダ著 秋野晃司・滝口直子・吉田正紀訳 1993『文化人類学 I』古今書院
- 巖汝嫻主編 江守五夫監訳 1996『中国少数民族の婚姻と家族』上巻 第一書房
- 伊豫谷登士翁編 2007『移動から場所を問う—現代移民研究の課題—』有信堂高文社
- 上野千鶴子編 2005『脱アイデンティティ』勁草書房
- 植野弘子 1999「移民社会における姻戚関係」中国東北部朝鮮族民俗文化調査団 代表：竹田且編『中国東北部朝鮮族の民俗文化』（文部省科学研究費補助金研究成果公開促進費刊行）第一書房 pp.67-86
- 大川真由子 2010『帰還移民の人類学—アフリカ系オマーン人のエスニック・アイデンティティ—』明石書店
- 大橋史恵 2011『現代中国の移住家事労働者—農村-都市関係と再生産労働のジェンダー・ポリティクス—』御茶の水書房
- 岡本雅享 2008『中国の少数民族教育と言語政策』[増補改訂版] 社会評論社
- 小川佳万 2001『社会主義中国における少数民族教育—「民族平等」理念の展開—』東信堂
- 小野原信善 2004「アイデンティティ試論：フィリピンの言語意識調査から」小野原信善・大原始子編著 2004『ことばとアイデンティティ—ことばの選択と使用を通してみる現代人の自分探し—』三元社 pp. 15-51
- 小野原信善・大原始子編著 2004『ことばとアイデンティティ—ことばの選択と使用を通してみる現代人の自分探し—』三元社
- 韓光天 2006「中国朝鮮族の都市移動の実態に関する報告」中国朝鮮族研究会編『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク：「アジア人」としてのアイデンティティを求めて』アジア経済研究所 pp. 159-163
- 菅野博貢 2001「シーサンパンナにおける漢族流入とタイ族一床下居住民の生活—」塚田

- 誠之・瀬川昌久・横山廣子編『流動する民族—中国南部の移住とエスニティー』平凡社 pp. 129-152
- 金花芬・安本博司 2011「コリア系ニューカマーの教育戦略—韓国人と朝鮮族の学校選択と家庭内使用言語を中心に—」人間社会学研究集録6 (2010) pp.27-49
- 倉石忠彦 1997『民俗都市の人々』吉川弘文館
- クレア・マリィ 2011「《わたし》は何を語ることができるのか—ことばの学びにおける複合アイデンティティー—」『言語教育とアイデンティティー—ことばの教育実践とその可能性—』 pp.63-74
- 権香淑 2011『移動する朝鮮族—エスニック・マイノリティの自己統治—』彩流社
- 巖善平 2009『農村から都市へ—1億3000万人の農民大移動—』岩波書店
- 2010『中国農民工の調査研究—上海市・珠江デルタにおける農民工の就業・賃金・暮らし—』晃洋書房
- 小泉聡子 2011「多言語話者の言語意識とアイデンティティ形成—「ありたい自分」として「自分を生きる」ための言語教育—」細川英雄編『言語教育とアイデンティティー—ことばの教育実践とその可能性—』春風社 pp.138-158
- 呉詠梅 2009「日劇のように優雅に、韓劇のように温かく—中国における日本と韓国テレビドラマの受容—」谷川建司・王向華・呉詠梅編『越境するポピュラーカルチャー：リコウランからタッキーまで』青弓社 pp.82-125
- 佐々木衛 2007「都市移住者の社会ネットワーク—青島市中国朝鮮族の事例から—」佐々木衛編著『越境する移動とコミュニティの再構築』東方書店 pp. 3-18
- 白石さや 2003「文化人類学と大衆文化—マンガ・アニメのグローバル化を事例として—」綾部恒雄編『文化人類学のフロンティア』ミネルヴァ書房 pp.121-154
- 2007「ポピュラーカルチャーと東アジア」西川潤・平野健一郎編『東アジア共同体の構築3 国際移動と社会変容』岩波書店 pp.203-226
- 2009「エスニック・アイデンティティの再考—アチェ語の教科書を読む—」アジア教育学会編『アジア教育』第3号 pp.1-31
- 2012「私はここに属さない—グローバル化の時代の若者文化を考える—」アジア太平洋研究センター紀要『アジア太平洋研究』第37号 pp.31-46
- ジグムント・バウマン著 澤田眞治・中井愛子訳 2010『グローバル化：人間への影響』法政大学出版局

- 池春相 1999「通過儀礼の特性と変容—産育・婚姻の習俗を中心に—」中国東北部朝鮮族民俗文化調査団 代表：竹田旦編『中国東北部朝鮮族の民俗文化』（文部省科学研究費補助金研究成果公開促進費刊行）第一書房 pp.173-202
- 金旭賢 1999「食文化の変遷—延辺朝鮮族の事例—」中国東北部朝鮮族民俗文化調査団 代表：竹田旦編『中国東北部朝鮮族の民俗文化』（文部省科学研究費補助金研究成果公開促進費刊行）第一書房 pp.119-137
- 徐国興 2004「中国における国・公立大学授業料政策の変容」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第43巻 pp.99-108
- 徐国興 2005「中国の授業料政策と大学進学行動」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第45巻 pp.77-85
- スザーン・ロメイン著 土田滋・高橋留美訳 1997『社会のなかの言語』三省堂
- 鈴木一代 2007「国際家族における言語・文化の継承—その要因とメカニズム—」異文化間教育 26号 pp.14-26
- 田辺繁治 2003『生き方の人類学—実践とは何か—』講談社
- 谷川建司・王向華・呉詠梅編 2009『越境するポピュラーカルチャー：リコウランからタッキーまで』青弓社
- 中国朝鮮族研究会編 2006『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク：「アジア人」としてのアイデンティティを求めて』アジア経済研究所
- 中国東北部朝鮮族民俗文化調査団 代表：竹田旦編 1999『中国東北部朝鮮族の民俗文化』（文部省科学研究費補助金研究成果公開促進費刊行）第一書房
- 趙貴花 2008「グローバル化時代の少数民族教育の実態とその変容：中国朝鮮族の事例」『東京大学大学院教育学研究科紀要 2007』第47巻, pp. 177-187
- 張琮華 2001「中国における多文化教育のメカニズムと機能に関する研究：民族共生と社会統合の視点から」東京大学大学院教育学部博士論文
- 鄭暎恵 2005「言語化されずに身体化された記憶と、複合アイデンティティ」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房 pp. 199-240
- 津田幸男 1990『英語支配の構造』第三書館
- 坪井健 2007「在日中国人留学生の動向」飯田哲也・坪井健共編『現代中国の生活変動』時潮社 pp. 151-177
- 塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編 2001『流動する民族—中国南部の移住とエスニシティ

- 一』平凡社
- 塚田誠之 2010「中国広西壮（チワン）族とベトナム・ヌン族との交流とイメージ」『中国国境地域の移動と交流—近現代中国の南と北—』有志舎 pp. 84-116
- 鄭雅英 2000『中国朝鮮族の民族関係』東京：アジア政経学会
- 2008「韓国の在外同胞移住労働者—中国朝鮮族労働者の受け入れ過程と現状分析—」立命館国際地域研究第26号 pp. 77-96
- 鄭菊花 2012「延辺朝鮮族自治州における労働力移動の原因—1994年を中心として—」佐賀大学経済論集第45巻第2号 pp. 95-109
- 出羽孝行 2001「中国の朝鮮族の生徒の言語と民族文化の維持」『異文化間教育』15号 pp. 198-208
- 中川裕 1996「少数民族と言語の保持」宮岡伯人編『言語人類学を学ぶ人のために』世界思想社 pp.263-280
- 波平恵美子編 1993『文化人類学[カレッジ版]』医学書院
- ・道信良子 2005『質的研究 Step by Step—すぐれた論文作成をめざして—』医学書院
- 西川潤・平野健一郎編 2007『東アジア共同体の構築3 国際移動と社会変容』岩波書店
- 長谷川清 2010「人の流動と民族間関係、文化的アイデンティティの動態—雲南ビルマルート、徳宏傣族の事例—」『中国国境地域の移動と交流—近現代中国の南と北—』有志舎 pp.45-83
- 平野健一郎 2000『国際文化論』東京大学出版会
- 広田照幸 2003『教育には何ができないか—教育神話の解体と再生の試み—』三水舎
- 福岡安則 1993『在日韓国・朝鮮人—若い世代のアイデンティティ—』中央公論社
- 馮文猛 2009『中国の人口移動と社会的現実』東信堂
- ベネデクト・アンダーソン著 白石隆・白石さや訳 2007『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』書房工房早山
- 細川英雄 2011『言語教育とアイデンティティ—ことばの教育実践とその可能性—』春風社
- 本多俊和（スチュアートヘンリ）・棚橋訓・三尾裕子編著 2007『人類の歴史・地球の現在—文化人類学のいざない—』放送大学教育振興会
- 松岡正子 2001「四川チベット族地区における漢族の移入—漢方薬原料の産地にて—」塚

- 田誠之・瀬川昌久・横山廣子編『流動する民族—中国南部の移住とエスニシティー』平凡社 pp.153-174
- マノロ・アベラ 2009「東アジアにおける専門職労働移動」アジ研ワールド・トレンド No.164(2009.5)pp.14-15
- 三田千代子編著 2011『グローバル化の中で生きるとは—日系ブラジル人のトランスナショナルな暮らし—』上智大学出版
- 箕浦康子編著 1999『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィー入門—』ミネルヴァ書房
- 2009『フィールドワークの技法と実際Ⅱ—分析・解釈編—』ミネルヴァ書房
- 宮岡伯人 1996「文化のしくみと言語のはたらき」宮岡伯人編『言語人類学を学ぶ人のために』世界思想社 pp.3-41
- 編 1996『言語人類学を学ぶ人のために』世界思想社
- 山下晋司 2005「人類学をシステムアップする—現代世界との関わりの中で—」山下晋司・福島真人編『現代人類学のプラクシス：科学技術時代をみる視座』有斐閣アルマ pp.1-11
- ・福島真人編 2005『現代人類学のプラクシス：科学技術時代をみる視座』有斐閣アルマ
- 編 2005『文化人類学入門—古典と現代をつなぐ 20 のモデル—』弘文堂
- 山田礼子 2008「異文化間教育 25 年間の軌跡—大会発表と学会紀要から見る研究動向—」『異文化間教育』27 号 pp.47-61
- 山ノ内裕子 2011「日系ブラジル人の移動とアイデンティティの形成—学校教育とのかかわりから—」三田千代子編著『グローバル化の中で生きるとは—日系ブラジル人のトランスナショナルな暮らし—』上智大学出版 pp.184-193
- 尹敬勳 2010『韓国の教育格差と教育政策：韓国の社会教育・生涯教育政策の歴史展開と構造的特質』大学教育出版
- 李鋼哲 2006「グローバル化時代の朝鮮族社会構図—重層的アプローチ—」中国朝鮮族研究会編『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク：「アジア人」としてのアイデンティティを求めて』アジア経済研究所 pp. 3-19
- 李向日 2009「改革開放政策と中国朝鮮族社会の変容」国際文化研究紀要 16 号 pp. 1-24
- 2010「中国朝鮮族の韓国ドリームとその意識変化」国際文化研究紀要 17 号 pp. 165-186

李天国 2000 『移動する新疆ウイグル人と中国社会—都市を結ぶダイナミズム—』 ハーベスト社

渡辺己 2004 「北アメリカ北西海岸先住民にみる言語とアイデンティティ」小野原信善・大原始子編著『ことばとアイデンティティ—ことばの選択と使用を通してみる現代人の自分探し—』三元社 pp.127-149

<英語文献>

Jonathan Friedman, 1997, “Global crises, the struggle for cultural identity and Intellectual porkbarrelling: Cosmopolitans versus locals, ethnics and nationals in an era of de-hegemonisation,” Pnina Werbner and Tariq Modood eds., *Debating Cultural Hybridity: Multi-Cultural Identities and the Politics of Anti-Racism*, London: Zed Books, pp.70-89.

Marcus, George E, 1995, “Ethnography in/out the world system: The emergence of multi-sited ethnography”, *Annual Review of Anthropology*, 24, pp. 95-117.

Stefanie Schumann, 2011, *Hybrid identity formation of migrants: A case study of ethnic Turks in Germany*, Norderstedt: GRIN Verlag.

<中国語文献>

崔成学 2001 “中国朝鮮族社会及青少年的教育问题”《中国朝鮮族社会及青少年问题研究》延边人民出版社

——— 2002 “朝鮮族少年儿童就读于汉族学校问题研究”《开创 21 世纪的儿童教育》中韩国际学术会议论文集

葛新斌・胡劲松 2007 “非户籍常住人口子女义务教育的地方立法与政策探索：一项基于广东省东莞市的实地研究”『华南师范大学学报（社会科学版）』 2007 年第 5 期 pp.95-101

何俊芳 1998 《中国少数民族双语研究：历史与现实》中央民族大学出版社

户力平 2009 “京郊几多『望京』处”《前线》2009 年第 02 期 p. 63

黄有福 2009 《中国朝鮮族史研究 2008》民族出版社

金舜英 1994 “论朝鮮族教育与延边地区经济发展”《延边大学学报：哲社版(延吉)》 1.85-90

- 姜永德 1992 “延边的漢語教学” 東北朝鮮民族教育出版社漢語文編集室編集『朝鮮族中小學漢語文教学四十年經驗論文集』東北朝鮮族教育出版社
- 陆益龙 2003 《户籍制度：控制与社会差别》 商务图书馆
- 柳承華·金源坤 2009 “对中国和日本“韩流”现象的特性分析及利用方案”《当代韩国》夏号 pp.47-52
- 馬晓燕 2008 “移民社区的多元文化冲突与和谐：北京市望京韩国城研究”《中国农业大学学报(社会科学版)》第 25 卷第 4 期 pp.118-126
- 朴泰洙 2002 “中国朝鲜族教育史研究及其评价”《开创 21 世纪的儿童教育》中朝韩国际学术会议论文集
- 主編 2003 《中国延边朝鲜族儿童的双语教育环境研究》书林出版社
- 滕星·王军主编 2002 《20 世纪中国少数民族与教育：理论、政策与实践》民族出版社
- 肖艳新主编 2005 《延吉统计年鉴 2005》中国统计出版社
- 张丽娜·朴盛镇·郑信哲 2009 “多民族、多国籍的城市社区研究：以北京市望京地区为主线”《大连民族学院学报》第 11 卷第 2 期 (3) pp.113-117
- 郑信哲·黄娜 2010 “少数民族人口流动与城市民族教育问题：以山东省青岛市朝鲜族教育实践为例”《中南民族大学学报》(人文社会科学版) 第 30 卷第 1 期 pp. 30-34

<朝鮮語·韓國語文献>

- 김귀옥 2005 「한국 안의 조선족 여성들 : 심층면접 자료를 중심으로」 권태환편저 『중국조선족사회의변화 : 1990 년이후를중심으로』 서울대학교출판부 pp. 207-229
- 김병운 2007 「중국조선족의 한국어교육의 현황과 발전방향 : 초·중·고등학교 교육을 중심으로」 이중언어학. 제 33 호 pp. 395-422
- 김상철·장재혁 2003 『연변과 조선족 : 역사와 현황』 백산서당
- 김현선 2010 「한국체류 조선족의 밀집거주 지역과 정주의식 : 서울시 구로·영등포구를 중심으로」 사회와 역사. 제 87 집 pp. 231-264
- 권태환편저 2005 『중국조선족사회의 변화 : 1990 년 이후를 중심으로』 서울대학교출판부
- 박광성 2005 「조선족의 대이동과 공동체의 변화 : 현지조사 자료를 중심으로」 권태환편저 『중국조선족사회의변화 : 1990 년이후를중심으로』 서울대학교출판부 pp.

- 문형진 2008 「한국내 조선족 노동자들의 갈등사례에 관한 연구」 국제지역연구. 제 12 권제 1 호 pp. 131-156
- 박광성 2006 「세계화시대 중국조선족의 노동력이동과 사회변화」 서울대학교대학원사회학과 박사학위논문
- 박세훈·이영아 2010 「조선족의 공간집적과 지역정체성의 정치 : 구로구 가리봉동 사례 연구」 다문화사회연구. 제 3 권 2 호 pp. 71-101
- 박청산·김철수 2000 『이야기 중국 조선족 력사』 연변인민출판사
- 여수경 2005 「한국체류 조선족의 갈등과 적응」 人文研究. 제 48 호 pp. 243-277
- 예동근 2009 「글로벌시대 중국의 체제 전환 과정하의 종족 공동체의 형성 : 북경 왕징 코리아타운을 중심으로」 고려대학교대학원사회학과 박사학위논문
- 우영란 2008 『중국의 한겨레 : 한국인,조선족』 한국학술정보(주)
- 윤황·김해란 2011 「한국거주 조선족 이주노동자들의 법적·경제적 사회지위 연구」 디아스포라연구. 제 5 권제 1 호제 9 집 pp.37-60
- 이송이·홍기순·손여경 2010 「한국에서 조선족이모로 살아가기 : 조선족 육아 가사도우미의 삶에 대한 해석학적 현상학」 한국가정관리학회지. 제 28 권 11 호 pp.25-36
- 이주행 2008 「중국조선어와한국어의비교연구 : 규범문법을 중심으로」 『한국(조선)언어문학연구국제학술회의논문집』 민족출판사 pp.39-67
- 이진산주필 2006 『중국 한겨레사회 어디까지 왔나?』 흑룡강조선민족출판사
- 이진영·박우 2009 「제한 중국조선족 노동자집단의 형성과정에 관한 연구」 한국동북아논총. 제 51 집 pp.99-119
- 이혜경·정기선·유명기·김민정 2006 「이주의 여성화와 초국가적 가족 : 조선족 사례를 중심으로」 한국사회학. 제 40 집 5 호 pp.258-298
- 임계순 2003 『우리에게 다가온 조선족은 누구인가』 현암사
- 전형권 2006 「모국의 신화, 노동력의 이동, 그리고 이탈 : 조선족의 경험에 대한 디아스포라적 해석」 한국동북아논총. 제 38 집 pp. 135-160
- 정희숙·최호 주필 2011 『조선족 언어문화교육의 발전전략』 민족출판사
- 조복희·이주연 2005 「부모와 별거하는 중국 조선족 아동의 생활환경과 적응문제」 아동학회지. 제 26 권 4 호 pp.231-245
- 차한필 2006 『중국 속에 일떠서는 한민족 : 한겨레신문 차한필 기자의 중국 동포사회

리포트』 예문서원

蔡漢泰 2005 「中國同胞勤勞者の 法的 地位에 관한 考察」 中央法學. 제 7 집 제 1 호
pp. 77-99

최금해 2006 「한국남성과 결혼한 중국 조선족 여성들의 한국생활 적응에 관한 연구」
서울대학교대학원 사회복지학과 박사학위논문

황유복 2002 『중국속의 한글학교 中国的韩国语学校』 미·중한인우호협회

———— 2011 「조선족언어문화교육의 발전전략」 정희숙·최호 주필 『조선족언어문화교
육의 발전전략』 민족출판사 pp.10-21